

京都府遺跡調査概報

第 20 冊

1. 京滋バイパス関係遺跡
2. 芝山遺跡
3. 木津遺跡第4次
4. 河守遺跡
5. 篠窯跡群
6. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
7. 上中遺跡第3次
8. 燈籠寺遺跡第3次
9. 長岡京跡右京第193次
10. 長岡宮跡第164次
11. 栗ヶ丘古墳群
12. 京奈バイパス関係遺跡

1986

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく5年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることの普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和60年度は、33件の調査を実施しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは残念ながら、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅してはいきありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は、遺跡の重要性を理解していただくために、またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その内容を知っていただくために刊行するものであります。本冊では京滋バイパス関係遺跡ほか11件の調査結果を収録しました。調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに炎暑の下、極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 京滋バイパス関係遺跡
2. 芝山遺跡
3. 木津遺跡第4次
4. 河守遺跡
5. 篠窯跡群
6. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡
7. 上中遺跡第3次
8. 燈籠寺遺跡第3次
9. 長岡京跡右京第193次
10. 長岡宮跡第164次
11. 栗ヶ丘古墳群
12. 京奈バイパス関係遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 京滋バイパス関係遺跡				
(1) 単上り遺跡	宇治市菟道単上り	昭60. 4. 16 } 昭60. 9. 18	日本道路公団	荒川 史
(2) 単上り1号墳		昭60. 7. 29 } 昭60. 11. 27		
2. 芝山遺跡	城陽市寺田南中ノ芝	昭60. 5. 21 } 昭61. 3. 22	京都府土木建築部	小池 寛
3. 木津遺跡第4次	木津町木津南垣外	昭60. 10. 7 } 昭61. 1. 18	京都府警察本部	小山 雅人
4. 河守遺跡	大江町河守	昭60. 5. 20 } 昭60. 10. 18	日本鉄道建設公団	三好 博喜
5. 篠窯跡群				
(1) 西長尾奥第2窯跡群1号窯	亀岡市篠町王子～西山	昭60. 10. 1 } 昭60. 12. 18	日本道路公団	水谷 寿克 引原 茂治 岡崎 研一
(2) 黒岩C地区作業場跡	亀岡市篠町篠黒岩	昭60. 5. 7 } 昭60. 6. 29		
(3) 森地区試掘調査	亀岡市篠町大字森	昭60. 7. 1 } 昭60. 11. 22		
(4) 袋谷1号窯	亀岡市篠町森前山	//		

(5)上猪谷地区試掘調査	亀岡市篠町森前山	昭61. 2.24 昭61. 3.28		
(6)篠地区試掘調査	亀岡市篠町	昭60.11.26 昭61. 3. 5		
6. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡				
(1)薬王寺4・5号墳	福知山市多保市小字薬王寺	昭60. 5.17 昭60. 7.24	日本道路公団	長谷川 達正 山下 敏晃 藤原 敏晃
(2)多保市遺跡	〃	昭60. 5.17 昭61. 4.17		
(3)仁田城跡	福知山市宮小字城山	昭60. 6.27 昭60.10.28		
(4)大内城跡下層遺跡	福知山市大内小字平城	昭60. 8.27 昭61. 5. 6		
7. 上中遺跡第3次	京北町字下弓削～下中	昭60. 5.13 昭60. 9.14		
8. 燈籠寺遺跡第3次	木津町燈籠寺内田山	昭60. 7.29 昭60.10. 8	京都府教育委員会	松井 忠春 戸原 和人
9. 長岡京跡右京第193次	長岡京市友岡一丁目	昭60. 7. 5 昭60. 8.22	京都府教育委員会	石尾 政信
10. 長岡宮跡第164次	向日市寺戸町西ノ段～天狗塚	昭60. 9. 2 昭60.11. 2	京都府自転車競技事務所	石尾 政信
11. 栗ヶ丘古墳群	綾部市小呂町田坂	昭60.11.25 昭61. 3.31	京都府企業局	伊野 近富
12. 京奈バイパス関係遺跡				
(1)郷土塚4号墳	田辺町大字薪小字畑山	昭60. 7. 8 昭60.10. 5	日本道路公団	石井 清司 黒坪 一樹
(2)畑山2号墳	田辺町大字薪小字畑山	昭60.10. 7 昭61. 3.25		
(3)畑山3号墳	〃	昭60.11. 5 昭60.12. 4		

3. 本冊の編集には、調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. 京滋バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要	1
(1)隼上り遺跡	4
(2)隼上り1号墳	6
2. 芝山遺跡昭和60年度発掘調査概要	11
3. 木津遺跡第4次発掘調査概要	23
4. 河守遺跡発掘調査概要	43
5. 篠窯跡群昭和60年度発掘調査概要	57
(1)西長尾奥第2窯跡群1号窯	59
(2)黒岩C地区作業場跡	69
(3)森地区試掘調査	73
(4)袋谷1号窯	75
(5)上猪谷地区試掘調査	85
(6)篠地区試掘調査	86
6. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡	91
(1)薬王寺4・5号墳	92
(2)多保市遺跡	96
(3)仁田城跡	100
(4)大内城跡下層遺跡	104
7. 上中遺跡第3次発掘調査概要	107
8. 燈籠寺遺跡第3次発掘調査概要	119
9. 長岡京跡右京第193次発掘調査概要	127
10. 長岡宮跡第164次発掘調査概要	131
11. 栗ヶ丘古墳群昭和60年度発掘調査概要	143
12. 京奈バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要	153
(1)郷土塚4号墳	156
(2)畑山2号墳	159
(3)畑山3号墳	167

挿図・付表目次

京滋バイパス関係遺跡

第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	トレンチ配置図	2
第 3 図	隼上り遺跡遺構平面図	3
第 4 図	隼上り遺跡遺物実測図	5
第 5 図	隼上り 1 号墳石室実測図	7
第 6 図	隼上り 1 号墳遺物実測図	8
第 7 図	古墓群平面図	9

芝山遺跡

第 8 図	調査地位置図	12
第 9 図	地区設定図および周辺地形図	13
第 10 図	円面硯実測図	14
第 11 図	遺物実測図(拓影)	15
第 12 図	A 地区遺構配置図	16
第 13 図	古墳 5 主体部実測図	17
第 14 図	遺物実測図	17
第 15 図	古墳 5 周溝内遺構実測図	18
第 16 図	遺物実測図	18
第 17 図	古墳 6 主体部実測図	19
第 18 図	古墳 7 主体部実測図	19
第 19 図	遺物実測図 古墳 7 主体部	19
第 20 図	芝山遺跡 E トレンチ遺構図	21

木津遺跡

第 21 図	調査地位置図	23
第 22 図	調査地区設定図	24
第 23 図	西地区実測図	25
第 24 図	浄化槽・北・南地区実測図	27
第 25 図	北地区 SD31 実測図	29
第 26 図	北地区 SD31 出土遺物(1)	32

第 27 図	北地区SD31出土遺物(2).....	33
第 28 図	北地区SG01出土遺物	34
第 29 図	中世遺構出土遺物.....	35
第 30 図	土器埋置遺構出土遺物.....	37
第 31 図	近世遺構出土遺物(1)	38
第 32 図	近世遺構出土遺物(2)	39
第 33 図	包含層出土遺物.....	40

河守遺跡

第 34 図	調査地周辺遺跡分布図.....	44
第 35 図	土層柱状図.....	45
第 36 図	トレンチ配置図.....	46
第 37 図	2 トレンチ検出遺構実測図.....	48
第 38 図	出土遺物(弥生土器).....	49
第 39 図	出土遺物(土師器).....	50
第 40 図	出土遺物(須恵器).....	51
第 41 図	出土遺物.....	52
第 42 図	出土遺物.....	53
第 43 図	出土遺物(木製品).....	54

篠窯跡群

付表 1	昭和60年度調査一覧表.....	57
第 44 図	調査地位置図.....	58

(1) 西長尾奥第 2 窯跡群 1 号窯

第 45 図	調査地地形図.....	60
第 46 図	窯体内・灰原断面図.....	61
第 47 図	窯体実測図.....	63
第 48 図	完掘後地形図.....	65
第 49 図	窯体内出土遺物実測図.....	66
第 50 図	灰原・SX03出土遺物実測図	67

(2) 黒岩 C 地区作業場跡

第 51 図	調査地地形図.....	70
第 52 図	焼土坑実測図.....	71

(3) 森地区試掘調査

第 53 図	森地区調査地位置図	73
第 54 図	B区調査地地形図	73
第 55 図	C区調査地地形図	74
(4) 袋谷 1 号窯		
第 56 図	A区調査地地形図	76
第 57 図	窯体実測図	77
第 58 図	灰原断面図	78
第 59 図	トレンチ南壁断面図	78
第 60 図	出土遺物実測図(1)	80
第 61 図	出土遺物実測図(2)	82
第 62 図	出土遺物実測図(3)	83
(5) 上猪谷地区試掘調査		
第 63 図	調査地地形図	85
(6) 篠地区試掘調査		
第 64 図	調査地地形図	87
近畿自動車道舞鶴線関係遺跡		
第 65 図	調査地位置図	91
(1) 薬王寺 4・5 号墳		
第 66 図	薬王寺古墳群分布図	92
第 67 図	4 号墳石棺実測図	93
第 68 図	5 号墳石棺実測図	94
(2) 多保市遺跡		
第 69 図	多保市遺跡遺構配置図	97
第 70 図	住居 1 実測図	98
第 71 図	住居 1 出土遺物実測図	99
(3) 仁田城跡		
第 72 図	仁田城跡測量図	101
(4) 大内城跡下層遺跡		
第 73 図	大内城跡遺構配置図	105
上中遺跡第 3 次		
第 74 図	調査地位置図	107
第 75 図	調査対象地	108

第 76 図	遺構平面図	110
第 77 図	トレンチ中央南東壁断面図	111
第 78 図	SK19実測図	112
第 79 図	出土遺物実測図(1)	115
第 80 図	出土遺物実測図(2)	116

燈籠寺跡第3次

第 81 図	調査地位置図	119
第 82 図	調査トレンチ位置図	120
第 83 図	調査トレンチ土層断面図	121
第 84 図	調査地遺構平面図	122
第 85 図	土壇SX02実測図	123
第 86 図	土壇SX01実測図	123
第 87 図	出土遺物実測図	124

長岡京跡右京第193次

第 88 図	調査地位置図	127
第 89 図	調査地平面図	128
第 90 図	南壁土層断面図	129
第 91 図	出土遺物実測図・拓影	129
第 92 図	出土遺物	129

長岡宮跡第164次

第 93 図	調査地位置図	131
第 94 図	調査地平面図	133
第 95 図	SK16409平面図・立面図	134
第 96 図	溝SD16401およびAトレンチ西壁土層	135
第 97 図	溝SD16401およびBトレンチ北壁土層断面図	135
第 98 図	出土遺物実測図・拓影(1)	136
第 99 図	出土遺物実測図・拓影(2)	137
第 100 図	出土遺物実測図・拓影(3)	138
第 101 図	出土遺物実測図・拓影(4)	139
第 102 図	出土遺物実測図(5)	140

栗ヶ丘古墳群

第 103 図	調査地周辺の古墳分布図	144
---------	-------------	-----

第104図	石井根・田坂野・栗ヶ丘古墳群分布図	145
付表2	栗ヶ丘古墳群とトレンチ概要一覧	145
第105図	栗ヶ丘古墳群・古墳分布とトレンチ配置図	146
第106図	3・13号墳墳丘測量図	148
第107図	出土遺物実測図	150

京奈バイパス関係遺跡

第108図	調査地位置図	153
第109図	郷土塚4号墳平面図	157
第110図	郷土塚4号墳石室実測図	158
第111図	郷土塚4号墳・畑山3号墳出土遺物	160
第112図	畑山2号墳平面図	161
第113図	畑山2号墳石室実測図	162
第114図	石室側壁の石材法量比較グラフ	163
第115図	畑山2号墳排水溝実測図	164
第116図	排水溝石材法量比較グラフ	164
第117図	畑山2号墳出土遺物	165
第118図	畑山3号墳実測図	167
第119図	畑山3号墳石室実測図	168
第120図	畑山3号墳出土遺物	169

図 版 目 次

京滋バイパス関係遺跡

- 図版第 1 (1)調査区北部全景 (東から) (2)調査区全景 (北から)
- 図版第 2 (1)土塚 1 遺物出土状態 (東から) (2)土塚 1 完掘状況 (西から)
- 図版第 3 (1)単上り 1 号墳発掘前の全景 (南から)
(2)古墳群検出状況 (南西から)
- 図版第 4 (1)単上り 1 号墳石室検出状況 (南西から)
(2)単上り 1 号墳完掘状況 (南西から)
- 図版第 5 (1)単上り 1 号墳石室内遺物出土状況 (北西から)
(2)単上り 2 号墳周溝完掘状況 (北から)

芝山遺跡

- 図版第 6 (1)A 地区調査前全景 (東から) (2)C・D 地区調査前全景 (西から)
- 図版第 7 (1)C・D 地区試掘調査風景 (西から) (2)円面硯出土状況
- 図版第 8 (1)A 地区遺構検出状況 (南から)
(2)古墳 3 主体部遺物検出状況 (西から)
- 図版第 9 (1)古墳 5 溝内遺物出土状況 (南から)
(2)住居 3 検出状況 (東から)

木津遺跡第 4 次

- 図版第 10 (1)西地区全景 (東から) (2)浄化槽地区全景 (西から)
- 図版第 11 (1)北地区全景 (東から) (2)南地区全景 (東から)
- 図版第 12 (1)北地区SD31 (西から) (2)北地区SG01 (東から)
- 図版第 13 (1)西地区SX02 (右が北) (2)北地区SX05 (上が北)
- 図版第 14 (1)北地区SK06 (東から) (2)北地区SX14 (北から)
- 図版第 15 出土遺物(1)
- 図版第 16 出土遺物(2)
- 図版第 17 出土遺物(3)

河守遺跡

- 図版第 18 (1)河守条里制跡全景 (北東から) (2)調査地遠景 (南西から)
- 図版第 19 (1)調査地近景 (南西から) (2)3 B トレンチ掘削状況 (北東から)
- 図版第 20 (1)杭列SX02検出状況 (南西から)

(2)杭列SX02・溝SD04断割状況（東から）

図版第21 出土遺物(1)

図版第22 出土遺物(2)

図版第23 出土遺物(3)

図版第24 出土遺物(4)

篠窯跡群

(1)西長尾奥第2窯跡群1号窯

図版第25 (1)調査地遠景（西から）

(2)調査前灰原露出状況（北西から）

図版第26 (1)窯体・灰原検出状況（西から）

(2)窯体内遺物出土状況（西から）

図版第27 (1)窯体全景（西から） (2)窯体壁面（北西から）

図版第28 (1)完掘後調査地全景（西から） (2)前庭部（南東から）

図版第29 (1)SX03（南西から） (2)灰原内遺物出土状況（南から）

図版第30 出土遺物

(2)黒岩C地区作業場跡

図版第31 (1)A地区(SK01・02)全景（東から）

(2)B地区(SK03・04)全景（東から）

図版第32 土壇群検出状況

(3)森地区試掘調査

図版第33 (1)B区調査地遠景（東から） (2)トレンチ掘削状況（南西から）

図版第34 (1)C区調査前全景（西から） (2)トレンチ全景（北から）

(4)袋谷1号窯

図版第35 (1)調査地全景（北から） (2)A区調査地遠景（北から）

図版第36 (1)調査地近景（南から） (2)窯体検出状況（西から）

図版第37 (1)窯体全景（西から） (2)焼成部床面修復状況（南から）

図版第38 出土遺物(1)

図版第39 出土遺物(2)

(5)上猪谷地区試掘調査

図版第40 (1)調査地全景（東から） (2)2トレンチ断面（北から）

(6)篠地区試掘調査

図版第41 (1)調査地全景（北から） (2)調査地全景（南から）

図版第42 各トレンチの掘削状況

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡

(1)薬王寺4・5号墳

図版第43 (1)4号墳石棺・目張り粘土検出状況(南から)

(2)4号墳石棺検出状況(東から)

図版第44 (1)4号墳蓋石除去後の状況(東から)

(2)4号墳棺内(北木口部)遺物出土状況(南から)

図版第45 (1)5号墳蓋石検出状況(北から) (2)5号墳蓋石除去後の状況(南から)

(2)多保市遺跡

図版第46 (1)多保市遺跡発掘状況(北から) (2)住居1発掘状況(東から)

(3)仁田城跡

図版第47 (1)仁田城跡発掘前風景(北から) (2)仁田城跡発掘状況(北から)

(4)大内城下層遺跡

図版第48 (1)大内城跡下層遺跡遺構検出状況(北から)

(2)SH01検出状況(北から)

上中遺跡第3次

図版第49 (1)調査前風景(南西から) (2)遺構検出状況(北西から)

図版第50 (1)SK19遺物出土状況(北から) (2)SK18完掘状態(北から)

図版第51 出土遺物

燈籠寺遺跡第3次

図版第52 (1)調査地全景(南東から) (2)調査地全景(北から)

図版第53 (1)SX01(南から) (2)SX02(東から) (3)SX03(南から)

(4)SE04(東から) (5)SE05(南から) (6)SG06(南から)

長岡京跡右京第193次

図版第54 (1)調査地全景(北西から) (2)トレンチ全景下層(西から)

図版第55 (1)南壁断面 (2)西壁断面

長岡宮跡第164次

図版第56 (1)調査地全景(南東から) (2)Bトレンチ全景(北西から)

図版第57 (1)Aトレンチ全景(北西から) (2)土壇SK16409遺物出土状況

図版第58 出土遺物(1)

図版第59 出土遺物(2)

図版第60 出土遺物(3)

栗ヶ丘古墳群

- 図版第61 (1)3号墳全景(北から) (2)3号墳第1主体部全景(南東から)
- 図版第62 (1)3号墳第1主体部出土鋤先(東から) (2)3号墳SK02出土遺物(南東から)
- 図版第63 (1)5号墳全景(南から) (2)5号墳主体部北側遺物出土状態(北から)
- 図版第64 (1)第3トレンチ全景(南東から) (2)第8トレンチ全景(東から)
- 図版第65 出土遺物(1)
- 図版第66 出土遺物(2)

京奈バイパス関係遺跡

(1)郷土塚4号墳

- 図版第67 (1)郷土塚4号墳完掘状態(西から) (2)同上(北から)
- 図版第68 (1)郷土塚4号墳石室内遺物出土状態(南から)
(2)郷土塚4号墳石室完掘状態(南から)
- 図版第69 郷土塚4号墳出土遺物

(2)畑山2・3号墳

- 図版第70 (1)畑山2号墳横穴式石室検出状況(北から)
(2)畑山2号墳主体部内遺物出土状況(南東から)
- 図版第71 (1)畑山2号墳全景(南から) (2)畑山2号墳排水溝検出状況(奥壁側から)
- 図版第72 (1)畑山3号墳完掘状態(東から) (2)畑山3号墳遺物出土状況(南東から)
- 図版第73 畑山2号墳出土遺物
- 図版第74 畑山2・3号墳出土遺物

(3)その他の遺跡

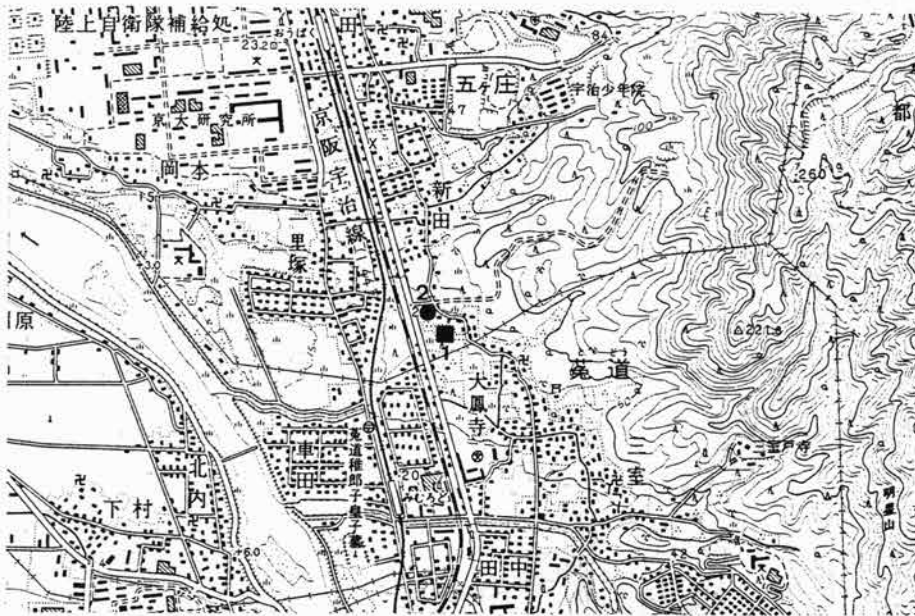
- 図版第75 (1)西山2号墳完掘状態(西から) (2)西山1号墳完掘状態(北東から)
- 図版第76 (1)野上遺跡・岡村古墳調査前全景(東から)
(2)野上遺跡トレンチ完掘状態(南から)

1. 京 滋 バ イ パ ス 関 係 遺 跡

昭 和 60 年 度 発 掘 調 査 概 要

1. は じ め に

京滋バイパス関係遺跡は、昭和58年度から継続して調査を実施している。昭和58年度は、近接する単上り瓦窯との関連が推定される飛鳥・白鳳時代の柱穴群などを検出した。昭和59年度は、古墳時代後期の単上り2・3号墳、奈良時代のピット群、鎌倉時代の土坑墓等を検出した。今回は、単上り遺跡の昭和59年度調査地の中間部と単上り1号墳の調査を行った(第1図)。調査は約2,200m²を対象とし、4月16日から9月18日まで実施した。単上り1号墳は、7月29日から11月27日まで調査を実施し、調査面積は約700m²である。現地調査は、当調査研究センター調査課主任調査員松井忠春・同調査員荒川 史が担当し、期間中多くの学生諸氏の協力を得た。^(注1)また宇治市教育委員会杉本 宏氏からは多くの教示を得た。記して謝意を表す。



第1図 調査地位位置図 (1/25,000)

1. 単上り遺跡 2. 単上り1号墳

2. 調査経過

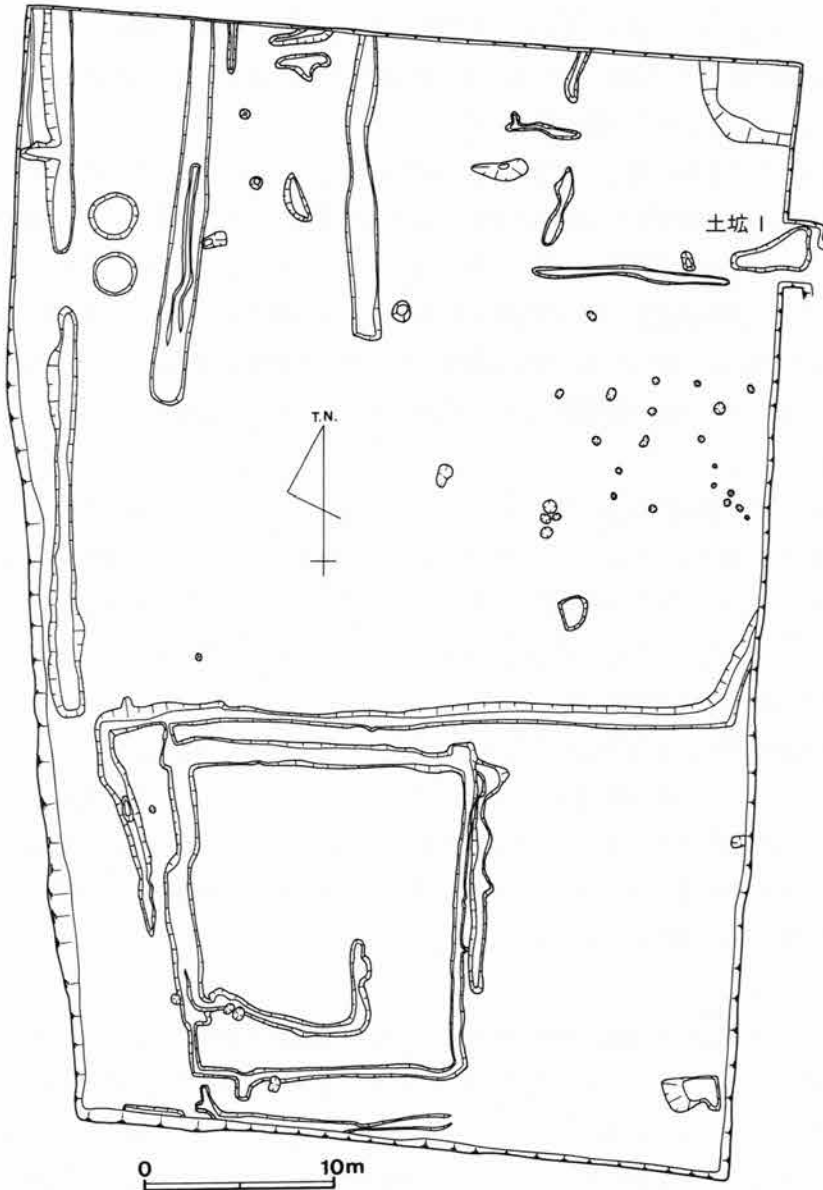
調査はまず、隼上り遺跡第6調査区において重機掘削から始めた(第2図)。層序は昨年度の調査においてすでに確認しており、上層から列記すれば、表土・黄褐色砂質土・暗茶褐色土・茶褐色土である。掘削は近世遺構面である暗茶褐色土層上面まで行った。深さは約50~250cmである。この面では第2調査区でも検出した黄褐色砂質土を埋土とする溝等を検出した。近世遺構面調査終了後、奈良時代から中世の遺構面である茶褐色土層上面まで重機掘削した。この面では調査区北東部で奈良時代の土壇やピット群を検出した。

隼上り1号墳は、当初墳丘上部が削平され表土直下に石材が遺存することが予想されたため、人力によって表土の除去を行った。表土を除去した段階で、石室の石材と古墓群を検出した。古墓群の調査と並行して、昭和59年度に明確にし得なかった隼上り2号墳の墳



第2図 トレンチ配置図

丘規模を明らかにするため、1号墳の南方にトレンチを設定した。その結果、周溝と思われる溝を検出し、これまでの推定通り直径約30mの円墳であることが判明した。1号墳は、古墓群の調査の結果、相当攪乱されていることが判明したため、古墓の底面のレベルまで掘り下げ、石室および石室内の調査を実施した。昭和60年11月9日に現地説明会を行い、11月27日すべての作業を終了した。



第3図 隼上り遺跡遺構平面図

3. 調査の概要

今年度の調査対象遺跡は、隼上り遺跡と隼上り1号墳であることは既述したところであるが、この項では検出された遺構・遺物について簡略に記すことにする。

(1) 隼上り遺跡

遺構(第3図 図版第1・2)

検出した遺構には、溝・土壇・ピット群等がある。上層で検出した溝は、調査区南部で方形に区画するように回る。これは、江戸時代の茶畑に関連する溝と思われる。以下、下層の主な遺構についてその概要を述べる。

土壇1 長さ4.2m、幅1～2.4m、深さ0.4mの溝状の土壇である。埋土は礫を多量に含み、昭和59年度に調査した土壇66と類似した状況を呈する。ここからは、須恵器の杯身・鉢・平瓶・風字硯、土師器の高杯、丸瓦・熨斗瓦などが出土している。

ピット群 調査区北東部で、直径20～60cmのピットを24基検出した。昭和59年度調査の第4調査区北西部においても、同様の規模のピット群を検出しており、これと一連のものである。ピットの並びは不規則で、掘立柱建物の柱穴になるかは不明である。

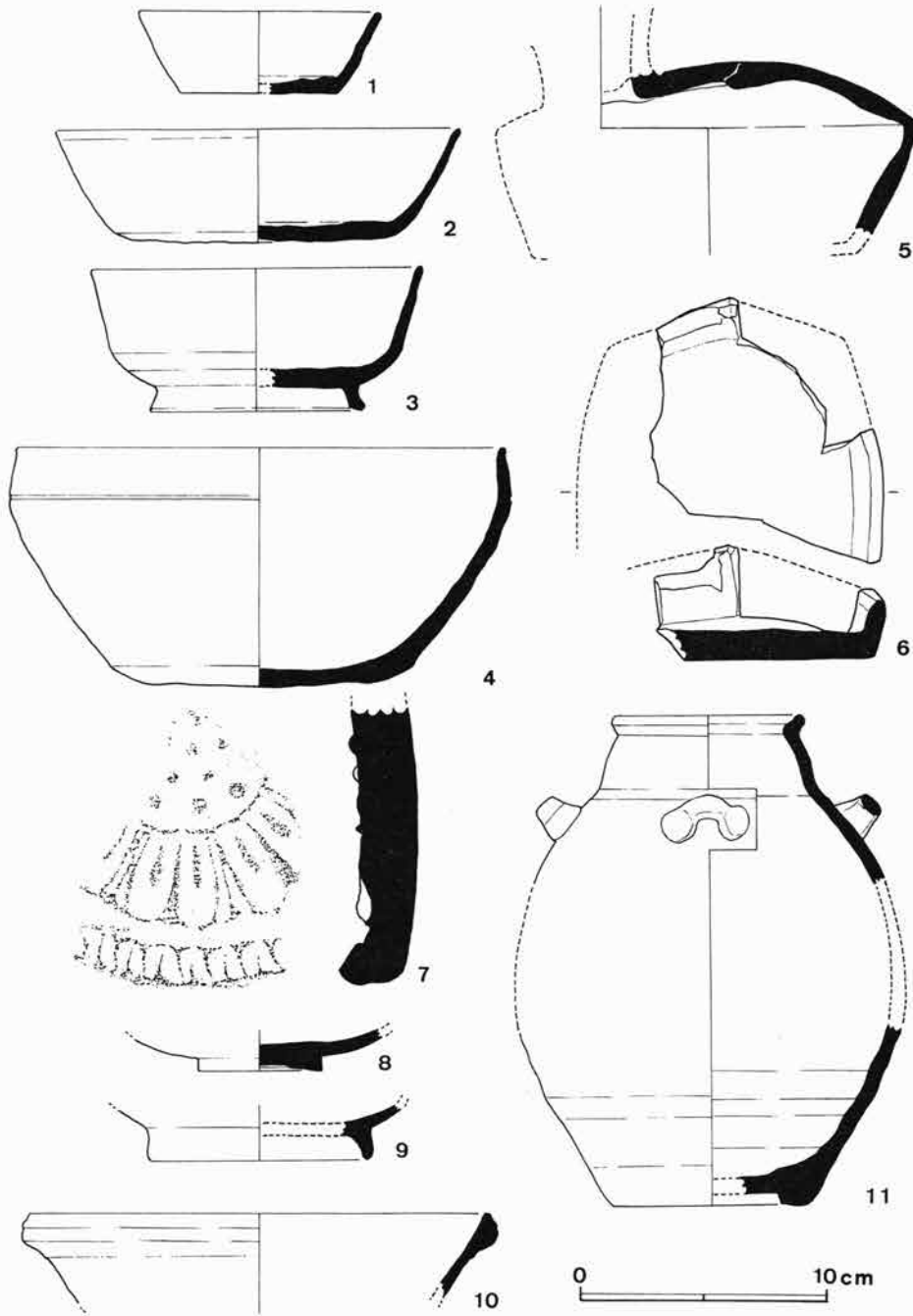
遺物(第4図)

今回の調査では遺構に伴って出土した遺物は少なく、そのほとんどが包含層からである。遺構に伴った遺物としては、土壇1から出土した遺物がある(1～6)。1～3は須恵器杯身である。4は鉄鉢型の鉢に類似するが、平底を持つ点が異なる。6は風字硯で、山中分(注2)類では花頭風字硯に属する。硯面はよく使い込まれており、磨滅が著しい。時期はこれらの遺物から8世紀代に比定できる。

土壇1以外では、奈良時代～中世の遺物が多い。7は表採品であるが、川原寺式に属する軒丸瓦である。調査地付近では、調査地の南東約200mのところにある大鳳寺跡から同一文様の軒丸瓦が出土している。8は京都系の緑釉陶器の碗である。9は灰釉陶器の高台部分で、東濃系の製品と思われる。10は中国製白磁碗で、横田・森田分類(注3)のⅣ類に属する。11も中国製品の青磁四耳壺である。

小 結

今回の調査の主な目的は、昭和59年度調査の第2・第3調査区で検出した中世墓群の広がりを確認することと、第4調査区で検出したピット群の範囲を確認することであった。ピット群に関しては、調査区北東部で検出しその範囲を確認したが、掘立柱建物とする積極的な根拠は得られなかった。中世墓に関しては、今回検出しなかったが、包含層から青磁・白磁などの中国製陶磁器類や瓦質土器の羽釜などが出土していることから、元来調査



第4図 単上り遺跡遺物実測図

- 1~3. 須恵器杯身 4. 鉢 5. 平瓶 6. 風字硯 7. 軒丸瓦 8. 緑釉皿
9. 灰釉碗 10. 白磁碗 11. 青磁四耳壺

地内に墓が営まれており、近世以降の茶畑の開墾などによって破壊された可能性が考えられる。

(2) 隼上り1号墳

古墳の概要(第5図 図版第3～5)

隼上り1号墳は丘陵の南側緩斜面に位置する。この古墳は、茶畑の中に低い墳丘が確認でき、隼上り古墳群中最も残存状態の良いものと推定されてきた。しかし、調査の結果茶畑の開墾などによって相当削平を受けていることが判明した。

今回の調査では、明確な周溝を検出できなかった。しかし墳丘の立ちあがりを確認した。この立ちあがりから判断すると、隼上り1号墳は、南北約23m、東西約22mの円墳である。葺石等の外部施設は見られない。

埋葬施設は、後世の石材抜き取りなどによって大きく破壊されており、原位置を保っている石材は東側壁で3石、西側壁で1石のみである。また奥壁の石材は石室内に倒れた状態で検出した。しかし、抜き取り痕から復元すると、埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、全長約8.4m、玄室長約4.5m、玄室幅約1.6～2.0m、羨道長約3.9m、羨道幅約1.3mを測る。主軸は、N-30°-Eをとる。玄室の平面プランは長方形であるが、奥壁部がやや狭まる。床面には礫床などの施設はない。玄門部には割石3個を置いて框石としている。

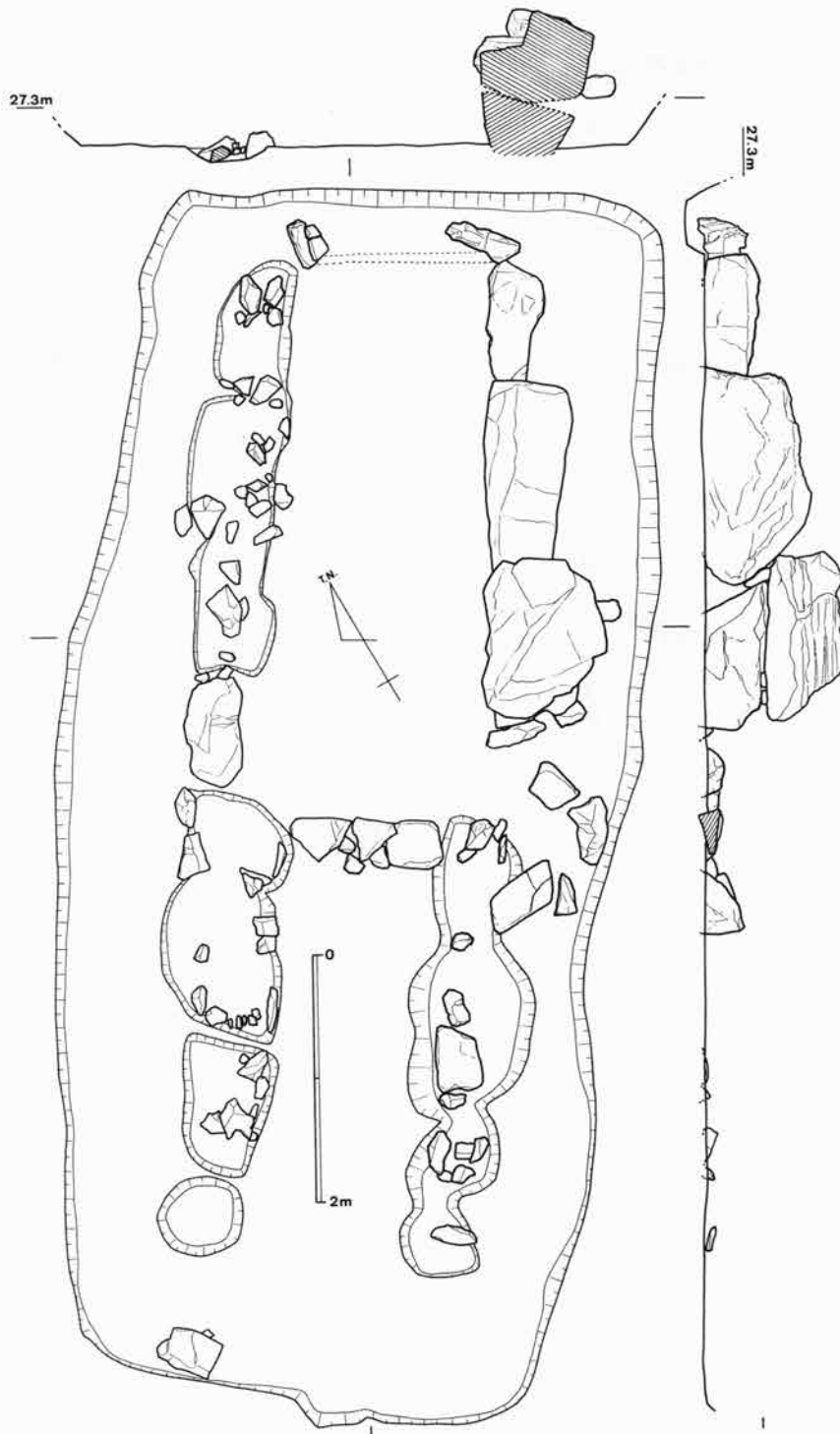
遺物は、床面まで攪乱が及んでおり、原位置を保っているものは無いと思われる。遺物が集中して出土した地点は西側袖部で、土師器甕・長胴甕・甗が破碎された状態で出土している。また羨道部の玄門付近では、かえりを持つ須恵器杯蓋等が集中している。

遺物(第6図)

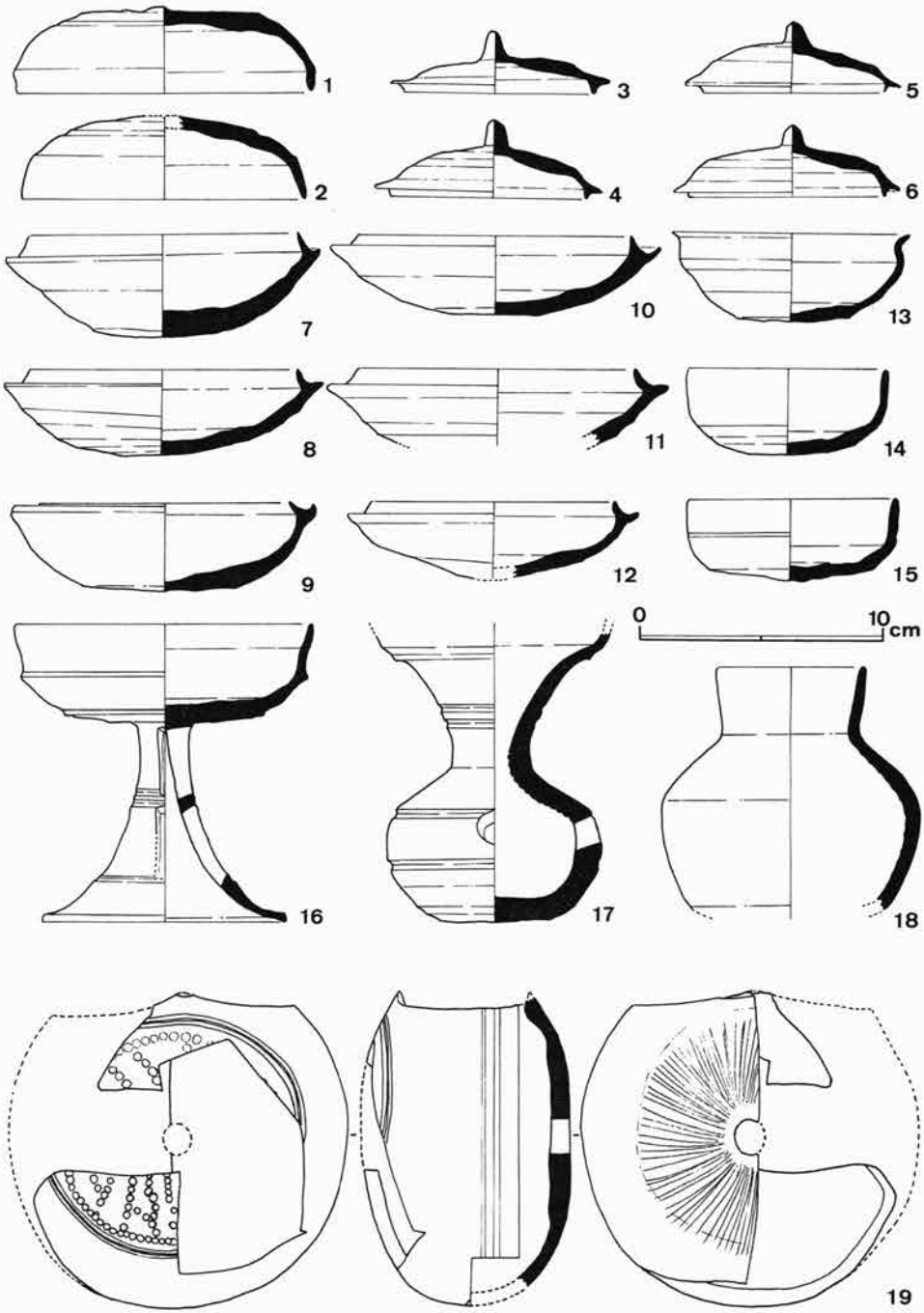
出土した遺物には須恵器(蓋杯・高杯・長頸壺・短頸壺・特殊扁壺・甕)・土師器(甕・長胴甕・甗)・鉄製品(鉄鏃)がある。

須恵器は、蓋杯・高杯などから4型式の時期差を設定できる。最も古式の様相を呈するのは11の杯身と16の高杯である。次の段階が2・7・8・10の一群で、口径がやや小さくなり受部も退化する。次が9・12の一群で、さらに小型化が進む。最後に3～6・13～15の蓋と身が逆転した一群がある。

また遺物の中で特筆すべきものとして、19の特殊扁壺があげられる。山形の口縁を持ち、体部の両面に穿孔していたものと思われる。そして体部の片面には、ヘラで円形に区画した内側に竹管文を施し、他方には孔を中心として放射状にヘラ状工具によって沈線を描いている。この種の土器の類例は、長野県恒川遺跡・岐阜県願成寺2号墳・愛知県向山6号墳・三重県大仏山古墳群・滋賀県穴太飼込古墳群(注4)・(注5)にあり、東海地方を中心とした地域に分布する。用途については不明である。(注6)・(注7)・(注8)



第5図 隼上り1号墳石室実測図



第6図 隼上り1号墳遺物実測図
1~6. 杯蓋 7~15. 杯身 16. 高杯 17. 臛 18. 壺 19. 特殊扁壺

なお古墳時代以外の遺物としては、瓦器・土師器・火葬人骨が出土しており、鎌倉時代に古墳が再利用されていたことが窺われる。

古墓群(第7図 図版第3(2))

石室の上層部分において4基の方形の石組を持つ古墓群、土塚54・土塚55・土塚57・土塚58を検出した。土塚54は東西長2.2m、南北長1.7m、深さ0.6m、土塚55は東西長1.7m、南北長1.4m、深さ0.5m、土塚57は南北長1.2m、深さ0.4m、土塚58は東西長1.3m、南北長1.4m、深さ0.4mである。土塚57は、土塚58に切られている。

出土遺物は土塚55で鉄釘と不明鉄製品があるのみで、時期を確定できる遺物は出土していない。



第7図 古墓群平面図

小 結

今回の調査によって、隼上り1号墳が6世紀後半に築造された、両袖式横穴式石室を持つ円墳であることがわかった。また、特殊扁壺の出土は、1号墳の被葬者が東海地方と深い関連があったことを示唆する。

4. お わ り に

隼上り遺跡の調査では、川原寺式軒丸瓦や風字硯など、調査地と大鳳寺が密接な関係にあったことを示唆する遺物が出土している。隼上り遺跡と大鳳寺との関連は昨年度の概報においても指摘したが、今回の調査はそれを裏付ける結果となった。

また、今回の隼上り1号墳の調査で、現在までに知られている隼上り古墳群のすべての古墳を調査したことになる。宇治川東岸の後期群集墳は、宇治市木幡所在の宇治陵墓しか知られておらず、3～4基程度の古墳群も、現在の所、御蔵山古墳群と隼上り古墳群のみである。宇治地域の後期古墳の分布は、南山城地方の他地域に比べても希薄である。このような状況の中で、わずか3基ではあるが、一つの古墳群の内容を明らかにし得たことは重要な意味を持つものと思われる。ただ隼上り古墳群に関して言えば、1・2号墳と3号墳との位置関係、さらに昭和57年度に宇治市教育委員会によって調査された隼上り東古墳^(注9)の存在などから、より大規模な古墳群を想定してよいのではないだろうか。(荒川 史)

注1 金丸浩樹・北村祥子・九嶋妙子・久世美智子・小泉裕司・小山裕美・坂根直之・田中美希・溜池博記・寺升初代・中井英策・中井精一・中村かおり・野村道江・八田達男・林 恵子・松永好宏・柳沢洋子・米井武始(五十音順・敬称略)

注2 山中敏史「陶硯関係文献目録」(『埋蔵文化財ニュース』41 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター) 1983

注3 横田賢二郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」(『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館) 1978

注4 『信濃の須恵器』上田市立信濃国分寺資料館 1985

注5 江崎 武氏の教示による。

注6 『特別展 須恵器展』愛知県陶磁資料館 1982

注7 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

注8 注7と同じ。

注9 杉本宏他『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』(宇治市埋蔵文化財調査概報 第3集 宇治市教育委員会) 1983

2. 芝山遺跡昭和60年度発掘調査概要

1. はじめに

芝山遺跡は、城陽市寺田南中ノ芝に所在する。当該遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部道路建設課が施行している山城総合運動公園城陽線道路建設に伴う事前調査である。山城総合運動公園は、昭和63年に開催される国民体育大会で競技場として使用される予定になっているが、現行の道路事情では円滑な運営が困難なため城陽線が計画された。建設予定地内には、はやくから埋蔵文化財の存在が知られており、京都府土木建築部道路建設課と京都府文化財保護課が協議し、当調査研究センターとの間で委託契約を行った。

芝山遺跡は、京都府文化財保護指導委員・柏井光彦氏が踏査の際、遺物を採集され、遺跡の存在が予想された。昭和52年に城陽市教育委員会が、鉄塔建設に伴う事前調査を行ったところ、5世紀末の方形周溝墓・7世紀前半の竪穴式住居跡・8世紀代の掘立柱建物跡等^(注1)を検出した。今回の発掘調査でも関連の遺構・遺物の検出が予想された。

発掘調査は、当調査研究センター調査課、主任調査員・辻本和美、調査員・小池 寛が担当し、本概要の執筆・編集は、小池 寛が担当した。

調査期間中、諸先生方の有益な御指導を賜った。特に、城陽市教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々や京都府文化財保護指導委員・柏井光彦氏、梶本敏三氏には、終始、御教示を頂いた。記して深謝する次第である。また、現地調査・整理作業に従事して頂いた多くの方々に御礼申し上げる^(注2)。

2. 調査経過 (図版第6-(1)(2))

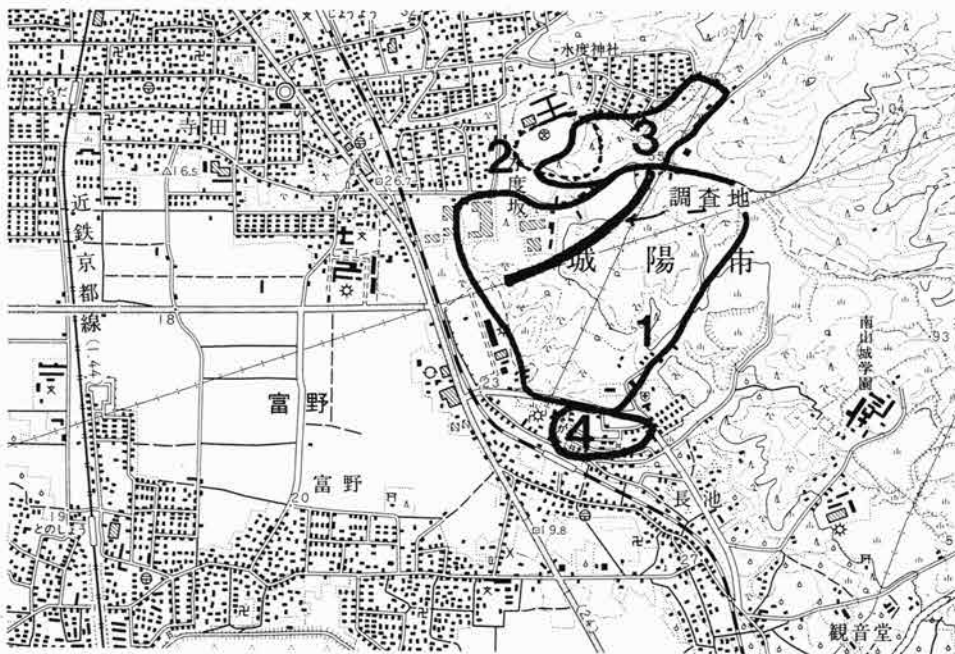
調査地は、東西600mにおよぶため、便宜上、西からA・B・C・D地区に分けた。全体の様相を知るため昭和60年5月21日から同年10月12日まで試掘調査を行った。試掘調査は、道路建設用のセンター杭に並行した幅4mのトレンチとそれに直交するトレンチを20m毎に設けて行った。A地区は、試掘トレンチ全面に遺構の広がりを検出した。B地区は、資材置場造成時に削平を受けており、遺構・遺物の検出はできなかった。C地区は、明確な遺構を確認できなかったが、一部で多量に土器を含んだ包含層を検出し、拡張して範囲を確定した。D地区は、最東部分で大河原川の旧河道を検出したため、試掘トレンチの幅で肩部の確認に努めた。また、肩部の南側に隣接する自然堤防状の微高地で古墳時代から奈良時代にかけての遺構を検出した。C・D地区において遺構・遺物を検出した部分について

ては、拡張して調査を行ったが、それ以外は、土層断面図を作成し試掘調査に留めた。これらの調査結果から、A地区は、昭和60年10月19日から本調査に入った。A地区については、昭和61年3月8日に現地説明会を開催し、見学者は100余名を数えた。その後、一部の図面作成等の作業を行い同年3月22日に全作業を終了した。調査面積は、A地区1,600m²、B地区500m²、C地区560m²、D地区1,100m²、合計3,760m²である。なお、A地区については、調査対象面積が2,800m²であり、来年度も引き続き調査を行う予定である。

本概要で使用する遺構番号は、現地説明会資料に準拠しているが、芝山遺跡は広範囲におよぶため、今後、遺跡全体での呼称を城陽市教育委員会等関係諸機関と協議し決定する必要がある。そのため、便宜上の番号であることを明記し、A地区調査終了後、遺構番号の整理を行う予定である。また、現地説明会資料作成時において、例えば、住居4を飛鳥時代に比定しているが、その後の調査で布留式併行であることが判明した。これらについて、本概要をもって訂正したいと思う。

3. 位置と環境 (第8図)

芝山遺跡は、北限が大河原川、南限が森山におよぶ広範囲の遺跡で、宇治丘陵から西方



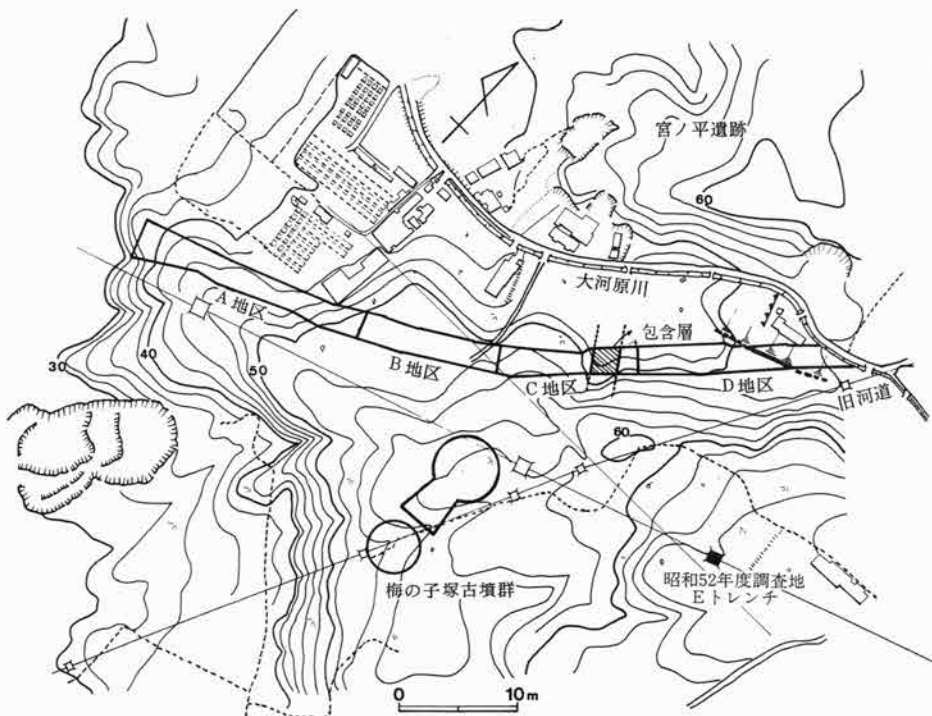
第8図 調査地位置図 (1/25,000)

1. 芝山遺跡 2. 宮の平古墳群 3. 宮の平遺跡 4. 森山遺跡

へのびる低丘陵の先端に立地しており、大阪層群が基層になっている。丘陵裾部には、旧北陸道がはしり、また、大住車塚等が位置する丘陵や木津川の沖積地が一望でき、墓地や住居を選地する上で極めて好条件であったと考えられる。

次に、最近の成果を中心に周辺の遺跡を概観する。^(注3)芝山遺跡の南方に位置する森山遺跡は、縄文時代後期の住居址や弥生時代・古墳時代の土器が良好な状態で検出されており、周辺での出土例が少ないことから極めて重要な資料となっている。現在、史跡指定を受け現地保存されている。一方、弥生時代の遺物は、木津川の沖積地に立地する塚本遺跡で発見されており、拠点集落が沖積地に存在することが十分考えられる。

古墳時代には、著名な久津川古墳群が形成されはじめる。4世紀代には、芝山遺跡内の梅の子塚古墳群やそれより北方に位置する西山古墳群・尼塚古墳群・上大谷古墳群等が築造され、5世紀代には、下大谷古墳群・平川古墳群・宮の平古墳群・芝ヶ原古墳群が築造される。久津川車塚古墳は、全面に朱を塗った長持形石棺を有している。最近、奈良県斑鳩町藤の木古墳から出土した馬具に象の文様が彫り込まれていたことが判明したが、それよりも1世紀古い車塚古墳出土の鏡にも文様形態の違いはあるが、象像があったことは興味深い事実である。芝ヶ原11号墳の主体部からは、松笠文を有する三角縁神獸鏡が出土し、



第9図 地区設定図および周辺地形図

数少ない型式であることが判明した。史跡指定を受けている丸塚古墳は、最近の調査で円墳ではない可能性も指摘されている。芝山遺跡の北方に位置する宮の平4・5号墳からは、城陽市で最古とみられる須恵器が出土しており、当地への須恵器導入の状況を知る上で貴重な資料となっている。また、周溝内から須恵器甕・壺・甌・蓋杯がまとめて出土しており、周溝内の供献土器を考える上で新資料を得たと言える。6世紀代には、冑山古墳群・長池古墳等が築造される。一方、久津川古墳群の終末をむかえる。最近、青谷周辺で石神古墳群が発見され、横穴式石室を埋葬主体部とする前方後円墳や円墳数基が確認された。

飛鳥・奈良時代に入ると芝ヶ原遺跡・正道遺跡・久世廃寺・平川廃寺・正道官衙遺跡や条里制施行等、極めて重要な遺跡・遺構が確認されているが、これらは、前段階からの基盤上に成立しており、当地周辺が古代における要衝の地であったことがわかる。

ここでは、特に、古墳時代について以下の2点の問題を指摘し、次章へ移りたい。

(1) 日本書紀・仁徳天皇十二年に「冬十月。掘_二大溝於山背栗隈縣_一以潤_レ田。是以其百姓^(註4)毎年豊之。」の記事があり、久津川古墳群を築造した豪族を栗隈縣主とする見解が見られたが、栗隈および縣自体の存在が年代的な側面から疑問視されており、被葬者についての再考が必要である。

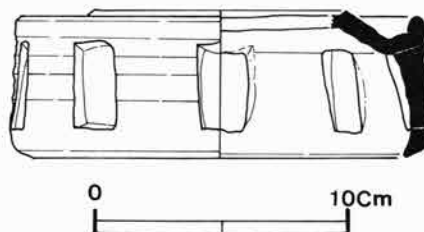
(2) 城陽市と宇治市の境に位置する上大谷古墳群と城陽市と井手町の境に位置する冑山古墳群では、各々、横穴式石室が確認されているが、その中間に位置する久津川古墳群では、現在、横穴式石室が確認されておらず6世紀代でも木棺直葬墳が主流をなしている。それが、どのような要因であるのかを研究することは、久津川古墳群を解釈する上で重要なことである。

4. 調査概要 (図版第7-(1) 第9図)

本年度は、試掘調査を主目的に行った。ここでは、B・C・D地区を主に記述し、A地区については、本調査の成果の一部も記述することにする。

(1) B地区

調査地内で最も高所に位置するテラス(標高50~51m)が中心であるが、現在、全面が資材置場となっており、造成時に3m前後の削平を受け、遺構・遺物は検出できなかった。しかし、立地条件は、後述するA地区と同じであり、何らかの遺構が存在していた可能性は極めて高いと言える。なお、A地区の



第10図 円面硯実測図

平坦面最東端では、ローリングを受けた瓦片が10点前後出土しており、B地区から流出し、再堆積した状況と考えられる。

(2) C地区

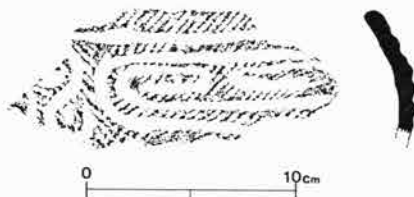
B地区と同じ平坦面と標高36mの谷部を含む。明確な遺構・遺物は検出できなかったが、遺物が多量に出土した包含層を検出した。調査前から湧水が著しく表探資料も数多くあり、遺物の存在が予想されていたところでもある。包含層は、20m間に広がり、トレンチ幅全面で検出しており、トレンチ以南の斜面一帯に広がるものと考えられる。基本的には黒色粘土が主体となり、遺物は、この層から出土している。また、黒色粘土層を切り込む褐色砂層や黒色粘土層の上層に褐色砂礫層を検出していることから、包含層は、比較的長い時間で堆積し、その後、急激な流水により砂礫層等が堆積したと考えられる。

出土遺物は、須恵器壺・甕・杯・高杯・碗等がある。現段階で最も古いものは、長脚二段透しの無蓋高杯で6世紀後半に比定できる。量的に多いものは杯類で、小型化した段階直後から杯蓋のかえりが消失した段階までの資料があり、8世紀前半の資料が多いことを指摘できる。注目する資料として杯身の口唇部に炭が付着したものがある。土師器は、杯・皿・盤・鉢・甕・高杯・鍋等がある。比較的多く見られる器種として杯・甕があり、8世紀代のものが多い。これは、須恵器と同じ傾向である。

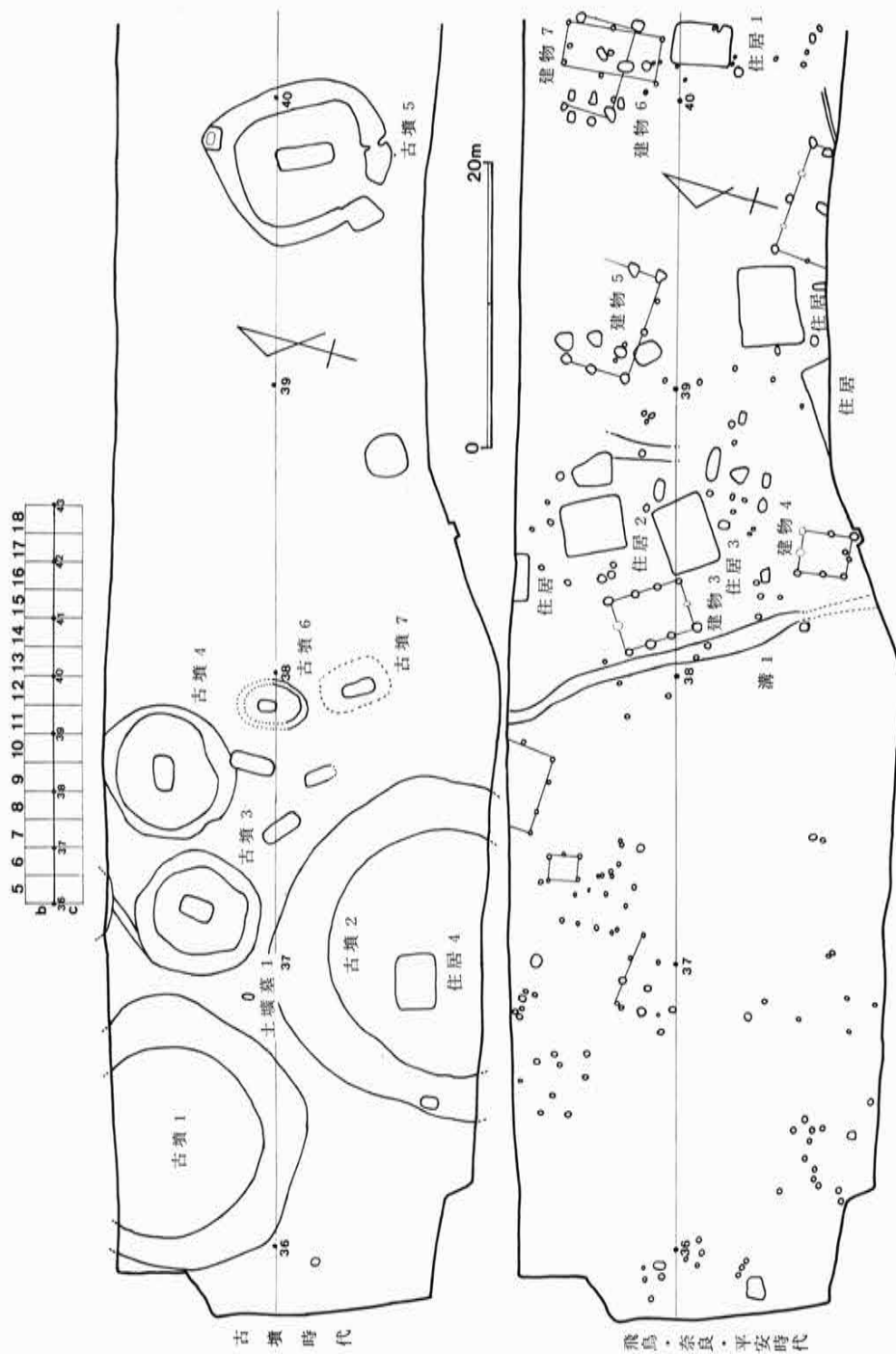
その他、C地区では、ローリングを受けた須恵器・土師器が出土しているが、明瞭な遺構に伴っていないことから先述した包含層と同じく再堆積によるものと判断できる。なお、円面硯(図版第7-(2) 第10図)の出土は重要である。

(3) D地区

C地区の東方で、一部を除き平坦面が続く。D地区最東部では、現在、調査地の北側を流れる大河原川の旧河道を検出した。旧河道は、褐色砂層が主体となり、現地地表下3~3.5mに河床を確認し、緩やかに傾斜する肩部も検出した。しかし、旧河道がどの時代に属しているかは、出土遺物や遺構面を切った形跡がなく判断できない。旧河道の南側に隣接する自然堤防状の微高地からは、B~D地区区内で最も安定した遺構面を検出した。試掘調査の段階で土層堆積状況が極めて複雑なため、一部において遺構面下層の礫層まで掘り込み、土層断面により遺構面を確認せざるを得なかった。検出した遺構は、溝・柱穴・土坎・焼土坎等である。溝は、断面U字形を呈し、幅60cm・深さ40cmをはかる。溝内より須恵器・土師器が出土している。溝の年代は、6



第11図 遺物実測図(拓影)
D地区包含層、縄文土器



第12図 A 地区 遺構配置図

世紀末～7世紀初めで、上層から奈良時代前半期の遺物が出土している。柱穴は、直径30～70cmまでの大きさで、若干の違いが見られる。建物跡については、未整理のため詳細な検討はできないが、少なくとも3棟分の建物を復元することができる。その他、明確な遺構は検出し得なかったが、縄文土器(第11図)や弥生土器が出土している。縄文土器は、器表面および口縁端面に縄文を施し、凹線により文様帯を構成している。文様構成から中期末に比定できる。弥生土器は、甕底部器表面にタタキを有しており、末期に比定できる。これらの資料は、細片ではあるが、ローリングを受けていないことから、原位置から大きくは移動していないものと考えてよい。

以上が試掘調査の結果である。

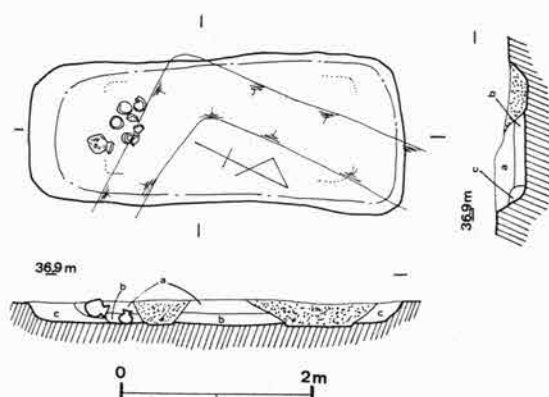
次に、調査地内で最も安定した状態で遺構・遺物を検出したA地区について、全容が明らかな古墳を中心にして時代別に記述する。

(4) A地区(図版第8図-(1) 第12図)

調査地内で最も西に位置し、標高35m～37mの平坦面が中心である。丘陵平坦部は、幅約100m・長さ150mあり、調査地区は丘陵のほぼ中央にあたる。

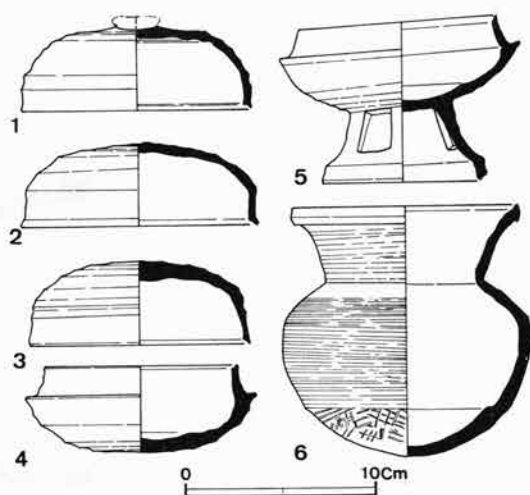
<古墳時代>

古墳1 古墳1は、直径17mの円墳で、溝の幅3m・深さ1mをはかる。主体部および墳丘は、後世の削平で残存しない。溝の埋土は、2層に分層でき、下層は黒褐色土で粘性を帯び、6世紀初頭の須恵器・杯蓋が出土している。一方、上層は、暗茶褐色土で礫が多く入り、主体部の副葬品である鉄鏃・鉄釘とともに奈良時代の須恵器・土師器等の遺物が多量に入っ



第13図 古墳5主体部実測図

a. 暗茶褐色土 b. 暗茶褐色土(固い)
c. 濁茶褐色土



第14図 遺物実測図

古墳5主体部 須恵器

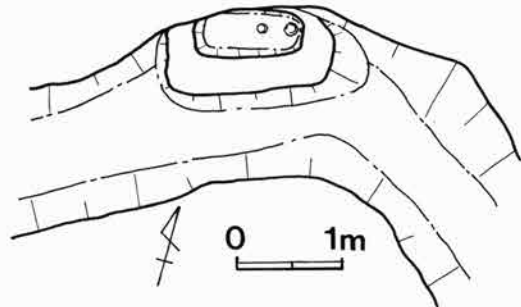
ている。

古墳2 古墳2は、直径20mの円墳で、古墳1同様、主体部および墳丘は削平され残存しない。溝も2層に分かれる。特に、上層からは、鉄鍬・棺金具とともに奈良時代の平瓦が出土している。

これら2基の古墳より西側では深さ50cm前後の整地層を確認しており、奈良時代の遺物とともに主体部の副葬品である鉄製品も出土しているところから、墳丘は、通常見られる程度の高さを有していたと考えられる。

古墳3 (図版第8-(2)) 古墳1・2の北東に位置する。直径7.5mの円墳で、墳丘は若干の削平を受けていると考えられるが、主体部は、ほぼ完存している。主体部主軸線は、ほぼ磁北に向き、長軸2.3m・短軸1.4m・深さ0.4mをはかる。出土遺物は、主体部北側に須恵器台付長頸壺、南側では須恵器蓋杯を検出した。台付長頸壺は、据えられた状態で出土している。周溝は、平均幅1m、深さ0.2mをはかり、埋土は暗茶褐色粘質土1層である。なお、古墳3北側に隣接するトレンチ端から、古墳の溝の一部を検出している。

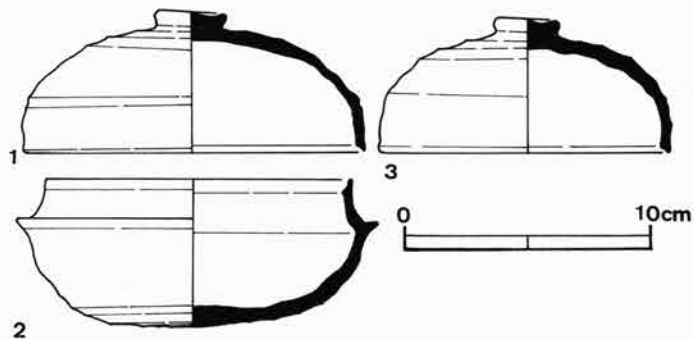
古墳4 古墳3の北西に隣接し、規模・墳形は、古墳3と同じである。主体部は、古墳3の主体部主軸線にほぼ直交し、長軸2.9m・短軸1.4m・深さ0.6mをはかる。遺物は、須恵器壺、鉄製品、刀子が出土している。なお、木口部では、白色粘土を確認している。



第15図 古墳5周溝内遺構実測図

古墳5 (図版第9-(1)) 他の古墳は溝1以西に築造されているが、古墳5のみ溝1以東に位置する。

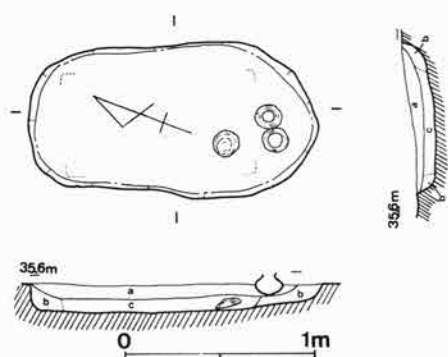
墳形は、方墳であり、南北11m・東西10mをはかる。主体部(第13図)は、長軸3.3m・短軸1.5m・深さ0.2~0.4mで、南側から須恵器甕・壺・蓋杯・有蓋高杯(第14図)が出土している。周溝は、幅1.3~



第16図 遺物実測図
古墳5周溝内 須恵器

1.8m・深さ0.3~0.5mの規模で、最北部溝内に2.2m×1mの壇状の高まりを確認し、ほぼ中央に1m×0.5mの土壇を掘り込み、須恵器蓋杯を検出した(第15・16図)。また、最南部は、溝の一部を掘り残し墓道をつくっており、溝の両端は、溝幅より広く掘り込まれ、須恵器杯蓋を検出した。

古墳6(第17図) 長径4.5m・短径3.1mの楕円形を呈する古墳である。主体部は、長軸1.6m・短軸0.8m・深さ0.2mの規模で、南側から須恵器壺・杯蓋が出土した。周溝は、幅0.3m・深さ0.1mをはかり、南半分は比較的良く残存しているが、北半分は、削平を受け僅かに溝の底が残存するに過ぎない。

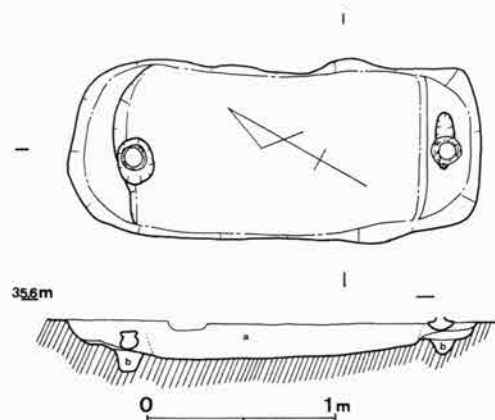


第17図 古墳6主体部実測図
a. 暗茶褐色土 b. 濁茶褐色土
c. 茶褐色土

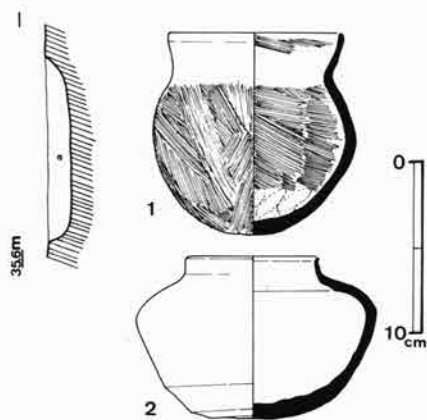
古墳7(第18・19図) 基本的に古墳6と同規模の楕円形を呈するものである。主体部は、長軸2.2m・短軸0.9m・深さ0.4mをはかる。主体部の北側から須恵器壺、南側から土師器壺が出土している。各々の土器の直下にピットが掘られている。周溝の遺存状態は、極めて悪く、溝の底が残存するにすぎない。

土壇墓 古墳2・3・4・6の間で、3基確認している。各々から須恵器蓋杯・壺等が出土している。

上述の古墳をまとめると、築造年代は、杯蓋の肩部稜線と杯身の立ち上がりから古墳5



第18図 古墳7主体部実測図
a. 暗茶褐色土 b. 濁赤褐色土



第19図 遺物実測図 古墳7主体部
1. 土師器 2. 須恵器

が最も古く5世紀末から6世紀初頭に比定できる。古墳1・2は、主体部が残存せず正確な築造年代を決定する根拠を欠くが、古墳1の溝の下層から肩部稜線が良く残り、内傾する口唇部を有する杯蓋が出土しており、6世紀初めに比定できる。古墳3・4は、各々、主体部が良好に残存している。古墳3の主体部の蓋杯は、大型化が定着した段階のもので、6世紀中頃に築造されたと考えられる。古墳4は、壺しか出土していないが、古墳の墳形・規模が古墳3と酷似していることから、同時期と考えて良い。古墳6・7と土塚墓の一部は、出土した蓋杯から6世紀後半に比定できる。その他の土塚墓は、古墳6・7より新しい要素をもつ須恵器が出土しており、6世紀末に比定できる。

住居4 古墳2のほぼ中央で検出した竪穴式住居跡である。規模は、3.5m×2.8mをはかり、平面プランは長方形を呈する。遺構検出面下30cmで床面を確認し、遺物の大半は、北側の炭層から出土している。遺物は、土師器甕・高杯・壺・小型丸底壺、石器、砥石があり、布留式併行と考えられる。

<飛鳥時代>

住居1 住居1は、南北3m・東西4mの長方形に近い竪穴式住居跡で、カマドは側壁の一部を掘り残した特殊な構造をしている。また、住居跡中央に直径20cm程の平坦面をもつ円礫が据えられており、床面に柱穴がないことから考えれば、この円礫で柱を受けていた可能性がある。

住居3 (図版第9-(2)) 住居3は、4m×5mの長方形の竪穴式住居跡で、東壁中央にカマドがあり、南西隅に幅10cmの溝が掘られている。遺物は、床面直上から須恵器杯蓋、土師器甕・皿・碗等が出土している。出土遺物から7世紀中頃を前後とする時期に造営されたと考えられる。

溝1 溝1は、住居2・3の西側に位置し、トレンチ南東端では後世の削平を受けて検出し得なかった。幅は、1~1.5m、深さは0.3mをはかる。出土遺物は、須恵器、土師器がある。

概観すると、飛鳥時代の竪穴式住居跡は計6基確認し、主軸線の方法は各々異なり、カマドは東壁中央部および隅に位置する。また、住居跡と古墳群の関連を考える上で溝1は、極めて重要であると言える。

<奈良時代>

柱穴・土塚等を検出したが、整理中であるため何棟の掘立柱建物跡が復元できるのかわからない点も多い。そのため、建物3について説明し、他は概観するに留めたい。

建物3 トレンチのほぼ中央に位置する。柱穴の規模は、直径0.7m程度で、桁行3間(5.4m)×梁行2間(3.6m)の建物である。梁行には、中央に柱穴がないが、柱穴を掘らず

に柱を受けていた可能性がある。出土遺物は、細片ながら須恵器蓋杯・壺，土師器皿・杯等がある。他の建物跡を概観すると，主軸線が，ほぼ磁北と一致する群・上述の建物3同様，磁北で西へ32°前後ふれる群・西へ12°前後ふれる群に分けることができる。しかし，3時期に年代を与えるには至っていない。

<平安時代>

平安時代の遺構・遺物は，他の時代に比べて極めて少なく，当遺跡での動向を考える上では，資料面で不足している。

建物7 平安時代に属する掘立柱建物跡としては唯一である。建物7は，1間×2間で柱穴も直径20cmと小規模な建物である。柱穴から比較的残存率の高い灰釉陶器，壺が出土している。トレンチ内で直径20cmの柱穴を多数検出しているが，これらが奈良時代あるいは，平安時代に属するのか，今後の調査によって明らかにできるであろう。

5. 小 結

(1) C・D地区の検出遺構・遺物について

C地区で検出した包含層は，昭和52年に城陽市教育委員会が調査を行ったEトレンチ(第9図・第20図)の北斜面に位置する。Eトレンチでは，奈良時代の掘立柱建物跡を多数検出しており，中でも底をもつ建物跡等もあり，これらが一般的集落ではないことが調査当時から考えられていた。Eトレンチ周辺の地形は，標高60m前後の平坦面が続き，掘立柱建物跡が広がることは十分に考えられる。今回，C地区で検出した包含層は，土層断面の観察や遺物出土状況等から，この平坦面から流出し，再堆積したものと考えられ，出土した遺物の量や包含層周辺から円面硯が出土していることなどを考慮すれば，Eトレンチの掘立柱建物跡の性格を更に解明できると考えられる。一方，D地区の最東端で検出した大河原川の旧河道は，年代設定の根拠を欠くが，周辺に「築留」と言う字名が残っている点から，環境復元の際，重要な資料となる。旧河道南側の自然堤防状微高地で検出した奈良時代の建物跡や溝等の成立に旧河道が大きく係っていると云える。なお，微高地で出土した縄文時代中期末の土器は，ほぼ同時期の森山遺跡との関連が考えられ，森山遺跡が拠点となり，周辺に広が



第20図 芝山遺跡Eトレンチ遺構図
(注1文献より転載)

りを見せるものと解釈できる。今後、同時代の遺構・遺物の検出が十分予想される。

(2) A地区の検出遺構・遺物について

A地区は、平坦面全面に遺構を検出し、住居地(布留式併行)→墓地(古墳時代)→住居地(飛鳥・奈良・平安)と土地利用の変遷を明らかにすることができた。布留式併行の竪穴式住居跡は、今のところ一基しか確認していないが、トレンチ以南に広がることは確実であり、いわば、集落の北限を確認したと考えても良い状況にある。6世紀代には、廃絶した集落跡に古墳が築造され、いわゆる、群集墳が成立する。古墳の主体部は、木棺直葬である。古墳1・2に見られる高塚とともに、古墳3・4・5の低い墳丘をもつものが同時に存在していることは、興味深い事実である。特に、古墳5のように、溝内に供献土器を入れたり、溝の一部を掘り残し、陸橋状施設をもっている点は、弥生時代の方形周溝墓と共通した部分も少なくない。直接の系譜は引かないが、伝統的な葬法として考えることも可能であり、今後、高塚以外の墳墓の中での技術的位置づけと階級的位置づけを類例調査により行う必要がある。

飛鳥時代の竪穴式住居跡を中心とする集落が成立すると同時に溝1が掘られる。これは、溝1を境界に古墳群(墓域)と住居群(住居域)が分けられていたことを示唆するもので、古墳を築造した集団と住居を造営した集団は、極めて密接な関係があったと考えられる。また、奈良時代に入り、古墳を削平し居住空間を広げているが、これらの動向は、周辺の歴史的背景を理解する上で何らかの参考になると考えられる。

以上、簡単ではあるが小結としたい。なお、A地区の調査は、昭和61年度も引き続き行う予定であり、古墳・住居等の検出が期待される。 (小池 寛)

注1 『芝山遺跡発掘調査概要』 城陽市文化財調査報告書 第7集 城陽市教育委員会 1978年

注2 調査参加者(順不同・敬称略)

石田真一・大谷正子・梶本真由美・北埜善史・郡 角治・古賀達也・小館美和・浜口和宏・林 啓子・原田幸子・樋口絹子・福富 仁・和田 満

注3 各遺跡については、城陽市教育委員会発刊の「城陽市埋蔵文化財調査報告書」各冊を参照されたい。なお、新発見の石神古墳群については、梶本 敏三氏の御教示を得た。

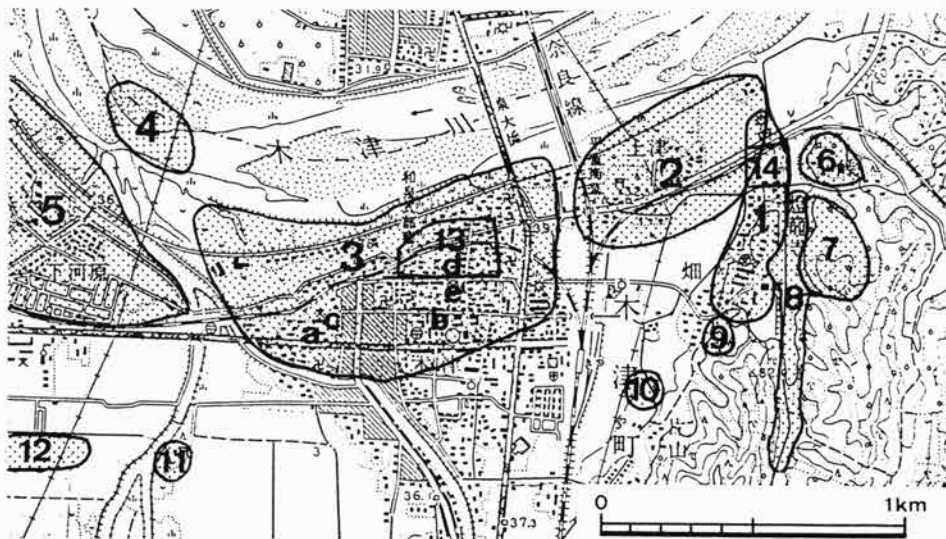
注4 国史大系・日本書紀(前編) p.300 吉川弘文館 昭和56年

3. 木津遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

伊賀の山中から西流して来た木津川が、南山城平野に入り、大きく流れを変え、北上する手前の左岸に木津町は位置する。木津川に沿う自然堤防には、奈良時代から中・近世にかけての遺跡群が広がっている(第21図)。木津遺跡は、最初の調査(欠番、第21図a)が昭和54年に行われて以来、3次にわたる調査(同b～d)が実施され、奈良時代の礎石建物跡や中・近世の溝・土壇等が検出され、土器・陶磁器・瓦等が出土している^(註1)。

今回の調査は、木津町大字木津小字南垣外15番地他2筆(同e)に所在する木津警察署の庁舎老朽化に伴い、庁舎の新築が計画されたため、工事の事前調査として行ったものである。解体工事のみならず仮庁舎の建設も庁舎敷地内で行われたので、その工程上の関係から、調査は4地区に分けて行った。昭和60年10月7日に西地区(旧署長公舎→新車倉庫)の調査を開始し、浄化槽地区及び新庁舎北半にあたる北地区(旧駐車場)の調査を経て、新庁舎南半にあたる南地区(旧庁舎)の調査を終えたのは、翌昭和61年1月18日で、実働日は62日を数えた。調査面積は約800m²である。なお、関係者説明会を1月14日に実施した。現地調査は、当調査研究センター調査課主任調査員松井忠春と同調査員小山雅人が担当した



第21図 調査地位置図(今回調査地=e)

1. 燈籠寺遺跡 2. 上津遺跡 3. 木津遺跡 4. 木津北遺跡 5. 吐師津遺跡 6. 白口遺跡
7. 赤ヶ平遺跡 8. 釜ヶ谷遺跡 9. 内田山遺跡 10. 片山遺跡 11. 田中遺跡 12. 鶴ノ町遺跡
13. 木津平城跡 14. 燈籠寺廃寺

が、木津町教育委員会や木津警察署等の機関から、最大限の御協力と御理解を賜ったことをここに銘記して、謝意を表する次第である^(註2)。以下の概要報告の執筆は小山が担当した。

2. 調査の経過

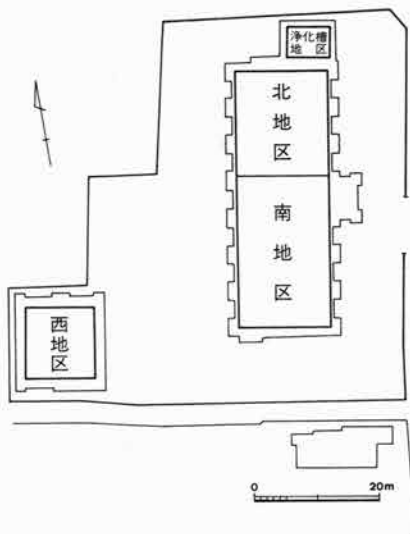
上述したように、今回の調査は、4地区に分けて行ったので、以下、各地区毎に調査の経過を報告する。なお、本概要においては、遺物番号は挿図・図版写真共通の通し番号であるが、遺構番号については、現地で命名したままに各地区毎の番号を用いたので必ず地区名を頭に付した。

(1) 西地区 (第23図・図版第10-1)

西地区と名付けた旧署長公舎部分には、近世以降の攪乱がかなり深く入っており、後述する北地区に見られた包含層はもはや残存せず、地表下70~90cmで直接地山層を検出し、その面で行くつかの遺構を認めた。溝3条、ピット数個、及びトレンチ北部の自然流路の様相を呈する深い落ち込みがそれである。また、トレンチの南東部分にはほぼ等間隔で並ぶピット状の土色の変化を認めたが、遺構としての深さはほとんどなく、第23図にはその位置だけを破線で示しておいた。礎石建物の痕跡かも知れない。

(2) 浄化槽地区 (第24図・図版第10-2)

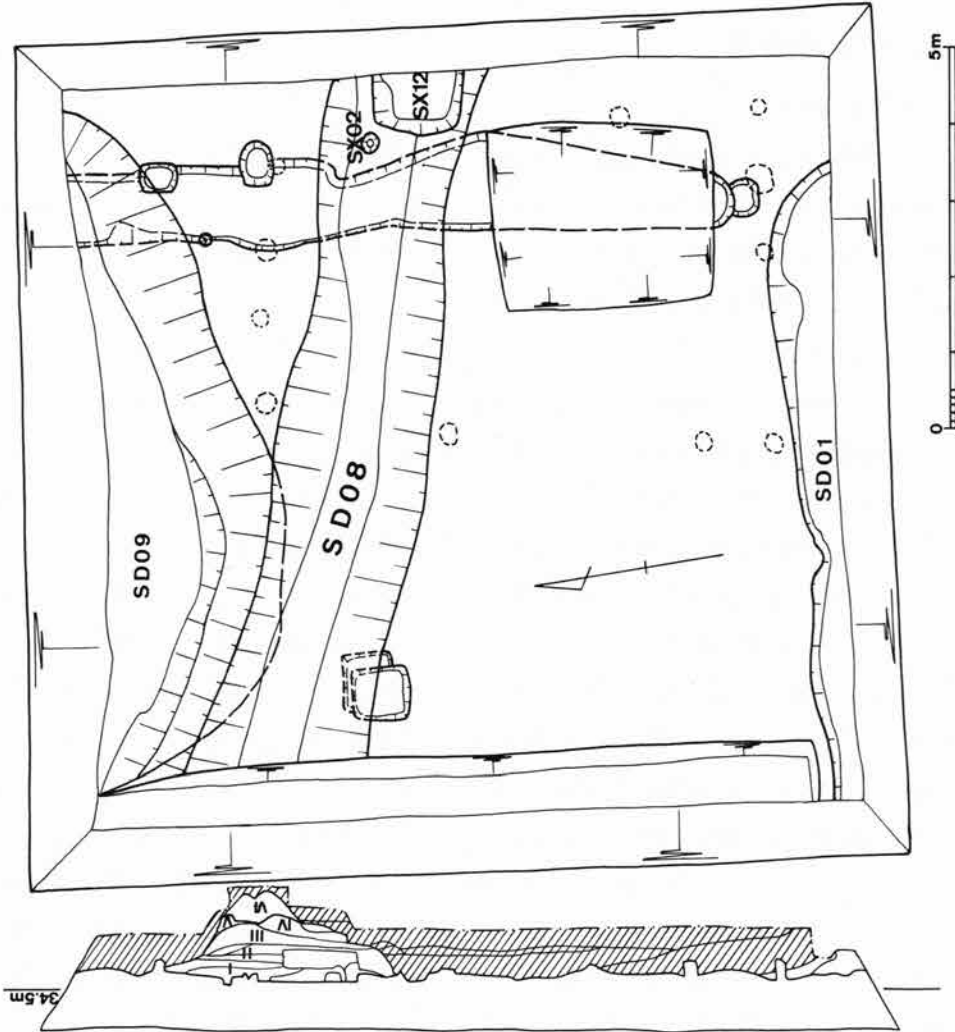
浄化槽予定地は、北地区の北西に位置する。L=33.0mまで遺物を相当数含む数層の包含層が堆積していた。第24図に示したのは、L=34.0mの面で検出された3基の土壇である。埋土は粒子のやや粗い砂で、遺物はSK01に数点伴ったにとどまる。



第22図 調査地区設定図 (1/1,200)

(3) 北地区 (第24図・図版第11-1)

新庁舎の北半で旧駐車場にあたる北地区は、攪乱も少なく、最も広く調査できた地区である。現地表下50cmまでは近・現代の攪乱であるが、L=34.5m前後で厚さ15cm程度の黄褐色の整地層を検出した。この面には礎石がいくつか並んでおり、明治30年の木津警察署の建物跡と判断された。その下層には、2層からなる包含層があり、多量の遺物を含んでいたが、特に多いのが中・近世の遺物で、奈良時代の須恵器・土師器・瓦類がこれに次ぐ。その下に広がるのが、地山と考えられる黄褐色の砂質土層で、その上面L=34.0mを測る。この地山に掘り込まれた



第23図 西地区実測図

大小の遺構は、溝30条以上・土壇40基・埋甕3基・池状遺構1を数える。主なものに関しては、次節でその概要を報告する。なお、06ライン以北で地山地形の落ち込みが確認され、これは、浄化槽地区へと続いて行くようである。

(4) 南地区 (第24図・図版第11-2)

新庁舎南半に相当するこの南地区は、昭和30年に建てられた旧庁舎の敷地にあたり、この建物の基礎等による攪乱がかなり深く、かつ広範囲に広がっているため、北地区の延長として地山(遺構)面を調査できたのは地区全体の40%に過ぎない。攪乱に分断されながらも、溝13条・土壇9基・埋甕1基・池状遺構1を検出した。

3. 中世の遺構

(1) 土器埋置遺構

西地区SX02は、トレンチ東壁際で溝SD08の埋土を切り込んで掘られたピット内に、土師器羽釜を正置した遺構である。羽釜(85)の底には小皿(84)が置かれ、同型式の小皿(83)が蓋のように重ねられ(図版第13-(1))、更にその上にやや大型の皿(82)がかぶさっていた。土器はいずれも使用された痕跡がない。

(2) 溝状遺構

中世に位置づけられる溝として、西地区SD08・北地区SD31・南地区SD02がある。

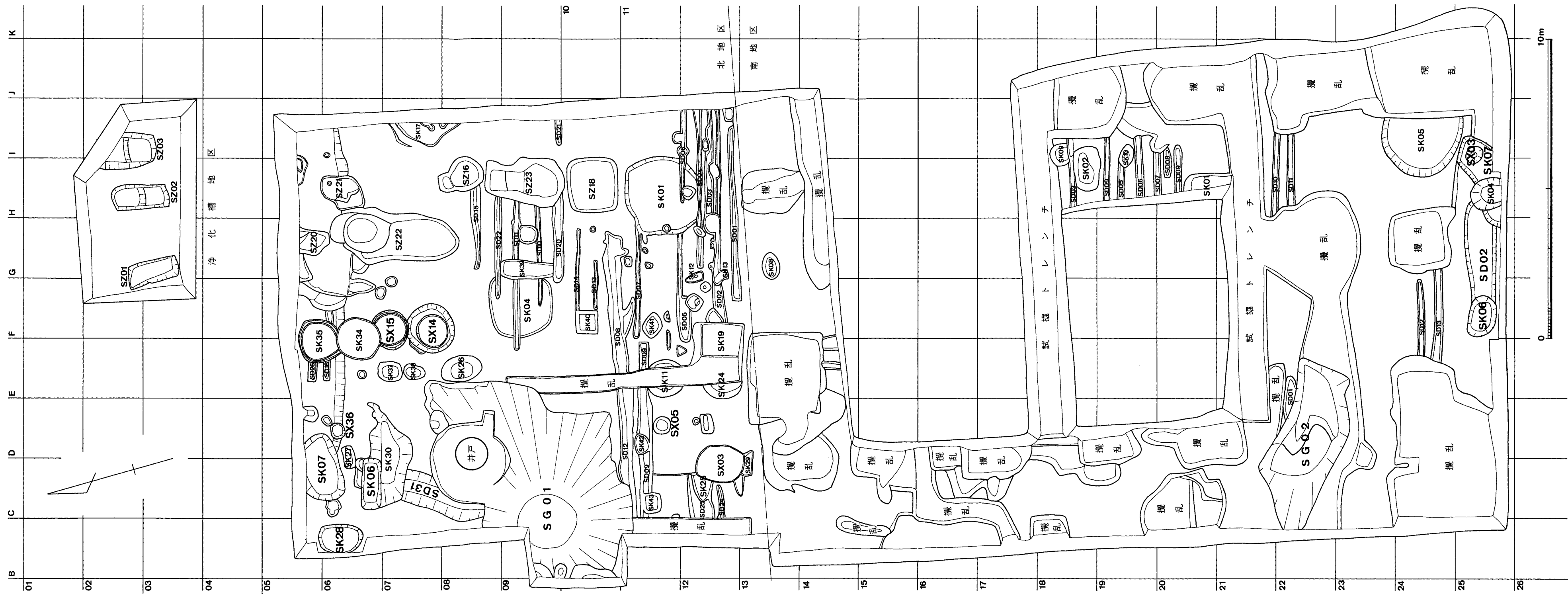
西地区SD08は、南西-北東方向に走る溝で、9.5mにわたって検出した。幅1.8mを測り、深さ1mのV字溝である。埋土は6層に分かれるが、最下層を除く各層から土師器小皿(60・61)が多くは破片となって出土した。他に、須恵器や瓦器、瀬戸おろし皿がある。

北地区SD31は、北地区の北東部C07・08で検出した溝状遺構である。北をSK30、東を近代の井戸掘形、南をSG01によって切られている。残存長は2.9mを測り、比較的残りのよい所で幅1.1mを測る。溝の底には、大小の礫と共に土師器羽釜12個体(1~13)・瓦質羽釜5個体(14~18)・瓦質播鉢2個体(19・20)と瓦質土器片10数点が投ぜられていた(第25図・図版第12-(1))。土師器小皿や陶磁類は全く見られなかった。

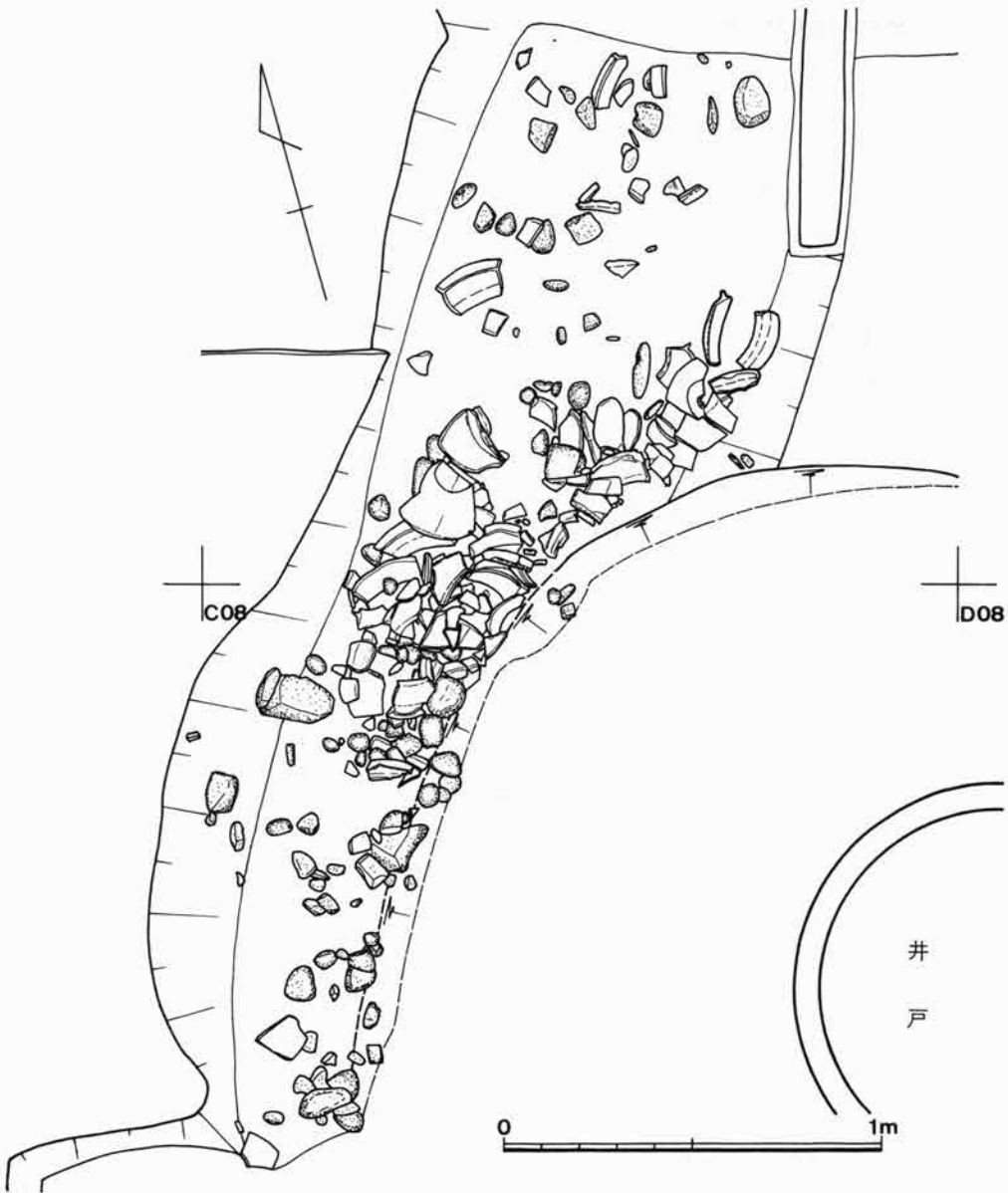
南地区SD02は、南地区の南端で検出した東西方向の溝である。両端をSK06とSK04によって切られており、検出し得た長さは3.5mにとどまる。幅は1m前後、深さは20cm前後である。出土遺物はかなり多く、個体数の確認は未だ出来ていないが、瓦質の播鉢(54)が8個体を数え、細片化した土師質羽釜がかなりある(51)。これらに混って、中国製の青磁(57・58)・青花(59)等の輸入陶磁や、瀬戸・美濃系の灰釉陶器(55・56)が出土している。

(3) 池状遺構

北地区SG01は、北地区西部で検出した大きな落ち込みである。東西7m・南北8mで最大深さは検出面から1.1mを測る。最下層には厚さ10cm前後の灰色粘土が堆積し、その上に、南方から投ぜられた炭・灰・焼土を多量に含む層が南側斜面に沿って5層堆積している(図版第12-(2))。この厚さ70cmに及ぶ焼土層によって、このSG01の南半の埋土が占められている形であり、北半の埋土は、この焼土層と平行するような淡黄褐色ないし暗褐色の砂土層から成っている。炭灰混り焼土層から出土した遺物(第28図21~47)は、破片数で941点を数える。約半数が土師器小皿で、土師質羽釜、瓦質大甕・盤が加わる。この層出土の目立った遺物として、中国製の青磁と青花があり、今回の調査では、最も多く輸入陶磁を含む遺構である。



第24図 浄化槽・北・南地区実況図



第25図 北地区 SD31 実測図

南地区SG02は、北地区SG01に類似する遺構であるが、南地区一帯に広がる現代の攪乱によって上層は失われ、東西6m・南北3m程の範囲を検出したにとどまる。下層は厚さ20~30cm程の青灰色粘土層で、中層以上は地山よりやや暗い黄褐色粘性砂質土である。遺物は、土師器皿・羽釜・瓦質の甕・盤類が多いが、瀬戸・美濃系の碗皿類や、中国製の青花皿も見られる。

4. 近世の主要な遺構

(1) 土器埋置遺構

瓦質の大甕をピットの中に埋置した遺構が、今回の調査で3例検出された。北地区SX05・SX36、南地区SX03がそれである。最も大型の甕(76)を用いた北地区SX05(図版第13-(2))は、遺存状態も最も良く、甕口縁部は失われているものの、鎌状鉄器・完形の唐津系皿(77)・炮烙片(78)が出土した。甕の底部は一か所穿孔されている。

(2) 埋桶遺構

北地区SX14(図版第14-(2))・SX15・SK34・SK35は、4基並んだいずれも真円形に近い遺構で、桶状の木質の枠を埋置していたと思われる、SX14とSX15では掘形と桶内の埋土が異なっている様子が観察された。出土遺物は、破片数でSX14から276点、SX15から80点、SK34から60点、SK35から47点出土したが、最もまとまっていたSX14の遺物を第31図92～108に示した。図示した以外には棧瓦片や瓦質大型土器片がある。

(3) 土塚状遺構

北地区SK06(図版第14-(1))は、長さ1.8m・幅0.7m・深さ0.5mの土塚で、埋土及び底面から多量の陶磁器・土器片(第32図109～119)が出土した(破片数157点)。

北地区SK07は、長さ2.3m・幅1.4m・深さ0.3mの土塚で、2層からなる埋土から大量の遺物(第32図120～129)が出土した(破片数525点)。棧瓦片(184点)が目立つ。

北地区SK28は、長さ1.4m・幅1.0m・深さ0.6mの土塚で、ここからも多くの遺物(第32図130～141)が出土した(破片数139点)。

南地区SK06は、長さ1.3m・幅0.9m・深さ0.3mの土塚で、陶磁片を主体とする遺物が出土した。小片が多いので、図示していない。

以上の4例の土塚は、いずれも長楕円形を呈し、多くの遺物を含む点で共通している。

(4) 砂土塚

第24図で、遺構番号にSZを付した土塚状遺構は、北地区東部に集中し、いずれも遺構面から1m前後の深さを有し、壁も垂直に近く、しかも埋土は完全な砂である点で共通している。これらは、噴砂の可能性が高い。遺物は大部分が細片化した瓦器と土師器皿(6基から229点)で、近世陶磁類を全く含んでいない。

(5) 溝状遺構

中世の遺構の項で報告した3条以外の溝は、いずれも東西方向の細く浅い溝である。埋土の様相から、近世末以降に形成されたらしく、遺物はいずれも細片化している。

(6) ピット

今回の調査で多数のピットないし小土塚を検出したが、柱穴らしいものは皆無であった。

5. 出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱で160箱、破片数にして約23,000点を数える。ほとんどが室町～江戸時代の土器・陶磁器・瓦等である。出土遺物の多くは遺構に伴っており、第26～33図の実測図も遺構別に配列して、一括資料としての価値を強調しておいたが、本項では便宜上、中世と近世に分けた後、各器種別にその概要を述べる。^(注3)

A 中世の遺物

土師器類には、皿(21～35・49・50・60～69・80・82～84)と羽釜(1～13・36・37・51・52・70・85)がある。羽釜の大部分は大和型に属するもので、口縁端部を斜上方に延長し、その上面を浅くくぼめるものが最も多く、口縁端部を玉縁状に折返したものがこれに次ぎ、くの字状の口縁のものは少ない。

瓦質土器には、羽釜(14～18)・播鉢(19・20・54)・盤(53)が多いが、包含層中の遺物には、碗(156)・香炉(157)・小型羽釜(158)も見られる。

無釉陶器としては、練鉢(38)と信楽系の播鉢(42)がある。

瀬戸・美濃系の灰釉陶器には、皿(56・73・74)・おろし目皿(39・159)・細蓮弁文碗(55)・壺(40)・蓋(41)がある。鉄釉陶器には天目茶碗(71・72・142・143)がある。

輸入陶器は、中国龍泉窯系の明代青磁が主で、印花文碗(43・44)・蓮弁文碗(57)・稜花皿(45・46・58)・盤(47)等がある。他に青花の碗(59)や羯磨文皿(75)等も数点見られ、包含層から、青磁(珠光青磁も含む)片が約50点出土した。

B 近世の遺物

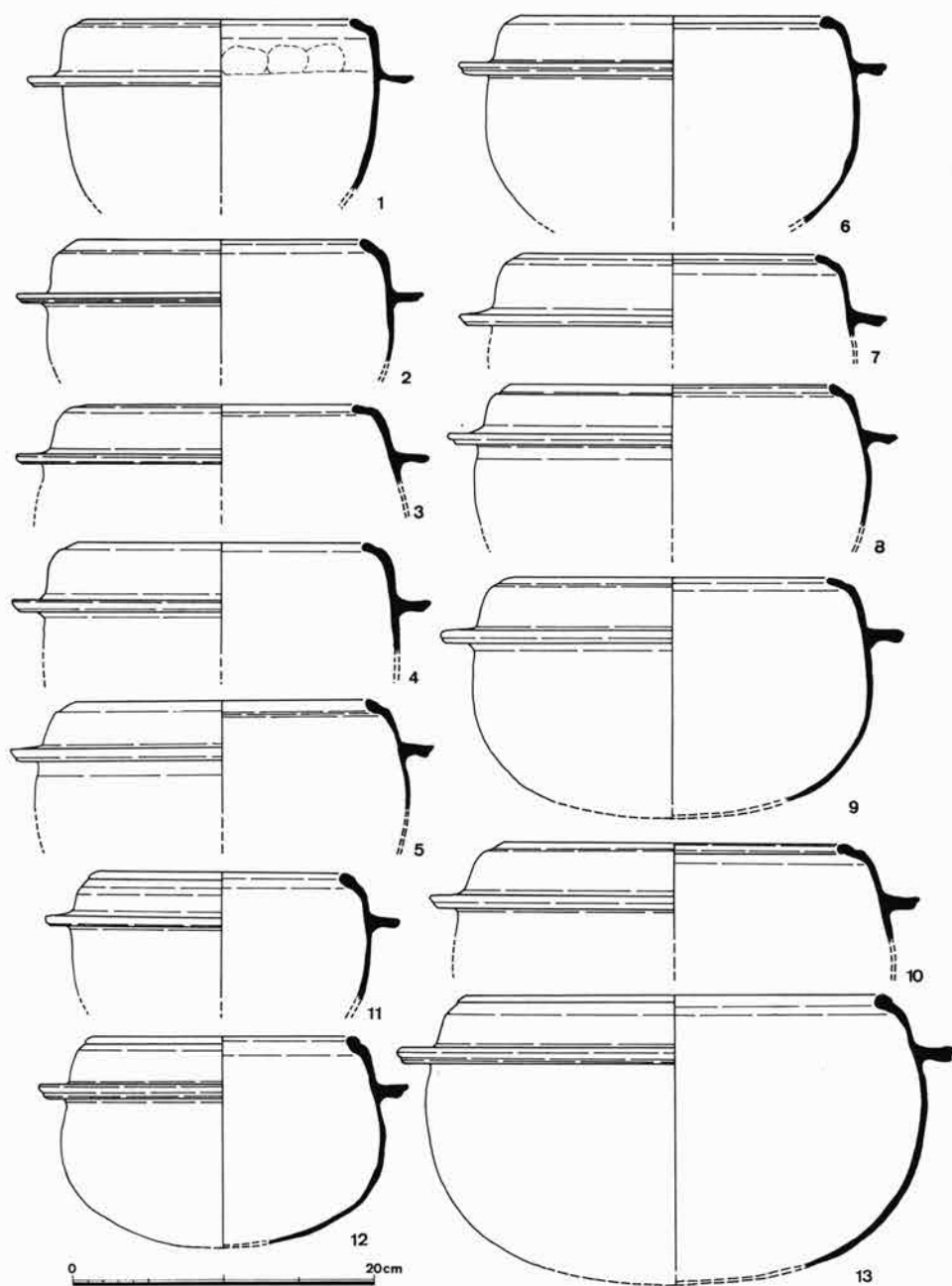
土器類には、皿(80・86～88・92・93・109～112・130～132)と、炮烙(78・89・94・95・113～115・133～135)がある。炮烙(土鍋)は、中世末の羽釜(特に36参照)を祖形として、17世紀の中間的形態(89)を経て、仮にAタイプと呼ぶ炮烙(94他)が生まれ、Bタイプ(114他)はその退化型式と考えられる。133も同一系統に属すると思われる。Cタイプ(134他)は、鉢に似るが、下面に火を受けた跡や内面底に炭化物が凝固しているところから、土鍋として用いられたのであろう。

瓦質土器は、ほとんど大甕(76・79・81)に限られ、中世に見られた播鉢はない。

無釉陶器として、産地不明(京焼系か)の碗(133)と灯明皿(132)がある。

播鉢には、信楽系(124・136)と備前系(97)があり、中世に見られた瓦質のものはない。

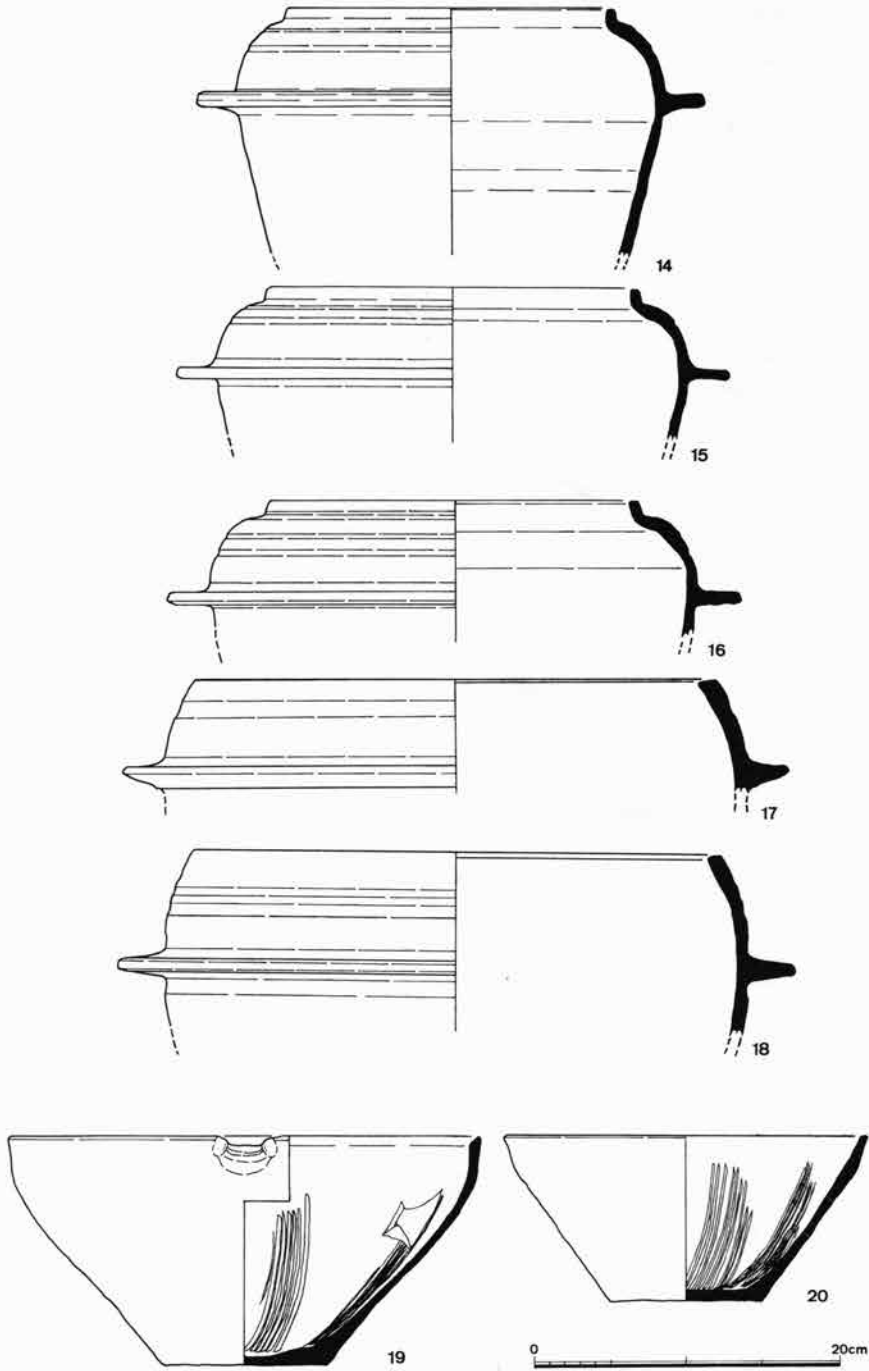
唐津系陶器で目立つのは、刷毛目文碗(117・126・138)であるが、見込みを蛇の目釉剥ぎした碗(125)や黄緑色総釉の小碗(116)もある。他に唐津系の陶器としては、青緑釉の碗



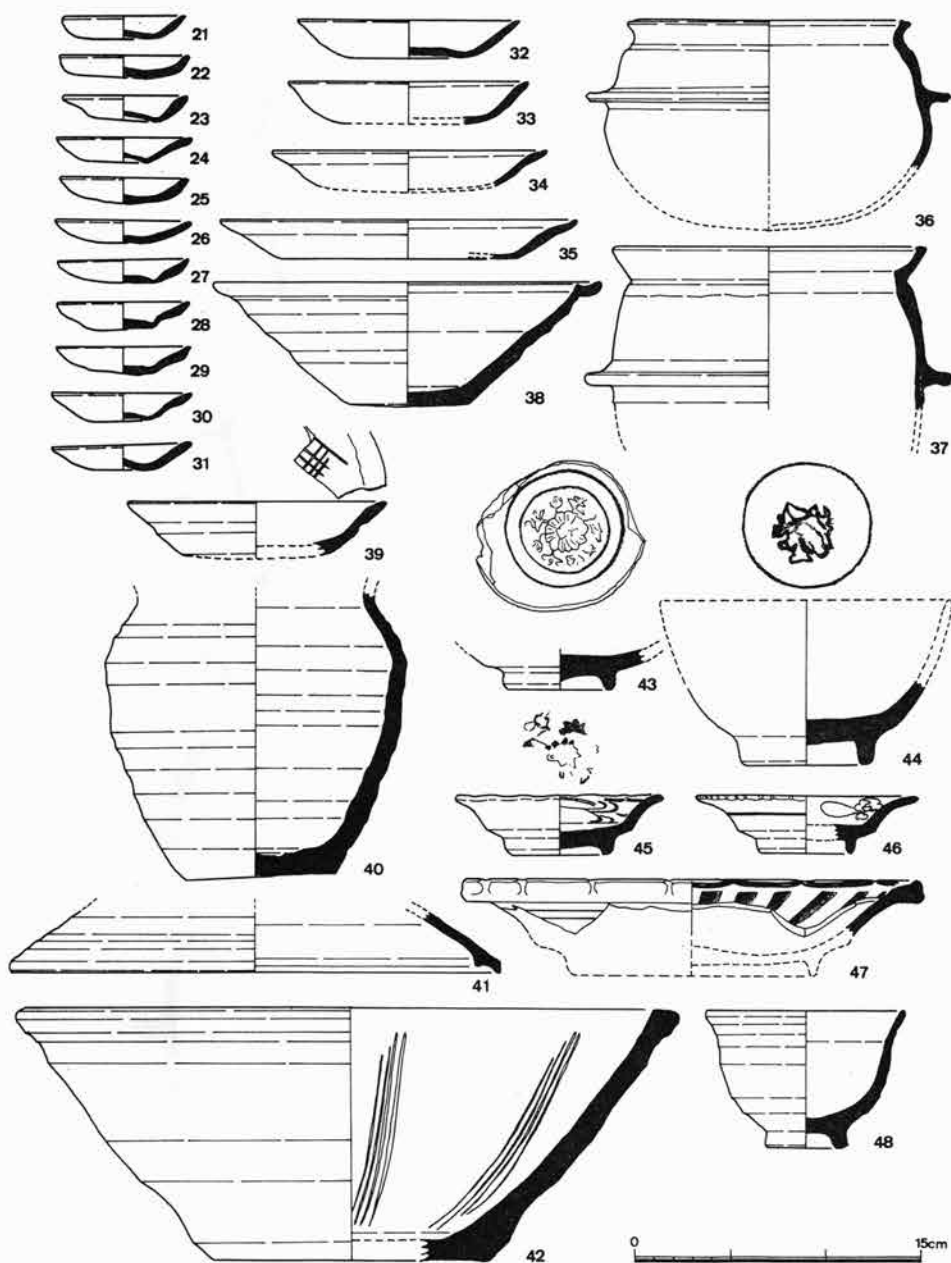
第26図 北地区 SD31 出土遺物(1)

(144)と皿(77)が多くあり、三島手の鉢(163)も少なくない。皿(162)は京焼系に近く、一方、皿(161)は、胎土目積の痕跡を残す古手のものである。

中世には少なからず見られた瀬戸・美濃系の陶器としては、鉄釉の水注(137)しかない。



第27図 北地区 SD31 出土遺物(2)

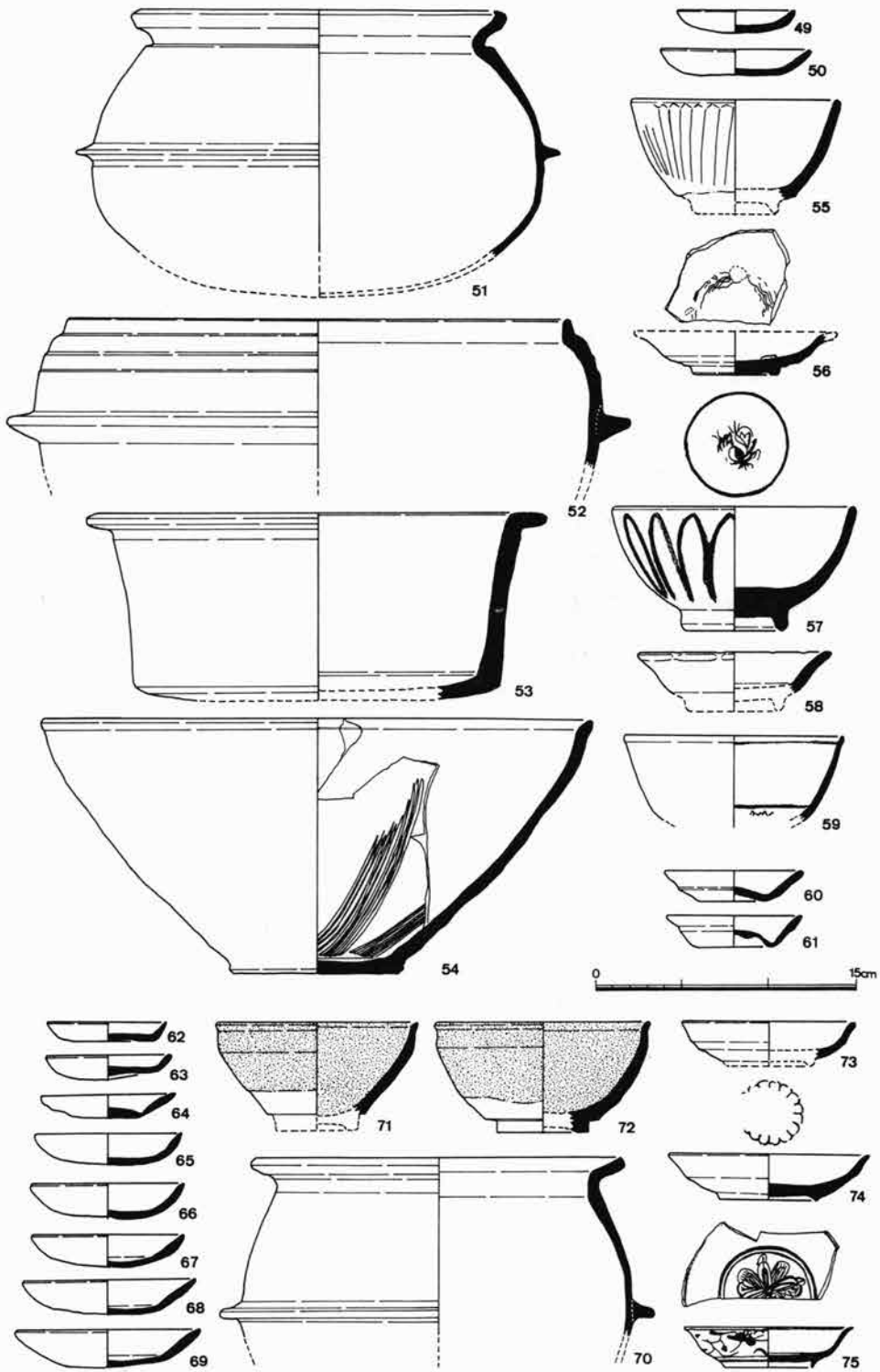


第28図 北地区SG01出土遺物(21~47:焼土層, 48:砂層)

国産青磁(伊万里系)として、碗(98)と皿(99)が出土している。なお、浄化槽地区出土の碗(145)は、見込みに単純な花文(?)を描いた青磁染付である。

国産の白磁としては、小杯(139・164・165)に限られるようである。

「くらわんか手」と称される伊万里系染付碗には、見込みを蛇の目釉剥ぎするもの(100



第29図 中世遺構出土遺物
上段：南地区SD02；下段：南地区SG02；60・61：西地区SD08

・101・118・127・128)と、しないもの(119・129・149)とが見られる。器形の特徴的なものとして、口縁端部を外反させる101と、体部以下に数条の沈線を施す100がある。一方、染付皿は、特に北地区SX14に集中していたが、形態と文様によって、大きく2種類に分かれる。Aタイプは器高が高く、絵付けは単純で、高台脇以下露台で、見込みに蛇の目釉剥ぎを施す(102~104・141)。Bタイプは器高が低く、絵付けは複雑で、総釉である(105~108)。小型の甕(96)は、丹波系と思われる。

土器・陶磁器類以外の近世の遺物としては、瓦片がかなりある。本葺瓦と棧瓦とがあり、北地区SK07等の18世紀の遺構から出土した瓦は棧瓦が多い。

他に図示できなかったが、泥面子類・伏見人形・伊万里人形・古銭(宋銭と寛永通宝等20点)等が出土している。

C 弥生~鎌倉時代の遺物

弥生時代の甕の底部と考えられる破片が2点(183・184)出土している。いずれも右上りの粗いタタキを施し、183はドーナツ底を呈する。畿内第5様式に属する。

古墳時代の須恵器(181)は、特に外面がかなり磨耗しているが、6世紀初頭前後の高杯と考えられる。また、埴輪片(182)が2点出土しているが、調査地近くに古墳の存在は知られておらず、あるいは円筒棺に使用されたのかも知れない。

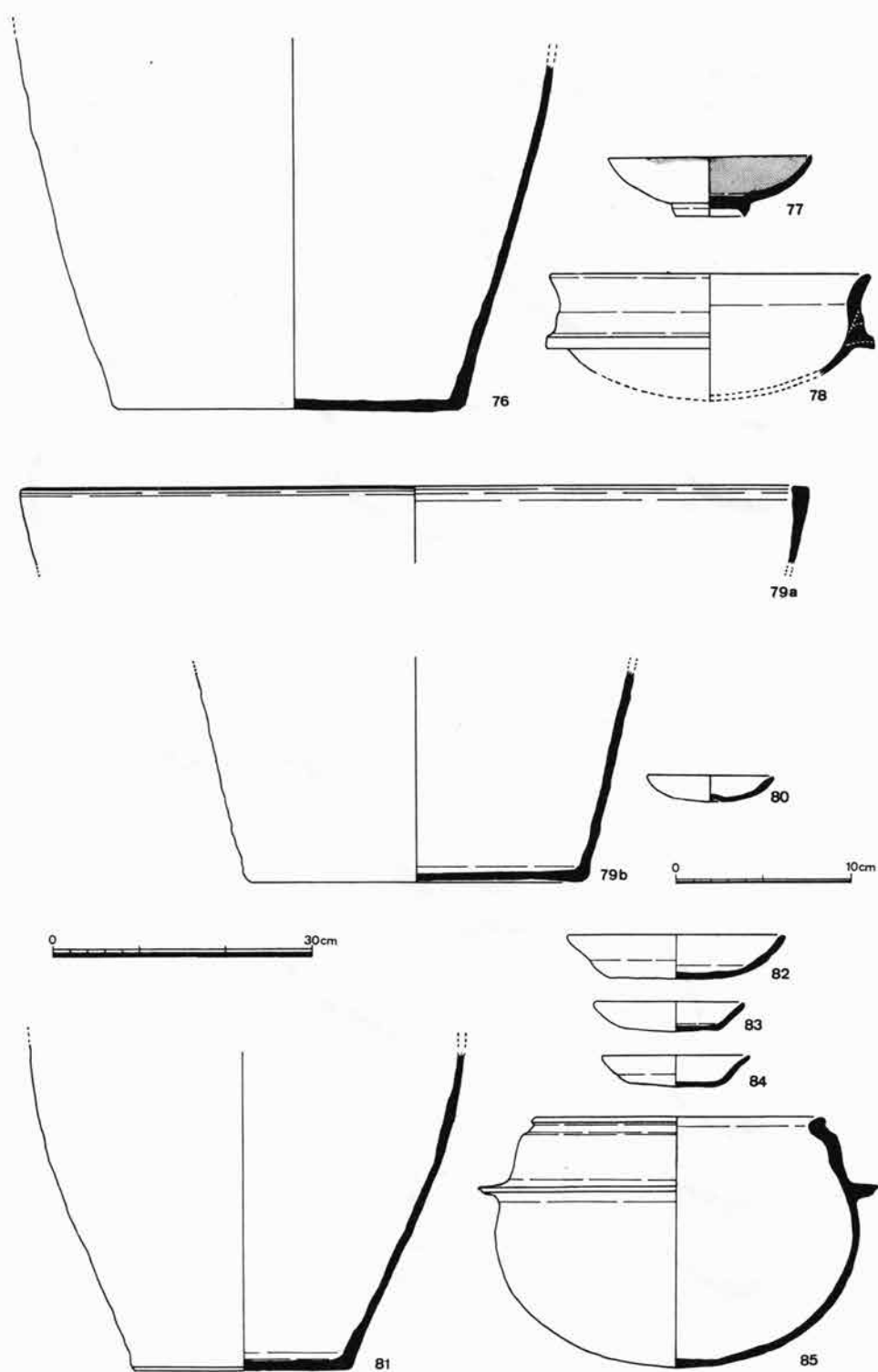
奈良時代の遺物は、整理箱2箱程度の出土が見られた。7世紀中頃の須恵器1点を除き、いずれも8世紀の須恵器(173~180)・土師器・布目瓦等である。須恵器に限って言えば、各器種が存在するが、特に鉄鉢(178・179)が比較的多いようである。

平安時代末期から鎌倉時代に位置づけられる遺物としては、多くは細片化した瓦器の塊(167~171)や皿(172)があり、他に、古瀬戸四耳壺片2点、中国製灰白磁玉縁碗2点、青磁蓮弁文碗数点等の破片がある。以上の弥生時代から中世前半期に属する遺物は、いずれも包含層や遺構の埋土から出土したものである。

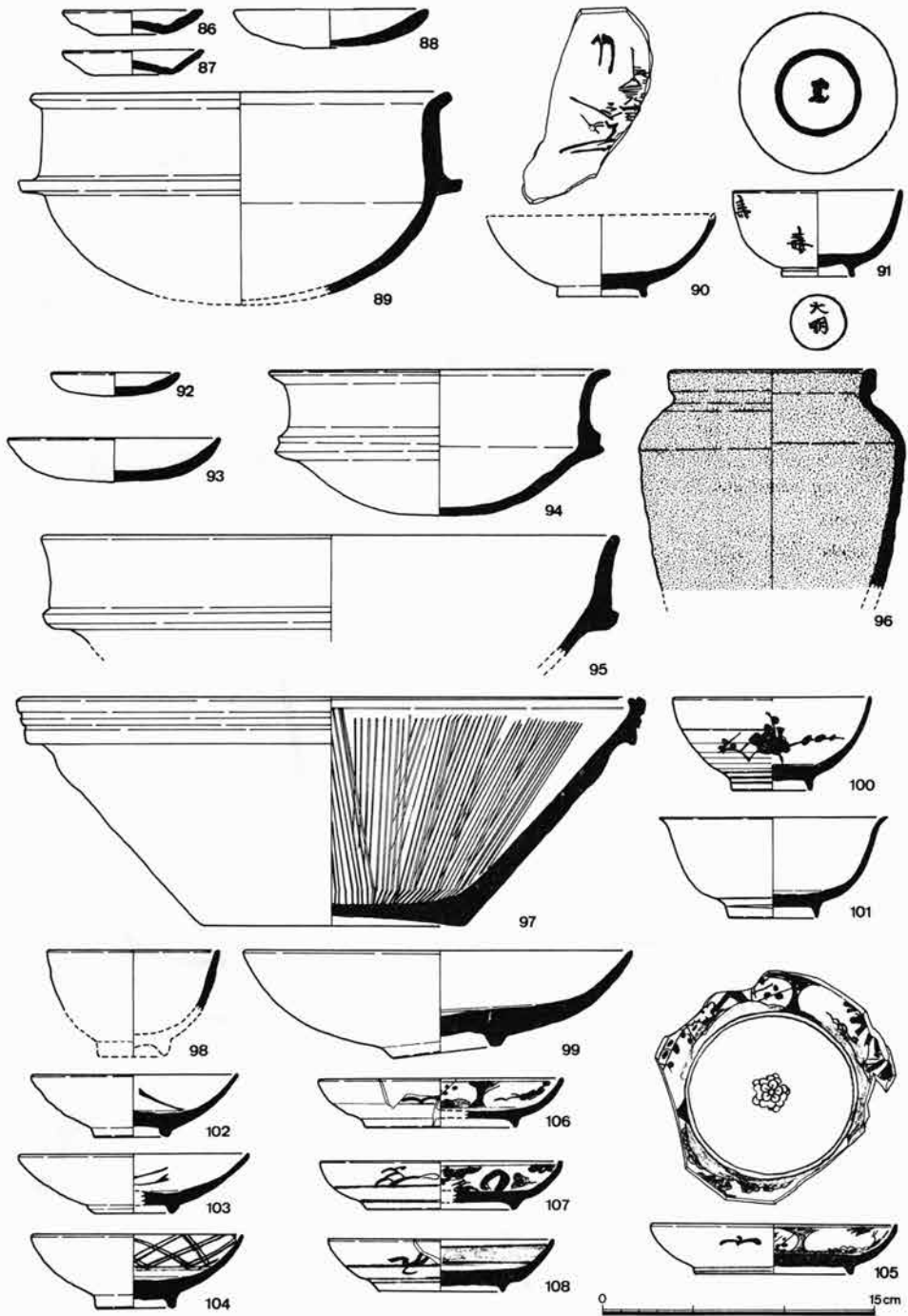
以上、その概要を報告した出土遺物は、破片数にして2万点を超えるが、皿・羽釜・炮烙等の土師質のものが70%近くを占め、次いで近世陶磁が20%、瓦質土器が7%、須恵器が6%である。この数字については、今後より詳細なものにして行きたい。

6. ま と め

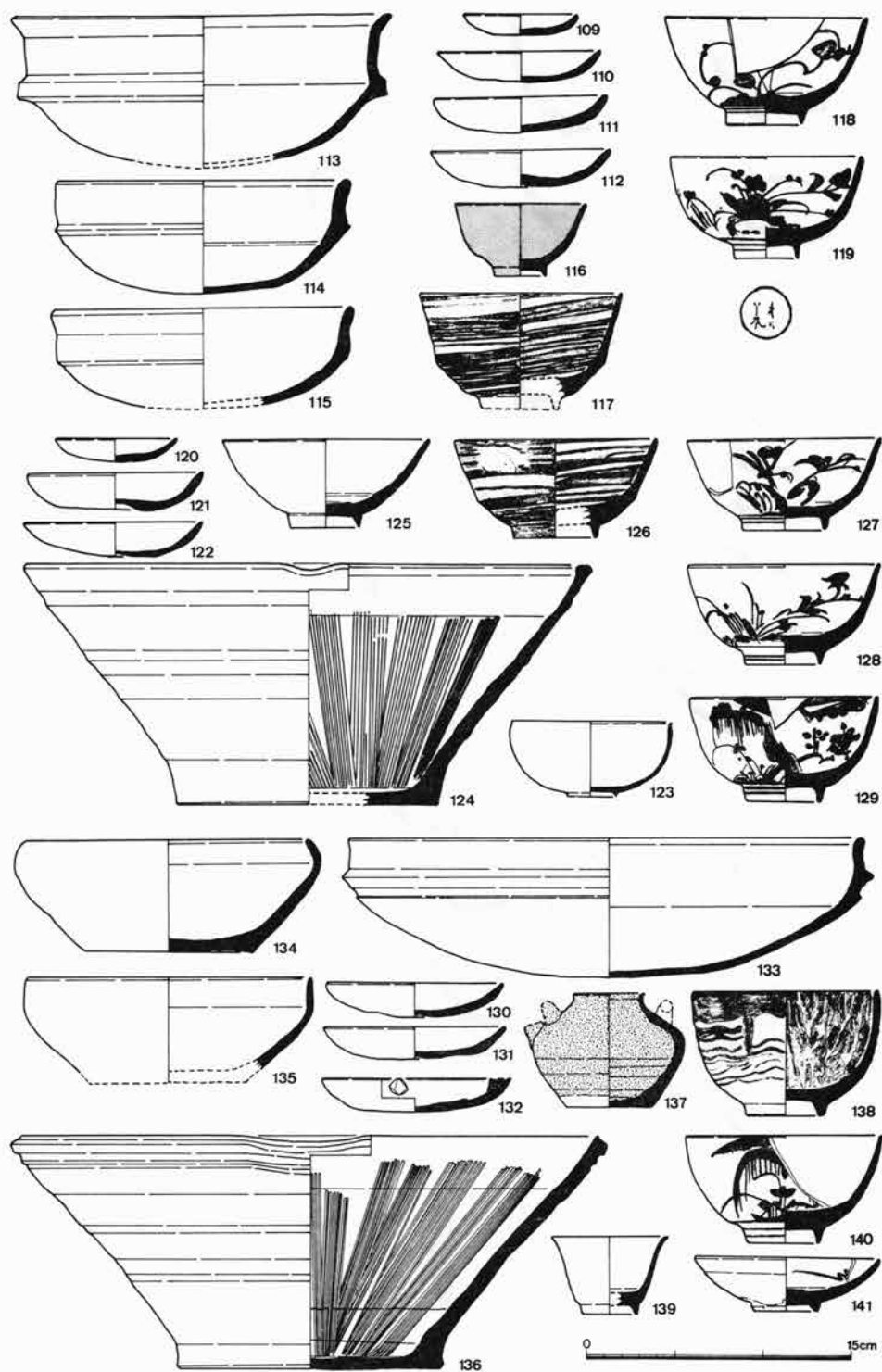
木津遺跡は、木津町の市街地をほぼ覆う程の広大な散布地であるが、その面積に比して今回を含めて5度の調査による発掘面積は、微々たるものである。今回の調査においては、室町時代後半から江戸時代中頃に至る時期の溝や土塚等の遺構が夥しい遺物と共に検出された。同時に少数ながら今まで木津遺跡では報告されていないより古い時代の遺物も出土



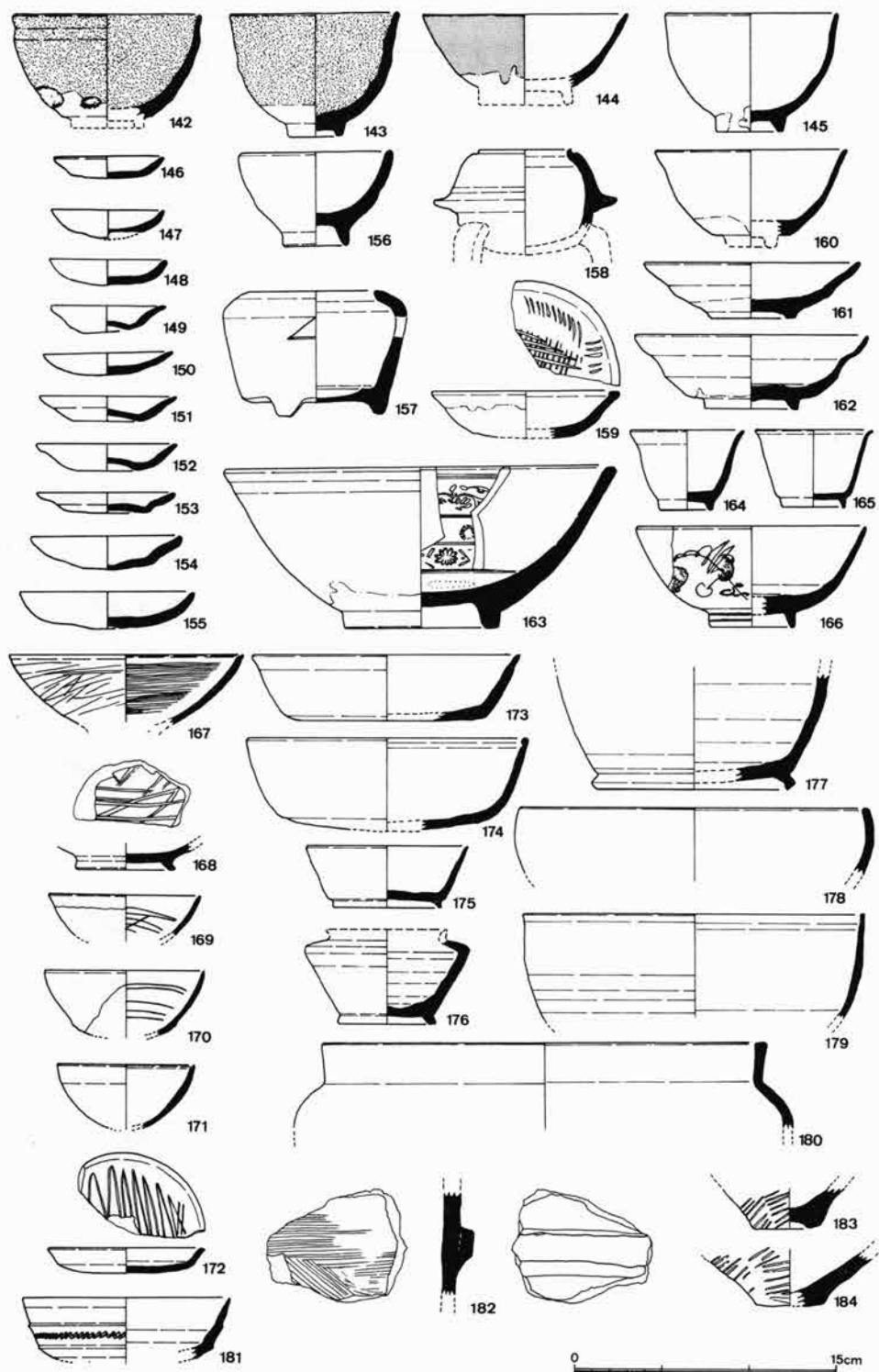
第30图 土器埋置遺構出土遺物(76・79・81(1/8))
上段：北地区SX05；中段：同SX36；下段左：南地区SX03；下段右：西地区SX02



第31図 近世遺構出土遺物(1)
上段：南地区SX07；下段：北地区SX14



第32図 近世遺構出土遺物(2)
 上段：北地区SK06；中段：同SK07；下段：同SK28



第33図 包含層出土遺物

している。そこで、時代を追って今回の調査結果をまとめてみたい。

(1) 弥生時代——西地区と北地区から各1点弥生土器(183・184)が出土している。畿内第5様式の甕の底部であり、近くに弥生時代の遺跡があるのかも知れない。

(2) 古墳時代——須恵器の高杯(?)片1点(181)と埴輪片(182)2点が出土している。古墳時代の中期後半から後期頃のものであろう。

以上の5点の遺物は、従来は奈良時代以降とされてきた木津遺跡に、更に時代をさかのぼる遺構・遺物が存在した可能性を示唆するものである。

(3) 奈良時代——調査地全域の包含層や遺構埋土から、須恵器(173~180)・土師器・瓦等の8世紀に位置づけられる遺物が相当数出土している。今回調査地の南西約100mの第1次調査地(現商工会館)では、奈良時代の礎石建物跡が検出されており、また、木津遺跡の東隣には著名な上津遺跡もあり、今回の調査地にも恐らく奈良時代の遺構があったと思われるが、後世に削平されたのであろう。なお、1点ながら7世紀中葉にさかのぼる須恵器片も出土している。

(4) 平安時代後期~鎌倉時代——平安時代初期~中頃までの遺物は出土していない。12~14世紀に位置づけられる遺物として、破片数1,000点を超える瓦器(167~172)や古瀬戸の四耳壺片が数点あり、輸入陶磁器として青磁碗片のいくつかは14世紀前半にさかのぼる。

(5) 室町時代——今回の調査において遺構から出土した一括資料の中で最も古くに位置づけられるのは、西地区SD08の土師器皿を主体とする遺物群で、14世紀から15世紀前半までの資料である。これに後続するのが西地区SX02と北地区SD31で、15世紀後半に位置づけられよう。北地区SG01焼土層と南地区SD02の出土遺物には、中国製青磁のようにやや年代のさかのぼるものも含まれるが、全体として16世紀前半と見られる。そして、南地区SG02の資料は、天目茶碗(71)等から、16世紀の中頃から後半に位置づけられよう。

以上の中世(4・5項)の遺物は決して少なくはないが、遺構が溝や池状遺構であり、遺跡の性格付けはかなり困難である。あえて、想像をたくましくするなら、瓦器や土師器が平安時代の終り頃から室町時代最末期まで連続と存在し続け、古瀬戸や輸入陶磁もこれに並行するように中世全期にわたっているところから、城館ないし寺院といったひとつの勢力が当調査地ないしその近辺に存在したのではないとも考えられる。しかし、この点に関しては、今後の周辺において中世の良好な遺構が調査されるのを待ちたいと思う。

(6) 江戸時代前期——16世紀末に位置づけられる胎土目積の唐津系皿(161)と17世紀後半と思われる南地区SK07の遺物との間には、今回調査地においては若干の空白期間がある。南地区SK07出土の壺(90)は、京焼系清水銘の陶器であるが、伊万里産か否かについては、図示していない他の例と共に後日検討を加えたい。

(7) 江戸時代中期——今回の調査で3例検出された埋甕遺構の内、北地区SX05からは炮烙片(78)と唐津系青磁釉皿(77)が出土している。後者は17世紀後半から18世紀前半に編年されているが、同様の遺構南地区SX03が切り合い関係によって南地区SK07より新しいことからすれば、17世紀末から18世紀初頭頃のものであろう。この埋甕遺構に関しては、鎌状鉄器の存在から、一応、墓と見做しておきたい。

北地区SX14・SK06・SK07・SK28は、いずれも多量の遺物が出土したが、時期差はほとんどないと思われる。18世紀前半から中頃に位置づけられるこれらの遺構の性格については、充分検討を加えていないが、土塚状のものについてはゴミ穴の可能性が高いと思われる。また、埋桶遺構は便所かも知れない。

このように、今回の調査は、多くの遺構・遺物に恵まれたが、遺構の性格については、はなはだ疑問が残るとせざるを得ない。今後周辺の調査が行われるならば、今回の調査地の性格についてもより明らかにされることであろう。(小山雅人)

注1 『木津町史 史料篇1』, 1984, 173~177頁, 及び引用文献参照。

注2 調査に補助員・整理員として参加された方々は、次の通りである。

(補助員) 村田和弘・前田 寛・木下年史・岩前良幸・小住寛二・滋井雅章・三宅正樹・吉川啓太, (整理員) 林 恵子・柳沢洋子・新谷二三代・平岡佳代子・柳沢登紀子・森崎千寿代・白石由香・宮本純二・田中康夫・岩前忠英・田中達也・水野哲郎・滋井秀明・武田一郎・木村和彦(敬称略・順不同)。

注3 中・近世の遺物については、担当者の1人松井と、当調査研究センター調査員伊野近富・引原茂治の両氏の助言を得て、小山が執筆した。以下、主に参考にした文献を挙げる。菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』, 同朋社) 1983, 725~758頁; 大橋康二他『国内出土の肥前陶磁』, (九州陶磁文化館) 1984; 亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」(『鏡山先生古稀記念古文化論叢』) 1980, 811~852頁。

4. 河守遺跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、宮福線鉄道建設工事に伴い、日本鉄道建設公団大阪支社の依頼を受けて財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施したものである。

加佐郡大江町を経て宮津市と福知山市とを直結する鉄道路線、宮福線の鉄道建設は、日本国有鉄道に代わる第3セクター宮福鉄道会社が設立されたことにより、昭和57年に再開された。鉄道建設に先立つ分布調査の結果、大江町内では河守遺跡が直接路線にかかることになった。このため、日本鉄道建設公団大阪支社と京都府教育委員会との間で協議が行われ、当調査研究センターが発掘調査を実施することになったのである。

調査は、昭和60年5月20日から10月18日までの期間で行い、現地調査を当調査研究センター調査課主任調査員長谷川達・同調査員三好博喜が担当した。

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員および補助員として作業に従事していただいた^(注1)。また、調査全般にわたり、大江町教育委員会をはじめとする関係諸機関の協力を得ることができ、現地調査においても多くの方々の御協力と御指導とを賜わった。改めて感謝の意を表わしたい。

2. 位置と環境

河守遺跡は、京都府加佐郡大江町河守に所在する。調査地は、由良川と宮川とによって織り成された標高9～11mの沖積地にある。調査地内の地勢は、3地区から両側に向けて徐々に低くなっているものの、ほぼ平坦であった。周辺には広大な水田地帯が形成されており、一般国道175号西側には河守市街地が続いている。

河守遺跡は、条里制地割を現在の耕地地割に踏襲した遺跡として認識されていた。遺跡のある河守地区の耕地地割は、東西南北の方位に沿って、ほぼ一町方角の碁盤目状に区画されている。大江町の条里復原を試みた芦田忠司氏によれば、河守地区には少なくとも面積27町の条里制地割が施行されていたということである。河守地区のほかにも、金屋・波美地区、阿良須地区、二箇地区に条里制地割の分布を指摘している。以下では、河守地区の条里制地割が形成されるに至った歴史的環境について概観してみたい。

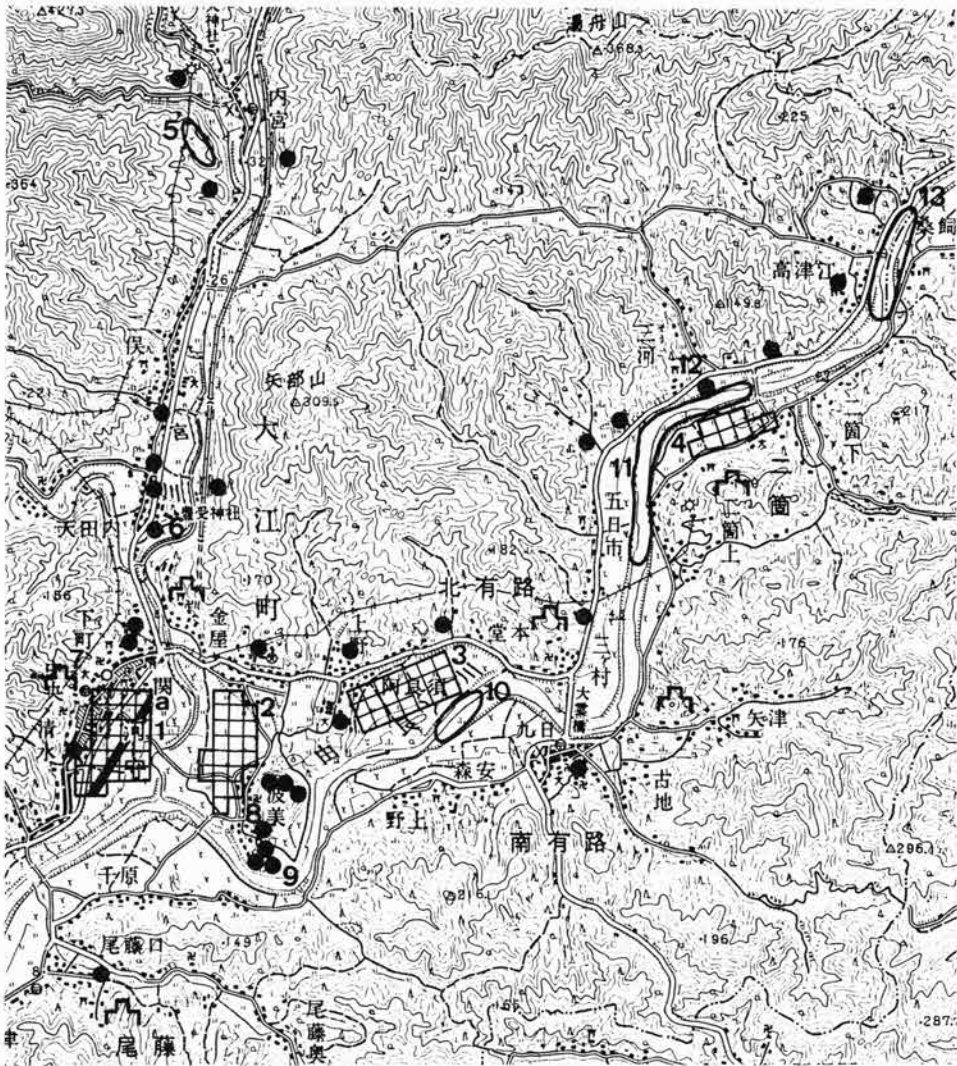
縄文時代の遺跡は、由良川沿いにその存在が知られている。三河宮の下遺跡が昭和48年^(注3)に、舞鶴市桑飼下遺跡が昭和47年^(注4)にそれぞれ発掘調査され、縄文時代後期の集落跡が検出

(注5)
された。梅ヶ平遺跡では、石鉄が出土しただけで遺構は検出されていない。

弥生時代の大江町内の遺跡については、今のところ明確にされてない。近くには、自然堤防上に営まれた集落跡として著名な舞鶴市志高遺跡がある。

大江町内で知られている古墳は、古墳時代後期の小規模な円墳が多い。住居跡は、高川原遺跡で9基、三河宮の下遺跡で7基が検出された。いずれも6～7世紀のものである。

(注6)
奈良時代から平安時代にかけて、大江町は、丹後国加佐郡に含まれる地域であり、北有



第34図 調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- a. 調査地 1. 河守条里 2. 金屋・波美条里 3. 阿良須条里 4. 二箇条里 5. 梅ヶ平遺跡
6. 豊受神社付近遺跡 7. 河守城跡 8. 宮裏古墳 9. 宮山古墳群 10. 高川原遺跡 11. 二箇遺跡
12. 三河宮の下遺跡 13. 高津江遺跡

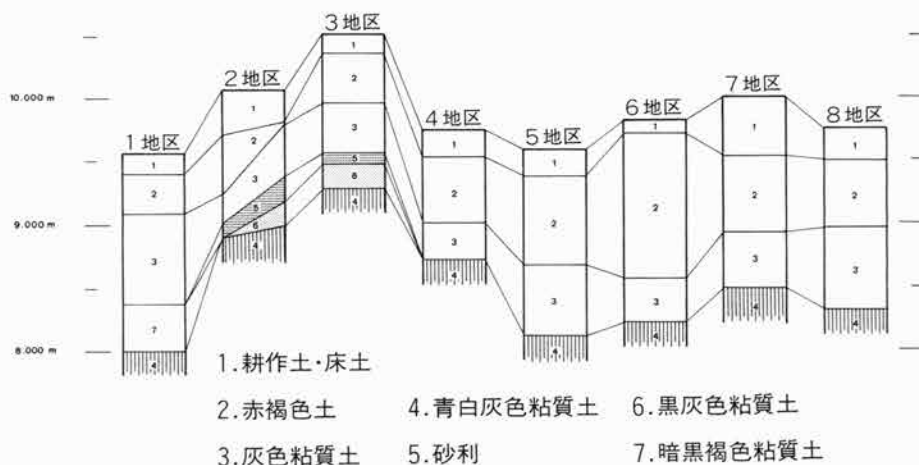
路・南有路を中心として有道郷，河守を中心として川守郷が置かれたとされている。『延喜式』神名帳にみえる加佐郡11座のうち「阿良須神社」を大江町内に比定する説もあるが判然としていない。^(注7)考古学的にみても、この時代の様相は不明瞭である。

大江町内の原始・古代の遺跡は、40か所を数えるにすぎない。実際、町の中央を流れる由良川の流域に平地はみられるが、大半は氾濫原である。この他は山地であることから、わずかな平地しか持たないこの地域には、大規模な集落を形成する素地が備わっていなかったものと考えられる。この様な状況のなかで、いつ、いかにして条里制地割が施行されたかについては問題を残すところである。

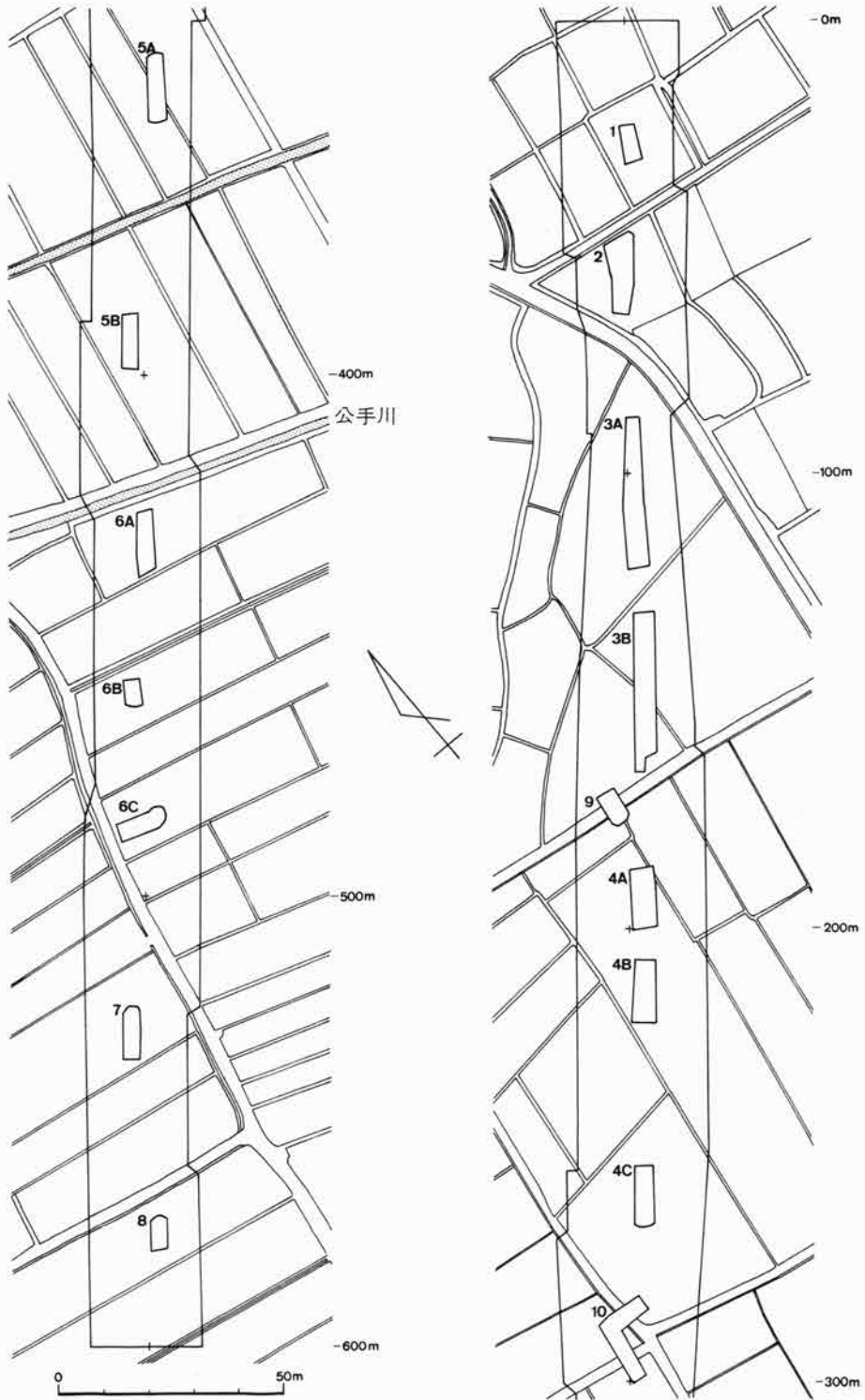
3. 調査経過

調査は、条里制地割に伴う遺構・遺物の検出および条里制地割施行前の遺構・遺物の検出を主な目的として実施した。調査対象地は、全長600m、幅20～30mと細長く、広範囲にわたる。このため各所に試掘トレンチを設けて、遺跡の状況を把握することに努めた。基準線は、路線工事予定地内の中央線を用い、調査対象地北東端を起点とした。地区割りは、調査対象地が条里制地割を斜行しながら横切るため、北東側から南西側に向けて各条里ごとに1～8の地区名を与えた。各地区ごとにトレンチを設け、複数ある場合には、アルファベットによるトレンチ名を付した。なお、農道部分についての掘削も2か所で行い、9地区・10地区とした。設置したトレンチは16か所である。掘削面積は、排水対策関連の掘削をも含めて1,650m²に及ぶ。

現地調査は5月20日に開始し、北東側から順次掘削を進めた。周辺は水田地帯で、耕作



第35図 土層柱状図



第36図 トレンチ配置図

中であつたため周囲からの湧水には終始悩まされた。しかも、全体に粘質土層であつたため水捌が悪く、排水作業には多大な労力を必要とした。このため、調査は困難をきわめた。掘削は、耕作土・床土および赤褐色土までを重機により行った。その後は人力によって進め、遺構・遺物の検出に努めた。写真撮影・測量作業はその都度行い、10月18日には関係者説明会を行うとともにすべての現地作業を終了した。

調査地の全般的な層位は、耕作土(床土)・赤褐色土・灰色粘質土・青白灰色粘質土の順であつた。赤褐色土層の厚さは、北東側で30~40cm、南西側で50~100cmと地区によって異なつていた。灰色粘質土層はほぼ均一で、各地区ともに40~60cmであつた。2地区・3地区では、灰色粘質土と青白灰色粘質土との間に10cm程度の砂利層と20cm程度の黒灰色粘質土層とが存在した。遺物が認められたのは、灰色粘質土層までであつたため、掘削は青白灰色粘質土層の上面までとした。掘削深度は北東側が1~1.2m程度で、南西側は赤褐色土の堆積が厚かつたため1.4~1.7mと深いものになつた。

調査の結果、杭列状遺構8か所と溝状になると思われる落ち込み1か所を検出した。遺物の大半は、奈良時代から平安時代にかけての土師器・須恵器であり、ほとんどが2地区および3地区から出土した。しかし、当初予想していた古代の条里制地割に伴う明確な畦畔や水路などの遺構および条里制地割施行前の集落跡などは検出できなかった。

4. 検出遺構

(1) 杭列状遺構

杭列SX01・SX03 3Aトレンチ北東端で検出した。杭列の方向は、ほぼ東西方向(SX01・N78°E, SX03・E83°E)である。検出した杭は、SX01が14本、SX03が5本で、直径2~3cm・長さ20~30cmの丸木を用いていた。SX01の杭頂部の絶対高は9.75m程度、地表下約80cmの地点で検出した。SX03は、さらに10cm前後下から検出された。両者ともに灰色粘質土層中に打ち込んだものと思われる。

杭列SX02(第37図) 2トレンチで検出した。杭列の方向は、ほぼ南北方向(N2°EおよびN14°E)である。検出した杭は18本で、2~4cm角の割材を用いていた。杭頂部の絶対高は9.25m前後、地表下約80cmの地点で検出した。杭の長さは80~100cmである。同様の材質・加工を施した杭は、1トレンチでも1本検出した。この杭は、灰色粘質土層中に打ち込んだものであり、SX02も同じように灰色粘質土層中に打ち込まれたものと推察される。

杭列SX05・SX06 3Bトレンチの中央で検出した。杭列の方向は、ほぼ南北方向(SX05・N3°W, SX06・N16°W)である。検出した杭は、SX05が11本、SX06が8本で、2~4

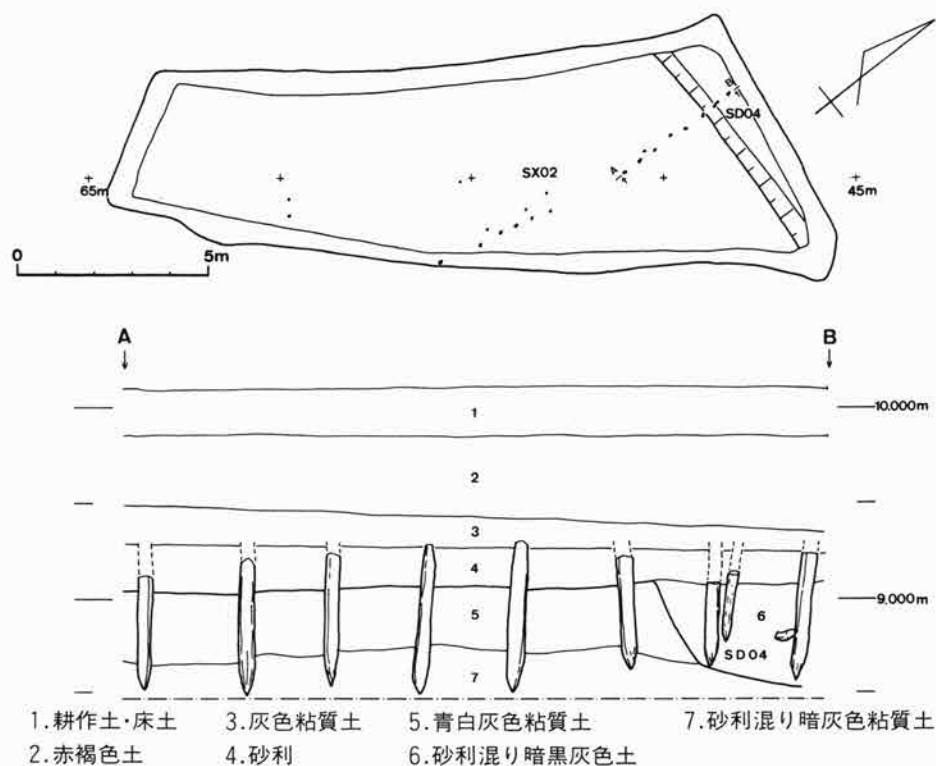
cm角の割材を用いていた。SX05は現在の畦畔下で検出した杭列で、畦畔を作るために近現代に打ち込まれたものであろう。SX06の杭頂部の絶対高は9.35m前後、地表下約80cmの地点で検出した。杭の長さは80~100cmである。灰色粘質土層中に打ち込んだものと思われる。

杭列SX07・SX08 交差する農道を掘削した10トレンチで検出した。農道直下で検出されたこれらの杭列も直交する状況を呈していたことから、農道拡張以前の畦畔に伴う杭列と考えられる。検出した杭は、SX07が27本、SX08が23本で、直径2~4cm、長さ50cm前後の丸木を用いていた。杭頂部は絶対高8.8m程度、地表下約1.1mの地点で検出した。

杭列SX09 農道部分を掘削した9トレンチで検出した。検出した杭は59本で、2~4cm・長さ50~80cmの丸木を用いていた。杭頂部の絶対高は9.5m前後、地表下約1mで検出した。農道拡張以前の畦畔に伴う杭列と思われる。

(2) 溝状遺構

溝SD04(第37図) 2トレンチ北東端で南側肩部を約6mにわたって検出した。北側肩部については、農道が迫っていたため掘削できなかった。青白灰色粘質土をおよそ55cm掘



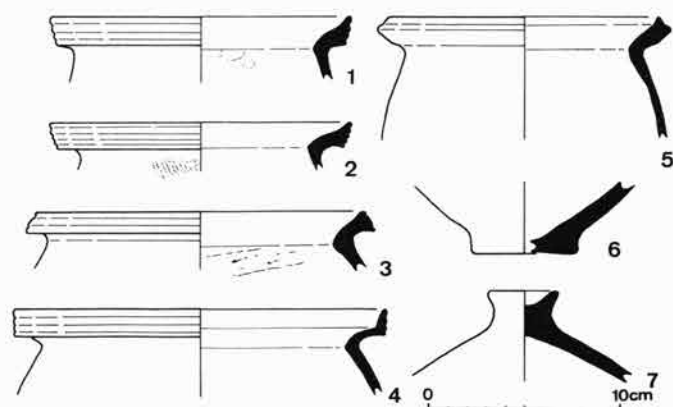
第37図 2トレンチ検出遺構実測図

り込んだ素掘りの溝と考えられ、方向はほぼ東西(N88°E)である。埋土内から須恵器の杯蓋(第40図1)が出土している。杭列SX02の杭が溝の埋土中に打ち込まれていることから、溝の埋没後に杭列が形成されたものと判断できる。遺物の年代から、溝の埋没時期は9世紀と考えられよう。

5. 出土遺物

遺物のほとんどは2地区・3地区から出土したもので、大半が奈良時代から平安時代にかけての土師器・須恵器で占められている。これらの遺物は、灰色粘質土層下部から砂利層・黒灰色粘質土層にかけて、多くの木片と共に出土した。大半が小破片で、復原できるものはほとんどなかった。磨滅したものが少なかったことから、これらの遺物は極めて近い場所から流れ込んだものと思われる。層位別での出土遺物の傾向をみると、赤褐色土層には近世、灰色粘質土層上部には中世、灰色粘質土層下部および砂利層・黒灰色粘質土層には平安時代以前の遺物が多い。遺物には弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦・土製品・石製品・金属製品・木製品がある。

弥生土器(第38図) 5は甕で、口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を上方へつまみあげている。端部外面には1条の凹線をめぐらす。磨滅のため細部の調整は不明である。第Ⅳ様式併行と思われる。1～4は、口縁部を「く」の字状に外反させて端部を拡張するものである。1は端部外面に3条の擬凹線をめぐらしている。調整は磨滅のため不明な点が多く、内面にナデ調整に伴う指頭圧痕が認められるだけである。2は端部外面に4条の擬凹線をめぐらし、胴部外面にはタテハケが認められる。3は上下に拡張された端部が内傾するもので、端部外面に2条の擬凹線がめぐる。胴部内面をヘラケズリする外は、ナデによる調整である。4は上方に拡張した端部がそのまま立ち上がるもので、外面には3条

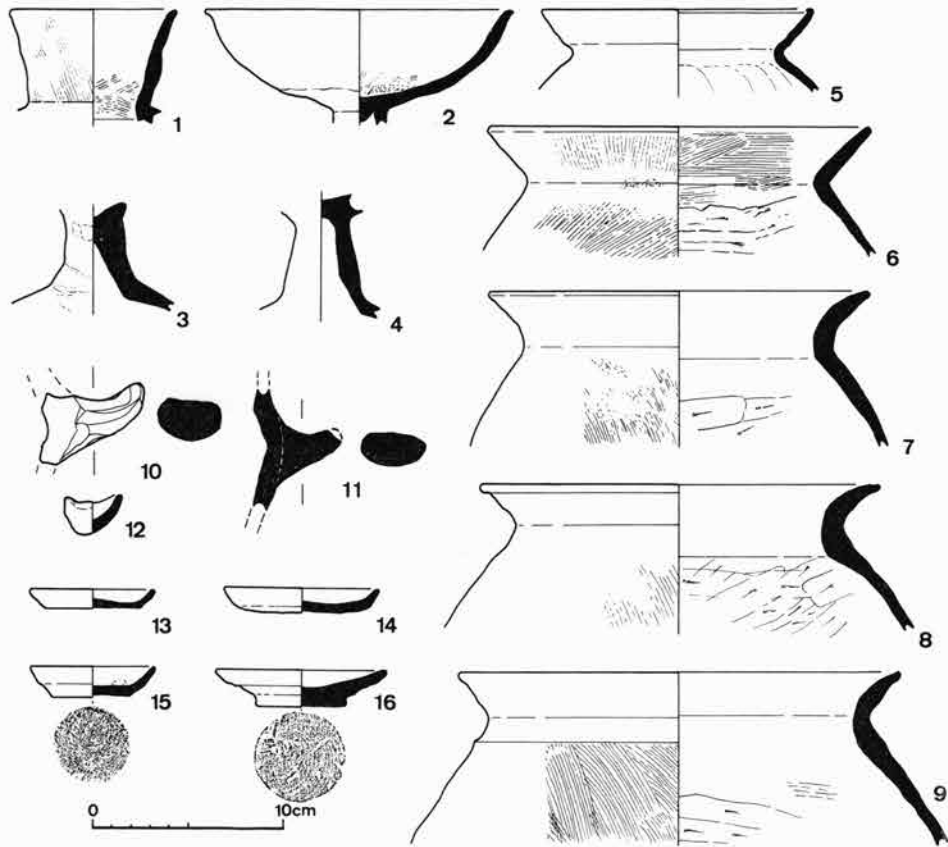


第38図 出土遺物(弥生土器)

の擬凹線がめぐる。いずれも第Ⅴ様式併行と考えられる。

6は底部破片、7は蓋である。

土師器(第39図) 1は壺の口縁部である。内外面ともハケ調整を施したのちナデ消している。

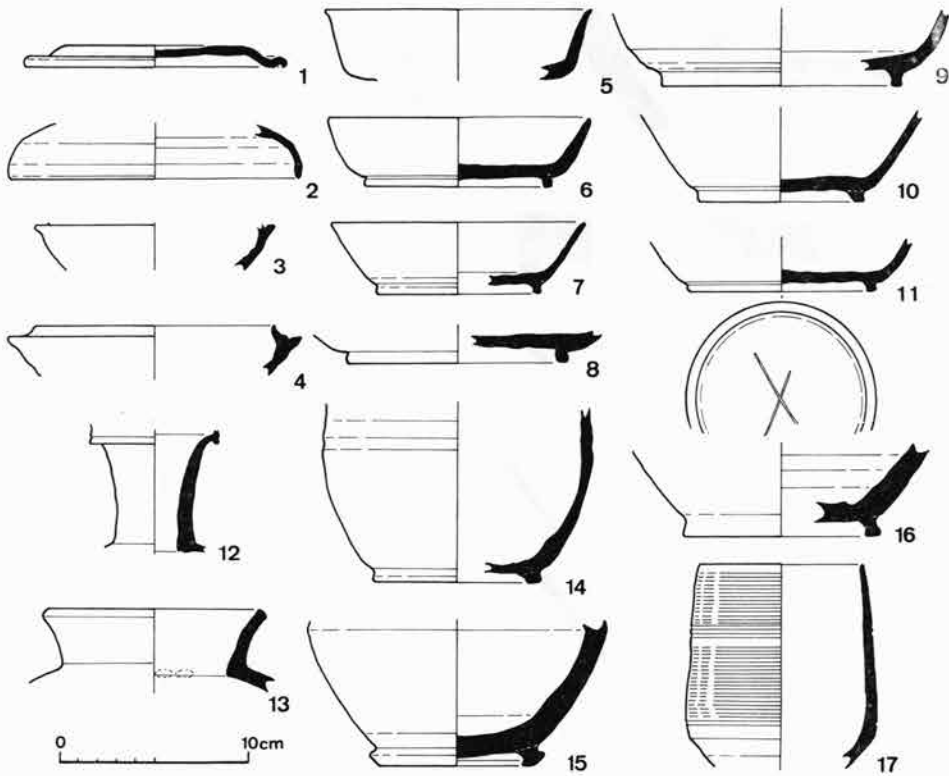


第39図 出土遺物(土師器)

2～4は高杯である。2は杯部で、杯部下半が内湾しながら伸び、口縁部が短く外反するものである。磨滅により細部調整は不明であるが、内面にハケ調整が認められる。3・4は脚部で、柱状の脚から「く」の字状に開く裾部をもつものである。

5～9は甕である。5は布留型甕で、「く」の字状に開く口縁部がやや内湾ぎみに伸び、端部内面を肥厚させている。細部調整は不明であるが、胴部内面にヘラケズリが認められる。6は、「く」の字状に開く口縁部がそのまま伸びるものである。外面はハケ調整が施され、口縁部付近ではナデ消されている。内面は口縁部にハケ調整が施され、胴部はヘラケズリが行われている。7・8・9は、「く」の字状に開く口縁部が外反ぎみに伸びるものである。いずれも口縁部内外面にナデ調整を施し、胴部外面にハケ調整、内面にヘラケズリによる調整を施している。

10・11は把手部分の破片である。12は手捏ねによる小型土器である。13～16は皿で、15・16の底部には糸切痕を残している。



第40図 出土遺物(須恵器)

須恵器(第40図) 1・2は杯蓋である。1は口径14cmを測り、天井部は扁平で低い。口縁端部は折り曲げて丸く仕上げている。つまみはもたない。2は口縁部がゆるく内湾するもので、端部は丸くおさめている。

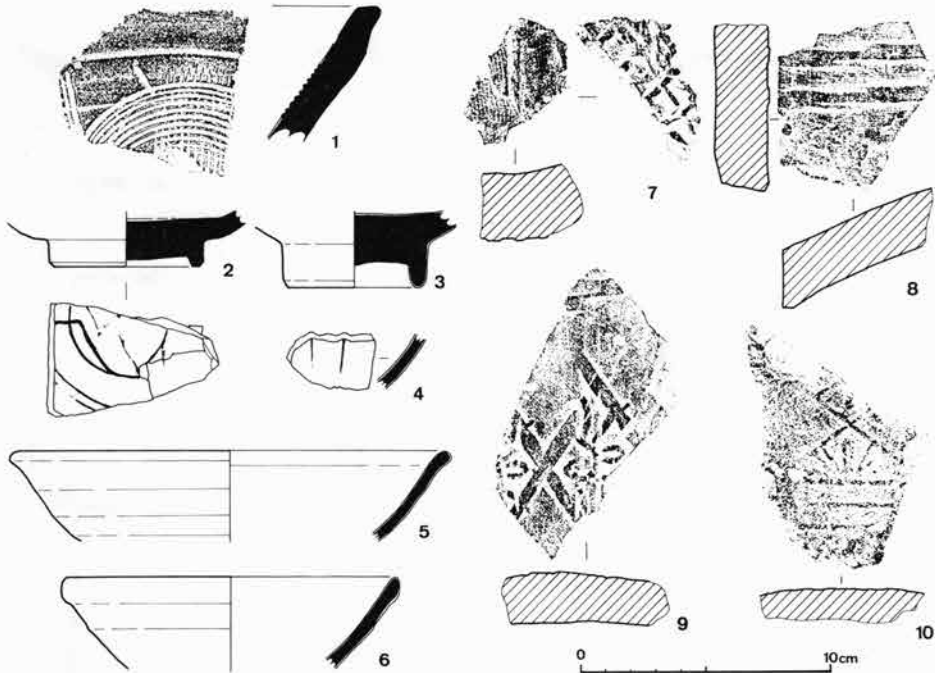
3～11は杯身である。3・4は内傾する短いちあがりをもつ。5は高台をもたないもので、口縁部はやや外反する。6～11は高台をもつものである。このうち口縁部まであるものは、6・7のみである。11は底部外面に「×」印のヘラ記号を持つ。

12は壺の口縁部で、端部を欠く。13は、胴鉢との接合の様子から瓶類の口縁部と思われる。14～16は壺の底部で、いずれも高台を有する。17は盃で、口径8.8cm、深さは底部以下を欠くものの10cm以上を測る。外面にはカキメ調整が施され、部分的に凹線がめぐる。

墨書土器(第42図27～29) 3点出土しているものの、文字を判読できるものは無い。いずれも墨痕を確認したに留まる。27は杯身の底部外面に墨痕が残るもので、28も杯身の底部と思われる。29は杯蓋のつまみ部分に墨痕が認められる。

陶器(第41図1) 鉢の破片が多い。1は挿鉢で、比較的細かい挿り目が入る。

輸入磁器(第41図2～6) 磁器は、近世以降のものが多い。これに混って中国産の青磁



第41図 出土遺物

1. 陶器 2~5. 青磁 6. 白磁 7~10. 瓦

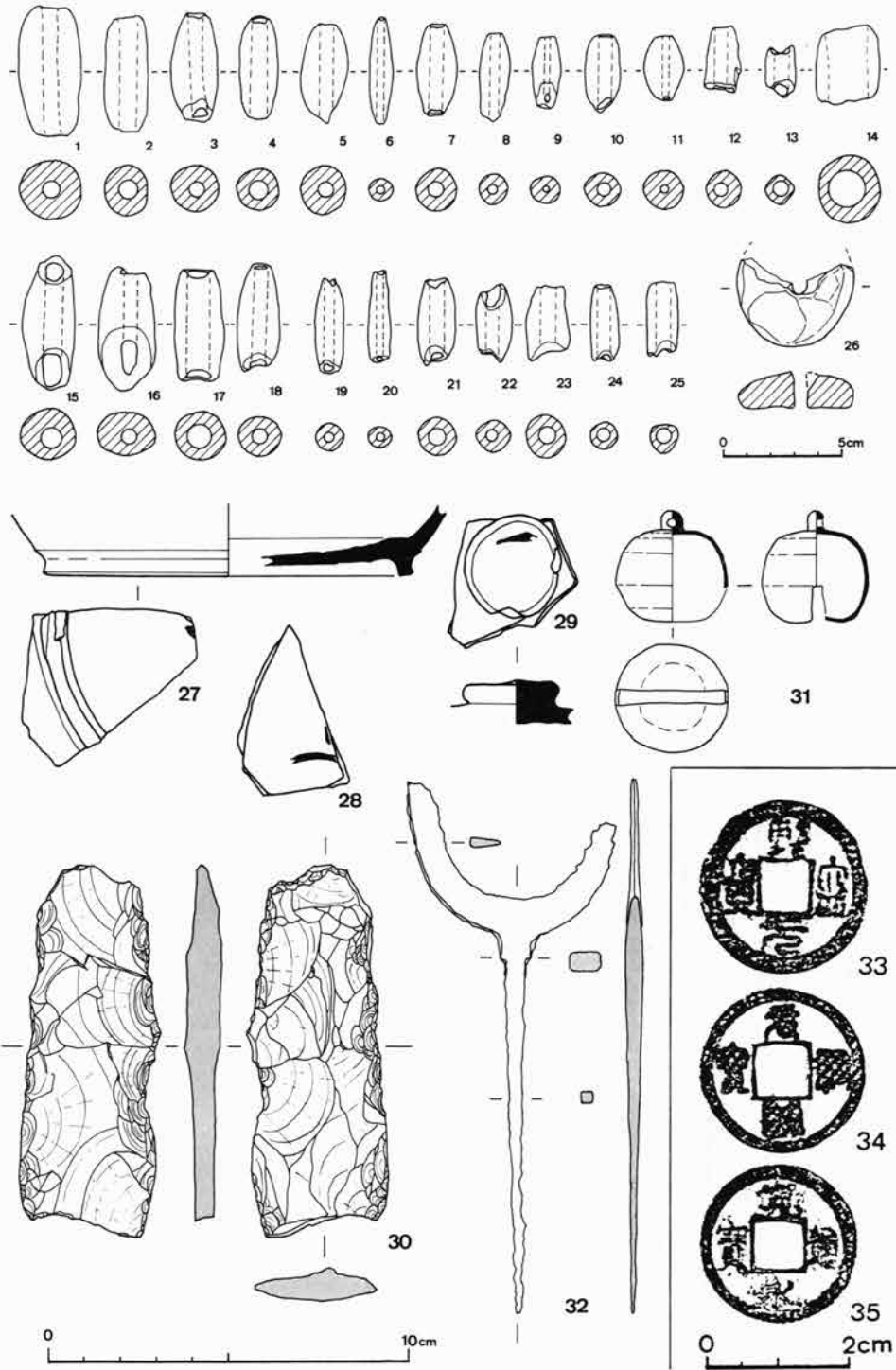
や白磁などの輸入磁器が何点か出土した。^(注8) 2・3は、比較的厚い底部をもつ青磁碗である。内面の模様は、2がヘラ描き、3がスタンプによって描かれている。いずれも龍泉窯系で、13~14世紀のものと思われる。4は青磁碗で、退化した蓮弁文をもつ。やはり龍泉窯系で、15~16世紀のものと考えられる。5は青磁碗である。6は白磁碗で、薄い玉縁をもつ。中国南部で生産されたものと思われる、10~11世紀のものであろう。

瓦(第41図7~10) 7は、凸面におよそ1cm角の格子叩きが施されている。凹面には布目痕が残る。8は、凸面に叩きによると思われる凸帯を有する。凹面には特別な痕跡は認められない。9・10は凸面だけが残るもので、3cm程度の格子のなかに模様を刻んだ原体で叩きを施している。焼きは甘い。7よりも新しい時期のものと思われる。

土製品(第42図1~26) 土製品としては、土鍾(1~25)と紡錘車(26)とがある。土鍾は総数25個出土した。いずれも素焼きで、端部を欠損するものが多い。紡錘車は素焼きのもので、直径約5cm・高さ1.5cmを測り、中央に直径0.6cmの孔をもつ。

石製品(第42図30) 石製品としては、3Bトレンチから打製石斧が1点出土しただけであった。安山岩系統の石材を用いたもので、刃部を欠損している。

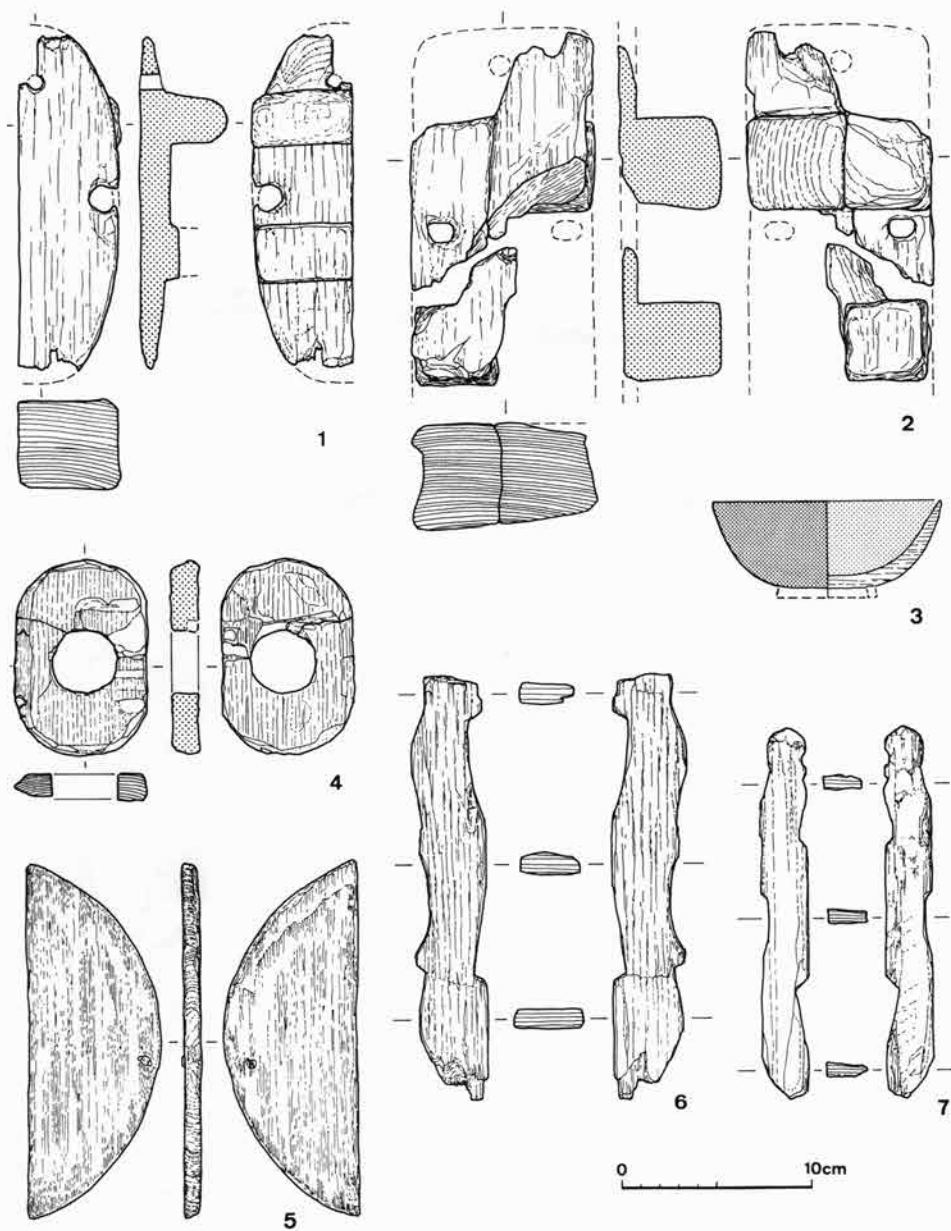
金属製品(第42図31~35) 金属製品では、銅鈴・鉄鎌・銅銭が出土している。31は銅鈴



第42図 出土遺物

1~26. 土製品 27~29. 墨書土器 30. 石製品 31~35. 金屬製品

で、最大径3.1cm、高さ3cm(鈕は5cm)、厚さ0.1cmを測る。玉はない。3Aトレンチ灰色粘質土の上層から出土したもので、付近から熙寧元寶が出土していることから中世以降のものと思われる。32は雁股型の鉄鏃で、鏃先端部を欠損している。3Aトレンチ赤褐色土から出土した。銅銭は4枚出土しており、2枚が北宋銭(33・34)であった。33は熙寧元寶(1068年に初鑄)、34は元符通寶(1098年に初鑄)、35は寛永通寶である。この外、鏽の進ん



第43図 出土遺物(木製品)

だ銅銭1枚がある。

木製品(第43図) 1・2は下駄である。いずれも欠損しているため全貌を知ることはいかない。一木造りによる連齒下駄で、齒の部分の木心に向ける木取りを行っている。3は漆器の椀で、口径12cmを測る。内面に赤漆、外面には黒漆を塗布している。4は用途不明の木製品で、長さ10.2cm・幅7cm・厚さ1.6cmを測る楕円盤に3.4cmの孔を穿っている。5は曲物の底板で、直径20cm程度と思われる。柾目材を円形に削り出し、断面は台形を呈している。外枠固定のための桜皮の綴紐が認められる。6・7は、用途不明の木製品で、頭部を両側から挟り込んだのち、交互に挟り込みを加えている。この他の木製品としては、杭列に用いられた杭がある。

6. ま と め

今回検出した杭列状遺構の多くは、現代の畦畔下から現れた。これらの杭列状遺構は、畦畔の構築に伴うものと考えられ、調査地の付近に現在もその姿を留める条里制地割が古くからの地割を踏襲したものであることを示唆している。しかし、条里制地割が施行された時期については、明確な資料を得ることができなかった。検出状況からすれば、ほとんどの杭が中世の遺物を包含する灰色粘質土層中に打ち込まれたものであり、中世末期から近世以降の段階で形成された可能性が強い。

溝状遺構になるものと考えられるSD04は、9世紀以前に形成されたものと推察した。条里制地割の方向に一致するもので、水路跡の可能性もある。しかし、他の地点では検出できていないこともあり、現時点では可能性を指摘するに留めたい。

条里制地割施行前の遺構については、今回の調査では検出できていない。しかし、2地区・3地区から多くの遺物が出土したという状況から、調査地の西方に接して集落が営まれていたことが推測できる。今回の調査地は、集落に極めて近い耕地であったものと思われる。出土遺物のなかには、この集落の内容を考える上で貴重な資料も含まれている。墨書土器や布目瓦の出土は、古代における寺院もしくは役所などの施設存在を暗示するものである。河守地区に建立された古代寺院として「清園寺」の名が上げられているが、今回出土の資料と積極的に結び付ける根拠はない。中世においては、輸入磁器や北宋銭が認められ、背後の山麓台地にある河守城跡との関連が考慮される。

河守地域では、弥生時代以降ほぼ連続して集落が存在していたものと思われる。由良川流域は、洪水による被害が甚大であり、比較的安定した山麓に集落が求められたと考えられよう。しかし、下流域では、自然堤防などの微高地上に立地する例が多く、由良川下流域における集落立地にはまだ問題が多い。

今回の調査では、明確な遺構こそ検出できなかったものの、多くの遺物の出土をみた。この点から言えば、集落遺跡について不明な点の多かった河守地域を考える上で、貴重な資料を提供できたと言えよう。(三好博喜)

注1 調査参加者(順不同・敬称略)

調査補助員 赤木克行・亀山 悟・後藤広亮・杉井 健・荻野孝之・堀 真人・荒賀邦康・
亀井宣明・新治正樹・木村佳太

作業員 糸井俊夫・松井喜代史・倉橋佐市・奥野 弘・仁張 宏・荒木武夫・荒木保雄
・秋保和成・角野隆美・井上恭子・桐村員子・加瀬郁子・伊藤佐和子・岡本美
津子・倉橋鈴子・井之上しげ・高橋雅枝・荒賀栄子・荒賀ツユ・赤井歌子・真
下久子・佐古照子・藤田きく枝・坪内八千代・鈴木絹子・真下美千子・鈴木キ
ヌ・高橋真智子

事務補助員 松本房江・真下沢子

注2 芦田忠司「大江町の条里制遺構」(『大江町誌』通史編 上巻) 1983

注3 竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注4 舞鶴市教育委員会『桑飼下遺跡発掘調査報告書』 1975

注5 浪江庸二「梅ヶ平遺跡」(『京都府加佐郡大江町高川原遺跡発掘調査報告書(大江町文化財調査報告 第1集)』大江町教育委員会) 1975

注6 中谷雅治ほか(『京都府加佐郡大江町高川原遺跡発掘調査報告書(大江町文化財調査報告 第1集)』大江町教育委員会) 1975

注7 塩見 晋「加佐郡」(『京都府の地名』日本歴史地名大系26) 平凡社 1981

注8 当調査研究センター調査員伊野近富の教示を得た。

注9 注7と同じ

5. 篠窯跡群昭和60年度発掘調査概要

1. はじめに

京都市の西方、老ノ坂峠を隔てた亀岡市東南部の篠町丘陵部一帯には、古代の生産遺跡として知られる篠窯跡群が分布している。その範囲は、東西約3km・南北約1.5kmに及び、総数80基以上の窯跡が点在している。

篠窯跡群の調査は、国道9号・老ノ坂亀岡バイパス建設計画に先だち、路線内に限って昭和51年度から継続して実施している。調査では、窯跡19基(半地下式登窯13基・小型三角窯5基・小型楕円窯1基)・窯状遺構3基・円形焼土塚9基・作業場跡2か所等を検出した。その結果、篠窯跡群は、操業期間が8世紀中葉から11世紀初頭までであること、窯体は、8世紀から10世紀にかけて東から西へと築かれていく傾向がみられること、窯体構造が10世紀を境として登窯から小型平窯へと変化することなどが明らかとなった。

さて、本年度の現地調査は昭和60年5月7日から昭和61年3月28日まで、下記調査一覧表のとおり窯跡1基・作業場跡1か所の発掘調査、山林・田畑部の試掘調査を実施した。なお、森地区山林試掘調査は、窯跡1基の存在を確認したため、面的調査に切り替えて実施した。

現地調査にあたっては、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・同調査員引原茂治・竹井治雄・岡崎研一が中心となり作業の進行をはかった。調査補助員・整理員として京都学園大学考古学研究会をはじめとする有志学生諸氏、作業員として地元篠町の方がたや宮前町東本梅の方がたにも参加していただいた。^(註1)

なお、本書の執筆にあたっては、上記調査員が分担してこれにあたった。文末にて明記し、その文責を明らかにした。(水谷寿克)

付表1 昭和60年度調査一覧表

遺跡名	調査方法	期間	概要	備考 () 掘削面積 m ²
黒岩作業場跡	発掘	60. 5. 7 ～ 6. 29	焼土塚6基・溝等を検出	昭和52年度に石垣・焼土塚等を検出し、作業場跡として調査を実施した。 (500)
西長尾奥第2窯跡群1号窯	発掘	60. 10. 1 ～ 12. 18	窯跡群の中で最大級の半地下式登窯を検出	(530)
上猪谷山林	試掘	61. 2. 24 ～ 3. 28	窯跡1基(袋谷1号窯)を検出	植林地部分 (600)
森地区山林	試掘 (発掘)	60. 7. 1 ～ 11. 22		工事用道路部分 (630)
篠地区田畑	試掘	60. 11. 26 ～ 61. 3. 5		連絡道路部分 (1,290)

2. 位 置

今年度は、西長尾奥第2窯跡群1号窯・黒岩C地区作業場跡・袋谷1号窯を発掘調査し、森地区・上猪谷地区・篠地区を試掘調査した。

西長尾奥第2窯跡群1号窯は、昭和54年度の試掘調査によって灰原の一部を検出している。^(注2) 今回の調査は、窯跡の全容

確認を目的とするものである。窯跡は、

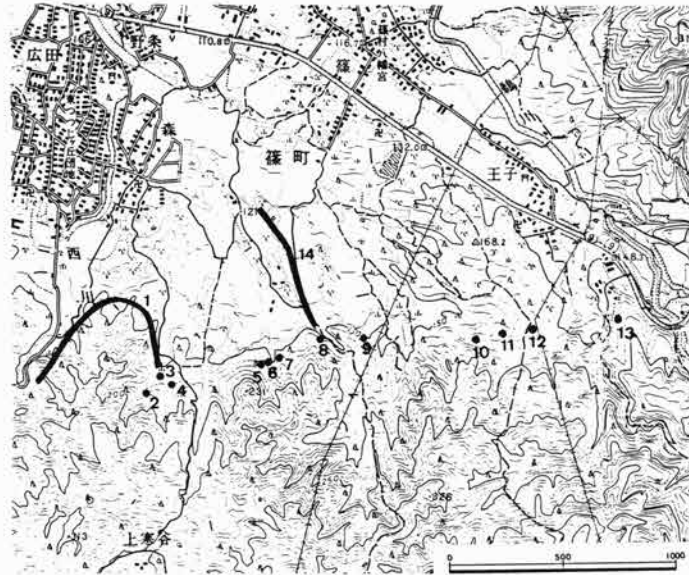
京都府亀岡市篠町大字王子の標高190m前後の丘陵上に位置し、今までに調査を行った窯跡の中では、最も高所に構築されたものである。

黒岩作業場跡は、亀岡市篠町篠小字黒岩に所在する。^(注3) 黒岩1号窯と小柳窯跡群^(注4)の緩斜地であり、それらの窯跡に関連する遺構が存在するものと思われる所である。

袋谷1号窯や森地区の調査地は、篠窯跡群の西端を北流する西川に沿って舌状にのびる丘陵裾部である。篠窯跡群では丘陵西側斜面に窯跡を構築する例が多く、また分布調査時に須恵器片を採集していることや、古墳状の隆起が見られたことから、調査地をA・B・Cの3区に分け、試掘調査を行った。その結果、袋谷池に通じる狭小な谷筋であるA区調査地より半地下式登窯1基を発見したため、発掘調査を行うことにした。この窯跡は、小字前山に所在しているが、前山窯跡群と区別するため袋谷1号窯と称する。

上猪谷地区の調査は、昭和52年度と昭和55年度に調査を行った前山窯跡群^(注5)の西側の緩斜地^(注6)に所在し、前山窯跡群や西前山1号窯^(注6)に関連する遺跡があると考えられる所である。

篠地区の試掘調査は、国道9号バイパスと国道9号線とを結ぶ南北方向の道路建設工事に伴うものである。段々状の田畑部が調査地であり、篠窯跡群に関する何らかの遺構がある可能性が考えられる。(岡崎研一)



第44図 調査地位置図

- | | | |
|------------|-------------|------------------|
| 1. 森地区調査地 | 2. 西前山窯跡 | 3. 上猪谷地区調査地 |
| 4. 前山窯跡群 | 5. 黒岩1号窯 | 6. 黒岩作業場跡 |
| 7. 小柳窯跡群 | 8. 掛ヶ谷窯跡 | 9. 芦原窯跡 |
| 10. 西長尾窯跡群 | 11. 西長尾奥1号窯 | 12. 西長尾奥第2窯跡群1号窯 |
| 13. 石原畑窯跡群 | 14. 篠地区調査地 | |

(1) 西長尾奥第2窯跡群1号窯

1. 調査の経過と概要

西長尾奥第2窯跡群1号窯は、亀岡市篠町王子西長尾および西山にある。昭和54年度の試掘調査^(注7)によって灰原を確認しており、窯跡の存在を想定していた。試掘調査の出土遺物や表面採集遺物は、8世紀頃のものであり、篠窯跡群の窯跡のなかでも、最古の窯跡の一つとして注目されていた。また、篠窯跡群のうちでは出土数の少ない大型の須恵器甍片が多数散布しており、どのような窯体構造であるかについても興味ある窯跡であった。

窯跡は、南側の山地から北に向ってのびる尾根の西傾斜面にある。篠窯跡群のなかでも東側に位置するものであり、付近には、昭和57年度に発掘調査を行った西長尾奥第1窯跡群1号窯^(注8)や、意泉寺窯跡群などの、8世紀後半頃の窯跡がある。

現地調査は、昭和60年10月1日から開始した。調査地内には、現在も使用されている林道があり、そのつけ替えの終了を待たないと、全面的に掘削することは不可能な状態であった。そこで、林道より東側の斜面にトレンチを設定し、窯体の確認を行った。林道のつけ替え終了後、林道の盛り土を重機によって除去し、窯体・灰原を検出した。検出した窯体は、半地下式登窯1基であった。

窯体は、篠窯跡群において、これまで確認したもののうちでも最大の規模をもつものであった。また、天井部こそ残存していなかったものの、その残存状況は、かなり良好であった。灰原は、堆積状況のよくわかる箇所を選んで、5層にわけて遺物を取り上げた。なお、篠窯跡群の窯体は、丘陵の西側斜面に焚口を西に向けて構築されているものが多いが、この窯跡の窯体もその例にもれない。この窯跡の調査は、西方向から強く吹きつける雪まじりの寒風について行ったが、その風は、何故窯体が西側に向けて構築されたかということを感じさせるものであった。

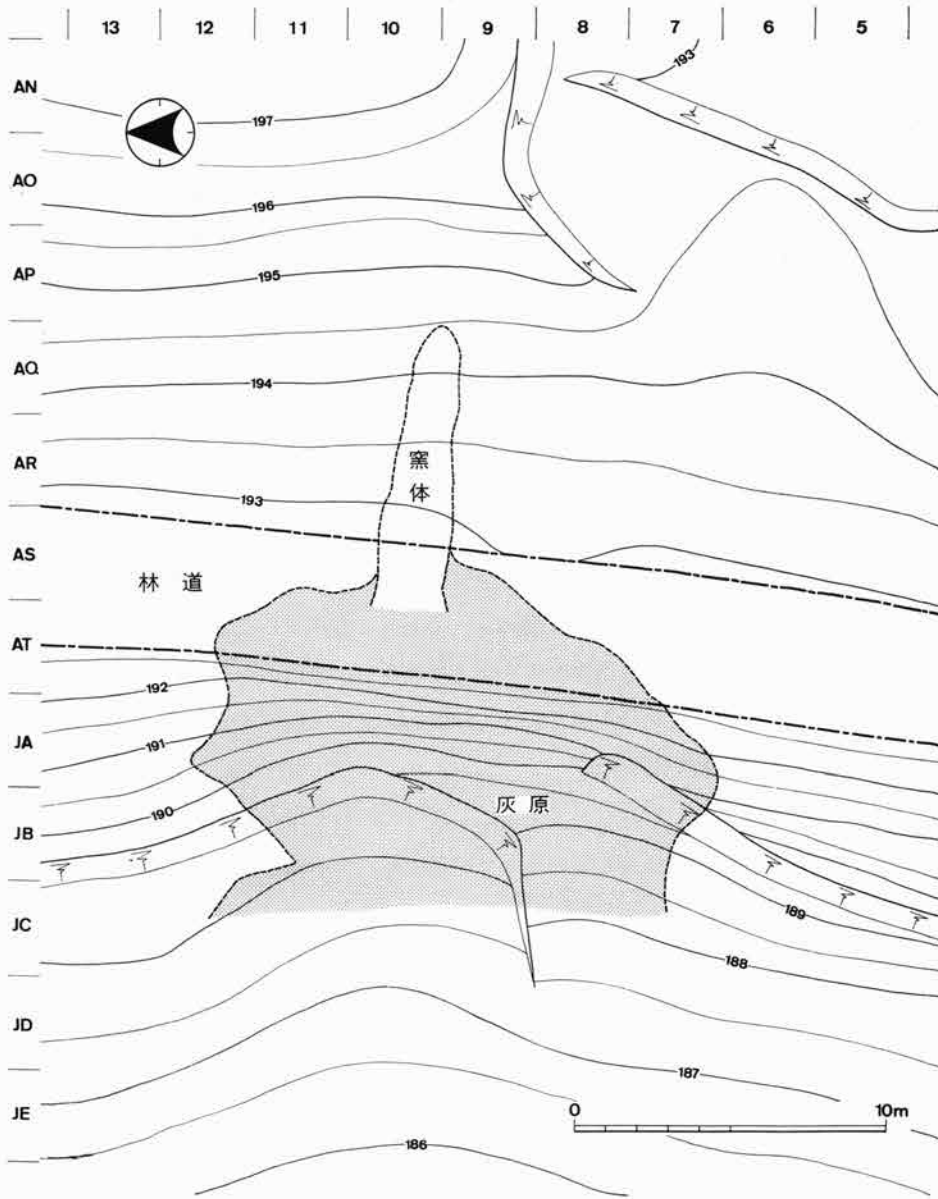
この窯跡については、昭和60年12月5日に航空写真撮影を行い、同11日に説明会を行った。昭和60年12月18日に機材撤収などを行い、現地調査を終了した。

2. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、上記の半地下式登窯の窯体1基・土壇状遺構3基(SX01・SX02・SX03)である。そのほかの窯跡に関連する遺構はなかった。

a. 窯体(第47図)

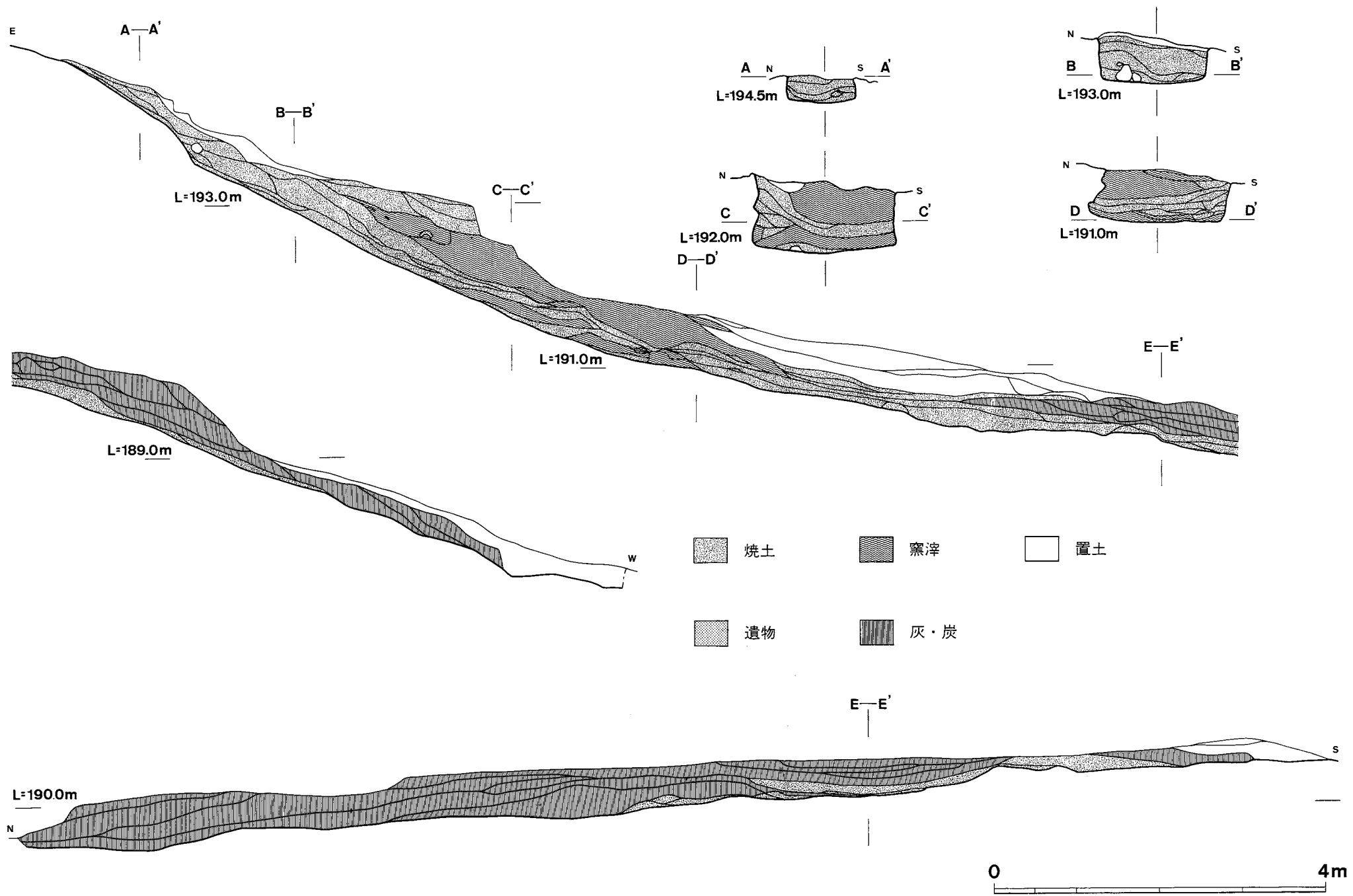
窯体は、丘陵斜面を溝状に掘り込み、その上部に天井部を架構した、半地下式登窯であ



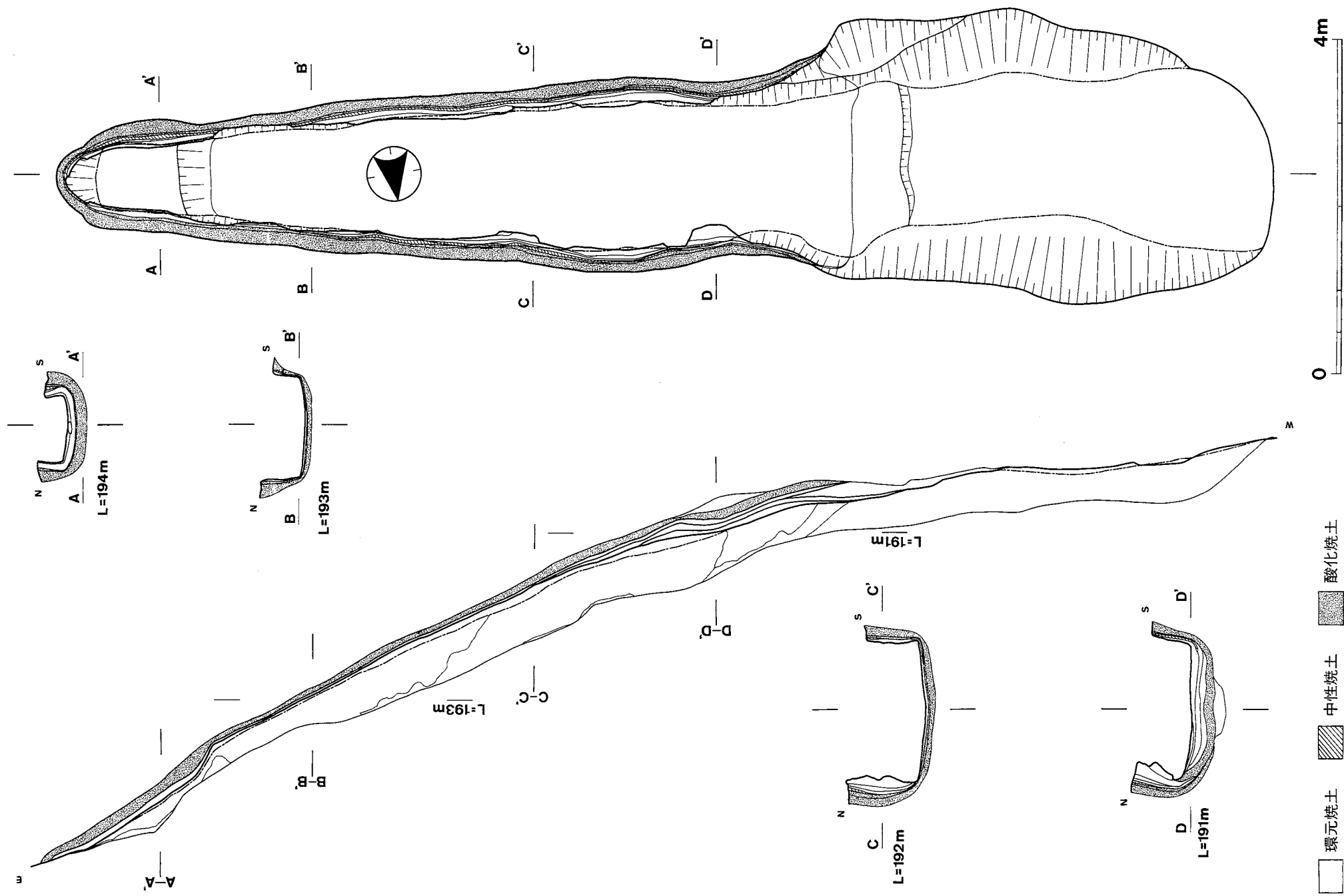
第45図 調査地地形図

る。主軸方向は、 $N-98^{\circ}20'-E$ である。長さ約9m・床面最大幅1.8mである。窯体の下部に、長さ約5.6m・幅約3mの前庭部が続く。窯体・前庭部をあわせた全長は約14.6mに及ぶ。床面傾斜角度は14度から25度である。側壁は、最もよく残っている箇所では、床面から約1mの高さまで残存している。

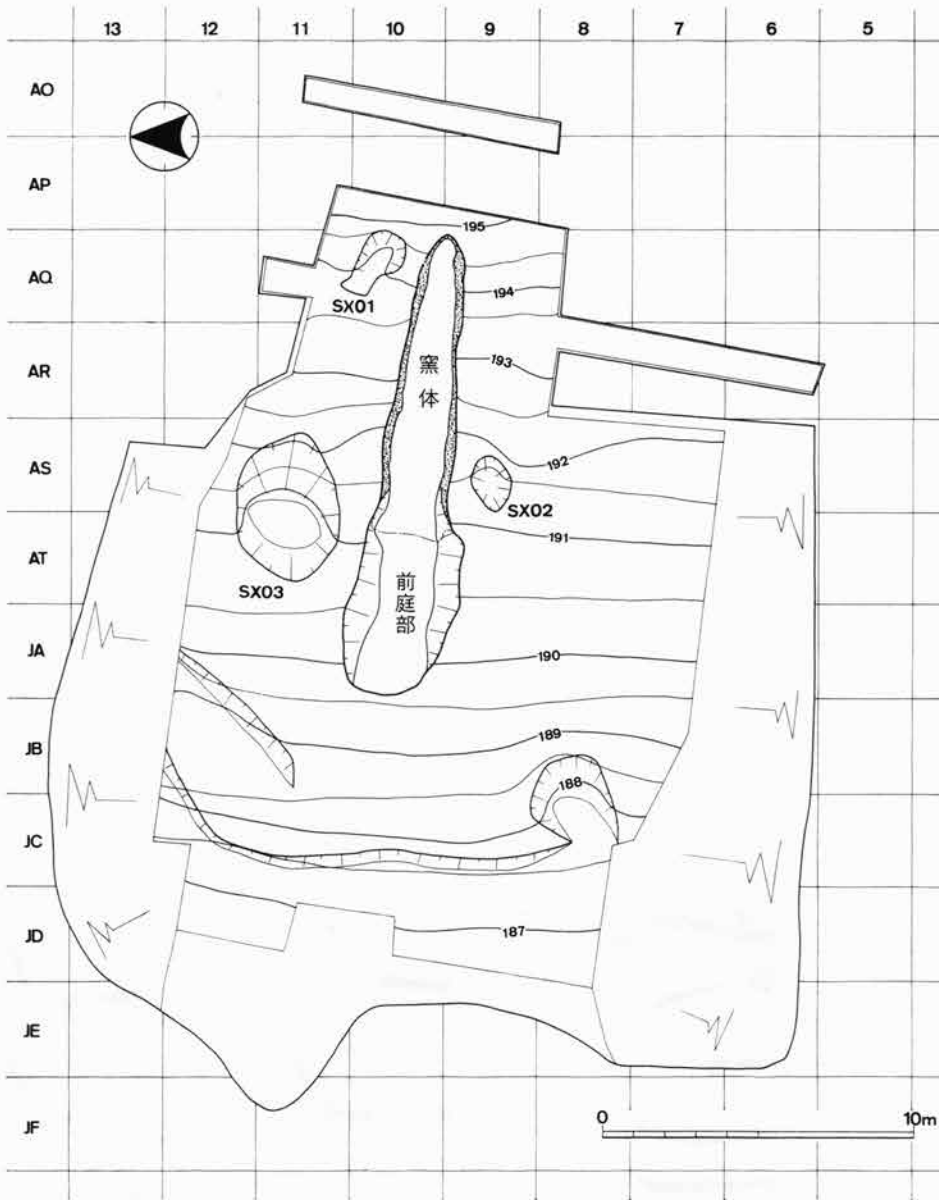
窯体焚口部付近の床には、灰色の還元焼土が3層認められる。これは窯体の改修を示す



第46图 窯体内·灰原断面图



第47图 窑体实测图



第48図 完掘後地形図

ものとみられる。改修の状況は、まず第1次床面上に炭や焼土混じりの土を置き、その上に第2次の床を貼る。さらに、第2次床面上に第3次の床を貼っている。煙道部付近の床にもそれに伴うものとみられる改修の痕跡がみられ、床に須恵器杯などをタイル状に埋め込んでいる。側壁も、粘土を貼り足して改修したことがうかがえる。

前庭部は、粘土を貼った痕跡はなく、地山を掘り込んだだけのものである。床面・側壁

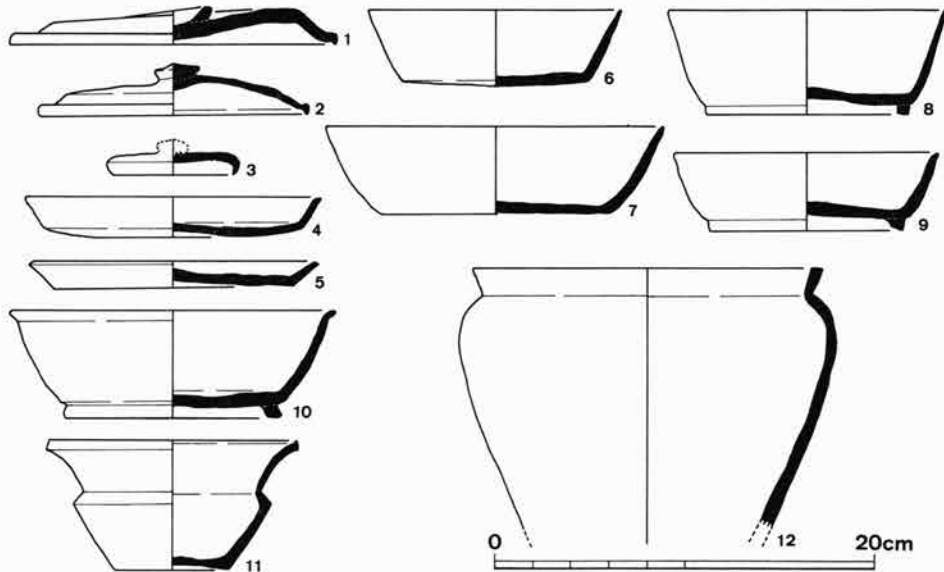
面とも焼けていない。床面には、低い段状を呈する箇所がある。また、床面・側壁面には、浅いくぼみが多数あるが、その性格は不明である。

b. 土壇状遺構SX01～03(第48図)

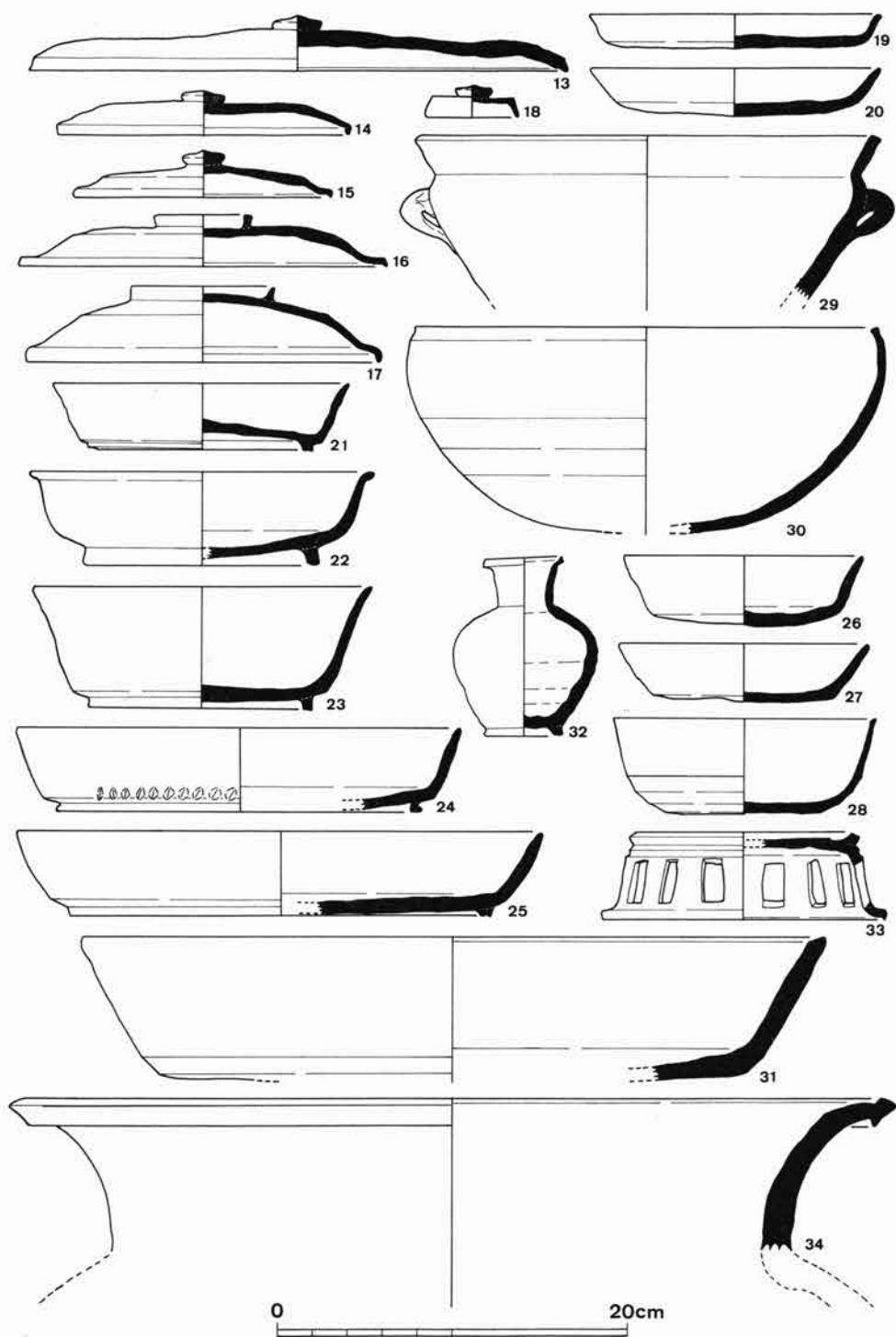
SX01は、長さ2.4m・幅1.4mの不整形を呈する。深さは32cmである。埋土は焼土である。少量の須恵器片が出土した。SX02は長径1.8m・短径1.2mの楕円形を呈する。深さは20cmである。埋土は、炭混じり焼土であり、少量の須恵器片が出土した。SX03は、長径4.8m・短径3.4mの楕円形を呈する。深さは76cmである。埋土は、炭・灰と焼土の互層である。多量の須恵器が出土した。これらの須恵器は、埋土を4層にわけて、層ごとに取り上げた。

3. 出土遺物

今回の調査では、遺物整理箱254箱に及ぶ須恵器が出土した。このうち、器種のわかるものの総数は、33,082点である。このうち、最も多いのが杯であり、高台のない杯A・高台付の杯B・不明のもの、あわせて19,340点である。次いで、蓋が多く、宝珠つまみ付きの蓋A・環状つまみ付きの蓋B・不明のもの、あわせて11,634点である。杯・蓋が出土遺物の内では圧倒的多数を占め、総数の約93%を占める。その他、皿・壺・鉢・高杯・円面硯などが出土しているが、なかでも、甕が67点と多数出土しているのが注目される。なお、甕の点数は口縁部の点数である。また、大型製品が多いのが特徴である。



第49図 窯体内出土遺物実測図



第50図 灰原・SX03 出土遺物実測図

出土遺物の整理作業は、まだ緒についたばかりであり、出土遺物の検討・分析はほとんどできていない。したがって、その詳細は今後の課題とし、概略を記すにとどめる。

a. 窯体内出土遺物(第49図)

第3次床面上から出土した遺物であり、この窯の最終段階を示すものとみられる。

蓋A(2)は、口縁部が屈曲する。蓋Bは、つまみの端部が平坦であり、その貼り付けは雑である。皿(4・5)は、平坦な底部から明瞭に屈曲して体部が立ち上り、口縁端部は平坦である。蓋Aや皿の形状は、9世紀初頭頃のもの^(注9)とされる芦原1号窯出土遺物とほぼ同じであるが、芦原1号窯出土遺物には蓋Bがない。その点で、この窯体内出土遺物の方が古いものとみられ、8世紀末頃に比定できるのではないかと推測される。

b. 灰原・SX03出土遺物(第50図)

上述のとおり、灰原やSX03からの出土遺物については、層分けして取り上げているが、現時点では、その詳しい分析や検討はできていない。

蓋Aには、口縁部が屈曲しないもの(13・14)と屈曲するもの(15)がある。蓋Bには、外面を削って薄手に仕上げ、明らかに佐波理碗の蓋を模したとみられるもの(17)がある。杯Bには、口径の大きいもの(24・25)や口縁が外反するもの(22)、体部の立ち上りの高いもの(23)などがある。特殊なものとして、腰部に部分的に刻みを施すもの(24)がある。鉄鉢形の鉢(30)は、篠窯跡群では初出のものである。

図示した遺物のうちでは、蓋B(17)・杯A(26・27)・杯B(23・24)・皿(20)が灰原最下層出土であり、この窯の操業開始段階を示すものとみられる。西長尾奥第1窯跡群1号窯出土遺物に類似するものもあり、8世紀後半には操業していたものとみられる。

4. 小 結

今回検出した窯体の特徴は、その規模が大きいこととともに、床面傾斜角度が、これまで確認された篠窯跡群の例にくらべて、かなり緩いということである。これは、甕などの大型製品を焼成していたことによるものとみられる。すなわち、傾斜角度を急にすると、火のまわりが早く、窯体内温度が急激に上り、大型製品が窯割れする率が高くなるので傾斜角度を緩くしたものであろう。大型製品の焼成を目的とした窯体構造といえる。

出土遺物は、おおむね8世紀後半頃のもの^(注9)とみられるが、蓋の口縁部やつまみの形状・杯Bの高台の貼り付け位置などをみると、少なくとも2形式がみとめられる。窯体内に改修の痕跡が認められることも考えあわせると、この窯の操業期間は、8世紀後半代のなかでもかなり幅があるのではないかと推測される。ただ、継続的に操業していたか、中断があったのかについては不明である。ともかく、これまで確認された篠窯跡群の窯跡のなか

では、最古の窯跡の一つである。

(引原茂治)

(2) 黒岩C地区作業場跡

1. 調査概要

黒岩作業場跡は、亀岡市篠町篠黒岩に所在する。小柳窯跡群^(注10)と黒岩1号窯^(注11)との間の広い谷部に位置している。標高145～150m、比高差が5mの比較的なだらかな谷部であり、しかも、幅80mと広く、作業場跡の立地としては最適である。しかし、この谷部は、本来地形的に見て、狭く深いものであったと考えられる。地表面に巨大な岩が露出していることから、土砂流の堆積物によって平坦になったものと推定される。

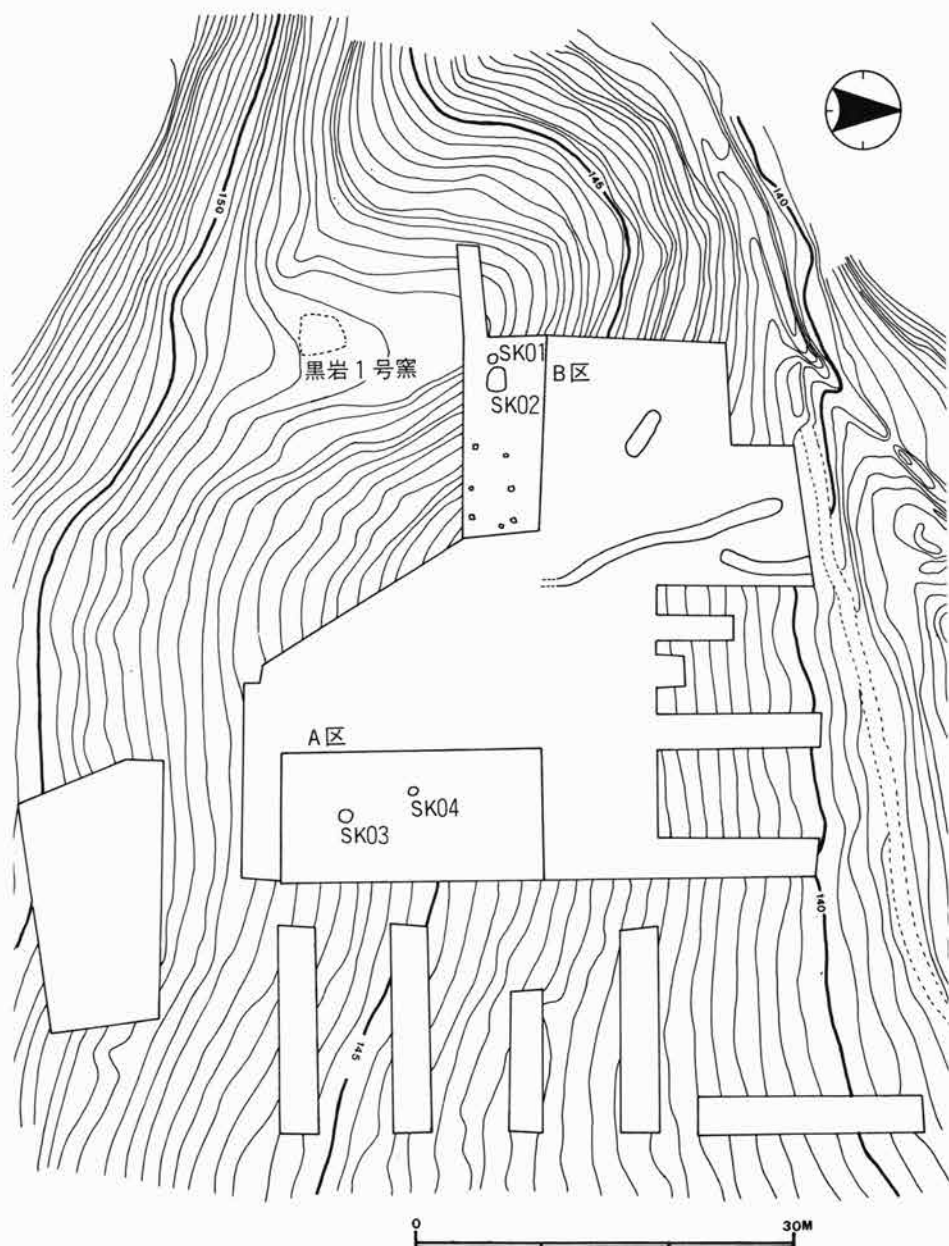
昭和59年度の調査^(注12)では、土壇・柱穴・溝等が確認されており、作業場跡の様相の一端が明らかになりつつある。今回の調査地は、前年度調査地に隣接しており、引き続き遺構の検出を主目的に調査を実施した。その結果、窯跡に関係があると思われる4基の焼土壇を検出した。

調査区は、A区・B区の2か所に分けた。A区はなだらかな斜面である。B区は、黒岩1号窯の北西約8mのところにある尾根の突端西側の急斜面である。掘削は、A区では表土・旧耕作土まで重機を用い、以下人力で行った。B区はすべて人力で掘削した。

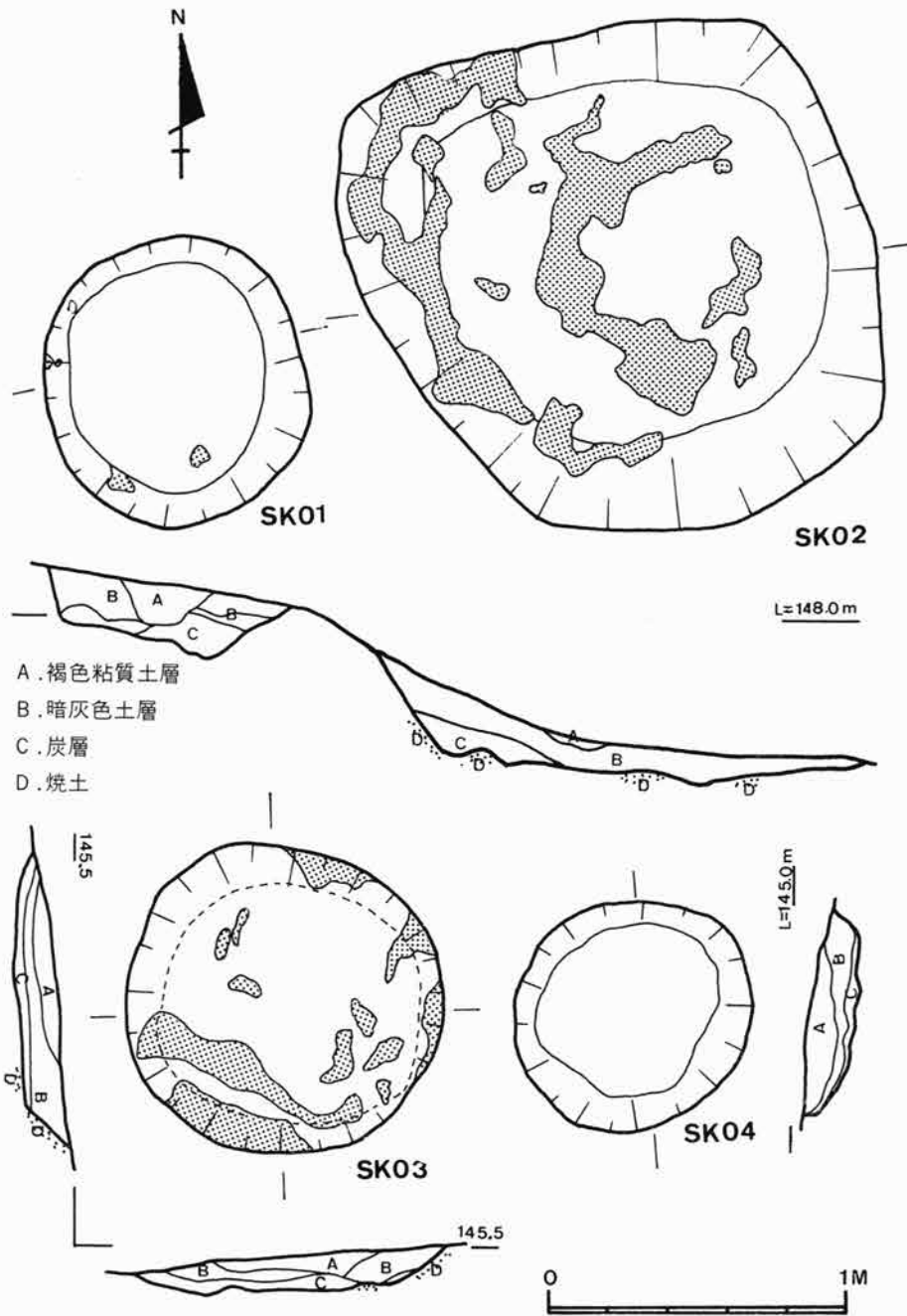
各トレンチの層位は、大きな違いが見られ、A区では平坦な谷が形成された過程の一端をうかがうことができた。A区は、表土、旧耕作土(厚さ0.2～0.3m)、褐色砂礫(1.2m以上)の順に堆積している。この褐色砂礫は、拳大から1m以上の巨礫まで、円礫・角礫が無秩序に入り混っており、土砂流による堆積物であることが判明した。時期については、遺物が無く不明である。一方、B区は、表土、褐色粘質土、淡褐色粘質土(一部白色シルト)の順に堆積している。褐色粘質土の上面では、須恵器の破片が出土した。淡褐色粘質土は、周辺地域によく見られる地山であると考えられる。淡褐色粘質土と褐色砂礫との先後関係は、褐色砂礫の方が新しいものであることが確認された。

2. 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、A区で円形の土壇を2基、B区で円形・方形の土壇各1基の都合4基である。これらの土壇は「焼土壇」と呼ぶことにする。その堆積は、大きく3層に分かれ、上から褐色土、暗灰色土(灰、炭化物)、炭層焼土の順である。褐色土は、焼土壇が廃棄された後のものである。炭化物は細片が多い。焼土は、基盤層の褐色土が焼けたものである。これらは、正円形を呈し、人為的に掘られ、何らかの目的をもって焼成された痕跡を残すものである。



第51図 調査地地形図



第52図 焼土坑実測図

焼土壇(SK01) B区の西側隅,黒岩1号窯の北方約12mに位置している円形の焼土壇である。直径0.8m,深さ0.3mを測る。断面は逆台形を呈し,底面は東へ低く傾き,西側面は急激に立ち上がる。上層の褐色土はやや炭が混り,炭層は粘質土を含み,東側の低い部分に厚く堆積している。底面の焼土は西側面と底部に若干残っている。火勢は東から西へ強いものと推定される。

焼土壇(SK02) 焼土壇SK01のすぐ東側の急斜面に位置する方形の焼土壇である。東側面が欠失しているが,長軸1.6m以上,短軸1.4mを測る。断面は皿状を呈し,なだらかな側面である。底面は凹凸が多い。土層をみると褐色土には炭と焼土が混在している。炭層は壇内西半部に薄く堆積している。焼土は,底部全面を覆っているが,とりわけ,西半部から側面においてはかなり強い火勢を受けたと考えられる。

焼土壇(SK03) A地区の南半部中央に位置している正円形の焼土壇である。直径1m・深さ0.2mを測る。断面は,本来逆台形を呈していたと推定されるが,北側が欠損している。底面は凹凸がなく,なだらかに北へ低くなり,側面は直線的に立ち上がる。炭層は底部全面に厚さ5cm堆積している。焼土は底部の南半と側面に集中している。

焼土壇(SK04) 焼土壇SK03の北方6mに位置している小ぶりの円形焼土壇である。直径0.8m・深さ0.15mを測る。断面は皿状を呈し,底面の傾斜は北へ低く,凹凸が激しい。土層は2層に分れ,炭混じりの褐色土と炭層から成り,焼土は全く認められなかった。

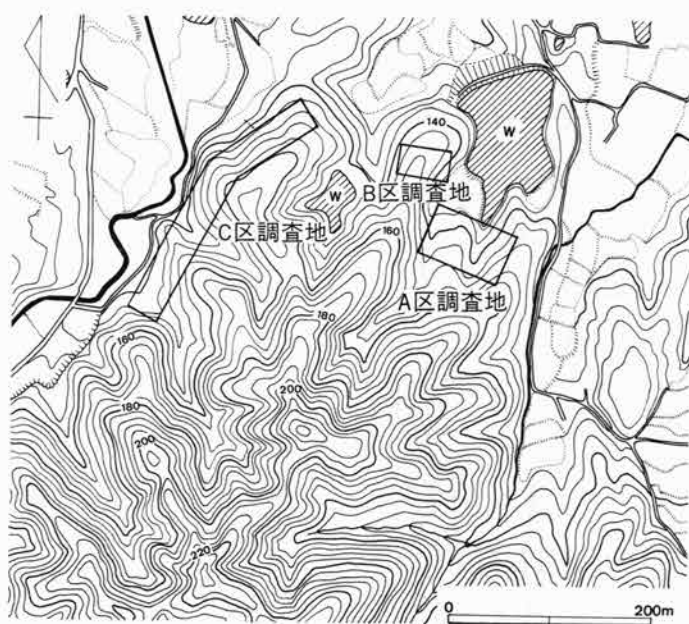
3. 小 結

この調査地は,小柳窯跡群と黒岩1号窯の間にある傾斜の緩かな地形を呈し,作業場跡として地形的に好条件を示している。黒岩C地区の2か年の調査において,溝・柱穴・焼土壇が確認されたが,個々の遺構の性格を明確にしていく必要がある。その中で,焼土壇については,過去の調査から,小型平窯と関連づけて考え,土器焼成に用いる燃料としての炭焼窯とする説もあるが,その上部構造については何の痕跡も得られない。ともかく,人為的に作られた焼土壇は,その用途については今後も考察していく必要がある。

(竹井治雄)

(3) 森地区試掘調査

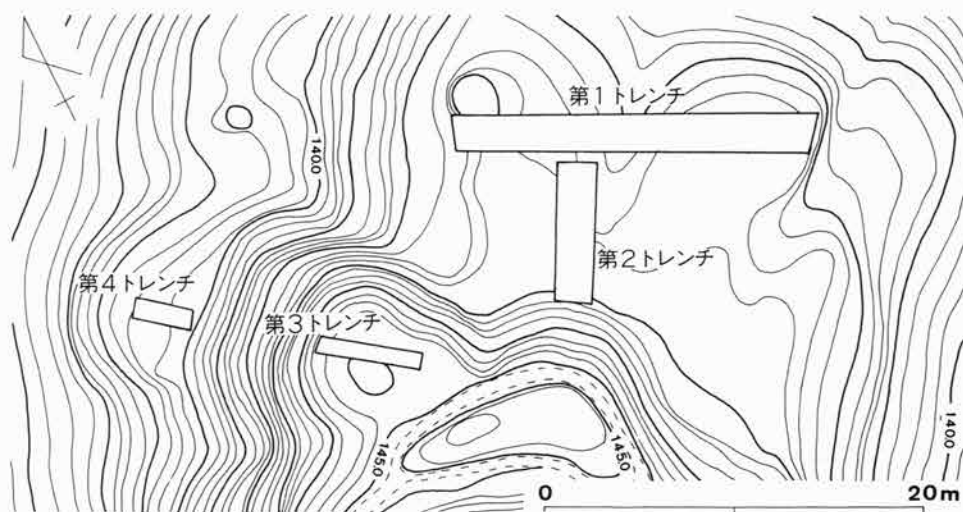
森地区の調査地は、篠窯跡群の西端にあたり、窯跡や古墳が存在すると思われた3か所を試掘調査した。この内、袋谷1号窯を発見したA区調査地については後述する。B区調査地は、古墳状隆起が見られ、C区調査地は、篠窯跡群の大半の窯跡が西側斜面に構築していることにより、試掘調査を行った。



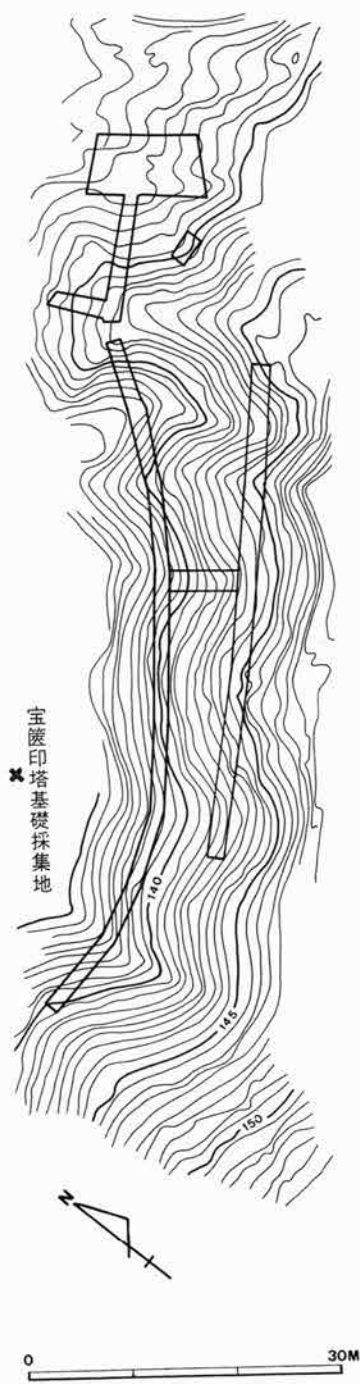
第53図 森地区調査地位置図

1. B区調査地

A区調査地の北西約100mの丘陵尾根筋上にあたる。古墳状の隆起や径1～2mの落ち込



第54図 B区調査地地形図



第55図 C区調査地地形図

みが数か所に見られたため、トレンチを設定し掘削を行った(第54図)。第1・2トレンチでは、黄褐色砂質土が約2m堆積していただけで、遺構や遺物は検出できなかった。第3・4トレンチでは、岩盤上に黄褐色砂質土が約30cm堆積していたが、遺構や遺物は検出できなかった。以上のことから、B区調査地には古墳や窯跡は存在しなかった。(岡崎研一)

2. C区調査地

調査地は、標高135m~150m・比高差15mの比較的急傾斜となった丘陵西側斜面である。これまでに調査した篠窯跡群の窯跡の例からも、登窯を築くには最適の場所といえる。

等高線に平行する幅1.5m・長さ60mのトレンチと、等高線に直交する幅1.2m・長さ20mのトレンチを設定して調査を実施した。

層位は、表土・褐色土・淡褐色粘質土・茶褐色粘質土・茶白色シルト(地山)の順に堆積している。褐色土は、厚さ0.3m~0.4mで、小礫が含まれており、小規模の地崩れの痕跡であろう。淡褐灰色粘質土は、厚さ0.1m~0.2mで、炭化物・植物質があり、旧表土である。茶褐色粘質土は、厚さ0.5mである。調査地北東側では、表土下に0.2m~0.3mの褐色粘質土があり、その下層は、乳白色シルト(地山)である。

以上のように、窯体・灰原など、窯跡に関連する遺構は存在しなかった。大規模な地崩れの痕跡もなく、遺物も皆無であったことから、窯跡はなかったものと思われる。狭い範囲の調査であり、速断すべきではないが、今回の調査結果をみる限りにおいては、篠窯跡群の西限は、従来想定されていた地点に置くことができると考えられる。すなわち、前山窯跡群・西前山1号窯、後述する袋谷1号窯などが存

在する篠町森前山付近が、篠窯跡群の西限であり、当調査地までは窯跡の分布が及んでいないものとみられる。

出土遺物は、近世陶磁器片・棧瓦片などである。また、調査地外で「応永庚子」(27年・1420)年の銘文がある宝篋印塔基礎を採集した。調査地付近は、明治時代に廃寺になった国恩寺の旧地といわれており、これらの遺物は、国恩寺に関係するものかもしれない。

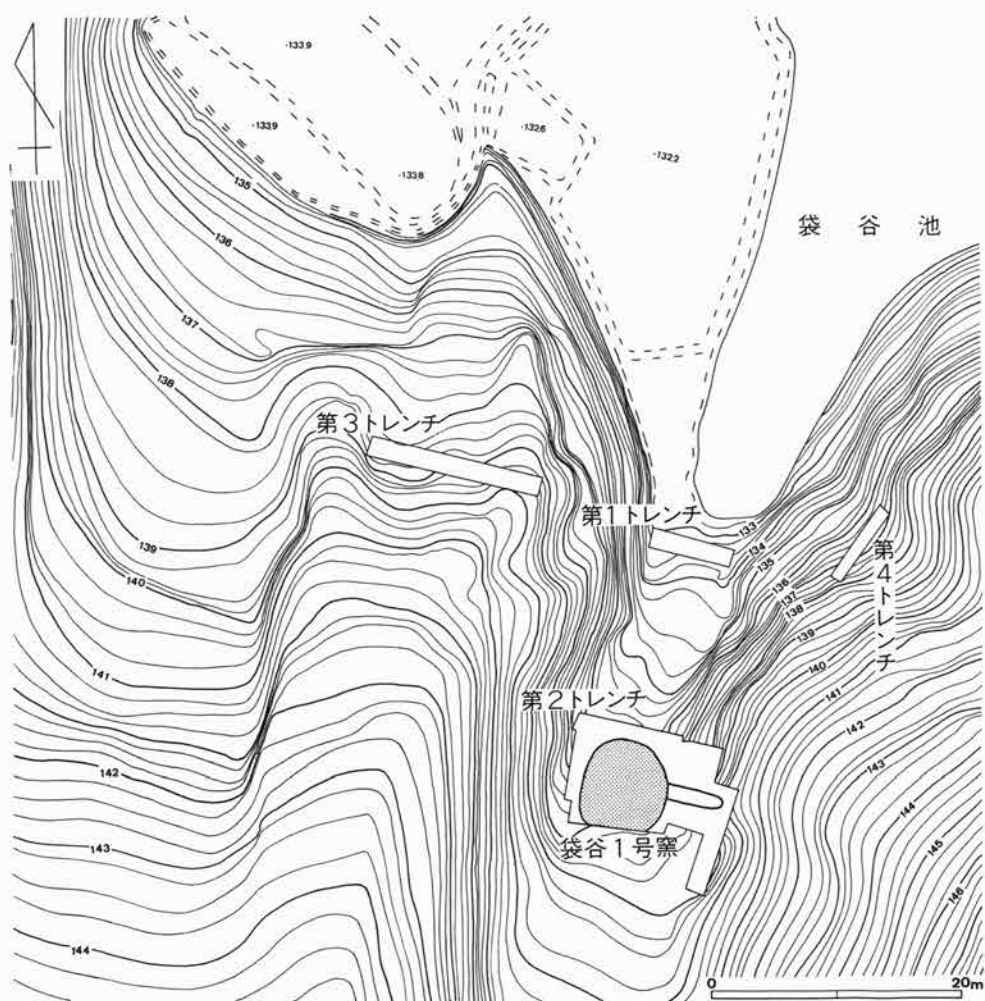
(竹井治雄)

(4) 袋谷 1 号 窯

1. 発掘調査の経過と概要

袋谷1号窯は、森地区の山林部を試掘調査した際に発見した窯跡である。分布調査の時に須恵器片を採集していたが、窯跡の位置は明らかでなく、今回の試掘調査・発掘調査によって窯跡の位置や規模を確認することができた。^(註13)京都府亀岡市篠町森の西端を北流する西川に沿って舌状にのびる丘陵がある。この丘陵先端に袋谷池があり、袋谷1号窯は、この袋谷地区に通じる狭小な谷筋の西側斜面から検出した(第56・57図)。

この調査は、谷筋に直交するように試掘トレンチを設定し掘削することによって、この谷筋に窯跡が存在するかどうかを確認することを目的とした。谷筋北側にトレンチ(第1トレンチ)を設定し、掘削した。その結果、表土下約2mで岩盤となったが、岩盤の上に堆積していた赤褐色礫層や黒灰色粘質土から多量の須恵器片が出土した。黒灰色粘質土は灰原ではなく、出土した遺物は山手から流れて堆積したものであったため、山手に何らかの遺構が存在するものと思われた。そのため、12m程山手に第1トレンチと同方向のトレンチ(第2トレンチ)を設定した。掘削を行ったところ、表土下2mで岩盤となったが、岩盤の上に堆積していた暗青灰色礫層から多量の須恵器片と窯滓が出土した。第2トレンチから出土した須恵器片には完形品に近いものがあることや窯滓の出土から、第2トレンチ付近に窯跡が存在するものと思われた。篠窯跡群では、北西の風が吹く頃に操業するためか、丘陵西側斜面に窯跡を構築する例が多いことが今までの発掘調査によって確認されているので、第2トレンチ東南の丘陵西側斜面にトレンチを設定し、窯体を確認することにした。掘削したところ、表土・黄褐色砂土が約30cm堆積しており、その下層の黄白色砂質土を切り込んで構築した窯体の一部を検出した。見つかった窯体は、煙道部付近と思われ、灰原は第2トレンチ南側の谷地形に堆積しているものと思われた。以上のことから、窯体を検出したトレンチ以西第2トレンチ以南を拡張し、発掘調査を行うことにした。その結果、半地下式登窯1基と灰原を検出することができた。窯体は、篠窯跡群の中でも小型の登窯に属し、壁の立ち上りも約20cmと残りの悪い状態であった。灰原は表土下約2mの谷地形



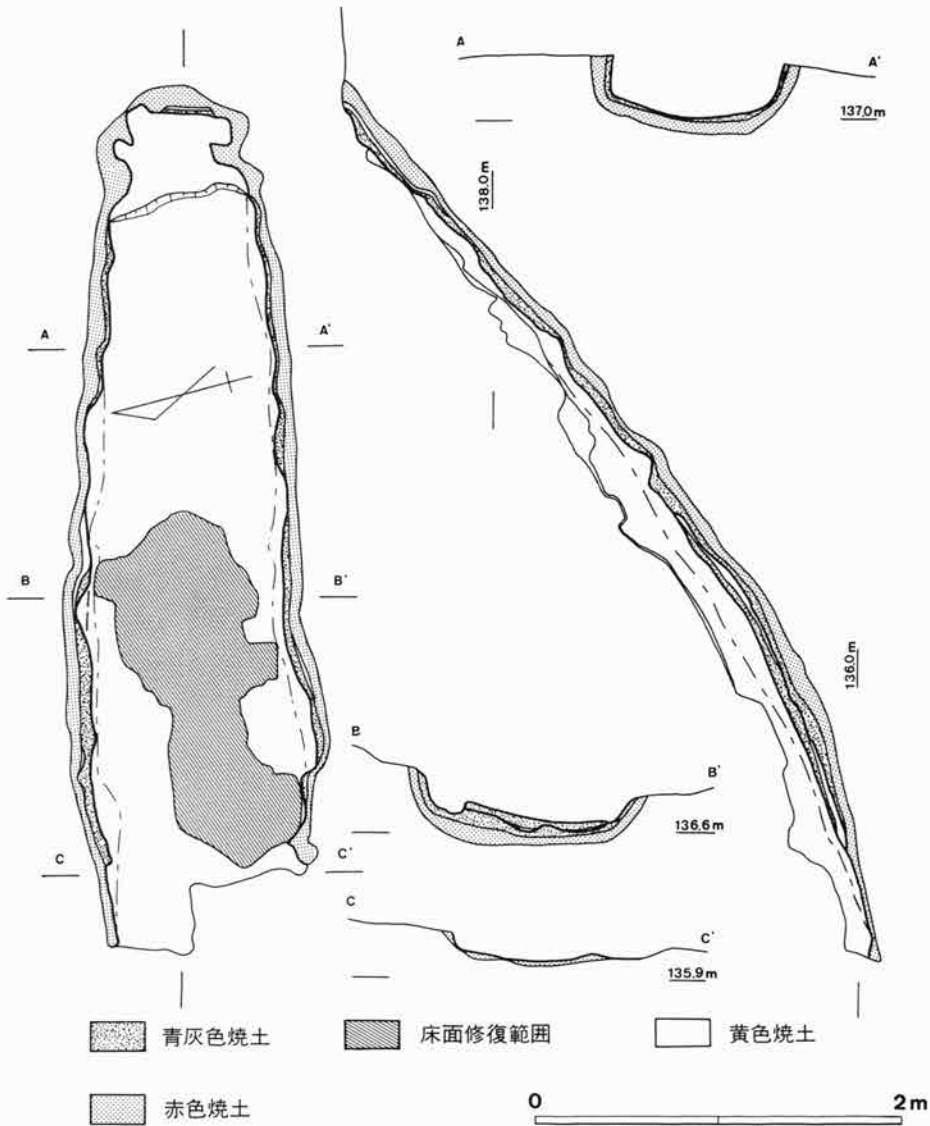
第56図 A区調査地地形図

に堆積していたが、厚さ約40cmと他の窯跡の灰原に比べてかなり薄いことから短期間操業したものと思われた。また、第1トレンチと第2トレンチの岩盤上より出土した遺物は、袋谷1号窯の灰原から流れたものと思われた。

検出遺構の項で詳細に記すが、袋谷1号窯灰原下層の鉄分を多量に含んだ赤色礫層から、残りの良い須恵器片が多量に出土した。これは1号窯操業以前のもので、山手から流れて堆積したものである。1号窯南側約10mの丘陵西側斜面を砂防工事する際に、多量の須恵器片が出土したという地元の方の話から、1号窯南側に別の窯跡が1基以上存在したものと思われる(以下、推定2号窯とする)。遺物整理の結果、1号窯灰原出土の須恵器の量を凌ぐものとなった。これは、推定2号窯が位置するあたりで谷筋がわずかに西南方向に折

れ曲り、推定2号窯の中軸方向が1号窯の中軸方向よりもわずかに北方へ振るため、谷筋に沿って須恵器が流出する量も多くなり、袋谷1号窯灰原出土の量を凌ぐ結果になったものと思われる。しかし、袋谷1号窯の調査が調査地南端であったため、推定2号窯まで調査することはできなかった。

また、第1トレンチを掘削した際に10世紀以降の須恵器が少量出土していることや、第1トレンチ東側の丘陵部がわずかに窪んでいたため、窯体確認のための試掘トレンチ(第3

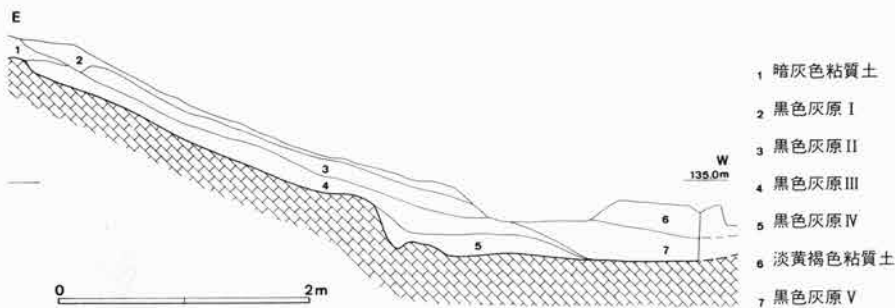


第57図 窯体実測図

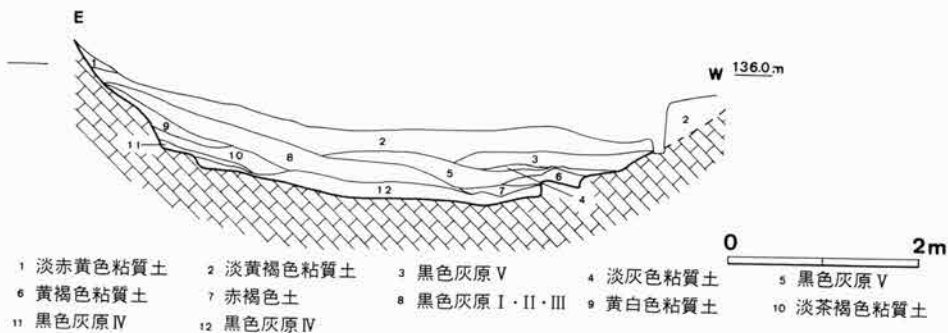
・4トレンチ)掘削を行ったが、遺構は存在せず、遺物の出土も見られなかった。

2. 検出遺構

今回検出した遺構は、半地下式登窯1基とそれに伴う灰原である。窯体の中軸方向は、 $N-75^{\circ}50'-W$ で、灰原は丘陵斜面から谷底にかけて堆積していた。窯体の規模は、残存長4.7m・煙道部付近での幅0.6m・焼成部での最大幅1.2m・燃焼部付近での幅1mを測る。窯壁は約20cmしか残存しておらず、天井部から側壁にかけてかなりの削平を受けた窯跡である。煙道部と燃焼部も削平されてはいるものの、窯体床面の傾斜角度や灰原と燃焼部との距離を考えても、全長5.5m程度の窯跡であったものと思われる。床面の傾斜角度は、第57図のB-B'付近で変わり、燃焼部からその地点までは約23度、B-B'から煙道部までは約38度を測る。焼土は、約10cmの厚さを測り、青灰色に焼けている部分の厚さは約4cmである。青灰色焼土は、C-C'付近ではなく、燃焼部は赤色焼土が巡るのみである。また、B-B'からC-C'にかけて床面を修復しており、その修復範囲から燃焼部と燃焼部の境はC-C'付近と考える。さらに修復範囲の東端が傾斜変換点付近になることから、主に須恵器を焼成した所は、床面傾斜が緩やかなC-C'からB-B'付近までの約 $1.9m^2$ であったと思われる。B-B'から煙道部にかけては、床面の傾斜を急にすることによって窯体内の温度を上げる、いわば煙道的役割を果たしていたものと思われ、ここでは須恵器を焼成しなかったものと考



第58図 灰原断面図



第59図 トレンチ南壁断面図

える。このように袋谷1号窯窯体は煙道部、焼成部、燃焼部が比較的明瞭な窯体であった。

B-B'付近を境にして煙道部側は地山をU字状に掘り窪めただけで、焼成部は粘土を貼り付けて構築している。また修復した床面は、最初の操業時床面に直接粘土を貼り付けており、その厚さは約6cmを測った。

灰原は、約40cmの厚さで丘陵斜面から谷部にかけて堆積していた。その範囲は、南北6.6m・東西4.5mである。大きく分層すると3層に分かれ、上層より黒色灰原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとした。黒色灰原Ⅱ・Ⅲは、操業時の堆積によるものであるが、黒色灰原ⅠはⅡ・Ⅲより淡いことから、窯体付近に堆積していた灰原が流れて堆積したのではないかと思われる。この3層より出土した須恵器に、時期差は見られなかった。床面の修復回数や灰原の堆積状況から、袋谷1号窯は2回以上の操業が行われ、それもごく短期間で廃業したものと考えられる。

灰原の掘削を行っているとき、灰原裾部より1号窯操業前に堆積した層と、操業後も堆積した層から多量の須恵器片が出土した。この層はいずれも灰原でなく、山手より流れて堆積したものである。1号窯操業以前に堆積した層は、赤色礫層(第58図黒色灰原Ⅳ)で、操業後に堆積した層は、礫混りの淡灰色土層(第58図黒色灰原Ⅴ)である。この両層から出土した遺物を整理すると、よく接合することや、遺物の形態も同じ特徴を示すことから、1つの灰原から流れてきたものと思われた。これら黒色灰原Ⅳ・Ⅴから出土した遺物は、その形態の特徴を見る限り、黒色灰原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ出土の遺物とも同時期のものである。また、黒色灰原Ⅳ・Ⅴの遺物出土状況が、拡張部南側つまり山手ほど完形品にちかくなり遺物も密集することから、袋谷1号窯に隣接するように推定2号窯が構築されていたものと思われた。

拡張部南側の断面を観察しても、推定2号窯の灰原から流れた黒色灰原Ⅳの上に袋谷1号窯の灰原が堆積し、その後、黒色灰原Ⅴが2回にわたって流れ堆積していることがわかった(第59図)。

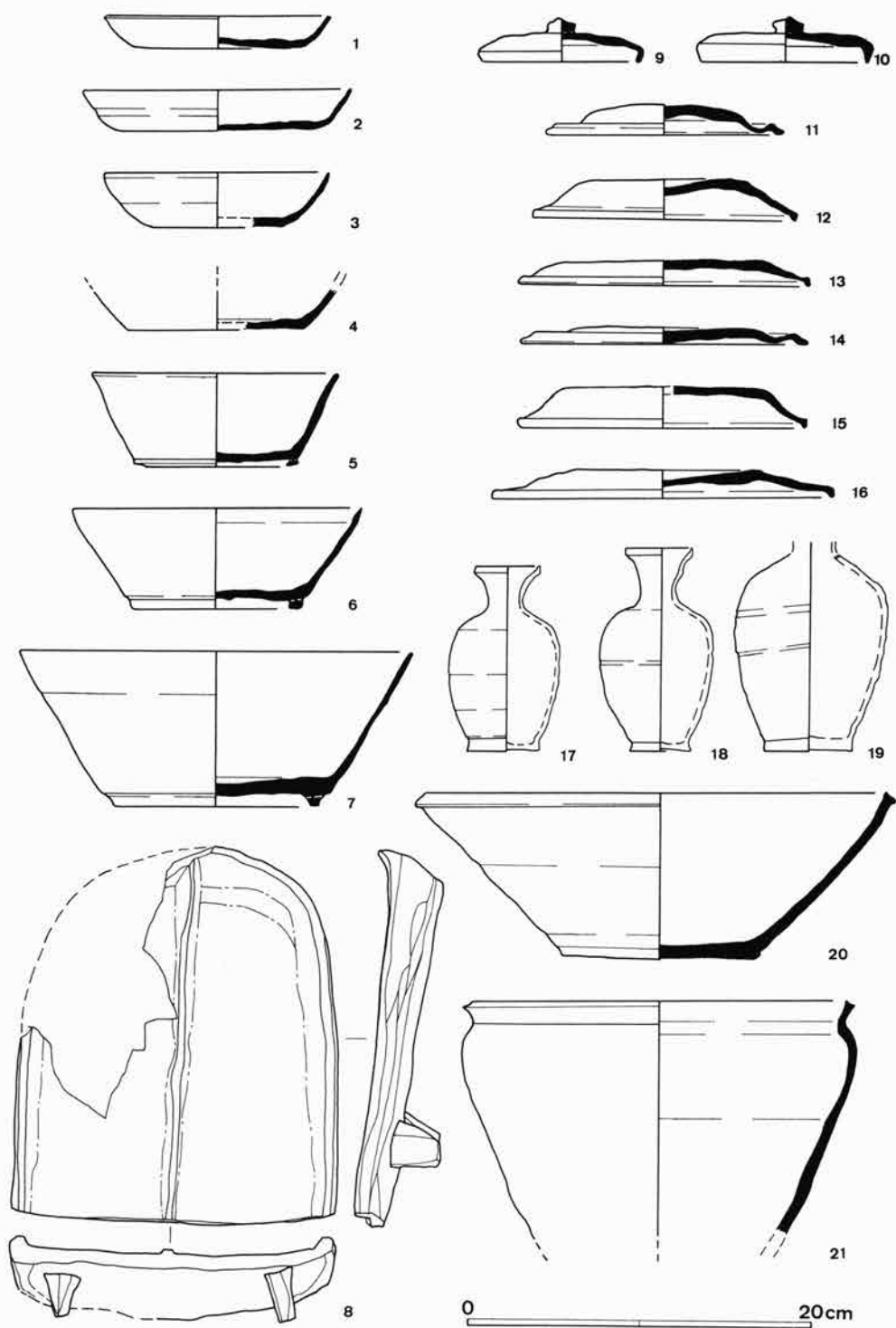
以上の調査の結果、袋谷窯跡は、袋谷池に通じる谷筋の西側斜面に構築した、少なくとも2基から成る窯跡群であることを確認した。

3. 出 土 遺 物

出土遺物は、袋谷1号窯灰原(黒色灰原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)より出土したもの(第60図)と、推定2号窯の灰原から流れてきたもの(黒色灰原Ⅳ・Ⅴ、第61・62図)に分かれる。

黒色灰原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ出土遺物

今回出土した遺物は、杯・皿・蓋・瓶子・壺・鉢・硯・甕である。



第60図 出土遺物実測図(1)

皿は平底のものしか出土しておらず、9世紀前半に多く見られた口縁端部の皿(1)と、口縁端部を丸くおさめた皿(2)が出土している。

杯は平底のもの(3・4)と輪状高台を巡らすもの(5～7)がある。杯(3・4)は、平坦な底部からわずかに内湾しながら外上方に立ち上り、口縁端部は丸くおさめている。杯(5～7)は、平坦な底部から外上方に真っすぐ立ち上り、口縁端部は丸くおさめている。ごく少数であるが、杯(7)のような大型品も出土している。

蓋は、短頸壺と併用した蓋(9・10)と、杯や皿と併用した蓋(11～16)に分かれる。蓋(9・10)はつまみを有し、平坦な天井部から真下に屈曲する。蓋(11～16)は平坦な天井部からS字状または外下方に屈曲する。この形態の蓋には、つまみが無い。

瓶子は、体部が卵形で底部は平底である。中には、器高が15cm程の大型品もある。

鉢は、平坦な底部から外上方に真っすぐ立ち上り、口縁端部の平坦なもの(20)と、平坦な底部から外上方に立ち上り、口縁部がく字状に屈曲し、端部が平坦なもの(21)も出土した。10世紀によく見られる玉縁状口縁を巡らした鉢は、出土していない。今回の調査でかなり多くの鉢が出土しているが、その過半数を占めるのは、鉢(20)の形態のものである。

硯は、風字硯と二面硯が出土している。

黒色灰原Ⅳ・Ⅴ出土遺物

堆積層より出土した遺物は、蓋・杯・皿・瓶子・壺・鉢である。

蓋は、短頸壺と併用する蓋(22・23)と、杯や皿と併用する蓋(24～26)がある。蓋(22)は、平坦な天井部から真下に短かく屈曲し、簡単なつまみを貼り付けている。蓋(23)は、平坦な天井部から真下に短かく屈曲し、天井部に輪状のつまみを貼り付けている。蓋(24～26)は、平坦な天井部からS字状に屈曲して口縁部に至る。この形態の蓋には、つまみは無い。

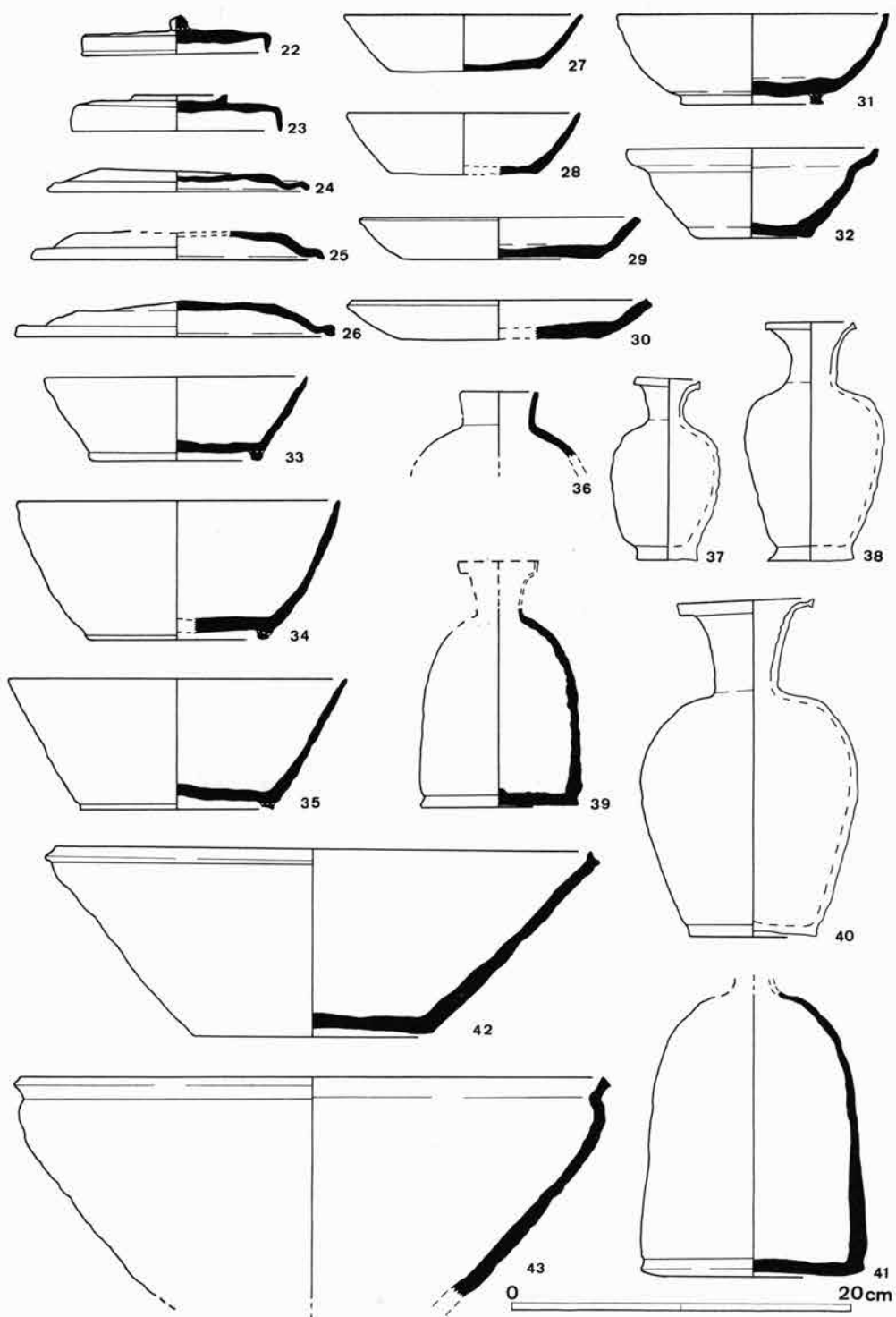
杯は、平底のもの(27・28)と輪状高台を巡らすもの(33～35)がある。形態は、黒色灰原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ出土の杯と同じ特徴である。

皿は、平底で口縁端部が平坦なもの(29・30)である。

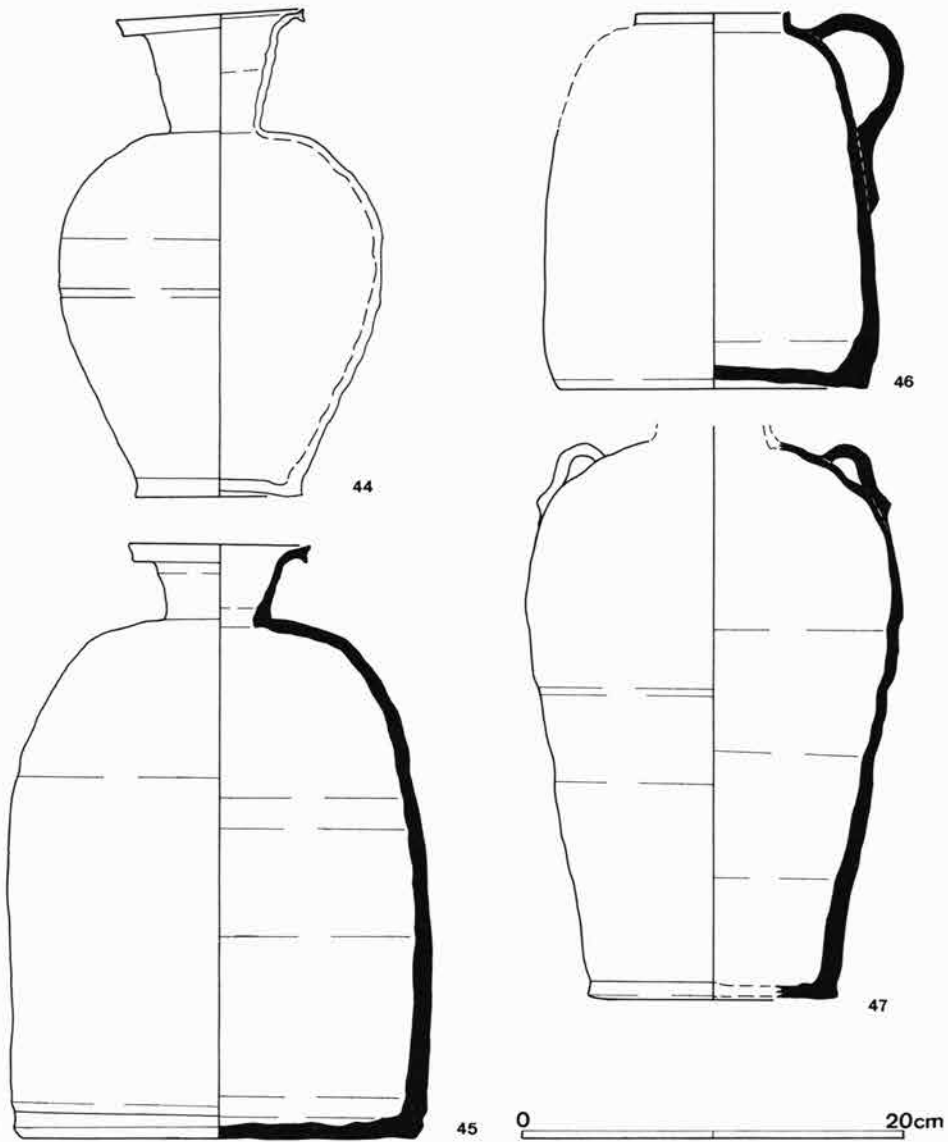
瓶子は、体部が卵形のもの(37・38)と、砲弾形をした瓶子(39)がある。瓶子(36)は、おそらく砲弾形をした瓶子の口縁部と思われ、口縁部は、上方に立ち上り端部は平坦におさめている。

鉢は、平坦な底部から外上方に真っすぐ立ち上り、口縁端部が平坦なもの(42)と、口縁部がく字状に屈曲し端部が平坦なもの(43)がある。鉢は、全体の出土量の3割を占めるが、その大半は鉢42の形態のものである。

壺は、体部が卵形のもの(40)と、砲弾形をしたもの(41・44)と、短頸壺(45)と、双耳壺(47)がある。



第61図 出土遺物実測図(2)



第62図 出土遺物実測図(3)

31は、杯34のように体部が内湾しながら立ち上り、高台を底部端より内側に貼りつけたものである。口縁端部は、平坦に仕上げている。

32は、平坦な底部からわずかに内湾しながら立ち上り、口縁部ではS字状に大きく屈曲し、端部は上方に丸くおさめたものである。

46は、篠窯跡群で初めて出土した器形で、短頸の壺に大きな把手がつくものである。

以上のように、黒色灰原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴから出土したS字状に屈曲する蓋には、す

べてつまみがなく、平底の杯はやや内湾しながら立ち上り、また鉢の形態や瓶子の体部の形態から、9世紀中頃のものと思われる。昭和52年度に発掘調査を行った前山1号窯出土遺物に類似するものである。

4. ヘラ記号

破片であるが、ヘラ記号を施したものが若干あった。ヘラ記号は、草花を描いたものとして「×」「-」「佑」で、黒色灰原Ⅲ・Ⅳ・Ⅴから出土したものである。草花を描いたヘラ記号は、花卉を「田」という印刻で表わす簡単なものである。「-」は、長線と交差しないように短線を刻んでいる。「佑」は、壺の体部上半に「佑 仁」とあり、もとは「佑」を4か所に刻んでいたものと思われる。これらのヘラ記号は、壺の体部上半や体部下半または高台を有した杯の底部外面に施されていた。

個体数 袋谷1号窯窯体内または灰原より出土した個体数は、540個体である。その内、鉢が272個体と最も多く、全体の50%を占める。中でも平底の底部から外上方に立ち上り、口縁端部を平坦に仕上げた鉢が大半である。8世紀後半から主に焼成されてきた杯は20%、蓋が11%、皿は2%となり、皿はほとんど作られていない。このことから、袋谷1号窯は鉢を主に焼成していたことが特徴と考えられる。

黒色灰原Ⅳ・Ⅴより出土した個体数は、1,753個体である。袋谷1号窯出土遺物と同様に、鉢が最も多く363個体と全体の31%を占め、その内、平底の底部から外上方に真っすぐ立ち上り、口縁端部を平坦に仕上げた鉢が大半である。杯は14%、蓋が4%、皿が1%、瓶子が5%、壺が5%と、袋谷1号窯と同じ傾向が見られた。以上のことから、袋谷窯跡群は、杯や蓋よりも鉢を多量に焼成した窯跡群である。

5. 小 結

袋谷1号窯は、篠窯跡群の西端にあたり、狭小な谷地形の西側斜面に構築された、2基以上から成る窯跡群の内の1基であった。窯体は半地下式登窯で、煙道部・焼成部・燃焼部が明確に区分できる窯跡であった。構築に際しては、地山をU字状に掘り込み、焼成部の側壁や床面には粘土を貼り付けており、煙道部には粘土を貼り付けていなかった。焼成部床面を1度修復しており、灰原の堆積から見ても2回以上の操業が行われたが、操業期間は、出土遺物などから短期間であったものと思われる。その操業時期は9世紀中頃で、隣接する推定2号窯も同時期の窯跡と考えられる。

この付近の窯跡としては、前山1・2・3号窯^(注14)や西前山1号窯^(注15)がある。中でも前山1号窯や西前山1号窯は、今回調査を行った袋谷1号窯・推定2号窯を含めて9世紀中頃から後

半にかけて操業していた窯跡である。また、今までの調査結果から、時期が新しくなるにつれて東から西へと操業場所が移動し、それにつれて工人集団も移動した傾向が見られる。

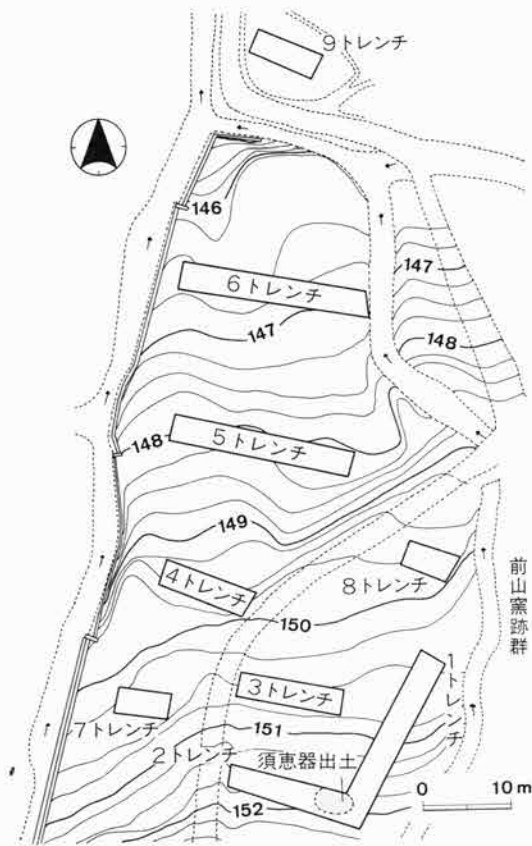
以上のことから、亀岡市篠町森小字前山付近の丘陵西側斜面には、9世紀中頃から後半にかけて操業していた窯跡がかなり存在するものと思われ、今回の発掘調査は、それを裏付ける一資料になるものと考えられる。
(岡崎研一)

(5) 上猪谷地区試掘調査

1. 調査概要

調査地は、亀岡市篠町森前山に所在する。昭和52・55年度に発掘調査を行った前山窯跡^(注16)群の西側に隣接する地区である。地形的には、南側の山地から流出してくる2条の谷が合流する所であり、やや幅の広い谷部である。

現地調査は、昭和61年2月24日から開始した。調査地内に9か所のトレンチを設定し、重機によって掘削した。調査地のほとんどは、園芸用樹木の植林地であり、そのための盛土が、調査地北半部では地表から約1.5mの深さにまでおよんでいた。盛土の下層は、部分的に旧表土や旧耕土が認められる箇所もあったが、ほとんど、土石流による堆積とみられる礫層であった。1・2トレンチでは、焼土や炭とともに須恵器片を含む層を確認したが、その範囲は狭く、また、その上層・下層とも上記の礫層であり、上流から流出してきたものであろう。9トレンチは、水田部に設定したものであるが、耕土下に少量の須恵器片を含むシルト層を確認したものの、その下層は、透水性のある礫層であった。どのトレンチも、重機掘削や人力による精査を行い、地表下1.5m～2mまで掘削したが、顕著な遺構・遺物は検出しなかった。昭和61年3月28日に、機



第63図 調査地地形図

材撤去や埋めもどしを終了した。

2. 小 結

今回の調査では、当初予想していた前山窯跡群に関連する遺跡は検出しなかった。1・2トレンチで出土した須恵器片は9世紀代のものであるが、位置的にも、前山窯跡群に関連するものとはみられない。調査地の南側に窯跡があることを示すものであろう。

(引原茂治)

(6) 篠地区試掘調査

1. 調査概要

本調査地は、9号バイパスと国道9号線を結ぶ連絡道路(アクセス)の予定地内である。地形は標高約120~145mと北へ緩やかに低くなる水田地帯である。この両側は、東に西長尾と西に小柳の細長い低い丘陵が張り出し、現在竹藪・畑となっている。調査地付近には窯跡が確認されており、窯業生産に関する遺構が存在することが予想されたため、試掘調査を実施した。

調査区の設定については、路線長約400m・幅20~60mの間において、幅2mのトレンチを路線の中軸線付近に沿って設定した。調査は、道路工事との関連から北側の竹藪から順番に南進し、路線幅が大きく広がる南半部の水田では、軸線に直交する東西方向のトレンチを入れた。設定したトレンチは、23か所である。調査地内の主な層位は、耕作土、床土、黄灰色粘質土、茶褐色粘質土、褐色砂礫、茶白色シルト(地山)の順である。茶褐色砂礫は、地下水位によって青灰色に変色しているところもある。検出された遺構は、谷状の落ち込み(C区)、水田の石組暗渠排水溝等であり、多くのトレンチでは水田一筆毎の区画整理のための盛土が確認できた。次に各トレンチの概要を記述したい。

Aトレンチ 掛ヶ谷から延びる低い丘陵部で、最近まで畑地として利用されていた。幅2m・長さ32mのトレンチを入れた。表土下に耕作のための整地層が厚さ0.3m堆積し、近現代の遺物が出土した。地表下0.6mで淡褐色シルトの地山があった。顕著な遺構はない。

Bトレンチ 標高120mの水田部である。耕作土、床土以下、茶褐色砂礫が0.3~1.2m堆積し、西方へ厚みを増している。この層は、丘陵沿いの土砂流による堆積物と考えられるが、時期は不明である。地山は淡褐色シルト層である。

Cトレンチ 標高122mの水田部に長さ27mの南北トレンチを入れた。その結果、谷状の遺構が検出されたため、さらに東西方向のサブトレンチを設定した。層位は、耕作土・床土以下、2層の旧耕作土が認められた。次に須恵器片を含む淡灰色粘質土、灰色粘質土



第64図 調査地地形図

が0.3~0.5mほど堆積し、灰色砂礫が基底面となる。この灰色砂礫の上面は、南西から北東に緩やかに傾斜しており、灰色粘質土を主な埋土とした谷状の遺構とみられる。

Dトレンチ 耕作土下から南北方向に走る石組の暗渠排水溝を検出した。石組の構造は、まず素掘りの溝を掘り、その両側面に直径7cmの丸木を胴木とし、この上に30~40cm大の河原石を蓋石としたものである。この水田の床土以下には、厚さ1.2mの茶褐色砂礫があり、土砂流による堆積土である。

E~Gトレンチ いずれの水田にも畦畔の改変があり、黄灰色粘質土を厚さ0.3~0.5mの盛土を行っている。下層は褐色砂礫が1.2~1.4mと厚く堆積しており、やはり土砂流によるものと思われる。

H~Jトレンチ 層位は、耕作土、床土、黄灰色粘質土、褐色シルトの順である。黄灰色粘質土は、固くしまり、砂質土も含んでいる。ここでは、茶褐色砂礫がない。

L~Qトレンチ L, Mトレンチでは、耕作土、床土以下、褐色砂礫が厚さ0.3~0.5m堆積している。Oトレンチでは、水田の改変がみられ、床土から須恵器片が出土した。この下層の茶褐色砂礫は角礫が目立ち、青灰色に変色している。この状況はUトレンチまで至り、砂礫層が最も厚みを増すのが、R, Sトレンチで、この部分が西南方向の谷部と考えられる。

V(1~3)・Z(1~3)トレンチ 水田面が急激に高くなっており、いずれも改変されたものであるが、旧地形においても急斜地であった。厚さ1.4mの砂礫は褐色を呈し、円礫、角礫が混在し、人頭大のものが多く、表面の風化が激しい。下層の地山は、淡茶白色シルト層である。

2. 小 結

今回の調査では、篠窯跡群に関連する遺構は確認されなかった。しかし、調査によって明らかとなった2点について述べておきたい。

第1に、調査地内の水田の畦畔が直線的に整っていることから、ある時期に改変、整備が行われたと推定される。断面観察の結果でも、旧耕作土、改変のための盛土があった。改変・整備の時期については、出土遺物・暗渠排水溝の形態から、近世及び近代であると考える。

第2に、ほとんどの調査区で確認された厚さ1~1.5m以上の茶褐色砂礫層は、土砂流による堆積物であり、出土遺物が無いものの、地山ではないと考える。地下水位の影響によって青灰色を呈する場合のほかは、風化した砂礫が茶褐色に見えるが、両者は同一のものとする。この砂礫層は、水流を伴った速度の速い土砂流ではなかったと推定する。

この2点は、窯跡とは関連しにくいものであるが、旧地形を復原する上で貴重な資料であると思う。(竹井治雄)

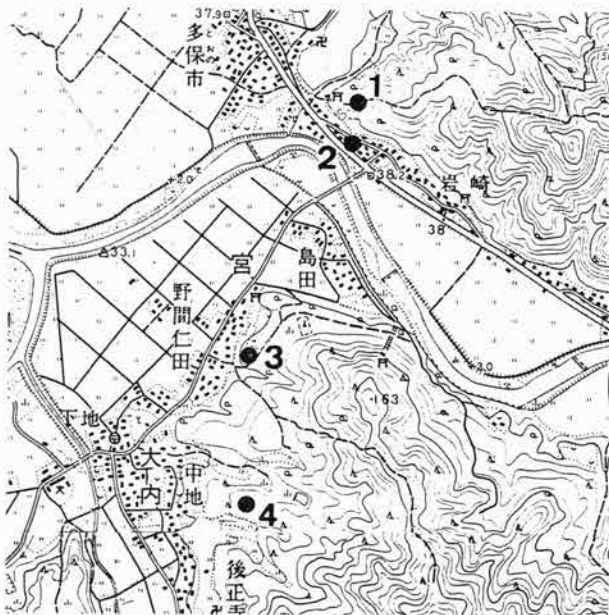
- 注1 調査補助員 青井 敏・青木恒文・上田俊章・栗林幸生・斎藤秀和・坂下雅朗・佐藤勝憲・清水 努・高橋孝次郎・高橋淳一郎・竹岡光男・立花正寛・田中博樹・中西 宏・中西正樹・西井淳也・西岡成郎・西垣真史・西町達也・波多野徹・人見克之・森 一夫・山地 亘・吉田和弘・吉田昌巳・吉富真樹
- 整理員 青木あさ代・安達君江・足立多枝子・岩田且子・上田和子・臼井千映子・岡田貞子・岡本美代子・岡本美和子・荻野富紗子・加藤由美・河原早苗・小滝初代・坂本明美・坂本佳津江・土屋桂子・中西康子・藤田育子・細川康晴・三木伸子・宮岡昭夫・村尾多美子・村上典子・村田澄恵・村山一弥・毛利悦子・山口あずさ・山本末子・山本弥生・劉 和子
- 作業員 石野正男・宇野三雄・高橋一義・平田数太郎・法貴四郎・矢代四一郎・井内悦子・小川ふじ・木村一江・中西ふみ子・西田初恵
- 事務補助員 真田明子・吉井雅代
- 注2 山口 博ほか「篠窯跡群昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会) 1980
- 注3 安藤信策ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会) 1978
- 注4 水谷寿克ほか「篠窯跡群昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会) 1980
水谷寿克ほか「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注5 樋口隆久ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会) 1978
安藤信策ほか「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注6 水谷寿克「篠・西前山1号窯」(『京都府埋蔵文化財情報』第19号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注7 注2と同じ
- 注8 引原茂治ほか「篠窯跡群昭和57年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注9 岡崎研一ほか「篠窯跡群昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
- 注10 注4と同じ
- 注11 注3と同じ
- 注12 石井清司ほか「篠窯跡群昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注13 岡崎研一「篠・袋谷1号窯」(『京都府埋蔵文化財情報』第18号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注14 注5と同じ
- 注15 注6と同じ
- 注16 注5と同じ

6. 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和60年度 発掘調査概要

はじめに

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の発掘調査は、昭和54年度に宮遺跡から開始して以来、7年間継続してきた。本年度は、薬王寺古墳・多保市遺跡・仁田城跡・大内城跡の4か所について発掘調査を実施し、自動車道の工事名「第7次施行命令区間」の京都府域に関する発掘調査は全て終了した。

薬王寺古墳は、土師川北岸の丘陵上に立地する古墳群であり、本年度は組合式石棺を主体とする1基を予定していたが、調査中、更に1基が発見され、合計2基の調査を行った。多保市遺跡は、橋梁部の橋脚工事の立会調査に際して、遺物・遺構の存在が確認され、急拠、発掘調査を行ったものである。土師川南岸の洪積世段丘上に立地する仁田城跡は、付け替え道路工事に伴うもので、堀と土塁の一部を調査した。大内城跡は、その主要部分について、昭和55・56・57年度に調査を実施したが、本年度は、本線部分で城跡以前の時期を調査するとともに、付け替え道路部分で、土塁等の発掘を行った。



第65図 調査地位置図 (1/25,000)

1. 薬王寺古墳群 2. 多保市遺跡 3. 仁田城跡 4. 大内城跡

調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となり、昭和60年5月9日から昭和61年3月30日まで断続的に実施するとともに、並行してケシケ谷遺跡等6遺跡の整理作業を行った。調査に際して、現地作業に従事していただいた大内地区、多保市地区、宮地区の方々をはじめ、数々の御協力、御教示を賜った関係諸機関の方々に心から謝意を表します。

(長谷川 達)

(1) 薬王寺4・5号墳

1. はじめに

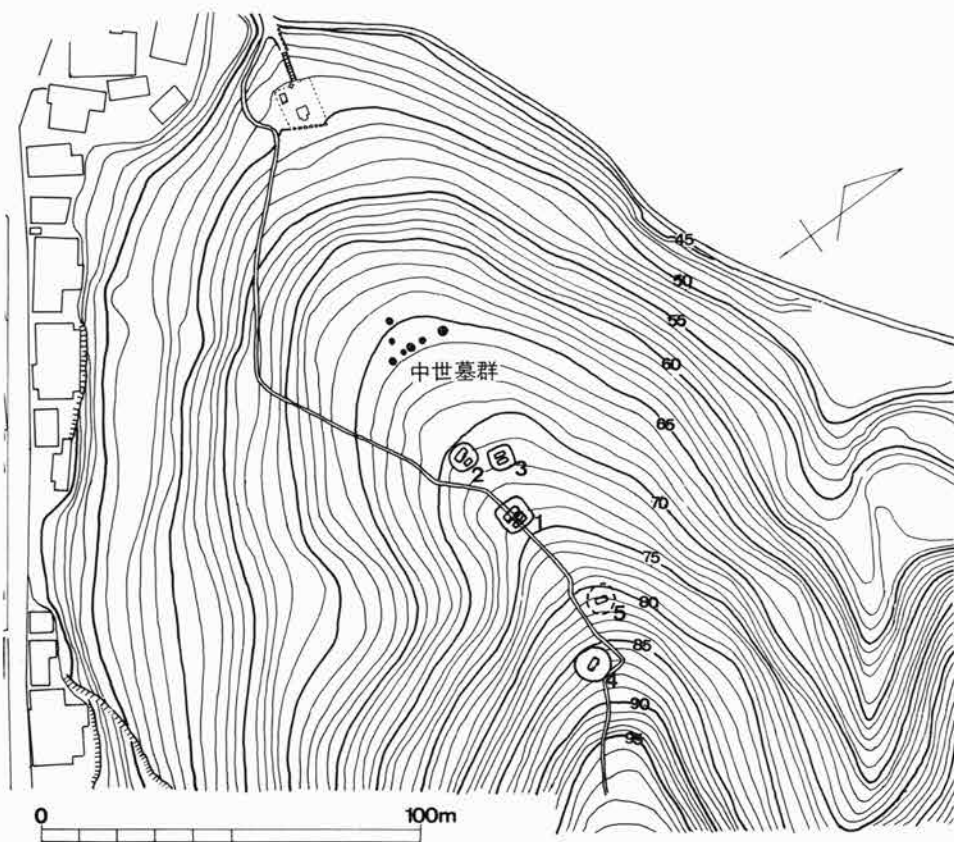
今回報告するものは、工事中に発見された2基の箱式石棺(薬王寺4・5号墳)の調査概要である。薬王寺古墳群は、これまでの調査によって5基発見されており、すべて東から西へ傾斜する丘陵上に位置する。1～3号墳が、丘陵の傾斜変換点の緩斜地に立地するのに対して、4・5号墳は、1号墳の東方30～40mの地点にあり、傾斜角20度前後という急傾斜地に立地している。

調査対象古墳は、工事に付随して発見されたため、調査前の旧状はほとんど失われていたので、主体部(箱式石棺)を中心とした調査となった。

2. 調査概要

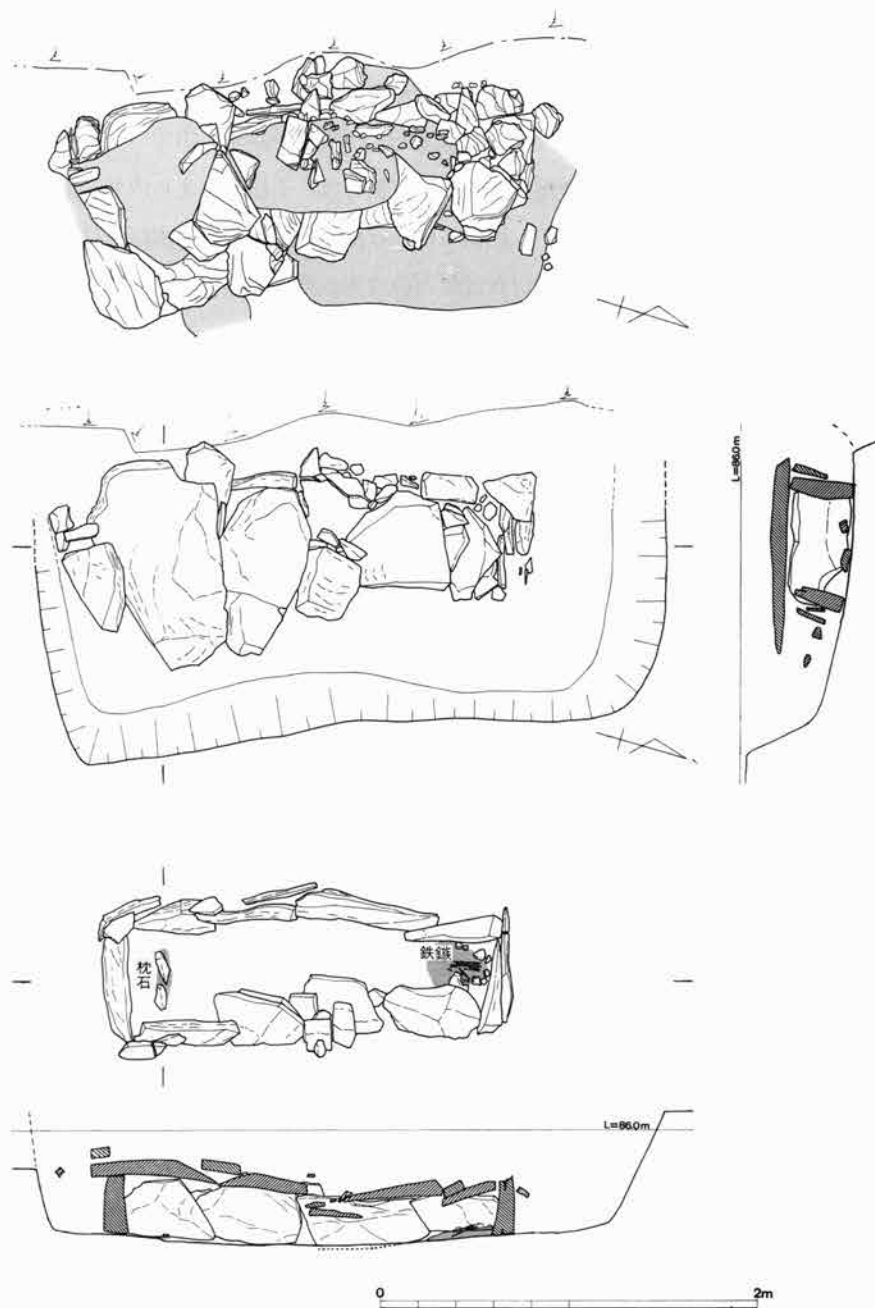
① 4号墳

墳丘と立地 標高86m付近に位置する。発見された時は、墓壇の西半分が削り取られ、



第66図 薬王寺古墳群分布図

棺材が露出し、石棺の東側にも一部掘削が入り、その土砂がたまっていた。そのため墳丘や外表施設に関して不明な点が多いが、石棺の南東側で石棺を囲むように走る溝を検出した。この溝は、幅0.8~1.0m、深さ0.2~0.4mを測り、溝内からは須恵器甕が破碎された



第67図 4号墳石棺実測図

状態で出土した。墳丘部を画する溝と思われるが、一部しか検出できず、墳丘の形・規模は不明である。また墳丘は、石棺長軸ラインの土の堆積状態から若干の盛土を行って築造されていることがわかった。

埋葬施設 墓壇は墳丘の西半分が工事で削り取られていたため不明な点が多い。その規模は、長さ3.3m、幅1.6m(現存幅)以上、深さ0.75mを測る。

石棺は、この墓壇の中に直接棺材を立て並べた上に蓋石を架ける箱式石棺である。主軸は南北方向にあり、方位はN16°Wである。棺材は、暗褐色を呈する小片で、両長側石各4枚、両木口石各1枚、蓋石5枚で構成される。東側石は、土圧等により内傾しており、棺内に倒れ込んでいるものも見られる。西側石は、ほぼ垂直に立つ。南木口石は、側石の内側にはさみ込まれるのに対し、北木口石は側石の外側に据えられていた。蓋石間の接合面には、同様の板石を数枚配置したり、また粘土で目貼りを行うことによって、蓋石の安定・棺の密封を図っている。蓋石は、北から順に架けてゆき南端に一番大きな板石(長さ1.1m×幅0.4~0.75m、厚さ0.15m)を配置している。

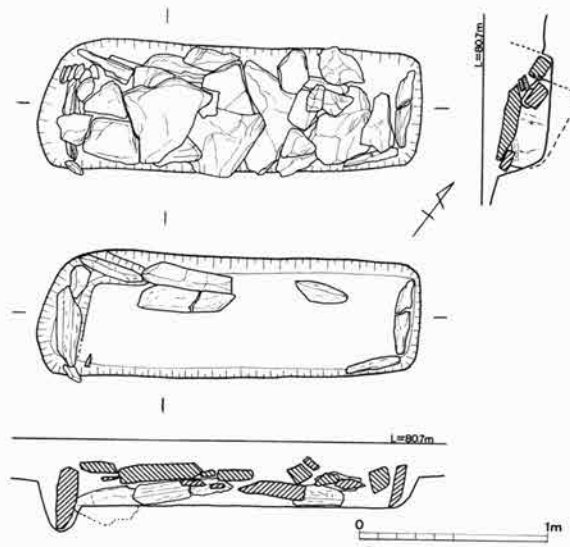
棺底には、板石・粘土等による床の形成は認められない。ただ北木口石とそれに接する東西の両側石の計3枚で画された部分には、棺底に2~5cm程の河原石と黄白色粘土で一種の床面を作り、その上に鉄鏃(19本か)が刀先を北木口に向けてまとめて置かれていた。また南木口石側には、2個の自然石があり、黄白色粘土で安定されていた。棺の構造・規模から頭位が南と考えられるため、この石は枕石と推定される。

棺の内法は、棺底で長さ1.92m、北木口幅0.52m、南木口幅0.60m、上端から棺底までの深さは0.3~0.4mを測る。

② 5号墳

墳丘と立地 標高81m付近に位置する。石棺のみが残り、周辺は工事のため削平されていたので、墳丘・外表施設に関しては不明である。ただ1~4号墳に見られた墳丘を画する溝が検出できなかったことから、無墳丘の可能性が高い。

埋葬施設 埋葬施設は、4号



第68図 5号墳石棺実測図

墳よりも小規模の箱式石棺である。墓壇は、長さ2.0m、中央部幅0.64m、確認面からの深さ0.15～0.25mの規模をもつ。壇底においては、さらに南木口石及びそれと接する西側石の2枚の棺材を据え置くためのL字型の溝を穿っている。

石棺は、南北方向に主軸をもち、方位はN35°Eである。棺材は、4号墳と同様の片岩で加工痕はみられない。蓋石は、4～5枚の板石を北から順に据えてゆき南端に一番大きな板石を配することは、4号墳と同じである。ただ粘土による目貼りはみられない。棺の側壁をなす木口石・側石は、前者は1枚ずつであるが、後者は一部しか検出できずその石の配置・組み方は今一つ明らかでない。ただ蓋石を除去した段階で、棺内に倒れこんでいた側石は少なく、もともと四周に完全に板石を立て並べて組んでいた可能性は少ない。

棺の規模は、推定値をとるが、内法は棺底で長さ1.65m、北木口幅0.4m、南木口幅0.5m、また上端からの深さ0.2mを測る。頭位は、棺の構造から南と考えられる。

棺内・墓壇から遺物は出土しなかった。

3. 出土遺物

遺物は、4号墳の墳丘を画すると思われる溝から破砕された須恵器甕が、また4号墳の棺内から鉄鏃(19本か)が一束になって出土した。これらの遺物の詳細については現在整理中のため、次回(本報告)に記したい。

4. 小 結

今回の調査の成果を簡単に整理してまとめにかえたい。

- ① 葉王寺古墳群は、5基(以上か)の古墳・埋葬施設から構成され、出土遺物から6世紀初頭から前半代の短い期間にまとめて築造された古墳である。
- ② 3・4・5号墳は、主体部に箱式石棺を採用していたが、3号墳のみ底石をもつ。また4号墳石棺は、長さ1.92m・幅0.52～0.60mと規模もひとまわり大きく、棺内には鉄鏃を副葬する床を形成していた。
- ③ 福知山市内における箱式石棺の例は、由良川流域の稲葉山古墳群^(注1)(9号墳主体部・方墳)、宝蔵山古墳群^(注2)(4号墳第3主体部・方墳)、八ヶ岳古墳^(注3)(方墳)の中で知られるがこれらは、4世紀末から5世紀前半代に築造されたもので、当古墳群とは時期・規模・構造に違いが認められる。
- ④ 京都府北部での類例としては、網野町岡^(注4)3・4号墳、同町新浜^(注5)2・3号墳、同町勝山古墳^(注7)がある。これらは出土した遺物から6世紀初頭頃に比定されるものである。

(山下 正)

(2) 多保市遺跡

1. 調査の概要

当遺跡は、福知山市の南東部、竹田川と土師川の合流点から北東約1kmの地にあり、土師川右岸の薬王寺古墳群が所在する丘陵の裾部に位置する。土師川がこの丘陵にぶつかって流れを大きく東へ変える所であり、国道9号線を経て約35mで川に面している。標高は約39mを測り、川面との比高差は5~6mである。

周辺の遺跡をみると、薬王寺古墳群が所在する丘陵の北側の谷に多保市^(注8)廢寺が知られている。多保市という地名も、この寺院の塔に由来するともいわれ、礎石をはじめとして瓦など遺構、遺物が確認されている。

また、1984年度には、多保市城跡、薬王寺古墳群の発掘調査が実施された。多保市城跡の発掘調査において、山城に関する遺構は、3つの郭や土塁などを中心に調査が進められたが、堅穴式住居跡や奈良時代のもので推定される方形掘形の柱穴列なども検出され、多くの成果があった。

薬王寺古墳群の発掘調査においては、組合せ式の石棺を主体部とする古墳をはじめ、馬具や鉄鏃などの副葬品を有した木棺直葬の主体部を持った古墳などが検出された。

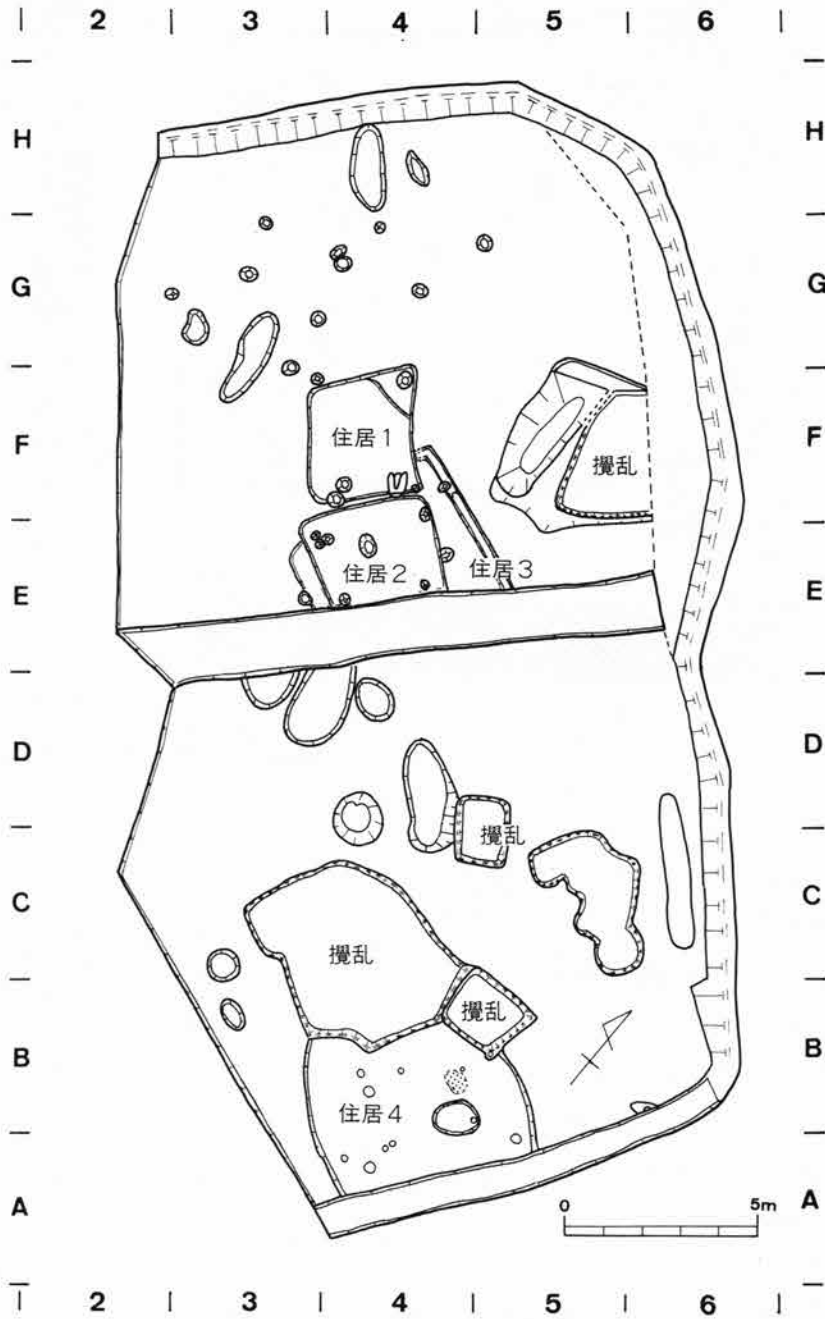
多保市遺跡の調査は、当地での橋脚部工事に際しての立会調査であった。始めに、工事により掘削されていた土層断面の観察を行った。この観察によって、中世以降に造成されたと考えられる民家敷地の盛土約1mの下に遺構面があることを確認した。そこで、排土置場や水道管が走る部分を除いた可能な範囲の盛土を機械力により除去した後、人力によって遺構・遺物の検出に努めた。調査の範囲は、東西12m・南北27mで、調査面積は324㎡であり、この調査によって弥生時代及び奈良時代の堅穴式住居跡を合わせて4基や、土塚・柱穴などを検出したほか、近世以降の土塚・遺物も検出した。

2. 検出遺構

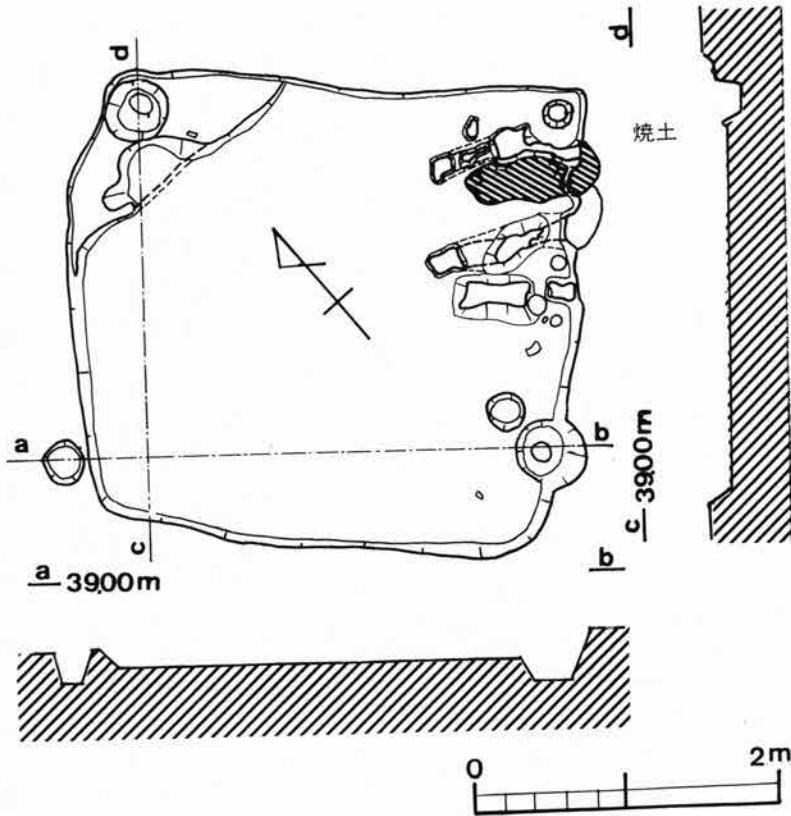
今回の調査により、弥生時代から近世以降までの遺構・遺物を確認した。以下、検出遺構の一部の概略を説明して、今回の報告としたい。

住居1 南北3m・東西3.4mを測る方形の堅穴式住居跡である。検出面から床面までの深さが約20cmと残りのよいものであった。東隅に作り付けのカマドを有していた。このカマドは、作り変えた可能性がある。柱穴に関しては、図中のものが堅穴式住居跡に伴うものかどうかは現時点では不明である。

住居1は、唯一まとまって遺物が出土した堅穴式住居跡である(第71図)。須恵器杯蓋1、



第69図 多保市遺跡遺構配置図



第70図 住居 1 実測図

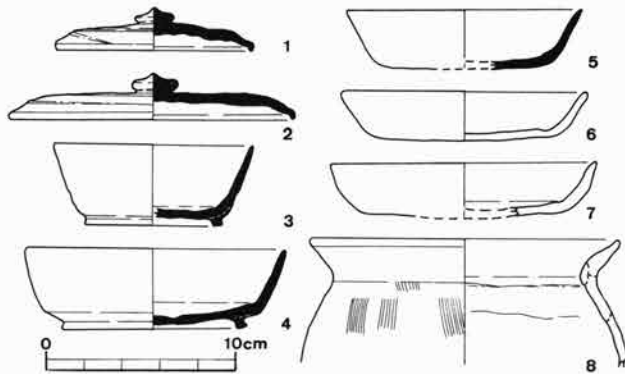
須恵器杯身 3, 土師器杯 6・7 がカマド部南側で集中して出土した。須恵器杯身 5 は, 住居跡北隅を掘り残して造ったと思われる壇の上から出土した。その外, 須恵器杯身 4 は, 南コーナーで住居跡を切り込んだ形のピットから出土した。土師器甕 8 は, 西隅の西側のピット内から出土した。

住居 2 東西 3.2m を測り, 方形を呈する竪穴式住居跡である。東辺部については, 明らかではなく, カマドや焼土は検出できなかった。柱穴に関しては, 検討中である。

住居 3 住居 1・2 に切られた形のもので, 方形を呈した竪穴式住居跡である。南北 5m を測る。幅 30cm の周溝が検出された。

住居 2・3 については, 出土した遺物に良好な資料がなく, 時代決定が困難ではあるが切り合い関係や平面プランなどから住居 1 と相前後した時代の竪穴式住居跡と推定される。

住居 4 ややいびつな円形を呈する竪穴式住居跡である。最大径 5.7m を測る。中央やや北東よりに楕円形をした土壇を検出し, その西側で焼土部を確認した。出土遺物などから弥生時代のものと考えられる。



第71図 住居 1 出土遺物実測図

土坑 10数個の土坑を検出した。時代・性格等は不明である。

ピット 10数個のピットを検出したが、埋土中から出土した遺物には時代差があり、埋土の土色も異なり、現時点では掘立柱等の建物にまとまるものはない。

(藤原敏晃)

3. ま と め

今回は、調査の一部の概略説明にとどめた。以下若干の課題を述べてまとめにかえたい。中丹地域においては、7世紀の竪穴式住居跡は、これまで綾部市を中心に比較的まとまって検出されている^(注9)。しかし、今回、多保市遺跡で調査した竪穴式住居跡のように奈良時代と考えられるものは、明確には確認されていなかった。このことは、当地における奈良時代を考える上でも非常に貴重な成果といえる。

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の調査において、奈良時代に関連するものとして、これまで、多保市城跡D地点で検出された一辺約1mの方形の掘形をもつ柱列(掘立柱建物?)や土坑が明確な例で、その他は明らかなものはなかった。

この多保市城跡D地点は、当遺跡が接する丘陵の北西側に広がる谷の一段高くなった平坦地の一部である。この遺跡が丘陵をはさんだ位置にある多保市遺跡と同一集落とすることは、不明な点も多く今後の課題であるが、少なくとも近接した時期に近接した所で掘立柱建物と竪穴式住居が存在したといえることができる。この様相が、奈良時代におけるこの地域の一般的な状況であるならば、7世紀には掘立柱建物のみからなる集落が一般化するであろう畿内地域と比較して、非常に興味深い点といえる。

ただし、福知山市北部の石本遺跡では、奈良時代になると掘立柱建物2棟が検出されており、竪穴式住居跡は検出されていない。この石本遺跡が、掘立柱建物のみからなる集落であるかどうかは、更に検討が必要であろう。しかし、仮にそうであるならば、福知山地域の中で、掘立柱建物のみからなる集落と、先に仮定した竪穴式住居跡が併存する集落という違いも今後の検討課題であろう。

また、奈良時代の竪穴式住居跡の性格という点についても検討を加えなければならない。以上のように、当地域における奈良時代について、今回の調査を踏まえて若干の課題を

述べた。狭小な調査面積でもあり、全体的な把握は困難な面もあるが、今後更に細かな検討を行うとともに周辺の調査を踏まえて考えていかなければならない課題は多い。

また、奈良時代以外についても、弥生、中世、近世と示唆に富んだ資料になると思われるが、資料整理が不十分でもあり、更に細かな検討を行い、後日の本報告に備えたい。

(藤原敏晃)

(3) 仁 田 城 跡

1. 調 査 の 概 要

仁田城跡は、福知山市大字宮小字城山に所在する。土師川右岸の低位段丘上に立地し、土師川と竹田川の合流点を中心とした平野を見渡すことのできる極めて眺望のよい場所にある。

竹田川は、日本で最も低い分水嶺を経て加古川に通じ、また土師川は、由良川と合流して日本海に至る河川である。従って、両河川は、播磨地域と日本海側を結ぶ重要なルートの中央部といえ、この両河川が合流する当地周辺は、交通の便に恵まれていた。また当地周辺は、平安時代以降「六人部荘」と呼ばれる荘園となり、経済的にも重要な所であった。

調査は、まず100分の1の縮尺による城跡地形測量図の完成を急ぎ、その後、工事により削平される部分である城跡東側空堀及び土塁一部の調査を行うことにした。調査地内の掘削に先立ち、4mごとの地区割りを行い、空堀に直交する形のトレンチを設けて土層等の観察をし、その後、人力により全面的に調査地の掘削を実施した。

発掘・測量調査を通じて、現在、以下のようなことが明らかとなっている。

仁田城跡は、単郭の形態をなす。その主郭部の規模は、北辺で34m、南辺48m、東西30mを測る台形状を呈する。この郭は、北辺土塁中央部にわずかに南に張り出す痕跡があり、東西2か所に区割されていた可能性がある。

土塁は、調査範囲の関係上一部しか掘削ができなかったが、現地形からみると東辺のもので上部幅1.4m、下部幅8mで、空堀底部から土塁上面までの比高差は4.4mを測る。

空堀は、東辺のものを調査したが、その結果、上面幅5～6.7m、底面幅2～3.2mの規模で断面は逆台形状を呈する。

土塁・空堀は、西辺を除いた三方に築いていたものらしく、西辺には見られない。西辺は平野部に面し、前面部ともいえるものであるが、急角度で平野部へと下がる斜面が防御の要を足していたものであろうか。もちろん、柵・壁などの防御施設も予想される。また西辺北端では、一部犬走りとも考えられる平端面部が地形測量図から読み取れる。

これらの土塁・空堀は、北辺・東辺では明瞭であるが、南辺においては不明瞭となる。しかし、南辺空堀部は、一部掘削確認しており、土塁も地形測量図で明らかなように、西



第72図 仁田城跡測量図

端まで存在が認められる。

なお、北辺の土塁・空堀は中央部で屈曲して作られており、横矢を意図したものと推測される。

入口については、明確にはいえないが、現在、道の通じる西辺か東辺にあったと推測されるが、さらに、背後に山のせまる東辺側の道は比較的新しいと考えられるので、入口は西辺にあったものであろう。なお、地形測量図にみられる東辺土塁中央部の道は後世の削平である。

調査は東辺空堀のほか空堀外側平端部についても行った。その範囲は小規模であるが、数個のピット並びに土壇を検出した。遺物等の細かな整理は今後行う予定であるが、鎌倉時代の掘立柱建物(東西2間×南北2間以上)と考えられるもの1棟と空堀に平行したピット列(柵列)を検出している。

出土遺物は、まだ未整理の段階であるが概略を述べてみると、鎌倉時代を中心とする瓦器の碗・皿・鍋、土師器の皿が多くみられる。また輸入陶磁器(青磁碗)や須恵器の甃・ねり鉢、土師器の皿がこの時代のもと思われる。その他、鎌倉時代のものとは比べて、その出土量は少ないが、弥生土器の小片・チャート剥片・中世以降の陶器のすり鉢(丹波焼?)・染付け片などや、近世以降の瓦類が出土した。

これらの遺物の多くは、空堀埋土より出土した。城跡の時代を決定する良好な遺物に恵まれていない。陶器のねり鉢片や染付け片がこの城跡とかかわってくるものと考えられる。現時点では、城跡の形状や文献などから戦国時代のもものと推定しておきたい。

空堀以外にも、先述の平坦地のピット群や土壇などから、鎌倉時代を中心とした遺物が出土した。このことは、鎌倉時代を中心とした時代においても、当地に人々が生活を営んでいたことを物語るもので、この生活跡を破壊して城を築造したものと思われる。

調査した空堀からは、近世以降の瓦類も出土した。この空堀は、掘削前、東半部が自然堆積のみでU字状に窪んでいたが、南半部は全く埋められていた。南半部は、この瓦類などが出土することから、近世以降に埋められたものと考えられる。

2. ま と め

以上、調査の概略をこれまで述べてきたが、今後更に整理を行い詳細は次期刊行予定の本報告にまわすことにし、今回は、当地域において精力的に中世城跡がまとめられている^(注10)『福知山市史』を参照して、当地周辺の様相を概観してまとめにかえたい。

仁田城跡周辺には、室町時代に築造されたと推定される城跡として、南から田野城跡(福岡城跡)、後青寺跡、大内城跡、仁田城跡が知られる。これらの城跡の位置関係は、大内城跡を中心に南約2kmに田野城跡、北500mに仁田城跡、南隣に後青寺跡と非常に近接した位置にある。

田野城跡は、土師川と竹田川合流点直前の、竹田川南岸の急な崖上に位置する。城域は、幅約40m、長さ約150mの広さで、東西に3つの郭が並ぶ。川に面した最西端の郭が「御居間屋敷」(『天田郡志資料』)と伝えられている主郭部と考えられている。東方に連なる二つの曲輪が「二ノ曲輪」・「三の曲輪」と推定されている。

『丹波志』の「古城部」には、「古城主兎ノ木縫殿介」がみえ、藤井善布氏は「兎ノ木」

が「小野木」の転訛と考えられることから、後に福知山城主となった小野木縫殿介重勝の一族と想定されている。さらに『丹波志』には、「悪右エ門(黒井城の荻野悪右衛門)ニ被亡、菩提寺ハ大内後青寺也」とあり、大内地区との関連が指摘できる。

大内城跡は、大内集落の東側丘陵上に位置し、通常「平城」と呼ばれていた所である。東西約400m、南北約200mの城域と推定される。城域の南と北は崖が切り立っており、東西に郭が並ぶ構造である。このうち、最も高い東端の郭が主郭部と推定され、西へ更に三つの腰曲輪が続くという広大なものである。主郭部とした郭は、東側に、三条の土塁と空堀を有するというものである。

この大内城は、主郭部については、1982年度から当センターが発掘調査を行っているが、平安時代末に築造され室町時代に今の姿となったと考えられる。館から城への変遷を考える上でも貴重な城跡である。平安時代、豊かな六人部荘を背景にした荘園関係の館跡に始まり、『丹波志』にある土豪級の「堀氏」の城館と変遷していったと推定されている。

後青寺跡は、『丹波志』に見える「後青寺」という寺院と推定されていたため、発掘調査が当センターにより実施された。しかし、寺院に関連する成果は得られず、結果としては大内城跡に隣接する戦乱時等の緊急時において立てこもった砦、または館跡と推定されている。『丹波志』にみえる「後青寺」はこの丘陵登口の平坦部に推定されている。

仁田城跡は、大内城跡から北へ約500mに所在する。調査の概略は先述したとおりであるが、『丹波志』には、「古主仁田城主和泉守」とあり、当地の土豪クラスの者と考えられる。さらに『丹波志』には、「長田村高橋ニ被討ト和泉守妻ハ大内村ニ逃ケ来リ弁天ノ前ニテ被討今ニ墓有陵墓ノ部ニ出ス」とあり、大内地区との何らかの関連、少なくとも敵対関係はなかったと思われる。

以上、文献等に若干みうけられる仁田城周辺城跡の記録をみると、すべて大内地区の記載があり、大内城との関連が推定される。竹田川・土師川東岸の集落範囲の中で、大内城を中心として、これらの城館の繋がりの可能性が指摘できるのではないか。しかし、土師川を経た対岸の多保市城と大内城との繋がりは、小地域の中でのまとまりにすぎず、一つの城を中心として支城網をはり巡らせていた地域に比べ、大きな力を有していたとは考えられない。

ただし、以上述べたことは、若干みられる文献資料をもとに推測を加えたにすぎず、発掘調査成果の検討は経ていない。今後、調査成果の検討を加え仁田城跡のみならず、これらの城跡の関連にも注目し検討を加えることも必要であろう。(藤原敏晃)

(4) 大内城跡下層遺跡

1. 調査の概要

大内城跡は、福知山市大字大内小字平城にあり、東から西へ延びる丘陵地を南北200m、東西400mにわたって城としたものである。この城跡は、東西に郭が並ぶ構造である。郭は3ないし4あると考えられ、東端のものが最も高い。この東端の郭を横断する形で、近畿自動車道舞鶴線が計画され、それに伴って当センターが昭和56・57年度に発掘調査を実施した。この調査によって、掘立柱建物跡9棟以上、井戸跡・柵列・土塁・空堀などの遺構が検出され、中国製陶磁器類をはじめ多量の土器類等が出土した。これらの遺構・遺物により、大内城跡は、平安時代末から室町時代末にかけて断続的に利用されたことがわかり、中世の城館を考える上で欠かすことのできない重要な遺跡であることが判明した。さらに、発掘地東北隅では、平安時代末から室町時代前半にかけて墓が営まれていたことが判明した。

この大内城跡遺構の下層の調査及び跨線橋取り付け部分を調査したが、今回は調査の関係上大内城跡下層遺跡の報告のみに留めたい。

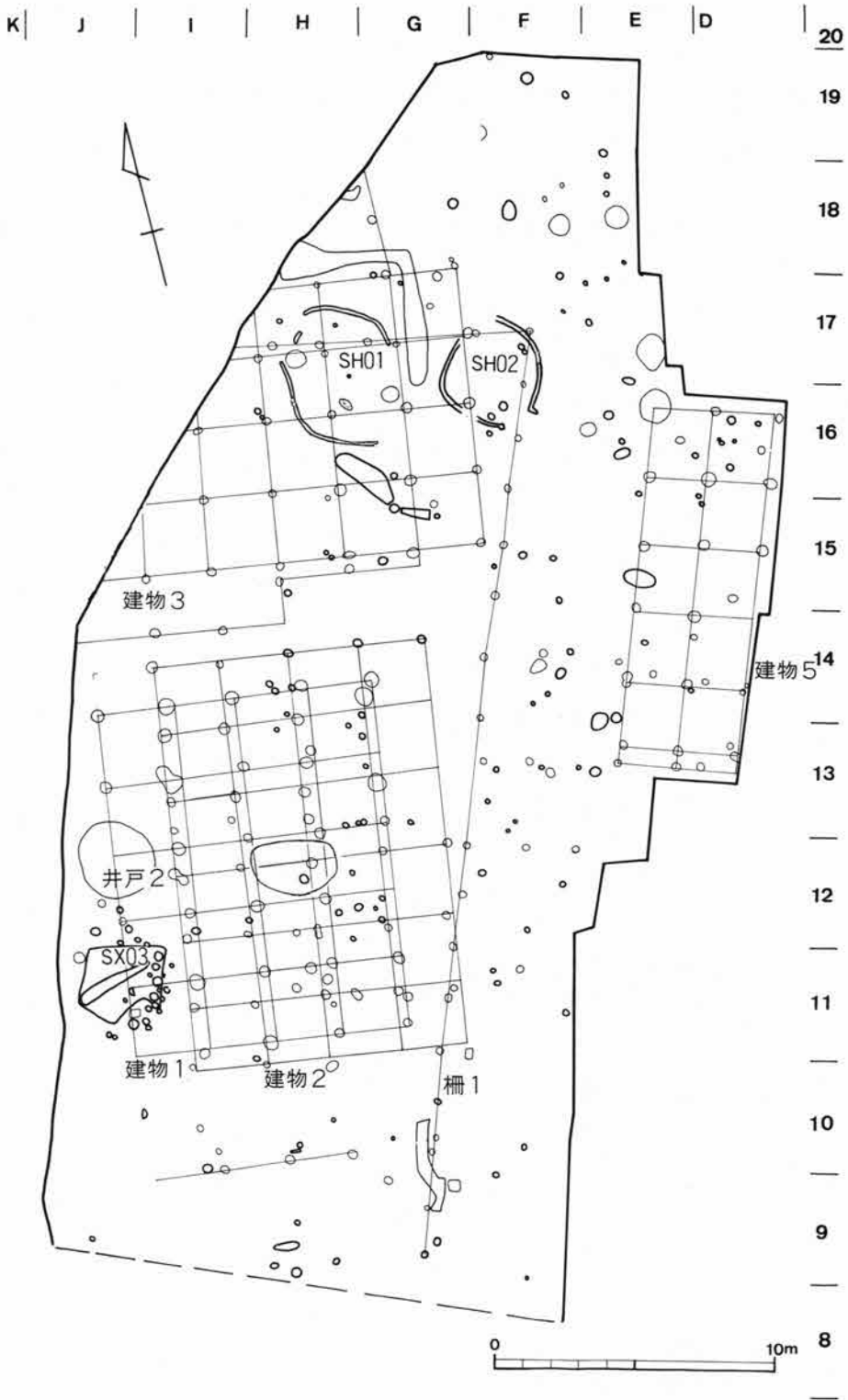
大内城跡下層の調査の結果、遺構の存在状況は良くなかったが、弥生時代の竪穴式住居の周溝部と平安時代末から鎌倉時代にかけてと考えられる柱穴、建物跡と推測される方形の窪地(SX03)などが検出された。以下主な遺構の概略を説明する。

SH01 南北に長い楕円状を呈した竪穴式住居跡である。幅約20cmの周溝のみが遺存したもので、南北径5.0m、東西径3.5mを測る。中央部南寄りに焼土を検出した。炉跡と考えられる。住居に伴う良好な遺物はないが、周辺で出土した遺物などから推定して、弥生時代中期のものと考えられる。

SH02 やや不正な円形を呈した竪穴式住居跡である。幅約20cmの周溝のみ検出した。径は3.5mを測る。焼土等は確認できなかった。SH01と同時代のものと推定しておきたい。

SX03 南北3m、東西2.5mのやや不整な方形を呈する。中央部を幅約50cmの溝が斜めに横切り、この溝に向かって床面が傾斜する。床面から瓦器・土師器の破片が出土しており、これらの遺物から、大内城跡の建物群と同時期のものであろう。北側にある井戸2との関連も考えられる建物跡と推定しておきたい。

その他、以上述べた遺構のほかに、多くの柱穴を検出した。これらのいくつかは、前回発掘調査で判明した掘立柱建物の柱穴となるものもあるが、その他は、性格が不明である。大内城跡にかかわる遺物以外に、弥生土器の破片が若干出土した。遺物は磨耗が激しく遺存状態は不良である。



第73図 大内城跡遺構配置図

ま と め

大内城跡は、平安時代末から南北朝期にかけての荘官クラスの館跡であり、鎌倉時代後期から室町時代末期に城として存在したことが確認されていた。今回の調査では、それ以前に弥生時代の集落跡があったことも判明した。

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の調査により、これまで、当地周辺では、弥生時代の集落跡は比較的まとまって確認されていた。宮遺跡・ケシケ谷遺跡、奥谷西遺跡などである。それに加えて今回大内城跡下層遺跡が加わったことになる。

これらの遺跡は、沖積地をみおろす台地上で、周辺の水田との比高差が20m前後あるという、同じような立地条件であり、広い意味での高地性集落ともいえるのである。これまでは、このことを重視して、まだ未調査である低地部に集落の存在を予想し、それに母村ともいえるものを想定して相互の関連を考えてきた。しかし、こうした一連の台地上に点々と集落が存在する状況を見ると、こうした立地条件が普通であったという視点においても考えていかなければならないのかもしれない。

なお、近畿自動車道舞鶴線建設に伴う福知山市多保市地区・宮地区・大内地区の発掘調査は今年度で終了し、これまで、その都度概要報告を刊行してきたが、今後はこれらの資料を総括的に整理し、報告書を刊行する予定である。
(藤原敏晃)

注1 『丹波の古墳Ⅰ—由良川流域の古墳』山城考古学研究会編 1983

『福知山市史』第1巻 福知山市史編さん委員会 1976

注2 堤圭三郎「宝蔵山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要 1967』京都府教育委員会) 1967

注3 注1と同じ

注4 樋口隆康「網野岡の三古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会) 1961

注5 堤圭三郎「岡4号墳発掘調査概要」(『網野町文化財調査報告』第1集 網野町教育委員会) 1977

注6 杉原和雄・三浦 到「新浜2・3号墳発掘調査概要」(『網野町文化財調査報告』第1集 網野町教育委員会) 1977年

注7 釋 龍雄『勝山古墳発掘調査報告』 1963

注8 注1と同じ

注9 青野遺跡、綾中遺跡、綾中廃寺などがある。

注10 『福知山市史』第2巻 福知山市史編さん委員会 1982

参 考 文 献

『福知山市史』第1巻 福知山市史編さん委員会 1976

『福知山市史』第2巻 福知山市史編さん委員会 1982

『日本城郭大系』11 新人物往来社 1980

7. 上中遺跡第3次発掘調査概要

1. はじめに

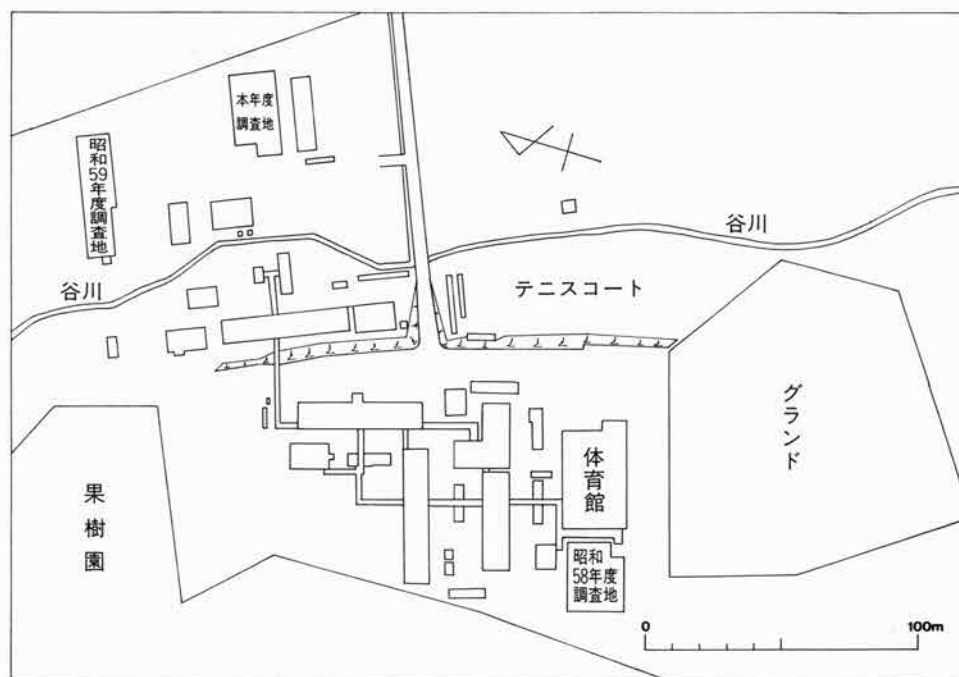
上中遺跡は、京都府北桑田郡京北町字下弓削から下中にかけて所在する。京都府立北桑田高等学校を中心に広がる遺跡である。今回の調査は、京都府教育委員会が、昭和60年度に林業科の校舎新築を計画したことによる事前発掘調査である。

京北町は、京都府の中央部に位置している。町の中央部である周山という地名が示す通り、標高1,000m未満の深い山々によって圍繞され、町内を貫流する大堰川(桂川)と、その支流である弓削川によって形成された山間の小盆地から成っている。この小盆地は、大堰川上流の山国地区、弓削川中流の弓削地区にもっともよく発達している。これらの盆地を中心に、町内には多くの遺跡が分布している。^(注1)

調査地は、弓削川により形成された小盆地のやや上流域の右岸に位置している。北桑田高等学校の立つ台地の周辺部にあたり、旧校舎跡地のため平坦化していた。学校周辺では、弥生時代前期・後期の土器片や半磨製石槍などの出土が知られており、また、ここより弓^(注2)



第74図 調査地位置図 (1/50,000)



第75図 調査対象地

削川をやや下った左岸の丘陵地からは、1861(文久元)年、下弓削出土と伝える銅鐸^(注3)(扁平鈕式袈裟摺文銅鐸)もあり、この地に銅鐸祭祀を行った人々が生活していたことが窺われる。そのほか、弥生時代の遺跡は、周山より大堰川を下った右岸の宇津小学校地内(宇津遺跡)^(注4)からも弥生時代後期の土器片やチャート製打製石鏃も発見されている。

古墳時代になると、調査地北西の丘陵上に鳥谷(6基)・ふくがなる(2基)古墳群が存在する。町内では前期古墳は未確認であるが、後期古墳を中心に中期古墳を含む総数120基にも及ぶ古墳が確認されている。その数は、大堰川水系では亀岡市に次いで多く、園部・八木町をしのいでいる。

上中遺跡の発掘調査は、今回で3度目になるが、昭和58年度に実施した合地上の格技場新築工事に伴う第1次調査^(注5)では、古墳時代前期の川跡・土壇・柱穴状掘り込み2か所を検出し、古墳時代前期～鎌倉時代にわたる遺物が出土している。

昭和59年度の林業科実習棟新築工事に伴う第2次調査^(注6)では、顕著な遺構は認められなかったが、自然流路と時期不明の溝2条を検出した。また、遺物もほとんど出土しなかったことから、この付近が上中遺跡の北端であろうと考えられた。この第2次調査と並行して行った周辺の遺物散布調査では、学校敷地内に3か所の遺物散布の濃密な部分が広範囲にわたり認められた。採集した遺物も、古墳時代前期～鎌倉時代にわたる。なかには、弥生

式土器の可能性のあるものや、縄文時代に比定される打製石鏃もあるが、縄文式土器が採集されなかったため可能性のみ指摘したい。

調査地は、第2次調査地より南東へ50mの位置にあたり、遺構及び遺跡地の範囲を知るうえで重要な位置を占めていた。

調査は、昭和60年5月13日から9月14日まで行い、当調査研究センター調査課主任調査員長谷川達・同調査員増田孝彦が担当した。その間、調査補助員・整理員^(注7)として有志学生の協力を受けた。また、調査にあたっては、京北町教育委員会、府立北桑田高等学校、地元各地区をはじめ多くの方々の協力^(注8)を得た。記して感謝の意にかえたい。

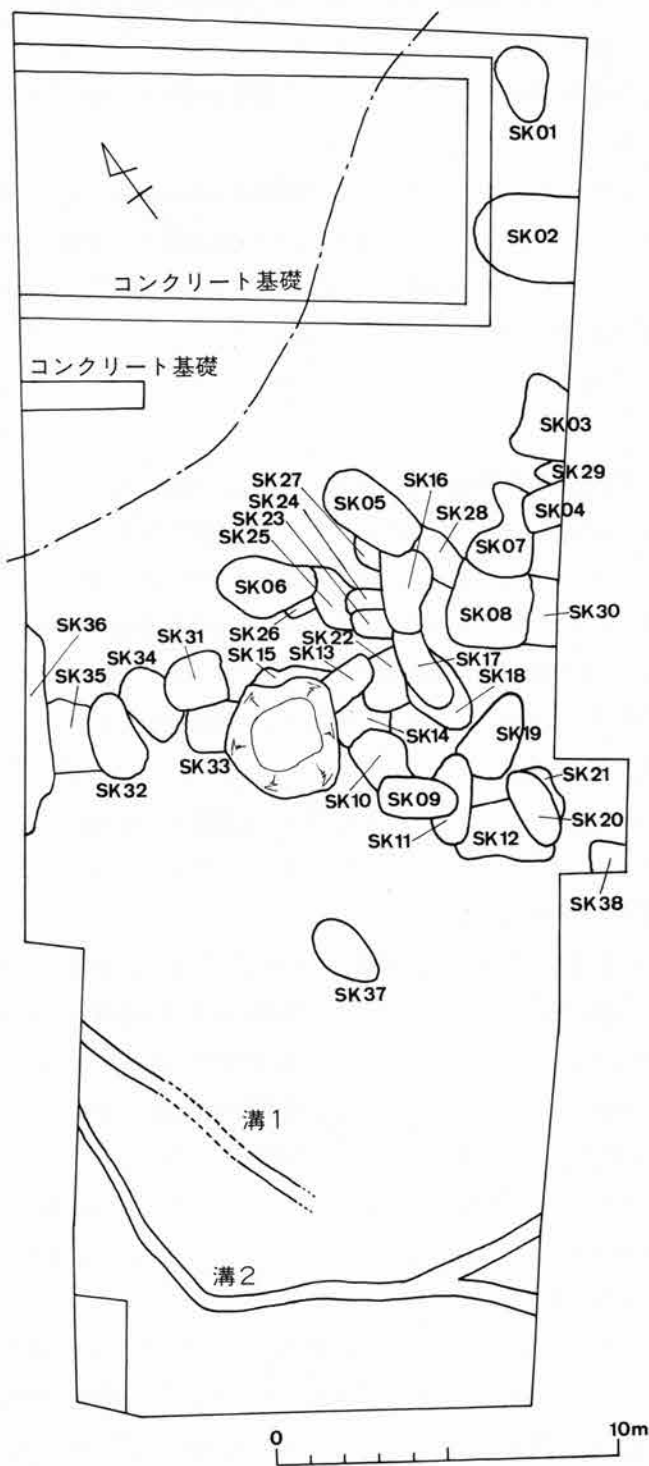
2. 調 査 概 要

調査は、林業科校舎新築予定地に40m×15mのトレンチを設定し、重機による表土の除去作業により開始した。旧校舎跡地ということもあり、トレンチ北東側にはコンクリート基礎が残存していた。このコンクリート基礎部分は、盛土がほとんどなく表土直下が地山面となっていたが、それ以外の部分では旧校舎建築に伴うと思われる盛土が調査地全体に、約20cm～45cm施されていた。これは現在、京都府立ゼミナールハウスが建つ調査地北東方にある丘陵が、もと旧校舎付近にまで延びていたものを削平し、校舎を建てたことによるものであり、本来はこの付近が丘陵裾部となる。

盛土を除去すると、トレンチ全体に畝跡をよく残した暗褐色の旧耕作土が現われたが、コンクリート基礎付近では認められなかった。この旧耕作土中からは、チャート剥片・土師器・須恵器片・土錘・瓦器・陶磁器片が出土した。

この旧耕作土を除去すると、部分的ではあるが黒褐色土の堆積が見られたため重機掘削から人力掘削へと切り替えた。黒褐色土は自然地形の傾斜が北から南下がりとなっているためそれに沿って約20cmの厚さを有していたがコンクリート基礎部分ではほとんど認められなかった。また、トレンチ中央よりやや南西寄りでは、途切れて消滅していた。これは旧耕作土の下部にさらにそれ以前の耕作土がありそれに伴い消滅したものと考えられる。この耕作土下面は、黒褐色土検出面より-45cmであり、低い段をもった段々畑状のものであったと思われ、磁器片や多量の細片化した瓦器片が出土している。この耕作土下面からは、砂を埋土とする南北方向から東西方向に延びる溝2条も検出した。

黒褐色土は、2次にわたる調査結果から、遺構検出面、遺物包含層であることが明らかであるため、精査を行ったところ灰白色・黄灰色粘土粒・塊を埋土とする土坩群37基(SK 01～37)が検出された。土坩群はその大半が切合い関係を有し、遺構検出面においては、各土坩上面に多量の土師器片が散乱していた。この黒褐色土上面に至ってからは、調査地

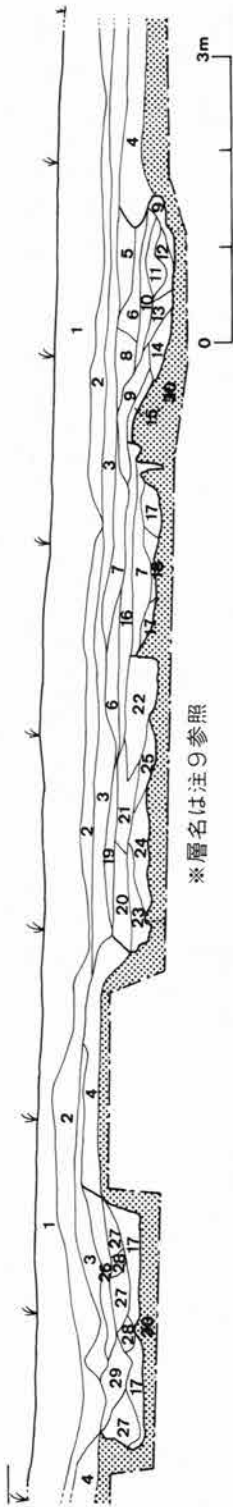


第76図 遺構平面図

が自然地形の谷筋近くにあることや、遺構面がトレンチ南側の谷川水面レベルに等しいことから湧水・滞水が著しくなった。そこで、トレンチ周囲に排水溝を設け水中ポンプにより排水を行いながら調査を実施することにした。

遺構は、トレンチ中央部を東西に縦断し、旧地形の山裾に沿った形で土壇群37基を検出した。トレンチ中央南西壁近くのSK20の掘削中に板材が出土し、その一部がトレンチ壁内に残るため、板材・土壇規模の確認のため、トレンチを南東側に2m×3.3m拡張した。その結果、板材は壁内にほとんど残っておらず、土壇自体の規模も約20cm広がることが判明した。その後、新たに拡張部分の南東角に1か所の土壇を検出したため(SK38)、土壇群の総検出数は38基となった。

土壇群の埋土中からは、古墳時代前期の土器が多



第77図 東壁断面図

数出土した。壺類は少なく、大半が甕であった。そのほとんどは細片化しており、一個体単位としてのまとまりのあるものは少なかった。

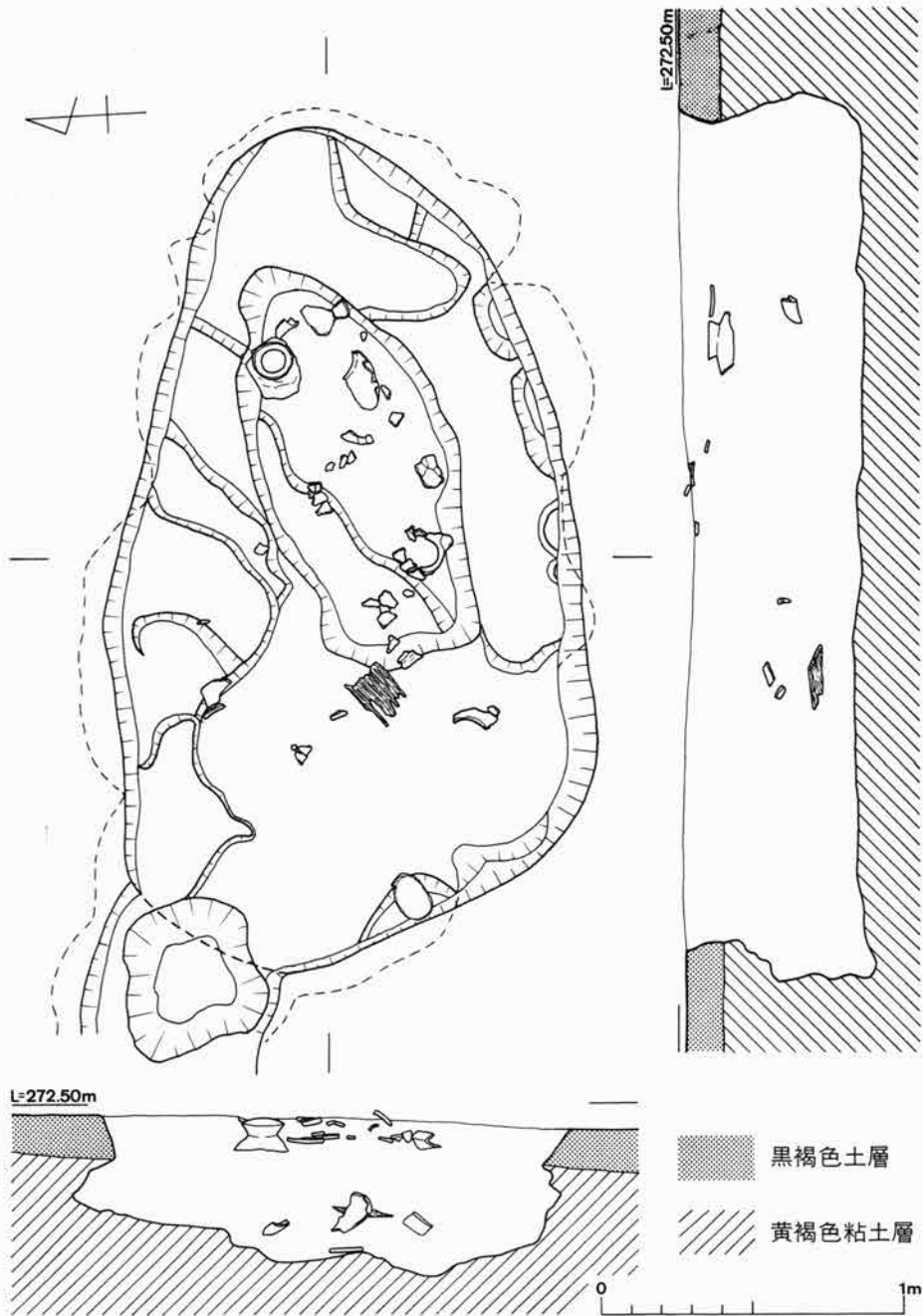
この土坑群は遺物を数多く含むこと、相互に切合い関係を有することなどから、当初は土坑墓と考えられたが、調査が進むにつれ土坑墓と判断するにはその要素に欠けてきた。土坑壁面が、遺構検出面である黒褐色土層のみ整然とし、その下層である地山部分が袋状に広がるという特異な形を成しており、底面も平坦な部分はほとんどみられず、凹凸が激しい形を成していた。このことは、ほとんどの土坑に共通していたが、一部、壁面・底面とも整然としたものも見られた。

なお、トレンチ南側の耕作土と思われる部分の断ち割りを行い、黄灰色・灰白色粘土の地山面まで精査を行ったが、遺構・遺物とも検出されなかった。

また、昭和59年度の第2次調査ではトレンチの約半分が氾濫原となっていたが、今回の調査地内では、トレンチの南西約6mの所に谷川があるにもかかわらず、氾濫の痕跡が認められなかった。谷川は本来さらに南西を流れていたものと推察される。

3. 検出遺構

土坑群(SK01~38) (第76・77・78図) 土坑群は、標高272.40m~272.70mの黒褐色土層上面よりその掘り込み上端を検出した。平面形は、不整形・楕円形・隅丸長方形を呈するが、全体的に長楕円形を成すものが多い。また、大半の土坑が相互に切合い関係を有しているため、その一部が消失してしまい当初の正確な規模が明らかでないものが多い。切合い関係を有さないものは、SK01・02・37のわずか3土坑のみである。深さについては、自然地形の傾斜が北から南下りであることや、旧校舎跡地ということもあり北西側に位置するものは浅く、南東側のものほど深くなっている。比較的原形を保つものによれば、その平均規模は長軸約2.4m、短軸約1.3m、



第78図 SK19 実測図

深さ約60cmを測る。主軸については、方向に規則性が見られず雑然としている。

各土壇埋土(第77図)は、地山が黄灰色・灰白色粘土であるため、これらの粘土と土壇検出面の黒褐色土の混合土から成っており、一気に埋まった様相を呈している。地山粘土は、

埋土各所に塊として見られるが、検出面においても縞状に粘土塊の広がりが見られた。土塚壁面は、検出面である黒褐色土層のみ整然とし、その下層である黄灰白・灰白色粘土の地山面に至っては、壁面が外側に袋状に広がっている。このことは、ほとんどの土塚に共通する特徴であるが、一部SK21・28・34などは袋状形態を成さず整然としている。その他、多数の切合い関係を有する部分でも、もっとも初期と思われる部分では、壁面は整然としているものもある。この袋状になる部分は、黒褐色土が入り込み、壁面は凹凸が激しく、棒状のものでえぐり取られたような形をしている。このえぐり取られた部分は、掘形よりも最大50cmも外側に出るものもあるが、平均約30cmである。袋状部分の壁面は、黄灰色粘土となっているが、本来この粘土層中にブロック状に存在している灰白色粘土がまったく見られなかった。底面についても同様であり、壁面が整然とするものについては平坦化しており、袋状になるものは凹凸が激しく、黄灰色粘土が底面となっている。このことから考えると、壁・底面が整然としないものは、ブロック状にある灰白色粘土を取り去ったためこのような形状になったと思われる。また、壁・底面とも整然とするものは、切合い関係が著しいため、土塚が一部しか残存しておらず、当初の形状をとどめておらず土塚全体が整然としていたかどうかは不明である。なお、この整然とする面はすべて黄灰色粘土となっている。

このような、特異な形状を成す土塚中から多くの土師器片が出土したが、これらは検出面から底面まで埋土中全体に認められた。大半の土器は、破碎されて小片化しているが、中には、1/2～1/3個体を単位としてある程度原形をとどめるものがある。各土塚により若干差が認められるが、土塚内中央より出土するものは、概して小破片が多く埋土中各所にみられる。一方、土塚壁・隅より出土するものは、底部を下にし体部下半を据えるもの(SK09)、口縁部を上にし体部上半を据えるもの(SK19・20)がある。また、各土塚とも底面より出土するものは、破片の大きなものや1個体単位のまとまりがみられる。特異な出土例として、土塚面に浅い凹みを設け比較的大形破片が数点置かれていたもの(SK08・31)もみられた。その他、SK19・20・37からは、部分的に残存する板材の一部が底面より出土したが、用途等は不明である。

溝1・2

トレンチ中央部より南側で検出したもので、溝1は途中で消滅するが、溝2は南北方向より延びてきたものが途中で屈曲し、トレンチ南東壁近くにおいて分岐するものである。初期耕作土下面より検出したものであるが、検出面での規模は、溝1・2とも幅約50cm・深さ約20cmで、内部埋土は淡褐色砂層であり、遺物はまったく出土していない。

この検出面の初期耕作土中には、多量の瓦器細片が出土していることから、中世に使用

されていた可能性が考えられる。同様な性格を有する溝は、林業科実習棟新築に伴う第2次調査でもほぼ南北方向から東西方向に延びる溝2条を検出している。いずれも遺物が出土しておらず時期は不明であるが、内部埋土が、砂・砂利層から成っていることや、その方向・本年度調査地と近接していることから同様のものと考えられる。現在の水田の区画方向と異にするため、初期耕作土の区画溝ではないかと推察される。

4. 出土遺物

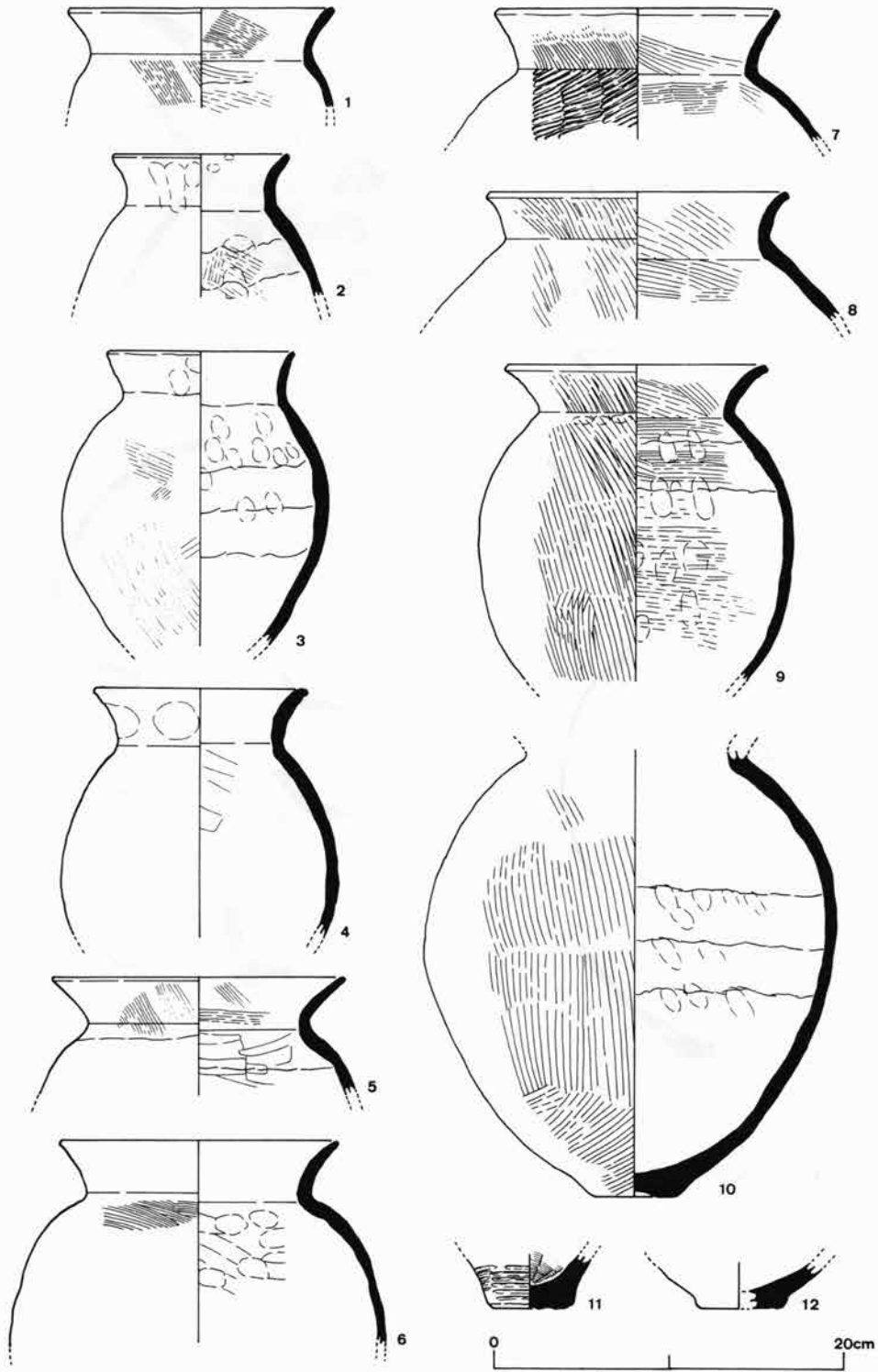
今回の調査で出土した遺物は、古墳時代前期の古式土師器・古墳時代終末期の須恵器・平安時代の須恵器等であるが、その大半は古式土師器である。その多くは細片化しており、1個体単位としてまとまりのあるものでも、磨耗が著しく器体全体を復元できるものがなく、図化できたものは少なかった。土坑内より出土した土器は、大半が甕であり壺類は極わずかである。遺構には伴わないが、旧耕作土中より土師器・瓦器・陶磁器が多量に出土しているが、ほとんど細片で図化できなかつた。また、黒褐色土中からは、わずかではあるが須恵器・土錘が出土している。

甕(第79・80図 1～18)

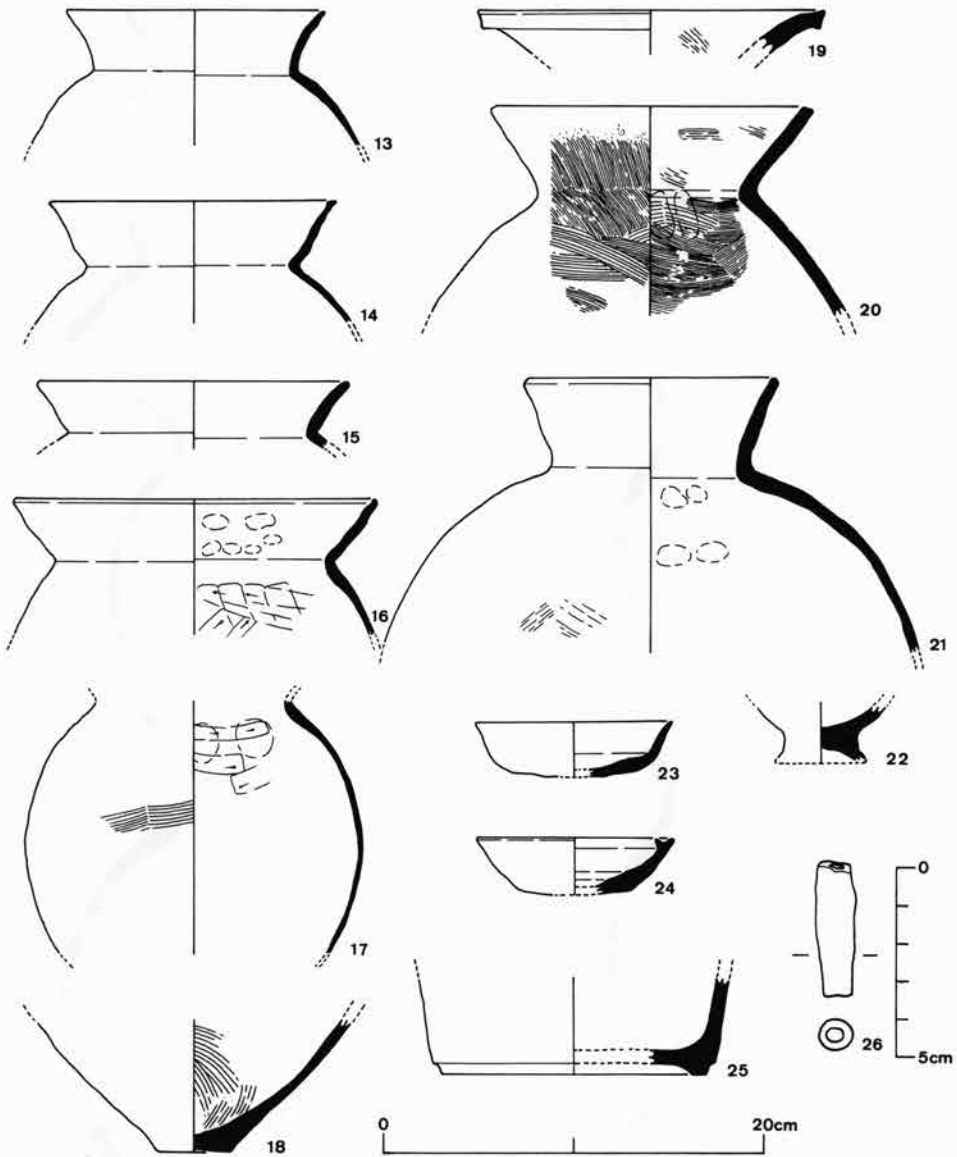
甕は、庄内系のものと(1～12)、布留系(13～18)とに2分される。(1～5)は、やや小型のもので、ゆるやかにカーブする頸部から外傾し、ほぼ直線的に外上方に延びる口頸部を有し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面は刷毛目を施すもの(1)、刷毛目後なで調整のもの(3)、なで調整のもの(2・4)とがある。内面は(1・2)には刷毛目調整がみられるがなで消されている。口縁部は、内外面とも横なでを施すもの、(1)は刷毛目もみられる。

(5～9)は、頸部はゆるやかに屈曲し、直線的に外上方にのび端部は丸くおさめる。体部外面は、斜め方向の刷毛目調整、内面は篋削りを施すもの(5・6)と、横方向の刷毛後なで消されているものがある(9)。口縁外面は、斜め刷毛目のもの(5・7～9)と、横なでのもの(6)があり、内面は斜め方向の刷毛目(5・7～9)と、横なでのもの(6)がある。(10)は、口縁部を欠くが、体部から底部にかけて粗刷毛が縦・横方向にみられる。また、(7)のように頸部から下方に畿内第V様式系統の連続螺旋叩きの手法をもつものもある。(11・12)は、これらの甕の底部と思われるもので、小型化し丸型化が進んでいる。(11)は、外面に叩き、内面には細かい刷毛目が残る。

(13～18)は、磨滅が著しいが、口縁端部の形状により、口縁端部が丸いもの(13・15)、口縁端部断面が三角形を成すもの(14)、端部内面に凹みをもつもの(16)に分類される。(16)は、体部内面は篋削り、(17)は、体部外面に一部刷毛目が残る、内面は篋削り痕がわずかに残る。(18)は、やや上底の底部で、内面には刷毛目が認められる。これらの甕は、同時



第79図 出土遺物実測図(1)



第80図 出土遺物実測図(2)

SK05(11・19)・SK06(16・17)・SK07(1・9・15)・SK08(3)・SK09(10)・SK12(5・18)・SK17(13)・SK19(7・20)・SK20(6・21)・SK24(14)・SK27(8・12)・SK28(2)・SK33(22)・SK34(4・22)・SK33(23~26)旧耕作土中

期のものと思われるが、器壁は3~4mmとかなり薄い。

壺(第80図 19~22)

(19)は、磨滅が著しいが、口縁部内面にわずかではあるが、斜め方向の刷毛目が残る。
(20・21)は、「く」字状に屈曲する頸部から、大きく外反する口縁部をもつもので、体部外

面には刷毛目が見られるが、(20)は、細かい刷毛と粗い刷毛が併用されており、内面にもそれが認められる。(22)は、台付壺の脚と思われるが、内外面とも磨滅が著しく調整等は不明である。

須恵器(第80図 23~25)

(23)は、やや丸く調整された底部をもち、内面には、自然釉が付着している。(24)は、たちあがり非常に退化したものである。(23・24)とも、口径10.4cm・器高2.9cmを測る。いずれも、7世紀中頃に比定されるものと思われる。

(25)は、底部のみの破片であるが、低い高台をもち、直線的にたちあがる。平安時代の所産と考えられよう。

土錘(第80図 26)

円筒形を成し、中央部はややふくらむ。成形は粗雑で、指による整形痕と考えられる凹凸が各所に見られる。全長3.6cm、径1.1cm、中央の孔は径4mmを測る。

5. ま と め

上中遺跡は、弥生時代から鎌倉時代に至り、南北約200m、東西約250m以上の範囲に広がる複合遺跡である。調査地は、旧校舎跡地であったにもかかわらず、古墳時代前期の土坑38基を検出したが、それらの性格を明確にすることはできなかった。可能性として考えられることは、その特異な形状からして粘土を採集した採土穴が推定されるが、土坑壁・底面とも整然としたものもことや、多量の土器が出土することなどからすれば、土坑墓としてあったところを、のちに採土穴として利用したとも考えられる。

3次にわたる調査と遺物散布調査によると、集落の中心は、現在学校施設のある台地及びその周辺に張り出した小台地を中心に広がるものと考えられるが、台地周辺部では、遺物の散布が希薄となっている。今回の調査結果からすれば、遺構面が現地表面よりもかなり下層にあり、遺物の散布が希薄な台地周辺部でも遺構が検出されることが明らかとなった。この土坑群は、さらに東西に延びており、今後学校改築を行う上で注意を要する。

調査で出土した土器類は、第1次調査に引きつづき京北町の歴史を研究する上で重要な遺跡であり、上中遺跡はその一つの指針となるもので、良好な資料を提供したといえる。

今後の調査に期待したい。

(増田孝彦)

注1 増田孝彦「上中遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注2 平良泰久ほか「周山瓦窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会) 1979

- 注3 辰馬考古資料館所蔵。梅原末治「下弓削発見の銅鐸」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第7冊 京都府) 1926
- 注4 『京北町誌』京北町誌編さん委員会 1974
- 注5 注1と同じ
- 注6 増田孝彦「上中遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第18号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注7 補助員 磯永和貴・鶴島三寿・細川康晴・藤井健介・佐伯英樹・福田正広
整理員 福田時子・吉田文子・川村つたゑ
- 注8 作業員 西 三次郎・市野卯三郎・津原 勇・竹内外夫・谷口岩吉・河原林啓治・草木小松
・鶴子三差子・牧ヒサエ・矢谷都え子・矢谷明代・勝山ユキ枝・畑段千鶴代・稲波
喜久恵・稲波みどり・矢谷由紀子
- 注9 1. 表土(旧校舎建設時の盛土) 2. 旧耕作土 3. 暗褐色土層 4. 黒褐色土層 5. 褐色粘
質土層 6. 淡褐色粘質土層(灰白色粘土混り) 7. 淡褐色粘質土層(灰褐色粘土混り) 8. 褐
色土層 9. 黒色土層 10. 淡褐色土層(少量の灰白色粘土混り) 11. 暗褐色土層(灰黄色粘
土混り) 12. 褐色粘土層(淡褐色土混り) 13. 暗褐色土層(少量の灰白色粘土混り) 14. 灰
褐色粘土層(暗褐色土混り) 15. 褐色粘質土層 16. 暗褐色粘質土層(黒色土含む) 17. 暗
黄褐色粘土層(黒色土がブロック状混る。袋状部分) 18. 暗褐色粘質土層(暗灰褐色粘土混
り) 19. 淡褐色粘質土層(灰白色・黄褐色土混り) 20. 黒褐色土層(少量の灰白色粘土混り)
21. 黒色土層(灰白色粘土塊含む) 22. 黒褐色土層(灰白色粘土混り) 23. 黒色土層(灰白
色粘土混り) 24. 淡黒褐色粘質土層(暗灰褐色粘土混り) 25. 褐色粘質土層(黄褐色粘土混
り) 26. 灰黄色粘土層 27. 淡黒褐色土層(黄褐色粘土混り) 28. 淡黒褐色土層 29. 暗
褐色粘質土層 30. 黄褐色粘土層(部分的に灰白色粘土を含む)・地山

8. 燈籠寺遺跡第3次発掘調査概要

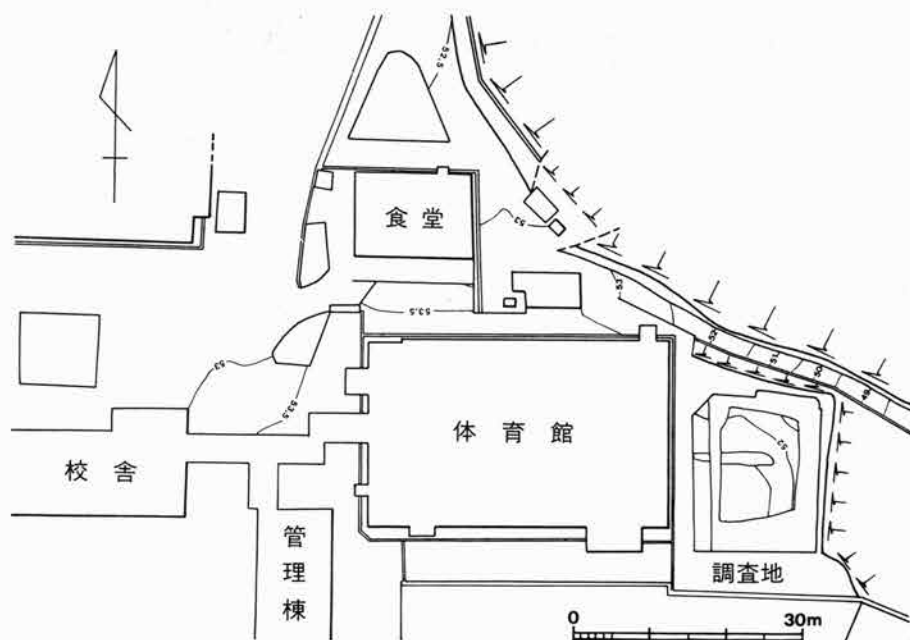
1. はじめに

燈籠寺遺跡は、京都府相楽郡木津町大字燈籠寺小字内田山に所在する。この遺跡は、日本国有鉄道関西本線「木津」駅の北東約700mの、標高50～60mの丘陵先端部に位置し、現在は京都府立木津高等学校校地として利用されている(第81図)。当丘陵は、北を木津川が東西に限り、南は東西に伸びる奈良山丘陵によって限られる。遺跡の範囲は、木津高等学校の全域を覆い、さらに北側の沖積平野に所在する燈籠寺廃寺に及ぶ。また、北西200mには奈良時代に平城京の外港として栄えた上津遺跡が、東では弥生時代から江戸時代にかけての遺物を散布する釜ヶ谷遺跡が接し、燈籠寺遺跡と重複する形で内田山古墳群が南へ広がる。^(注1)

当地域では、昭和33年に同校の農場造成の際に、弥生時代前期・後期の土器や、5世紀末～6世紀頃の古墳に伴うと考えられる埴輪・須恵器などが採取されている。^(注2) また、昭和55・59年度には、同校校舎の増改築工事に伴い発掘調査が実施されている。この調査では、5世紀前半から中頃にかけての古墳の周溝から円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪などが出土し、上層からは奈良時代の土師器・須恵器などが出土している。^(注3) また、昭和59年度の調査では江戸時代のものと考えられる池・井戸・井戸と池をつなぐ暗渠状水路が確認されて



第81図 調査地位置図



第82図 調査トレンチ位置図

いる。

今回の調査地は、昭和59年度に調査された東西棟の校舎より北東約70mにある武道場である。京都府教育庁管理課では当地に既存する武道場の老朽化に伴う増改築工事を計画し、同計画について京都府教育委員会で協議がなされた結果、当該する燈籠寺遺跡の範囲、性格等を明らかにするための発掘調査を実施することとなった(第82図)。

発掘調査は、昭和60年7月29日より同年10月8日までの約2か月にわたった。実施した発掘調査面積は380㎡である。調査は、当調査研究センターが主体となり、調査課主任調査員松井忠春・同調査員戸原和人が担当し、多くの調査補助員、整理員の援助を得た。^(注4)とりわけ木津高等学校からは絶大なる支援を賜った。また関係諸機関からも種々協力して頂いた。記して感謝の意を表します。なお、本報告は戸原が執筆した。

2. 調査経過

7月29日より現地入りし、着手準備のため、高等学校との打ち合わせを行った。夏期休暇中であるため、進入の予定をしているグラウンドでは終日クラブ活動のための生徒の出入が多く、調査地周囲には安全対策のためフェンスを設ける事、また、8日より重機・ダンプを導入するが、出入にはガードマンを立て、土砂はテニスコート南側に置くことなどをとり決めた。調査は現存する格技場の解体をまって、まず重機によって表土層及び攪乱

土の除去を行い、その後人力による精査に入った。当初は、整地層の面で遺構の検出に努めたが、攪乱土塚及び旧建物の基礎しか遺存しておらず、当地の基盤をなす大阪層群まで全面を掘り下げた。その結果、江戸時代と考えられる畑作に係る畝・溝・井戸などと動物を埋めた土塚を検出した。調査地の地区割は隣接する体育館の1辺を基準にし、3m毎の方眼割とし、レベルは絶対高で示した。また、方位は真北で示した。

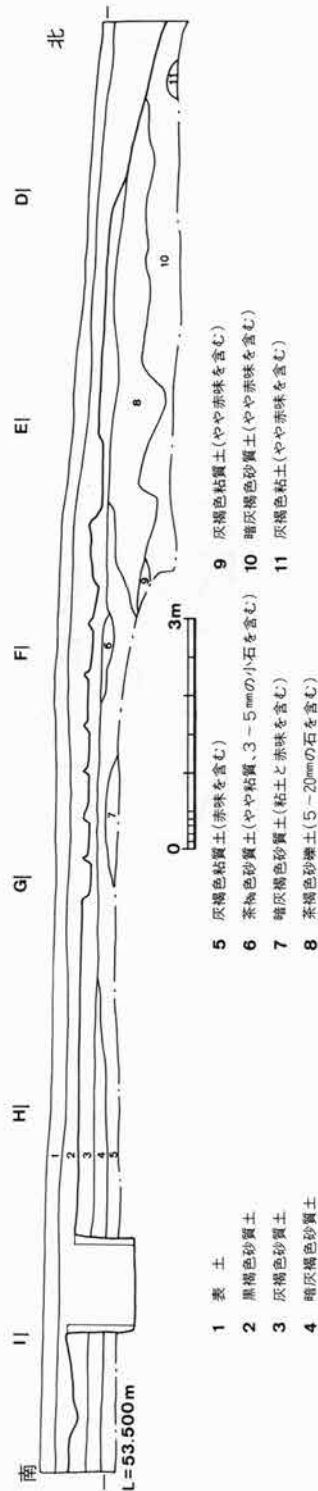
調査は機材の撤収をも含めて10月8日までに現地調査を終了した。

3. 層位(第83図)

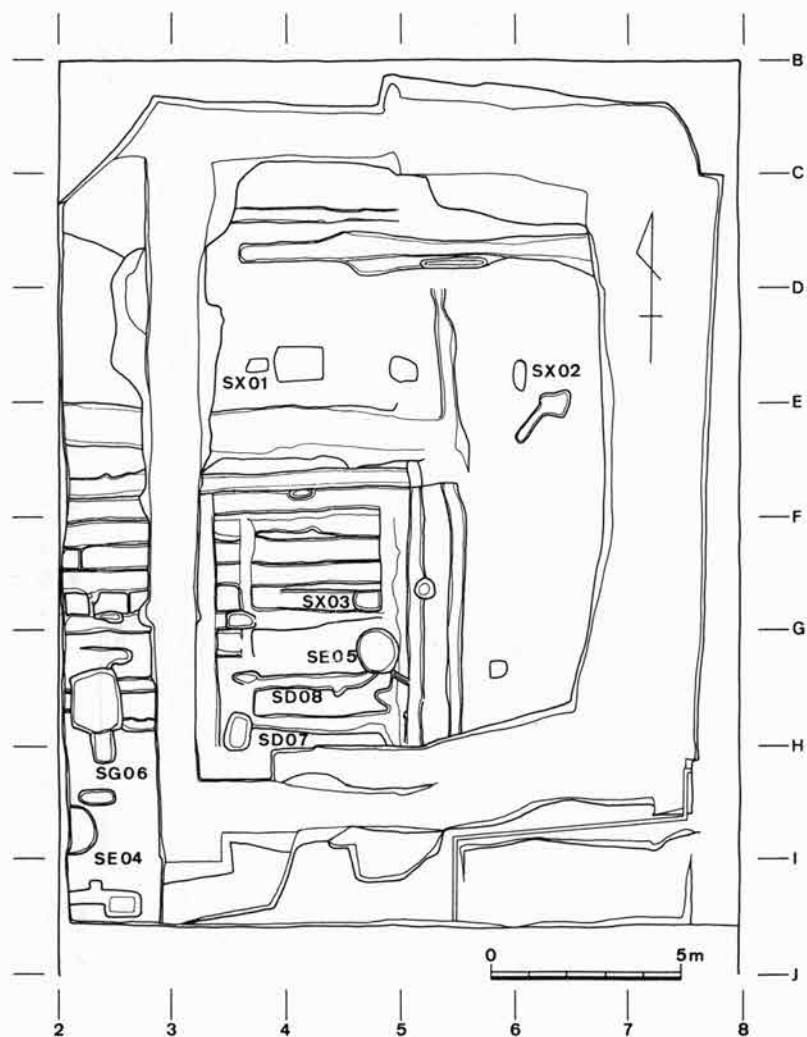
調査によって確認した層位は11層である。第1層は表土層で武道場建設時に埋まっており、何種類もの土によって構成されている。第2層は黒褐色砂質土で10~20cm堆積している。江戸時代からの畑作による耕作土である。第3層は灰褐色砂質土で、10~20cm堆積している。検出した遺構はみなこの層より掘り込まれており以下の層は大阪層群によって形成された地層であり、遺物も出土しない。第4層以下の地層は部分的なものもみとめられるが基本的に水平堆積の様相を呈している。

4. 検出遺構(第84・85・86図 図版第52・53)

今回の調査で検出した遺構は、畑の畝状遺構8条をE~F地区で東西に、溜池状遺構SG06を2G地区で、井戸SE04を2H地区、SE05を4G地区で、水路遺構SD07・08をG地区で東西に検出した。また、動物を埋納した土塚SX01を3D地区、SX02を6D地区、SX03を4F地区でそれぞれ検出した。その他にも数



第83図 調査トレンチ土層断面図(西壁・断ち割り)



第84図 調査地遺構平面図

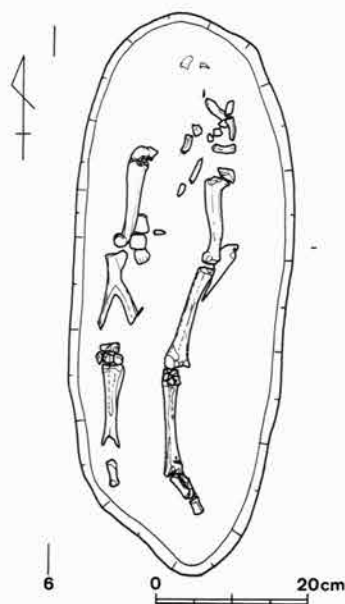
か所で溝状遺構や土壇を検出したが、埋土や検出時の状況から武道場建設時における攪乱であると判断した。畑の畝状遺構と考えられる遺構は、幅10~20cm・高さ5~10cmの高まりで、幾度にもわたり畝作りをした結果、削り残された部分がこのように形に基盤を残したものと判断した。それぞれの畝の間隔は約60cmで、東西7~8mにわたって検出した。溜池状遺構SG06は、東西1.3m・南北1.5m・深さ0.5mの規模で、南側に東西0.3m・南北0.5m・深さ0.3mの突出部が取り付く。池の底には桧皮が敷かれており、保水性を考慮して工夫したものと考えられる。また、池の西側では、水の導入口があり、幅約0.3mで両側に幅10~20cm・高さ10cmの堤がある。

水路(溝)は、いずれも溜池(SG06)から流れ出し、井戸(SE05)に流れ込むもの(SD08)と、

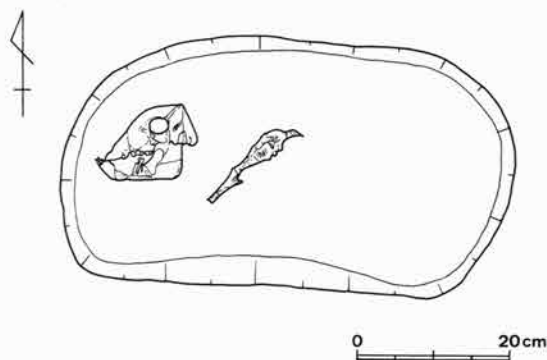
これに並行して東へ流れるもの(SD07)の2条を検出した。SD08は、幅0.6mを測り、SG06から井戸(SG05)に流れ込むまでの7.0mを検出した。SD08は、幅0.4~0.6mを測り、7.1mにわたって検出した。

井戸SE04は、直径1.28mの円形を呈し、深さ0.9mを測る。調査地内で全体の半分を検出した。井戸内面には漆喰を塗っている。昭和59年度の調査でも同様の井戸を検出しており、丘陵上での土地利用の広がりと考えられる。

SE05は、直径1.1m・深さ1.8mを測る素掘りの井戸である。地下水の湧出しはなく、溝SD08よりの水を溜めたものと考えられる。また、井戸の南東には幅10cm・深さ10cmの細い溝があり、あるいは排水用の溝であったと考えられる。



第85図 土坑SX02実測図



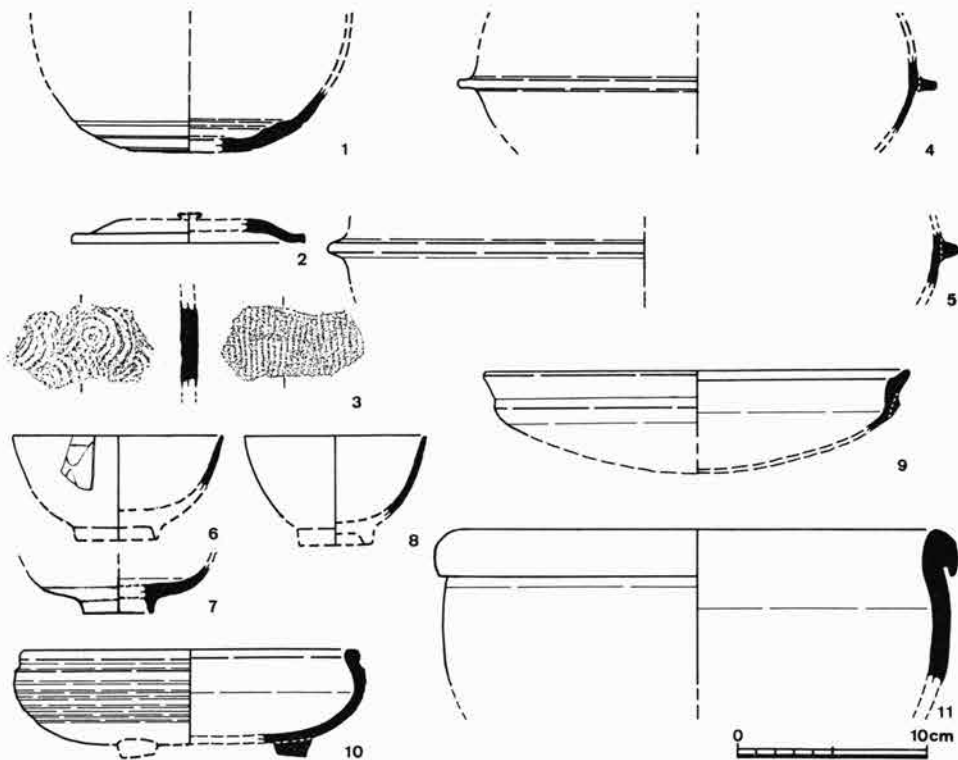
第86図 土坑SX01実測図

動物を埋納した土坑SX01は、東西0.6m・南北0.3m・深さ0.1mを測り、平面楕円形を呈す。土坑内より出土した獣骨は、頭蓋骨と脊椎骨の一部で、肢骨や肋骨等は出土しなかった。SX02は、東西0.3m・南北0.7m・深さ5cmを測り、平面長楕円形を呈す。全体に削平をうけており本来は北にさらに広がるものと考えられる。土坑内より後肢骨を出土した。SX03は、東西0.7m・南北0.5m・深さ0.2mを測り、平面隅丸長方形を呈す。土坑内より肋骨を集めた形で出土した。

5. 出土遺物(第87図)

今回の調査で出土した遺物は、土器・陶器・獣骨である。土器には古墳時代の須恵器壺(1)、奈良時代の須恵器杯蓋(2)、甕腹(3)、室町時代末の土師質羽釜(4・5)、江戸時代の炮烙(9)などがある。陶器には江戸時代の伊万里系碗(6・7・8)、江戸時代以降の軟質陶器(10)、陶製甕(11)などがある。

獣骨は、SX01出土のものが頭蓋の形状によりうさぎ、SX02出土



第87図 出土遺物実測図

のものが指骨の形状により有蹄類と考えられる。SX03の出土の獣骨は判別しえなかった。

この他の出土遺物として埴輪片、須恵器片などがあったが、いずれも細片のためここに図示し得なかった。

6. ま と め

今回の調査で検出した遺構は、近世以降の畑作に関連する畝や水利遺構が主なもので、出土遺物の中にある古墳時代や奈良時代に関するものは検出されなかった。検出した遺構の内、SE03とSX01・02・03は、埋土の状況によりその他の遺構よりさらに新しい時期に形成されたものと考えられる。

木津高等学校の校舎が建ち並ぶこの丘陵地は、古図によると「畑(ハタ)」という字名があり、近世には畑として利用されていた事がうかがえる。当丘陵の東側、釜ヶ谷の調査においても17世紀後半より耕地の拡大がみられ、^(註5)当地域での開発がこの時期に活発になっていた事がわかる。

(戸原和人)

- 注1 『京都府遺跡地図』(第2版) 京都府教育委員会編 1985
- 注2 『木津町史』史料編I 木津町史編さん委員会 1984
- 注3 大槻真純「内田山古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
松井忠春・小山雅人・戸原和人「燈籠寺遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注4 調査補助員 石原 順・小住寛二・川本 英・滋井雅章・中塚 等・前田 寛
整 理 員 林 恵子・柳沢洋子
- 注5 松井忠春・小山雅人・戸原和人・黒坪一樹「木津地区所在遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

9. 長岡京跡右京第193次発掘調査概要

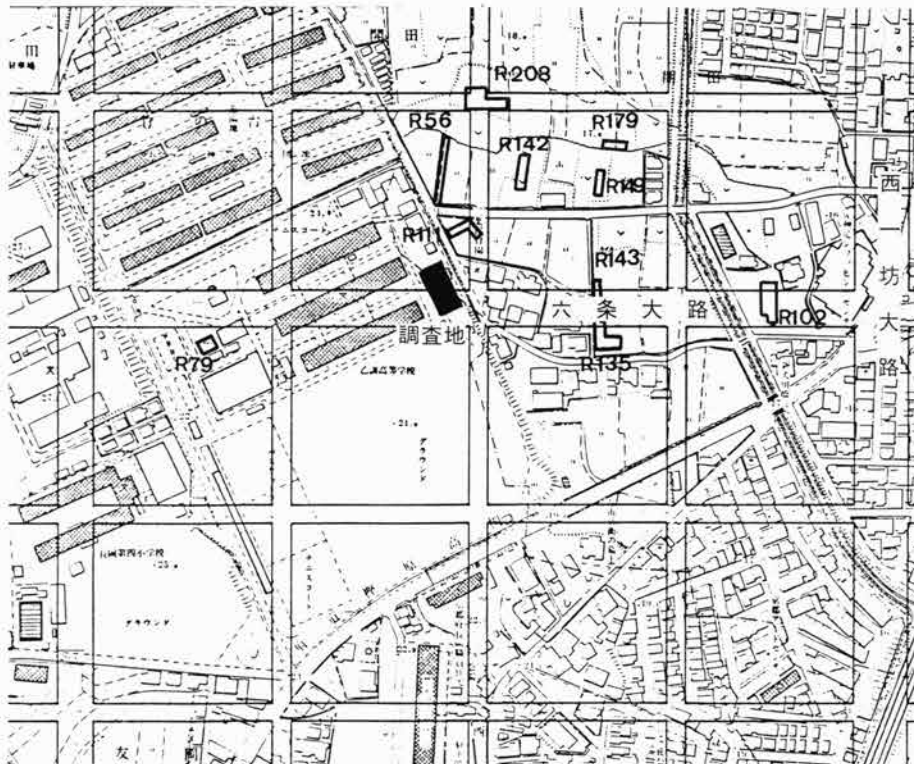
(7ANNKN-2地区)

1. はじめに

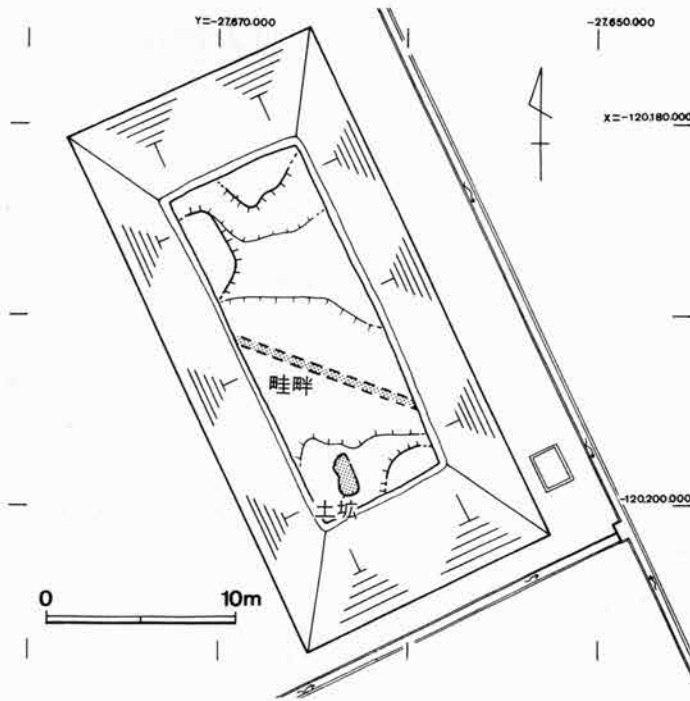
この調査は、京都府長岡京市友岡一丁目1-1に所在する、京都府立乙訓高等学校の校舎新築工事に伴う事前調査である。

調査地は、長岡京条坊復元図によれば、高校敷地の中央東端部で、右京六条二坊十二町に相当し、六条大路北側溝が推定される地点に位置する。このため、府教育委員会管理課、文化財保護課と協議した結果、発掘調査を実施することになった。

調査地と東側道路および水田面とは3m以上の比高差がある。これは、乙訓高校がその前身である長岡競馬場造成時に、西側の段丘を削平し東側に盛土したためであろう。競馬場造成以前、教室棟付近が谷状の地形であったことが古い地形図等から知ることができる。^(注1)
 周辺の調査として次のものがある。西方150mの右京第79次調査では、競馬場のコンクリー



第88図 調査地位置図 (1/5,000)



第89図 調査地平面図

ト製の溝と土塚を検出したのみで、乙訓高校敷地の西半分はかなり削平を受けいていることが判明している。東方約200m^(注2)の右京第102次調査では、長岡京期の木簡等遺物が出土した東西溝等が検出されている。東方約100m^(注3)の右京135次調査では、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列跡等が検出されている。また、北東部の調査でも、長岡京期の井

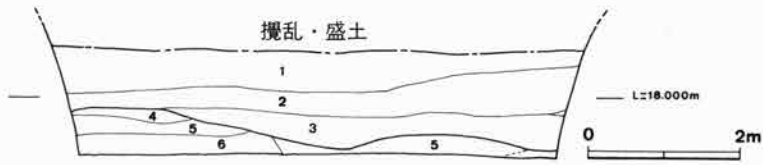
戸跡・中世の井戸跡をはじめ、古墳時代～中・近世の遺構・遺物等各時期のものがある。これらのことから、削平を受けていない場所では、長岡京期～中・近世の遺構が残っていることが予想された。

現地調査は、昭和60年7月5日に開始し、8月22日に終了した。調査にあたって、乙訓高等学校、長岡京市教育委員会、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、長岡京跡発掘調査研究所の御協力を得た。また、現地調査、図面・遺物整理には、学生諸氏等^(注4)の参加・協力があつた。記して謝意を表したい。

2. 調査概要

現地調査は、調査対象地に30m×14mの長方形のトレンチを設定し、コンクリートおよび盛土層を重機で掘削することから開始した。盛土層が厚く3～3.5mあり、湧水による土砂の崩落を防ぐため二段に掘り下げた。盛土層の下は、北部が旧水田の耕作土・床土、その下が褐色・暗褐色・黄褐色の砂礫土層となり、南西部では耕作土等は見られない。トレンチ中央部で競馬場造成以前の水田畦畔を検出した。この畦畔より北側が水田として利用されていたことが判明した。トレンチ南西部の砂礫を含んだ黄褐色土層面で、砂礫を含ん

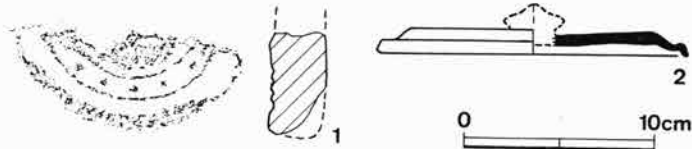
だ黒褐色土の
長さ約2m、
幅1m前後、
深さ20～40
cmの土坑を
検出したが、
遺物はほとん



第90図 南壁土層断面図

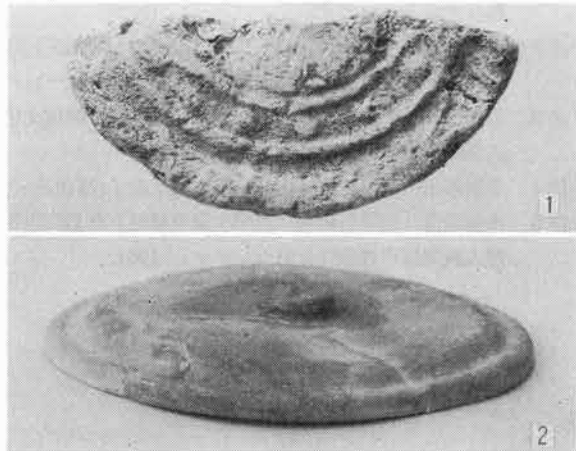
1. 暗褐色砂礫層 2. 黄褐色砂礫層 3. 灰褐色砂礫層
4. 黄褐色砂質土 5. 暗黄褐色砂質土 6. 5.に同じ(黒褐色粒含む)

ど見られない。この
ため、排水路兼用の
断ち割りを入れたと
ころ、北方で黄色粘



第91図 出土遺物実測図・拓影

土層、南で黄褐色・暗黄褐色
砂質土層が見つかった。黄色
粘土層は、固く締まってお
り「地山」面とおもわれる。この
黄色粘土層を削り込むように
して、自然流路とおもわれる
溝状の凹みがみられる。また、
黄色粘土層と黄褐色砂質土層
の間にも幅5～6mの自然流路
が東西方向にはしり、南端の
黄褐色・暗黄褐色砂質土層は、
南東から西および北へ向かっ



第92図 出土遺物
1. 軒瓦 2. 須恵器蓋

て下がっている。自然流路の堆積状況から、流路の変遷をうかがうことができる。

出土遺物には、軒丸瓦・平瓦・須恵器・土師器・陶磁器などがある。ほとんどが、砂礫を含む褐色土・暗褐色土・黄褐色土から出土した。軒丸瓦(図91-(1), 図92-(1))は、瓦当中心部の摩滅が著しいため形式等が明確ではないが、平安時代のものとおもわれる。須恵器蓋(図91-(2), 図92-(2))は、端部が屈曲するもので、長岡京期に多い。いずれも二次的な堆積によるものである。

3. おわりに

今回の調査では、競馬場造成以前の土坑・水田畦畔および自然流路が検出されたのみである。検出目標であった六条大路は、右京第96次調査で検出された五条大路の中軸線(X = -119,690.78)から割付けると、この調査地より20m以上南にあたることから、今回は検出されなかった。調査と平行して実施された下水管埋設工事における断面観察で次のことが得られた。教室棟の西端は、表土層直下が固く締まった粘質土と砂礫の互層の「地山」となる。中央部では地表下80cmまで盛土層があり、耕作土・床土の下に土師器片等が包含された暗褐色土層が認められた。削平を受けていない校地の東側では、遺構の検出に期待が持てる。(石尾政信)

- 注1 山口 博「長岡京跡右京第79次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第3冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注2 岩崎 誠「右京第102次調査略報(7ANMMK地区)」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和57年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1983
- 注3 岩崎 誠「右京第135次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和58年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1984
- 注4 古賀達也・片岡利広・山尾 撰・高木叙子(補助員・整理員)
- 注5 木村泰彦「長岡京跡右京第96次調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第1集』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1984

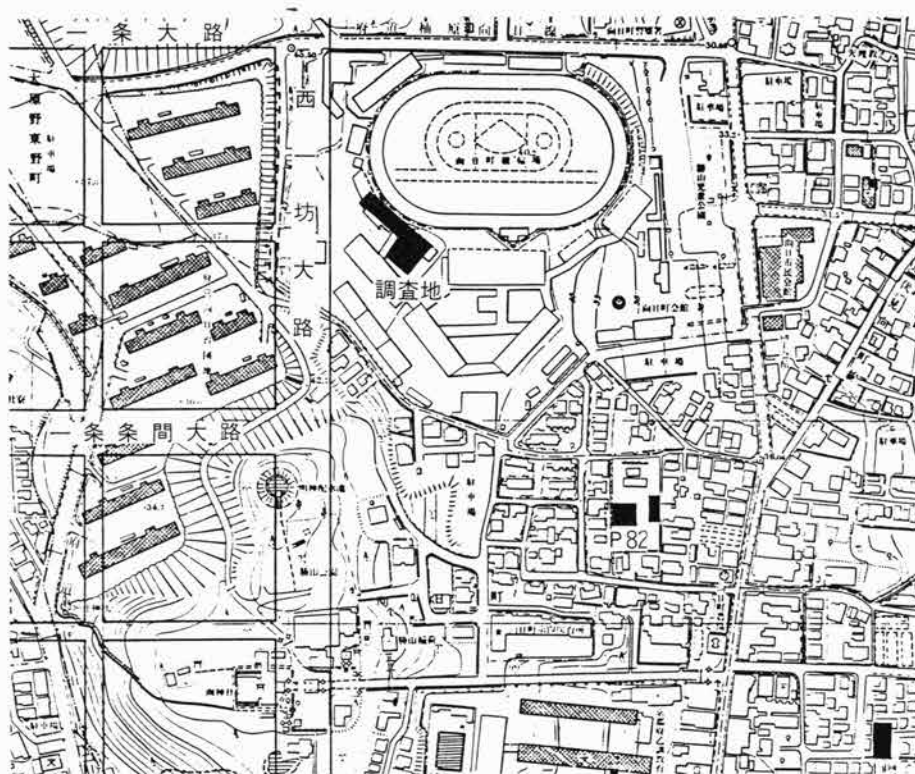
10. 長岡宮跡第164次発掘調査概要

(7AN18B地区)

1. はじめに

この調査は、向日市寺戸町西ノ段・天狗塚に所在する向日町競輪場の改修工事に伴うものである。新スタンド兼投票所建設予定地の約650m²を、昭和60年9月2日から掘削を開始し、11月2日まで現地調査を実施した。

調査地は、長岡宮域の西端で南一条第一小路の延長上にあつて、西方官衙地区の北方で平安宮の右近衛府にあたる。また、天狗塚という小字名が残っていることから古墳との関連も指摘されている。向日丘陵の稜線が調査地の西側を南北にはしり、元稻荷古墳のある丘陵最高地(標高60m)とは約18mの比高差がある。調査地周辺が、競輪場が造られる以前は竹藪であったことが旧地形図(大正11年京都市発行)からわかる。競輪場の造成によって



第93図 調査地位置図 (1/5,000)

旧地形はかなり改変されていると予想された。

周辺の調査として南東約200mで宮内第82次調査^(注1)があり、この調査で正殿級の南北に廂を持つ東西方向の礎石建物1棟、その東側で脇殿と推定される南北方向の建物が検出されている。また、宮内第82次調査地の西からも軒瓦が発見されている。

現地調査は、当調査研究センター調査課・主任調査員辻本和美・同調査員石尾政信が担当した。また、調査補助員・整理員として有志学生の参加^(注2)・協力があった。発掘調査全般にわたって長岡京跡発掘調査研究所・京都文教短期大学教授中山修一氏の御指導を受け、向日市教育委員会・財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの援助をいただいた。記して謝意を表したい。

なお、現地測量にあたって向日市教育委員会が設置した長岡京基準点56・5・56-11を使用し、平面図は国土座標で示した。水準測量は京都府水準点 No.4 を使用した。

2. 調査経過・概要

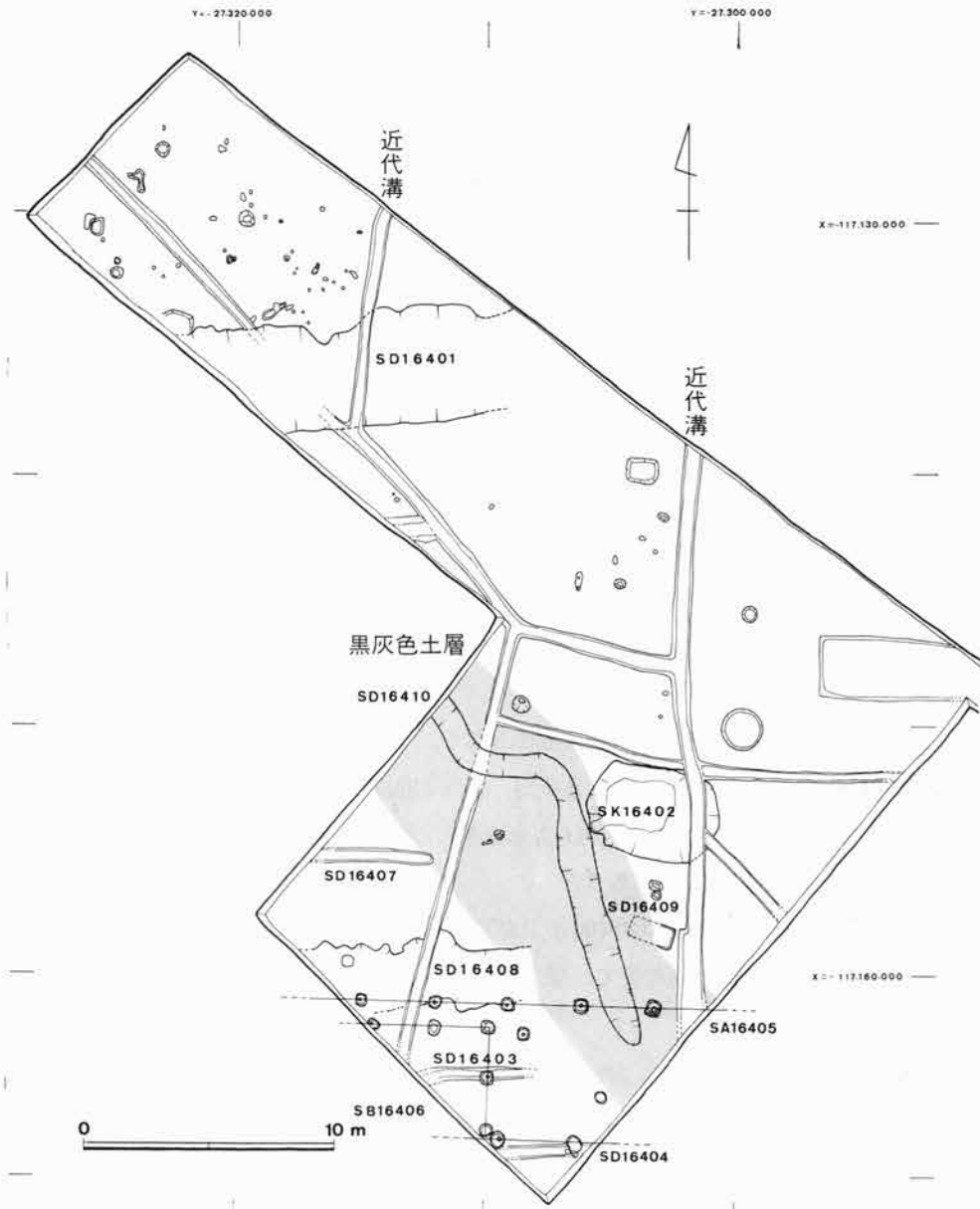
調査地は、向日町競輪場の西方に位置し、現在の標高はおよそ42～43mである。旧地形の改変が予想されたため、最も被害の少ないとおもわれる調査地東端に、走路と平行して幅10mのトレンチをL字形に設定し掘削を開始した。基本層序は、攪乱・盛土層の下にかつて竹藪であった頃の客土があり、厚い部分は1m以上ある。竹藪客土の下は、黄褐色土層および砂礫層となるが、西南部では長岡宮整地層・遺物包含層がある。

掘削した結果、トレンチ全域を縦横にはしる近代溝、東西方向の溝(SD16401)、西南部で楕円形の土坑(SK16402)と炭を大量に含んだ黒灰色土・暗灰褐色土(整地層)の広がりを検出した。黒灰色土層の上面から多量の遺物が出土したので、西南部の拡張を行った。拡張部分から柵列(SA16405)および掘立柱建物跡(SB16406)とこれに伴う雨落ち溝(SD16408)、および東西方向の溝(SD16403・04・07)を検出した。黒灰色土・暗灰褐色土層は、北西から南東にのびる蛇行した溝(SD16410)と、その周辺の傾斜面に堆積していることが判明した。黒灰色土層の北東・土坑周辺には、ほぼ同時期堆積したと考えられる赤褐色土層が広がり、土坑の南で緑釉唾壺の出土した方形を呈する土坑(SK16409)を検出した。

3. 検出遺構

この調査で検出した遺構には、近世～近代の地境溝・土坑、長岡京期の東西溝・掘立柱建物跡・土坑などがある。長岡京期以前の遺構・遺物は見つかっていない。以下に主要遺構について簡単に記す。

S D 16401 幅4～4.5mの東西方向の素掘り溝である。溝底は東から西に向かって深く

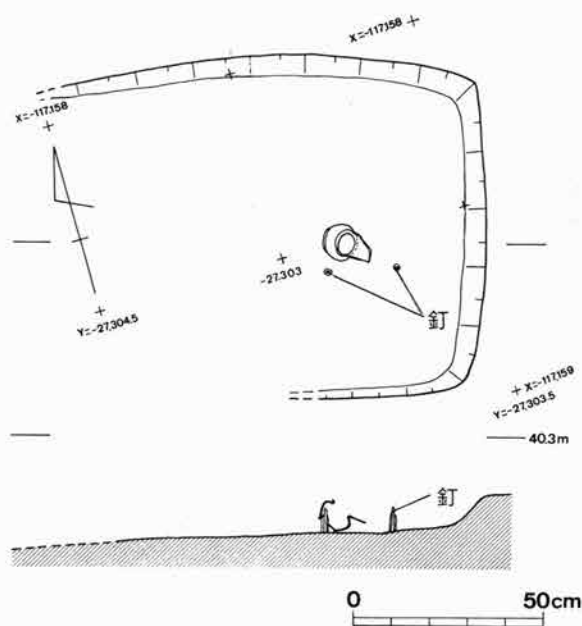


第94図 調査地平面図

なり、東端は不明瞭となる。西端の最も深い所は約0.7mある。溝の下層から長岡京期の遺物が出土した。宮内地境溝の可能性が高い。

SK16402 東西方向の素掘りの楕円形土壇で、長径5.3m・短径3.7m・深さ0.7mある。土壇の埋土は、赤褐色土・暗赤褐色土で、長岡京期の遺物が出土した。

SA16405 全体規模は不明であるが、東西方向に5か所の柱掘形が並ぶ東西4間以上



第95図 SK16409平面図・立面図

の柵列とおもわれる。柱掘形は一辺40~60cmの隅丸方形を呈し、径15~20cmの柱痕跡がある。柱間は10尺(2.95m)等間である。柱列東端の柱掘形の中央およびこれを囲むように径20cm前後の河原石が置かれていた。柱を安定させるためであろう。また、東方2か所の柱掘形は、黒灰色土層から掘り込まれている。柱掘形のひとつから墨書土器が出土した。この柵列から西にわずかにずれるが、南に5.4mの位置に東西2か所の柱掘形があり、柱掘形の規模・柱間は柵列と同

様である。両者を合せると建物跡の可能性もある。

SB16406 これも全体は不明であるが、東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物跡である。柱掘形は一辺50~60cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡の残るものもある。柱間は東西8尺(2.4m)、南北7尺(2.1m)ある。

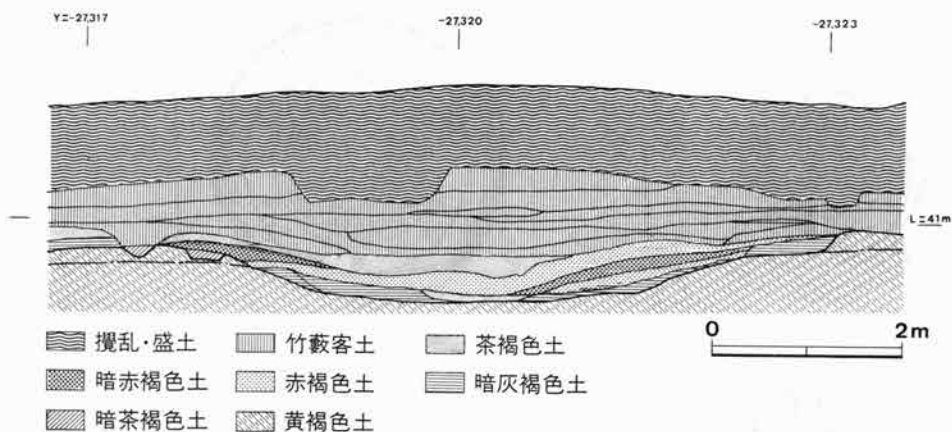
SD16408 掘立柱建物跡SB16406の北側雨落ち溝とおもわれる。溝の東端および南側は不明瞭であるが、幅1.5m前後で、深さ15~20cmある。溝中より緑釉陶器・軒瓦等の長岡京期の遺物が出土した。

SK16409 土坑SK16402の南で検出した幅0.9m、長さ1m以上、深さ0.1m前後の土坑である。西端は黒灰色土の下になり、埋土はSK16402と同じ赤褐色土である。土坑の中から横転した緑釉唾壺が出土した。唾壺に隣接して、直立した釘が頭部を下にした状態で出土したことから、木櫃状のものに入っていた可能性を考えることができる。

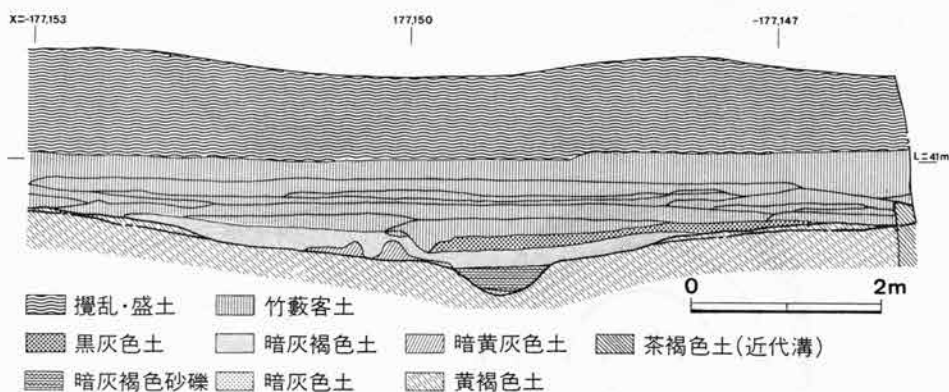
溝SD16403・04・07は、幅60cm前後のほぼ東西方向にはしる。SD16403・04は、SB16406等の柱掘形を切っていることから、長岡京期以後のものであろう。遺物はほとんど出土していない。

4. 出土遺物

この調査で出土した遺物には、近世~近代の陶磁器・瓦類、長岡京期の須恵器・土師器



第96図 溝SD16401およびAトレンチ西壁土層



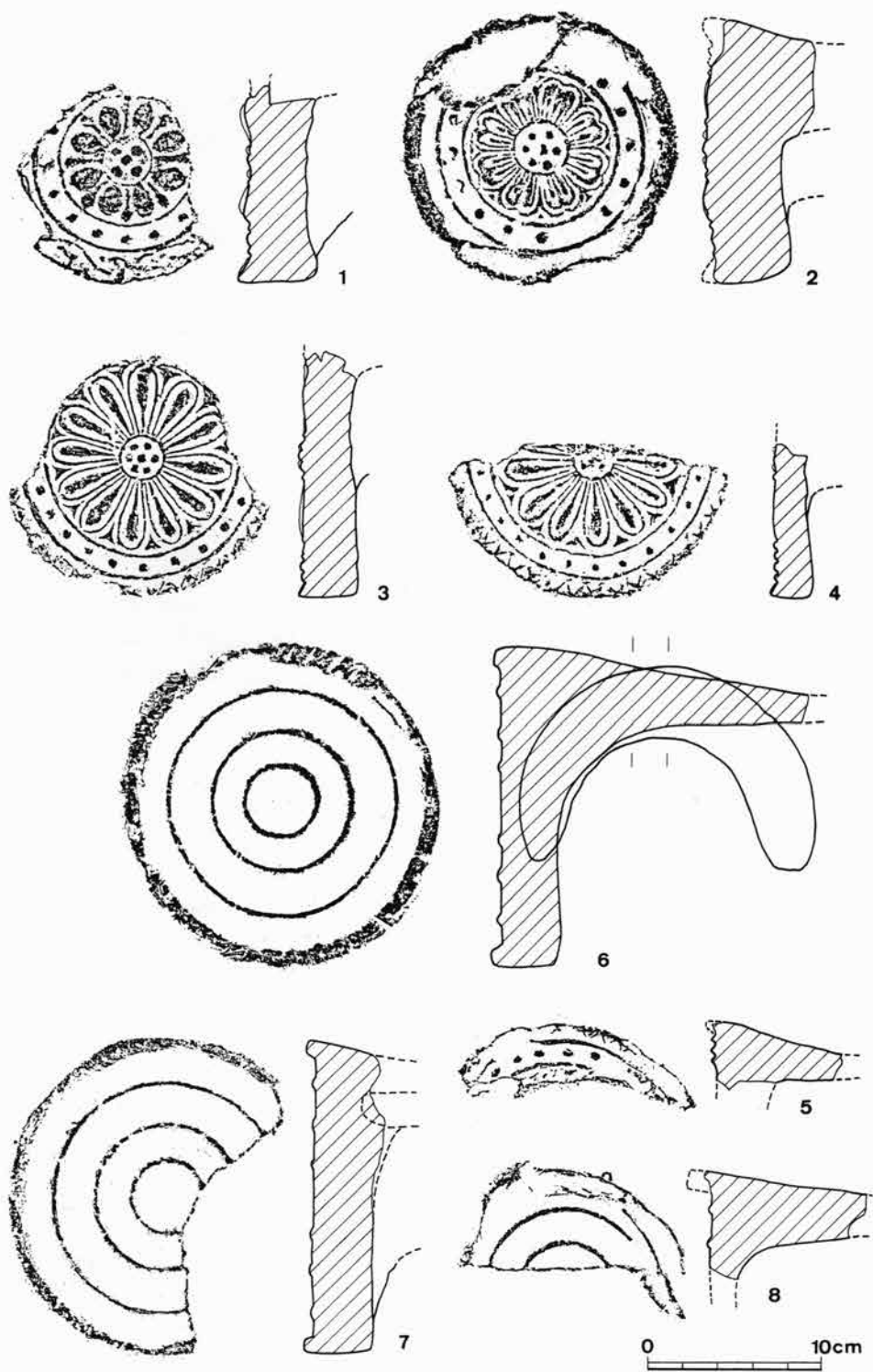
第97図 溝SD16401およびBトレンチ北壁土層断面図

・緑釉陶器・瓦類などがあり、他の時期のものはほとんどない。黒灰色土層の上面から多量の長岡京期の遺物が出土している。以下に瓦類・遺構出土遺物・包含層出土遺物の順に簡単に記す。軒瓦は図98・99、その他は図100～102に示すとおりである。

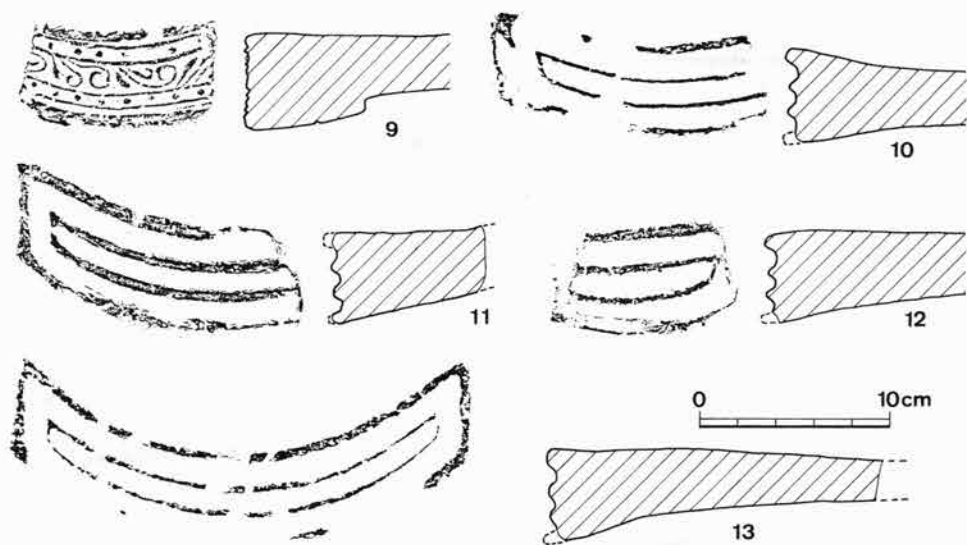
瓦類 瓦類は、近代溝3・4に5～10cmの礫とともに埋め込まれていたもの(2・3・4・5・9)、溝SD16408(10)・黒灰色土上面(6・12・13)およびその周辺(1・7・8・11)から出土したものがある。平瓦には完形に復原できるものもある。

軒瓦は、難波宮6011型式(重圈文)軒丸瓦(6・7)・同小形(8)、難波宮6572型式(重画文)軒平瓦(10～13)、周縁に唐草をめぐらした平城宮6091A型式(1)・同6135A型式(3・4)・同6291A型式(2)・同6688系(9)などがある。難波宮の瓦は、全体に焼成が甘く、断面が淡褐色を呈する。

SD16401 この溝の下層から土師器皿A(1)・椀A(2)・甃(3)・須恵器壺M(4)などが出土している。土師器皿は表面の摩滅が著しいが、外面にヘラケズリ痕が残る。須恵器壺



第98図 出土遺物実測図・拓影(1)



第99図 出土遺物実測図・拓影(2)

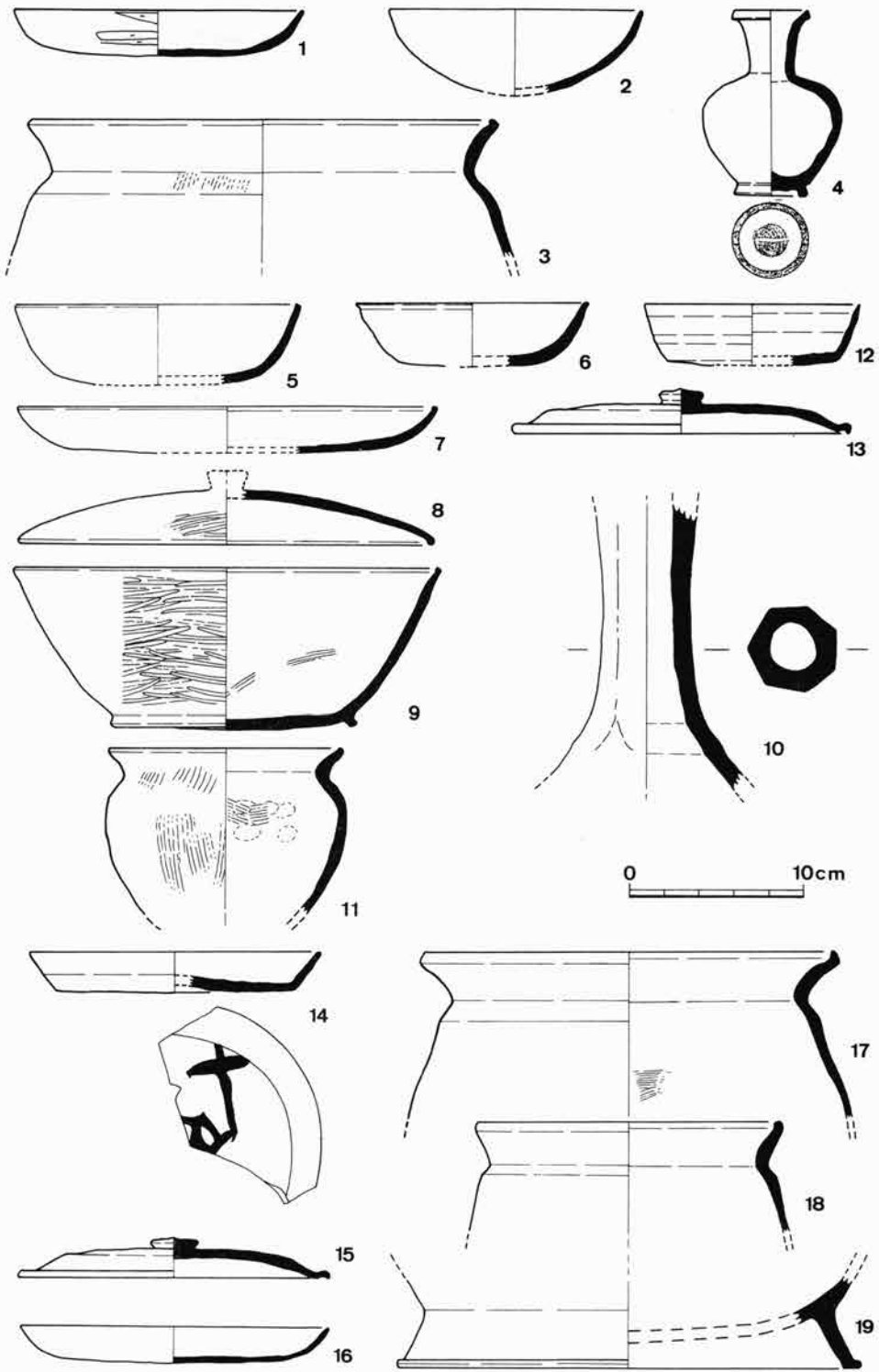
はロクロ挽き成形で底部外面に糸切り痕が残り、「一」字のヘラ記号を記している。焼成は良好、表面が淡青灰色を呈している。

SK16402 この土塚から土師器杯A(5・6)・杯B(9)・皿A(7)・蓋(8)・高杯脚部(10)・甕(11)、須恵器杯A(12)・蓋(13)などが出土している。土師器杯B・蓋は表面の摩滅が著しいが、外面にヘラミガキ痕が残る。杯A・皿Aは摩滅しており不明である。甕は球形の体部に「く」字形に外反する口縁部が付く小型品で、体部外面にハケメ・内面にハケメと指頭圧痕が残る。高杯脚部は外面を七角に面取りをしている。

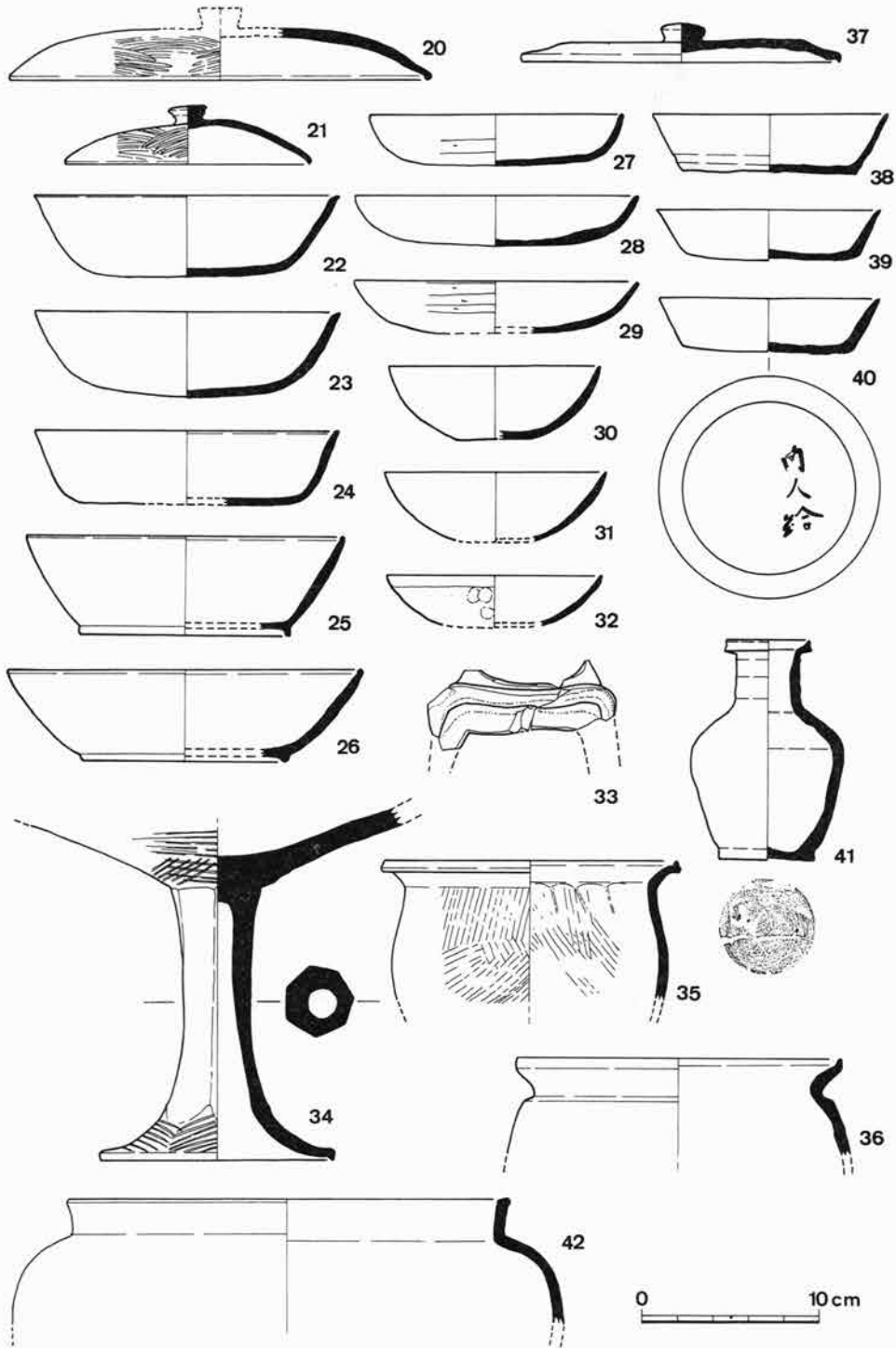
SA16405 西から2番目の柱掘形から須恵器皿A(14)が出土している。底部外面に墨痕が残るが、判読できない。焼成がやや甘く、表面は淡灰色を呈する。

SD16408 この溝から須恵器蓋(15)・土師器皿A(16)・甕(17・18)・緑釉陶器(19)・軒平瓦などが出土している。土師器甕は口縁部が「く」字形に外反し、口縁端部をつまみ上げるもの(17)とつまみ上げて丸くおさめるもの(18)がある。表面の摩滅が著しいが、体部内面にハケメが残るものがある(17)。緑釉陶器(19)は、数片あり同一個体とおもわれる。高台部分の復原径がやや大きくなることから竈であろう。しごく軟質で淡褐色の胎土で、透明感のある淡黄褐色に発色した釉がかかる。

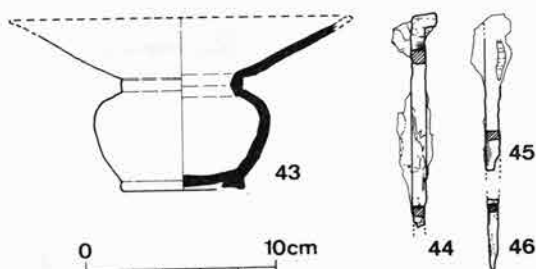
SK16409 先に記した様に土塚内から横転した緑釉唾壺と釘が出土した。唾壺の口縁部の一部が、周辺を精査中に発見された。緑釉唾壺(43)は、残存高8.3cm・胴径9.2cm・底径5.5cmある。器形は8世紀の彩釉陶器小壺に外上方に大きく開く漏斗状口縁部を取りつけた形態で、肩部に胴部最大径がある。口縁部内外面、胴部外面に細かいヘラミガキを行



第100図 出土遺物実測図・拓影(3)



第101図 出土遺物実測図・拓影(4)



第102図 出土遺物実測図(5)

い、全面に淡黄緑色に発色した釉が施されている。灰白色の緻密な胎土で焼成がやや甘く軟質である。釘は頭部を折り曲げた断面正方形のもの(44)と、長方形のもの(45)がある。

遺物包含層からは、暗灰褐色土層(20・32)、赤褐色土層(21・34・41)、黒灰色土層(上記以外)から、土師器

杯A(22~24)・杯B(24~26)・碗A(30・31)・碗C(32)・蓋(20・21)・高杯(34)・甕(35・36)・ミニチュアカマド(33)、須恵器杯A(38~40)・蓋(37)・壺M(41)・甕(42)などが出土している。土師器蓋には大小あり、外面にヘラミガキ痕がみられる。土師器食器類は皿の口縁部外面にヘラケズリ痕をとどめるが、他は摩滅が著しく調整は不明である。ミニチュアカマドは、通常みられるものよりひと廻り大きい。高杯は、脚部を棒状のものに粘土を巻きつけて作り、外面を七面に面取りするものである。口縁部外面と脚裾部外面にヘラミガキ痕がみられる。甕は口縁部を緩く「く」字形に外反させ端部をつまみ上げるもの(35)・強く「く」字形に外反させるため段の付くもの(36)とがある。前者には体部内外面ともハケメ痕がみられる。須恵器蓋は焼成が甘く淡灰色を呈する。杯A(40)は底部外面に「内人給」と墨書されており、焼成は良好で暗灰色を呈する。他の2点は焼成がやや甘い。壺Mはロクロ挽きで肩部がややなで肩状になり、口縁端部を強く上に挽き上げている。底部には糸切り痕がみられる。焼成はやや甘く淡灰色を呈する。

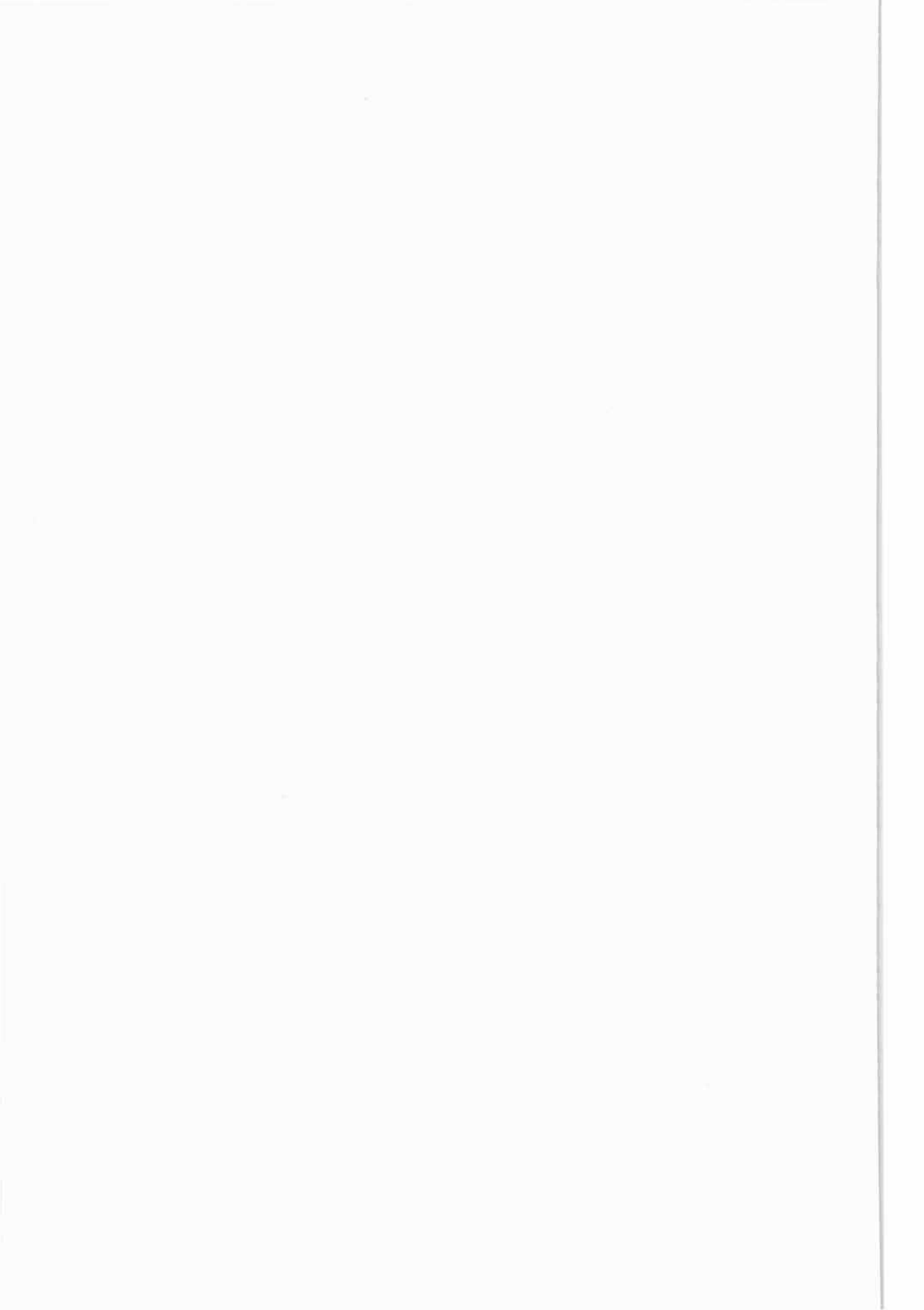
5. ま と め

今回の調査では、当初予想された競輪場造成による削平は少なく、長岡京期の建物跡等の遺構を検出した。地形は北から南・西から東に傾斜し、黒灰色土層下の蛇行する溝SD16401が最も低くなる。この低い場所を黒灰色土層等で整地したことが判明した。調査地は、推定西一坊中軸線(Y=-27, 350.35)から約40m東方にあたり、推定南一条第一小路中軸線(X=-117, 138.61)がトレンチ内を通る。東西溝SD16401は、推定南一条第一小路中軸線に近いところから、宮域内の区画溝の可能性が高い。柵列SA16405・掘立柱建物跡SB16406は、いずれも調査地外に延びるため規模は確定できない。柵列は、黒灰色土層・暗灰褐色土層の整地層を掘り込んでいる。柵列と掘立柱建物跡の前後関係は不明である。土塚SK16409から緑釉唾壺が釘と共に見つかり、周辺でミニチュアカマドも出土していることから、祭祀との関係が考えられる。

この調査で、長岡宮の西端・標高40m以上の丘陵地まで、長岡宮の造営が実施されていたことが判明し、長岡京期の多量の軒瓦や土師器・須恵器をはじめ緑釉陶器など貴重な資料を得ることができた。唾壺は平城京・平安京や官衙および寺院に関連した場所、猿投窯・京都市西京区大原野窯等で現在30例以上が知られている。^(注3)今後近隣の丘陵地の調査に期待がもてる。

(石尾政信)

- 注1 山中 章「長岡宮跡第82次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第5集 向日市教育委員会) 1979
- 注2 福富 仁・城田正博・浜口和宏・野田侑記子・平野仁佳子・山尾 摂・赤司 紫・加藤由美・神山久子・丹新千晶(補助員・整理員)
- 注3 「長岡宮跡出土の緑釉唾壺について—唾壺集成—」
(『京都府埋蔵文化財論集』第1集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.1



11. 栗ヶ丘古墳群昭和60年度発掘調査概要

1. はじめに

栗ヶ丘古墳群は、小規模な墳丘を有する総数12基から成る群集墳である。所在地は、綾部市小呂町田坂で、国鉄綾部駅より北へ約3kmの丘陵地にある。古墳は、丘陵の上部縁辺にあり、田畑との比高差は約20mを測る。

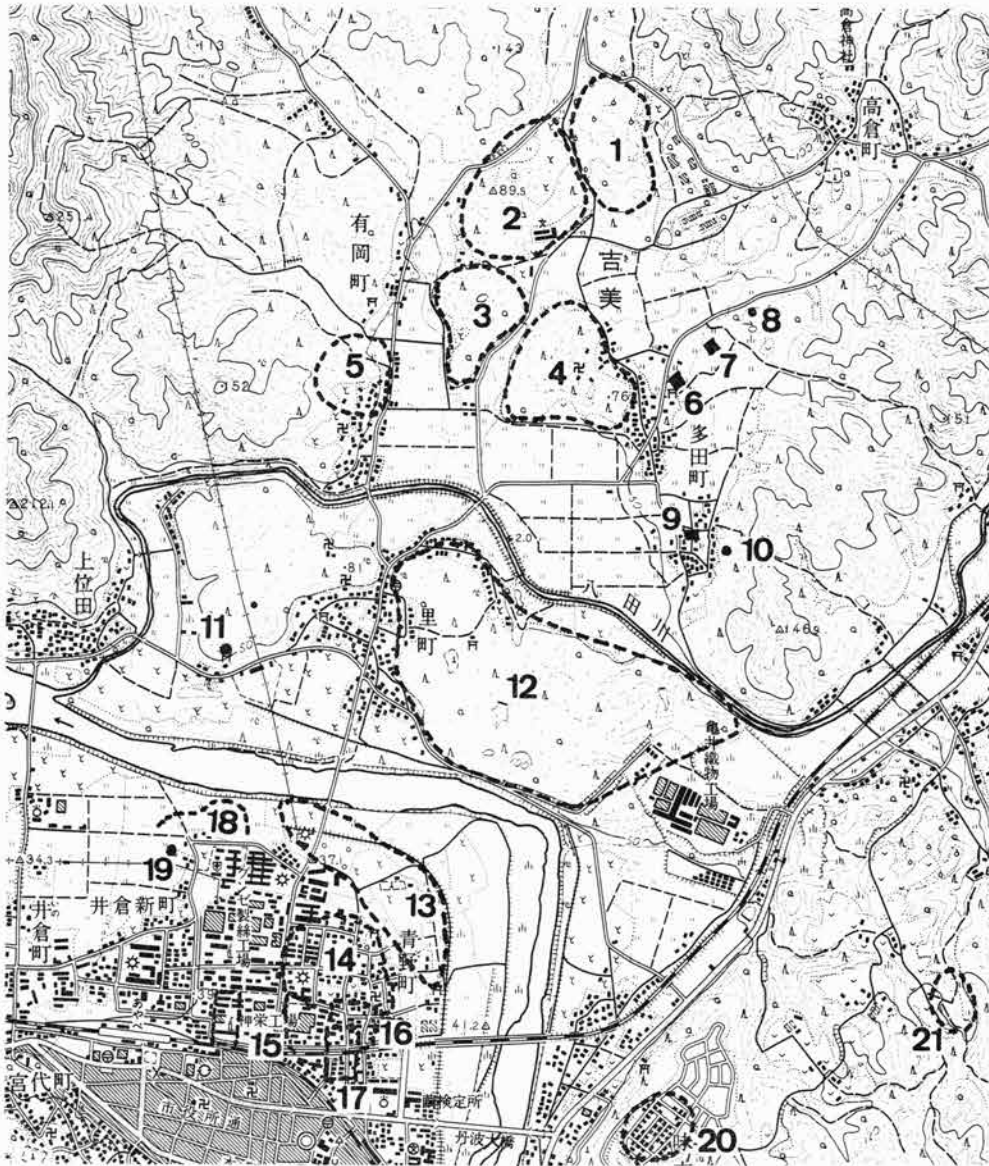
今般、この地に綾部工業団地が造成されることになり、事業担当課である京都府企業局開発事業課は、まず京都府教育委員会文化財保護課に対して埋蔵文化財の分布調査を依頼した。この調査成果を元に両課で協議した結果、昭和60年度から一部発掘調査に取りかかることになり、再度協議した結果、現地調査は財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター(以下、調査研究センター)に依頼することになった。これを受けて、当調査研究センターは、昭和60年11月25日から昭和61年3月31日まで現地調査を実施した。今年度の計画は、古墳2基を発掘し、その周辺を約600m²試掘することであった。調査を担当したのは、調査課主任調査員水谷寿克、調査員伊野近富である。現地作業に際しては、極寒にもかかわらず、地元作業員^(注1)や調査補助員・整理員^(注2)の奮闘のあったことを記して感謝をし、また、綾部市教育委員会をはじめ、綾部市企画総務部振興対策室、多田町・高倉町・小呂町・星原町の各自治会、および吉美地区連合自治会長の木下礼次氏など、関係諸機関・地元の方々の並々ならぬ協力のあったことも記して感謝するものである。

2. 歴史的環境

当古墳群は、由良川本流域の平野部から久田山^(注3)の低平な丘陵に隔てられた吉美盆地^(注3)の近隣に位置する。この辺りは複雑に谷が入り組んでおり、小地域空間を形成している。それでは、特に古墳時代に焦点を当てて、吉美盆地周辺の歴史的環境について略述したい。

盆地の南には久田山古墳群^(注4)がある。総数71基から成る古墳群である。ここでは、弥生時代後期の台状墓・周溝墓から造墓が開始されている。この2つの墓制が分布範囲を異にしているのは、周知の事実^(注5)であるが、なぜ、この地で共存するのかについて、中村孝行氏^(注6)は畿内と丹後との「中間に位置する当地方の地域性としてとらえ」ようとしている。

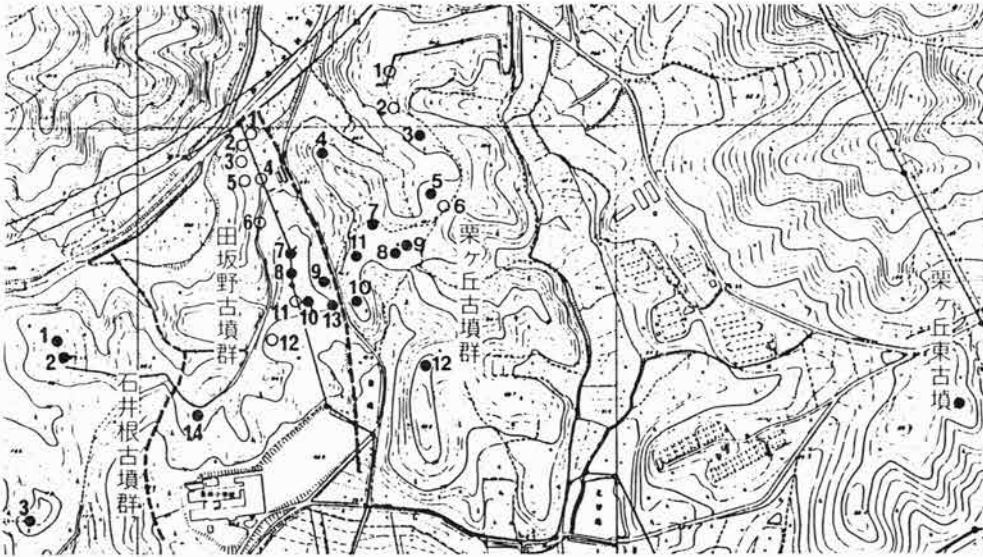
盆地中央の東寄りには聖塚^(注7)・菖蒲塚^(注7)という大型方墳がある。調査によると聖塚は一辺54.2m、菖蒲塚は同32.3mの方墳であることと、両墳とも南側に造り出しを有することが明らかとなった。年代は、周濠埋土中から出土した埴輪片によれば5世紀前半である。



第103図 調査地周辺の古墳分布図 (1/50,000)

- | | | | |
|--------------|--------------|------------|--------------|
| 1. 栗ヶ丘古墳群 | 2. 田坂野古墳群 | 3. 石井根古墳群 | 4. 坊主山古墳群 |
| 5. 二ノ宮古墳群 | 6. 聖塚古墳 | 7. 菖蒲塚古墳 | 8. 上多田古墳 |
| 9. 後路古墳 | 10. キツネ塚古墳 | 11. 里古墳 | 12. 久田山古墳群 |
| 13. 青野遺跡 | 14. 青野南遺跡 | 15. 綾中遺跡 | 16. 青野南遺跡官衙跡 |
| 17. 綾中廃寺 | 18. 青野西遺跡 | 19. 青野大塚古墳 | 20. 平古墳群 |
| 21. 斎神社裏山古墳群 | 22. 西野遺跡(仮称) | | |

盆地中央部から北西にかけての丘陵には、当古墳群のほかに田坂野、石井根、二ノ宮など、それぞれ2～10数基の群集墳がある。この内、田坂野古墳群については、一部発掘調査が実施された。^(注8)地形測量の結果12基の円墳が確認され、内5基が調査された。すべて木



第104図 石井根・田坂野・栗ヶ丘古墳群分布図(拠、注9のb文献)

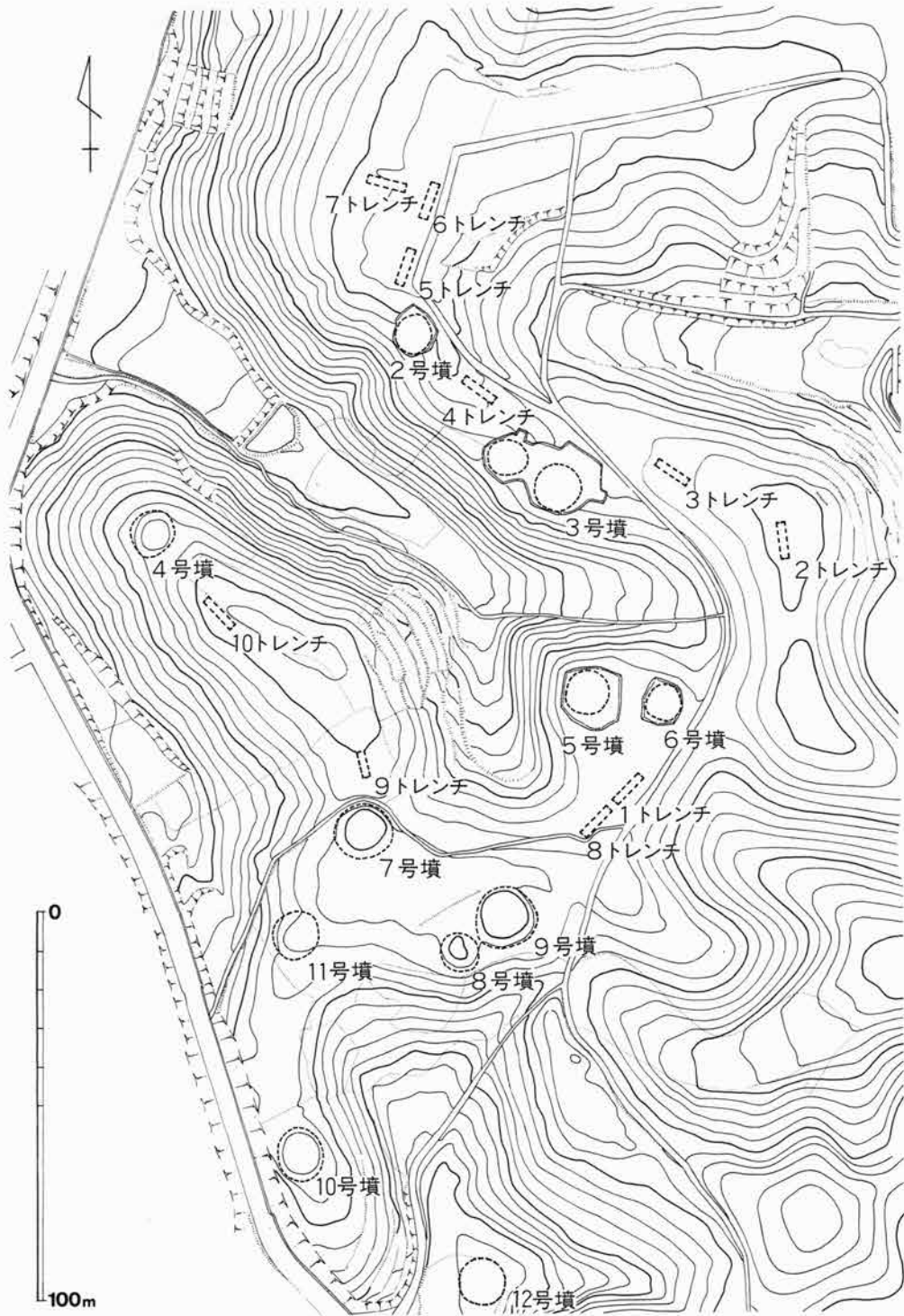
棺直葬墳で、4号墳のみが2体埋葬、他は1体埋葬である。年代は6世紀から7世紀にかけてであるらしい。田坂野古墳群と当古墳群とは道を挟んだだけの位置関係にあり、古墳の形状も似通っている。本来的には同一の古墳群であったのかもしれない。

3. 調査経過

当古墳群については、注4の文献で紹介されているが、やや異同があるので、今回はも

付表2 栗ヶ丘古墳群とトレンチ概要一覧

古墳名	所在地	概要 (単位=m)	トレンチ名	概要
栗ヶ丘1号墳	小呂町田坂	丘陵稜	第1トレンチ	無遺物
2号墳	〃	〃 径10 高1	第2	須恵器片
3号墳	〃	〃 径14 高1.2	第3	無遺物
4号墳	〃	丘陵端 径10 高1	第4	土師器片
5号墳	〃	丘陵稜 径10 高1	第5	〃
6号墳	〃	〃 径8 高0.6	第6	無遺物
7号墳	〃	〃 径15 高2	第7	〃
8号墳	〃	〃 径10 高1	第8	須恵器片
9号墳	〃	〃 径15 高2	第9	無遺物
10号墳	〃	〃 径11 高1	第10	〃
11号墳	〃	〃 径14 高1.5		
12号墳	〃	〃 径12 高1		
13号墳	〃	〃 径10 高2		
栗ヶ丘東古墳		〃 径11 高1.5		



第105図 栗ヶ丘古墳群・古墳分布とトレンチ配置図

とも新しい分布調査成果に則って古墳番号を表示することにする。^(註10)

現地調査は、まず草刈りをした後に地形測量を行った。この段階で3号墳の隣りに古墳のあることが判明し、13号墳と呼称することにした。本調査は3号墳と5号墳について実施し、1・2・4・6・13号墳に関しては試掘調査を実施した。その他、丘陵上に2m×10mのトレンチを10本設定し、遺構の有無を調べた。

全体の地形図は空中写真測量で作製し、個々の古墳に関しては縮尺100分の1の測量図を作製した。測量の基準レベルは、京都府企業局開発事業課の全体測量図の基準点のひとつである「新標6」のレベル(79.58m)を利用した。なお、同じく「標56-510」のレベル(47.22m)も見てみたが、誤差が大きく除外した。

4. 古墳等の調査

3号墳 本墳は直径14m、高さ1.2mを測る円墳である。南側は、谷に迫り出した形で造られており、自然の斜面と墳丘斜面との間には幅約1mの平坦面を造り、区別をつけている。南以外の三方には、幅2～3mで、深さ0.3～0.5mの周濠がある。ともかく、少量の盛土で大きく見せる地業を行っている。

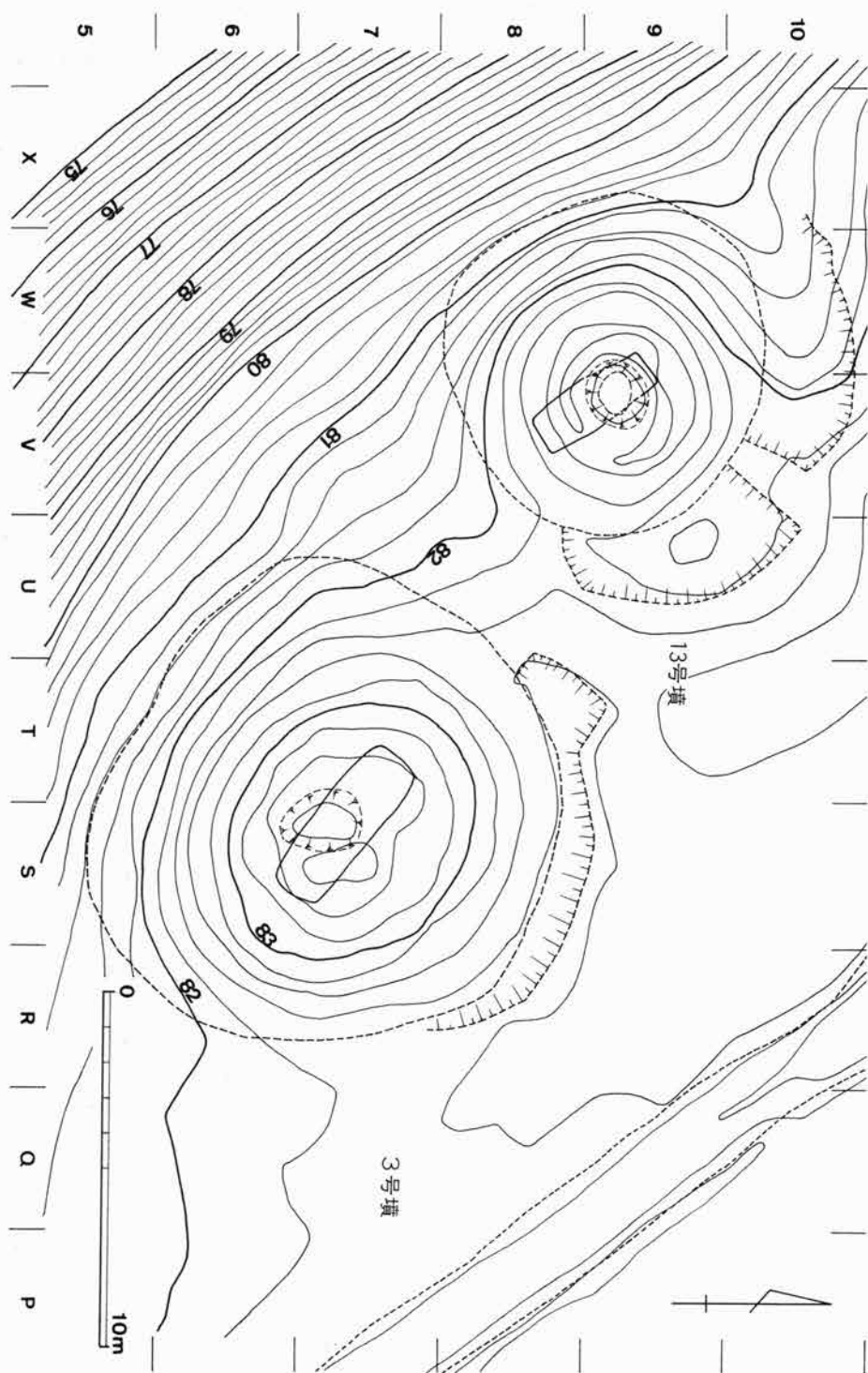
主体部は、墳丘の中央に2か所、これらは重複して検出された。北寄りにある第1主体部は、幅1.7m・長さ4.5m・深さ0.5mの長方形土壇である。棺底には鉄製鋤先1点と鉄鏃3点(南西部)が置かれてあった。また、この部分には朱の痕跡が認められた。主体部の横(南東部)には須恵器壺や土師器高杯などを埋納した土壇(SK02)があった。調査を進めた結果、この土壇は第2主体部を蔽った土層の上から掘り込まれたことが判明した。層位的には第2主体部→土壇→第1主体部と変遷している。

南寄りにある第2主体部の規模は、幅2m・長さ5m・深さ0.3mの長方形土壇である。中央部に鉄鏃数点が置かれており、西部には鉄斧1点と直上に鉄鏃2点があった。これらは棺底から約10cm上で検出された。東端には須恵器杯身5点が置かれてあった。

墳丘の表面に近い所では、須恵器高杯(低脚)や同躰などを検出した。また周濠の東側では、ほぼ完形で正位置に据えられた須恵器杯身を検出した。この土器は6世紀後半に属するが、他は6世紀前葉～中葉に属する。

墳丘の断面を観察した結果、造成方法は黄褐色土及び黒色土の旧地表面の上に、黄色と黒色の土層を交互に盛り上げていることがわかった。0.5mほど盛り上げた段階で主体部を掘り、その後更に盛土し、ある段階で土器を置き祭祀を執行したらしい。その後0.5mほど更に盛土し、作業を完了している。なお、主体部の底面はほぼ水平である。

5号墳 本墳は直径10mで、高さ1mの円墳である。南から東には幅0.8～1.2m・深さ



第106図 3・13号墳墳丘測量図

0.3mの周濠があり、特に南側では須恵器高杯等が出土した。遺物の分布はこの部分に限って2mほどまで認められた。墓前祭祀を物語るものであろうか。

主体部は1か所のみで、規模は幅1.8m・長さ3.2m・深さ0.7mの長方形土坑である。棺底には西に鉄刀1本(刀先は北で刃は内側に向ける)が置かれてあり、東には鉄鏃1本があった。なお、主体部の中央部にある新しい土坑からも鉄鏃が1本発見されており、元来は2本以上あったことが知られる。主体部の下層で認められた土層の変化によれば「H」字形の組合式木棺が考えられる。主軸はW30°S(磁北)である。

墳丘の西側は、幅1.5mの平坦面となっており、周濠が埋没していると考えて掘削したところ、周濠はなく平坦面が続いた後、南北2.65mで東西0.85mの長方形土坑(SX02)となることが判明した。墳丘側は0.2mの深さがあるが、反対側は自然の斜面を水平にカットした状態であった。底面の北半分には須恵器壺1・同横瓶1・同杯身3・同杯蓋1が据えられており、南半分には鉄鏃3点程度(腐食が進みバラバラになっていた)があった。埋土は上層が暗黄褐色土で、下層が暗黒褐色土である。

墳丘の造成方法は3号墳と同様である。すなわち、地山の上に5~10cmの厚さに黄色土・黒色土を置き、その途中で主体部を掘り、須恵器杯身などを付近に置き、その上に0.5mほど盛り上げていた。そして、墳丘の表面に近いところでは、須恵器1個体分がバラバラとなった状態で発見された。

その他の古墳 以上の他、1・2・4・6・13号墳の試掘を実施した。その結果、分布調査で古墳である可能性が指摘されていた1号墳は、そうでないことが判明した。他の古墳については、それぞれ1か所ずつ主体部を検出したが、まだ下層に存在している可能性は残している。次年度以降の調査に期待したい。

試掘調査 古墳群が存在する丘陵地に、2m×10mのトレンチを設定して土層の把握や遺構の有無を調べた。なお、トレンチ番号は掘削した順番につけたものである。

基本的層序は、上から表土(厚さ数cm, 以下同じ)、暗茶褐色土(15cm)、黒褐色土(15cm)、黄褐色土(地山)で、この状況はどのトレンチでも同様である。この内、遺物が出土したのは第2トレンチ(須恵器片)、第4トレンチ(土師器片)、第5トレンチ(土師器片)、第8トレンチ(須恵器片)である。遺構はほとんど認めることができない。但し、古墳の表層(2・5・6号墳)には平安時代と思われる土師器杯が1個体ないし2個体発見されることから、この時期に古墳を意識して祭祀等を執行したことが窺えるので、今後はこの点に留意し、調査を進める必要がある。

5. 出土遺物

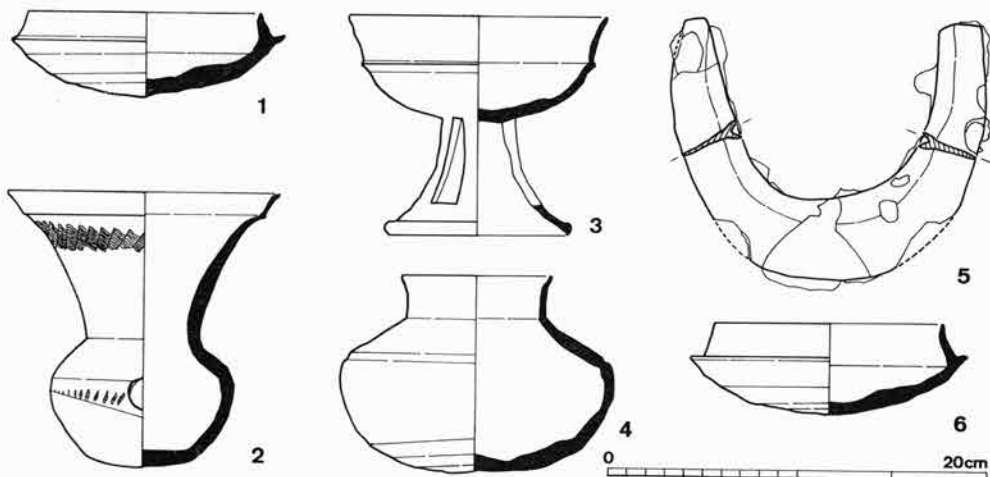
まず出土状況を把握しておきたい。基本的には主体部内部から出土するのは鉄鏃数点のみで、これに加えて3号墳第1主体部では鉄製鋤先1点、同第2主体部では須恵器杯5点と、鉄斧1点、5号墳第1主体部では鉄刀1点である。主体部を掘り、遺体を置いた後に封土をしているが、この時点で須恵器高杯(3号墳)や須恵器杯(5号墳)を置き、また盛土をして最終段階で墳頂部に須恵器甕1個体を置く(その時点で破碎したかどうかは不明)。

6号墳の場合は墳頂部に土師器甕を置き、13号墳の場合は大型の甕を置いていた。

周濠部に関しては、以下のとおりである。2号墳の場合は東部で須恵器甕等が出土した。3号墳の場合は少量の須恵器片が出土したのみで、これらは原位置は保ってはいず、墳丘から崩落した可能性が高い。5号墳の場合は南部で須恵器高杯を検出し、さらに南方にも広がっていた。また、前述したように西部ではSX02から完形品を埋置した土器群を検出した。6号墳は南部で土師器甕片が多数出土したが、これは、墳頂部に置いてあったものが、近年になって栗の木を植える際に掘った穴の排土と一緒に捨てられたものかも知れない。なお、西部では鉄鏃1点が出土したが、これも同様に排土と一緒に捨てられたものかも知れず、今後、主体部の調査を進めることによって決着がつくと思われる。13号墳の周濠は北部の一部が途切れており、道のような存在が推定できるかも知れない。途切れた西側では完全な須恵器甕が1点出土した。

では、図示(第107図)した遺物^(註11)についての説明を行いたい。

1は3号墳の東部周濠外から、正位置に据えられた状態で出土した須恵器杯身である。



第107図 出土遺物実測図
1~3・5; 3号墳, 4; 13号墳, 6; 5号墳

今回調査した中では、もっとも新しいタイプである。6世紀後半か。2は同墳の墳頂部から出土した須恵器甕である。6世紀中葉か。3は同墳墳頂部から出土した須恵器高杯で、三方に透かしのあるものである。5は同墳の第1主体部から出土した鉄製鋤先で、先を上に向けて、主体部の南辺に立て掛けたような状態で発見された。錆化は進んでいるが、ほとんど完形品である。6は5号墳墳頂部から出土した須恵器杯身で、6世紀中葉のものである。4は13号墳の周濠北西部で出土した須恵器短頸壺である。口縁部がやや外反することを特徴とする。

6. ま と め

今回は、栗ヶ丘古墳群についての初年度の調査であり、全容が解明されるのは今後のことであるが、気付いた点を摘記し、今後の調査のための資料としたい。

3・5号墳を完掘し、1・2・4・6・13号墳を試掘したが、3号墳が主体部2か所であった以外は1か所のみであった。今後、調査が進めば別の主体部が発見される場合もあるが、古墳の大きさを考慮すれば、せいぜい2か所までと思われる。築造年代は6世紀前葉から中葉にかけてが中心である。当古墳群でもっとも大きく、占地も丘陵の基部にある9号墳が、最大の権力者であろうが、これに次ぐ規模を有するのは3・5号墳である。今回の調査では副葬品に差異はほとんどなく、これが、第2勢力の常態なのかどうかは、規模がもっとも小さい(あたかも第3勢力を形成しているような)2・6号墳を調査すれば判明するので、成果を期待したい。

古墳外の丘陵地のトレンチ調査結果は、この地に人跡をほとんど認めることができないものである。但し、平安時代の土師器が点々と出土しているので、集落とはならないまでも、なんらかの小規模な施設があるかも知れない。今後、この点にも留意して調査する必要がある。

(伊野近富)

注1 作業員 柏原春雄・大槻伊太郎・大槻熊太郎・今井助雄・今井和二郎・安野正夫・白木茂・四方直市・坂本 弘・森岡義雄・高橋清一・大槻与三郎・丸山 昇・大槻和子・白木琴枝(順不同、敬称略)

注2 調査補助員・整理員 岩崎裕隆・塩見幸三・中坪央暁・立川明浩・中井英策・黒田康夫・白波瀬正幸・繁田 豊・村木 伸・赤井敏行・泉善多郎・出口貴志野・桑谷久美子・四方三智子・高野美和・村尾春代・丹新千晶・吉井雅代・山本弥生・関本典子(順不同、敬称略)

注3 中村孝行「聖塚・菖蒲塚試掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告 第11集』綾部市教育委員会) 1984

注4 a. 大槻真純「久田山」(『綾部市文化財調査報告 第5集』綾部市教育委員会) 1979

- b. 『丹波の古墳Ⅰ——由良川流域の古墳——』山城考古学研究会 1983
- 注5 平良泰久・黒田恭正・常盤井智行「Ⅶ. 大山墳墓群の変遷」(『丹後大山墳墓群』丹後町教育委員会) 1983
- 注6 中村孝行「綾部市久田山南遺跡の出土遺物について」(『太邇波考古』第5号) 1985
- 注7 注3と同じ
- 注8 堤圭三郎「5. 田坂野群集墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1966
- 注9 注3・注4のb・注8の文献。および、a. 『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1972
b. 平良泰久「綾部市吉美・八田地区分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1984
- 注10 注9のb文献と同じ
- 注11 須恵器の年代観については、以下の書を参考にした。田辺昭三他『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ1966。また、福知山市においての須恵器杯身・杯蓋型式分類案が提示されている。岩松 保「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡」(1)洞楽寺遺跡(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

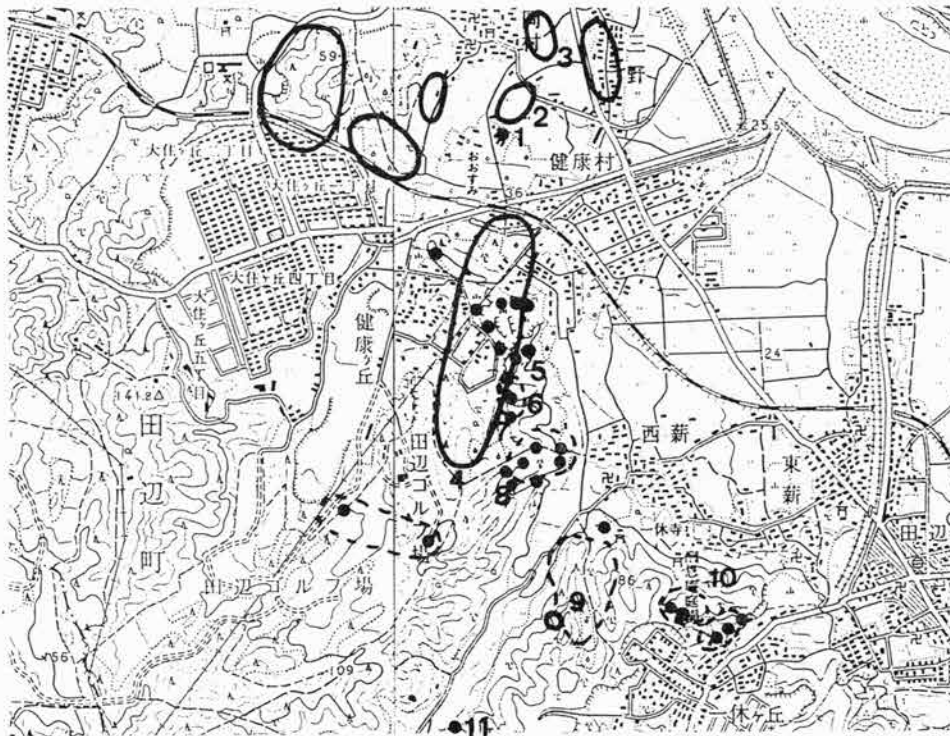
12. 京奈バイパス関係遺跡昭和60年度 発掘調査概要

1. はじめに

京奈バイパス関係遺跡の試掘および発掘調査は、城陽市から木津町に至る延長19.6kmにおよぶ路線帯に含まれる古墳・城館跡・集落跡などの調査である。

試掘および発掘調査に先立つ分布調査は、昭和47年度・57年度の2年次にわたり、京都府教育委員会・当埋蔵文化財調査研究センターが行い、その結果、19遺跡が路線内に含まれることが明らかとなった。

発掘調査は、昭和59年度の綴喜郡田辺町奥山田池遺跡から始まる。奥山田池遺跡では集落あるいは窯跡と思われるような明確な遺構は検出されなかったが、軒平瓦を含む瓦類と



第108図 調査地位置図 (1/25,000)

- | | | | | |
|------------|----------|----------|--------------|-----------|
| 1. 岡村古墳 | 2. 野上遺跡 | 3. 久保田遺跡 | 4. 狼谷遺跡 | 5. 郷土塚4号墳 |
| 6. 畑山2号墳 | 7. 畑山3号墳 | 8. 西山古墳群 | 9. 堀切古墳群・横穴群 | |
| 10. 天理山古墳群 | 11. 大欠遺跡 | | | |

ともに土師器・須恵器を含めコンテナ・バット15箱以上の遺物が出土した。

今年度は、田辺町大住・薪の両地区を中心に古墳3基・古墳状の隆起3か所・遺物の散布地3か所を対象として試掘および発掘調査を行った。

現地調査は、調査課主任調査員辻本和美、同調査員石井清司・黒坪一樹が担当し、調査に際しては日本道路公団大阪建設局京奈バイパス工事事務所・京都府教育委員会・田辺町教育委員会等諸機関の協力を得た。また地元大住・薪地区の方々には有形・無形の助力を賜わった。

なお、調査期間中、以下の方々から指導・助言を賜わった。記して謝意を表したい。

毛利光俊彦(奈良国立文化財研究所)・川西宏幸(平安博物館)・平良泰久・奥村清一郎(京都府教育委員会)・鷹野一太郎(田辺町教育委員会)・杉本 宏(宇治市教育委員会)・村川行宏(精華町教育委員会)・吉村正親(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

2. 周辺 の 遺 跡

京奈バイパス関係遺跡の調査は、昨年度に実施した田辺町三山木に所在する奥山田池遺跡にひき続き、今年度は田辺町大住および薪地区を中心に調査を行った。

大住および薪地区に点在する遺跡には、古墳時代中期に築造された大住車塚・大住南塚古墳のほか、古墳時代後期の横穴式石室および横穴墓などがある。

大住車塚古墳^(注1)(智光寺山古墳)は、田辺町大字大住小字八王寺に所在し、測量調査の結果、全長約66m、前方部幅約18m、後方部の一辺の長さ約30m、前方部の高さ約1.5m、後方部の高さ約4.5mを測る前方後方墳であることが判明した。水田の畦畔より長方形の周濠が推定されている。内部主体は竪穴式石室あるいは粘土槨と思われる。

大住南塚古墳^(注2)は、大住車塚古墳の西北約65mに位置する。この古墳は、測量調査の結果、盾形周濠を有する前方後円墳と考えられていたが、昭和60年度に一部発掘調査が行われ、大住車塚と同様、前方後方墳であることが確認され、前方後方墳が2基並列するという興味ある結果が得られた。大住南塚古墳の内部主体は竪穴式石室であり、石室内より石製品と刀剣が出土したと報告されている。

堀切古墳群^(注3)は、田辺町大字薪小字堀切谷・大欠ほかに所在し、横穴式石室と横穴墓からなる古墳群である。横穴式石室を内部主体とする古墳は5基以上を数え、発掘調査された堀切4号墳では円筒埴輪のほか、人物・馬などの形象埴輪が出土している。横穴墓は古墳の築造された丘陵の東側斜面に穿たれたもので、総数10基を数える。

天理山古墳群は、田辺町大字薪小字山垣外に所在し、堀切古墳群とは同一丘陵の東張り出し部に位置する。天理山古墳群は4基の円墳からなり、1号墳は崖面に粘土槨が露出し

ており、出土遺物には円筒埴輪・須恵器高杯などがある。天理山古墳群は、後述する畑山古墳群などより古い様相を呈する古墳群である。

このように、今回調査対象となった大住および薪地区は、古墳時代中期以降に古墳が築造され、特に薪地区については横穴式石室および横穴墓を主体とする古墳時代後期の古墳が点在する地域である。

3. 60年度の調査の概略

今年度は9遺跡を対象として試掘および発掘調査を行った。

狼谷遺跡は、綴喜郡田辺町大字薪小字狼谷に所在し、周辺部からは弥生時代中期の土器のほか、石庖丁・柱状石斧・環状石斧などの石製品の出土が知られている。今回の調査は、丘陵に直交する形で5か所(総面積282.5m²)のトレンチを設定し、調査を行った。その結果、調査地の大半は地表面より深さ約4mにわたり、砂層の堆積がみられ、同層内には遺物を含まないことが明らかとなった。ただ、調査地の南端より2mの範囲には地山の傾斜が認められ、その上面には弥生時代後期から庄内併行期に至る土器の細片を少量含んでいた。

郷土塚4号墳は、綴喜郡田辺町大字薪小字西山に所在する。周辺部には鉄槍・鉄鏃・鉄斧・鉈などの鉄製品のほか、家あるいは鳥形の形象埴輪を出土した古墳時代中期の円墳である郷土塚2号墳、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の郷土塚3・5・6号墳がある。^(注4)今回調査した郷土塚4号墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳であることが明らかとなった。

畑山2号墳は、綴喜郡田辺町大字薪小字畑山に所在し、周辺部には横穴式石室を内部主体にもつと考えられる畑山1号墳がある。^(注5)畑山2号墳は竹林開墾のため、墳丘の大半が削平を受け、墳丘規模・形状については明らかでなかったが、調査の結果、横穴式石室を内部主体とし、石室の中央には排水溝が築かれていることが明らかとなった。

畑山3号墳は、畑山2号墳とは谷をへだてて隣接し、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の古墳である。墳丘規模・形状については畑山2号墳と同様、竹林開墾のため不明である。

西山1・2号墳は、綴喜郡田辺町大字薪小字溜池に所在し、分布調査の結果、古墳状の隆起があり、調査を進めたが顕著な遺構・遺物の出土がなく、古墳とは考えがたく、単なる地山の隆起であることが明らかとなった。

大欠遺跡は、綴喜郡田辺町大字薪小字大欠に所在し、分布調査の結果、丘陵部から舌状にのびた先端部に立地し、わずかに中世の古墓を思わせる隆起があったため、試掘調査を行った。その結果、深さ約4mに至るまで砂層の堆積があり、顕著な遺構・遺物は検出で

きなかった。

野上遺跡は、綴喜郡田辺町大字大住小字野上ほかに所在し、周辺部には土師器などの散布が知られていた。調査は各田畑単位の試掘坑を設定し、遺構・遺物の確認につとめたが、一部中世の包含層と思われる黒褐色粘質土層が認められるのみで、顕著な遺構は認められなかった。

岡村古墳は、綴喜郡田辺町大字大住小字姫ノ垣内に所在し、隣接して野上遺跡がある。岡村古墳については『田辺町郷土史—古代篇』で同地周辺に埴輪を含む前方後円墳があることが記載されており、今回の調査地である竹林が同古墳に比定されているため、試掘調査を行った。その結果、古墳状の盛土が認められず、深さ約3.5mにわたり砂層の堆積があり、また埴輪などの出土もなく、古墳とは考えがたい結果を得た。

以上のように、今年度は9か所の調査対象地について試掘および発掘調査を行ったが、その結果、顕著な遺構としては横穴式石室を内部主体とする古墳が3基認められるのみであった。

なお、各遺跡の調査期間は以下のとおりである。

狼谷遺跡	昭和60年6月10日～同年7月13日
郷土塚4号墳	昭和60年7月8日～同年10月5日
畑山2号墳	昭和60年10月7日～昭和61年3月25日
畑山3号墳	昭和60年11月5日～同年12月4日
西山1・2号墳	昭和60年10月7日～同年11月2日
大欠遺跡	昭和60年11月5日～同年11月13日
野上遺跡	昭和61年1月17日～同年3月25日
岡村古墳	昭和61年2月5日～同年2月14日

3. 各遺跡の調査概要

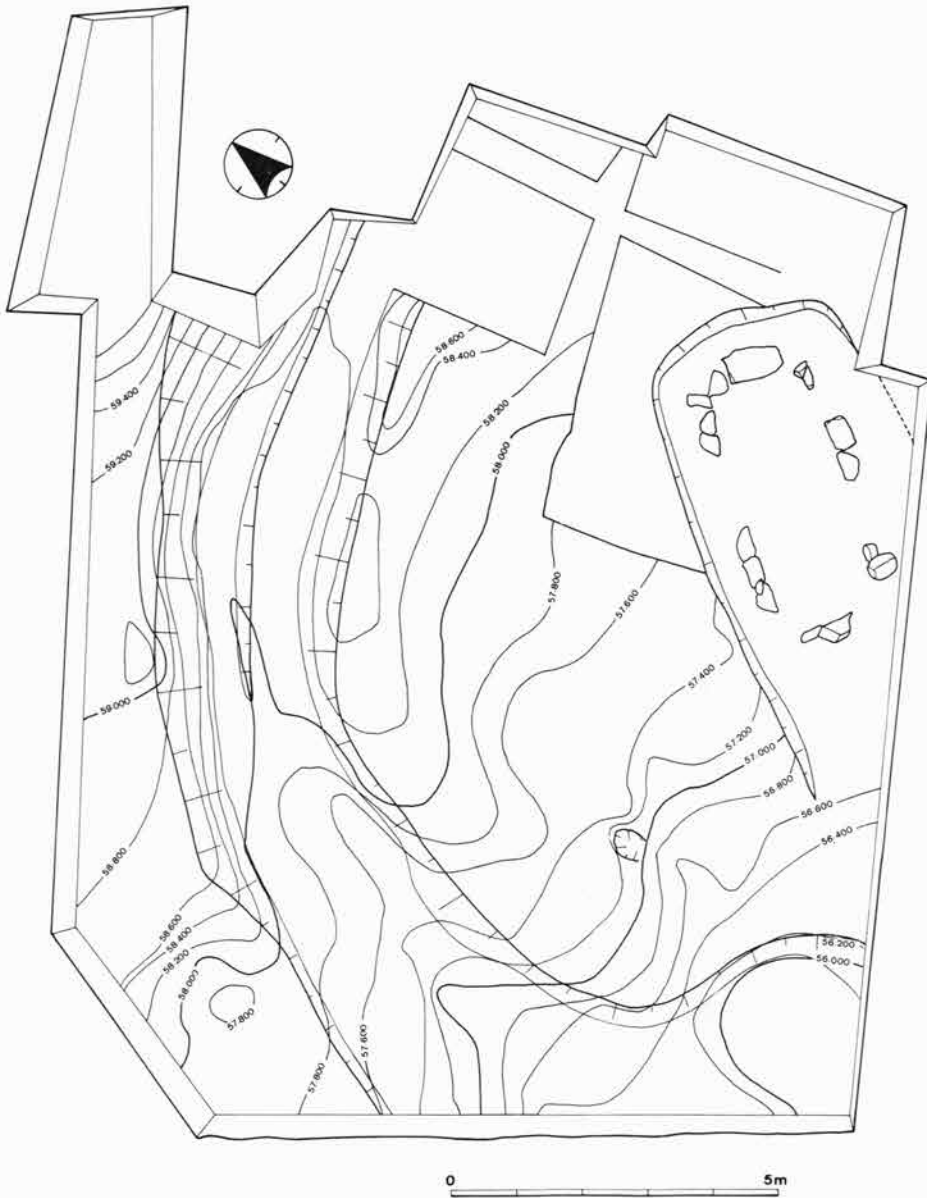
(1) 郷土塚4号墳

郷土塚4号墳は、6基の古墳からなる郷土塚古墳群のなかの1基である。付近には畑山古墳群・西山古墳群など横穴式石室を内部主体とする数基の古墳群が点在している。

a. 調査の経過

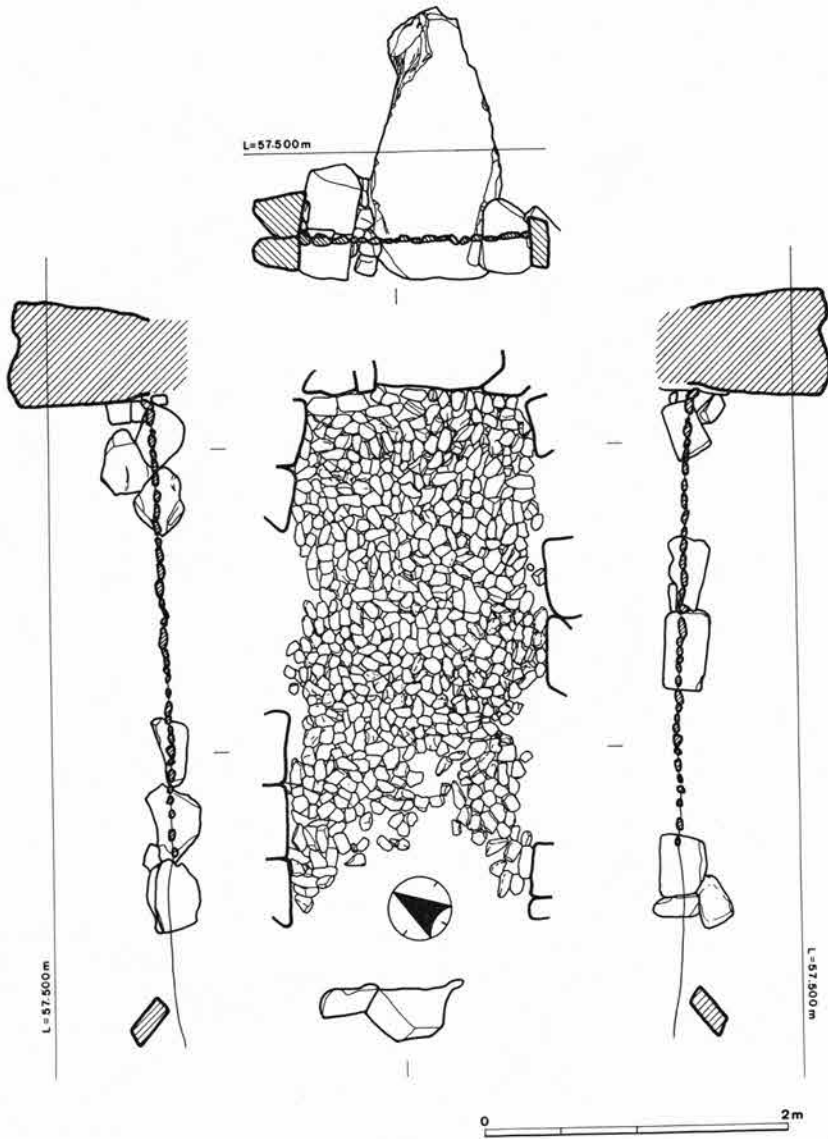
郷土塚4号墳を含めた郷土塚古墳群は、古墳時代中期の郷土塚2号墳を除き、いずれも横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の古墳群である。郷土塚4号墳も調査前から、竹林の中に石材が露出しており、横穴式石室であると推定されていた。

調査は、露出した石材を中心に長さ6m×幅3mの試掘坑を設定し、内部主体の確認を



第109図 郷土塚4号墳平面図

行った。その結果、露出した石材は横穴式石室の奥壁の一部であり、玄室および羨道部はなお南側にのびるものと考えられたため、調査地を拡張し、石室の全容を明らかにするよう努めた。調査地を拡張した結果、側石の遺存状態は悪く、基底石と一部2段目を残すのみであったが、玄室床面は河原石を全面に敷きつめ、遺存状態は良好であった。石室内からは土器のほか、鉄器類が出土したが、盗掘にあったためか出土量は少なく、土器は15点



第110図 郷土塚4号墳石室実測図

以上、鉄器は11点を数えるのみである。

石室内の調査と併行して、墳丘の有無・規模を確認するため、調査地をさらに西および南側に拡張した。その結果、周溝および墳丘の一部が確認でき、郷土塚4号墳が円墳であることが明らかとなった。

b. 墳丘および内部主体

郷土塚4号墳は、上面幅約2~3m・深さ約20cmを測る周溝によって画された直径約16m

を測る円墳である。墳丘は地山面の上に赤褐色土の盛土を行っているが、後世の竹林等により削平を受け、遺存状態は悪く、墳丘盛土は10～30cmを測るのみである。

内部主体は全長6m以上・玄室長約3.7m・幅約1.7mを測る横穴式石室である。玄室部床面には拳大の河原石を全面に敷きつめているが、羨道部との境付近では盗掘によるためか、一部河原石が抜き取られている。羨道部には側石が遺存せず、また玄室部にみられたような河原石も敷きつめていないため、羨道部の長さ・幅については推定の域を出ないが、掘形の南端部のとぎれる部分から長さを推定すると約2.3mとなる。羨道部には石材の抜き取り痕が明瞭ではないが、掘形の形態から推定し、無袖式の石室と思われる。

c. 出土遺物

郷土塚4号墳出土の遺物には土師器壺、須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・壺・提瓶・甕などの土器類のほか、銀環・鉄鏃・鉄刀・鉄鉗などの鉄製品があり、出土遺物の多くは石室内、特に玄室部の奥壁に集中して出土した。

土師器の壺(5)は、球形の体部から口縁部が直立ぎみに立ち上がる。体部外面は遺存状態が悪く調整不明。口径10.8cm・器高12.5cmを測る。

須恵器の蓋(1)は、天井部が丸みをもち、口縁部がわずかに外反する。天井部の中央に扁平で中央部がわずかに凹むつまみを貼り付ける。天井頂部に削り調整を施す。

有蓋高杯(2・8)は、口縁部の立ち上がり部が内傾ぎみに短く立ち上がる。脚部は2段3方に透し穴を施す。2は口径12.2cm、8は口径13.7cm・器高17.2cmを測る。

無蓋高杯(6)は、直立ぎみに立ちあがる口縁部をなし、杯部外面には下端と中位部に突帯と段をめぐらす。脚部には2段2方の透し穴を施し、脚部中位には2条の沈線文をめぐらす。6は口径11.5cm・器高15cmを測る。

短頸壺(7)は、口縁部が短く直立ぎみに立ち上がる。体部は肩部を形成し、底部は丸底ぎみとなる。肩部には2条の沈線文をめぐらす。口縁部内・外面、体部上半にはていねいなナデ調整、体部下半にはヘラ削り調整を施す。7は口径8.0cm・器高10.1cmを測る。

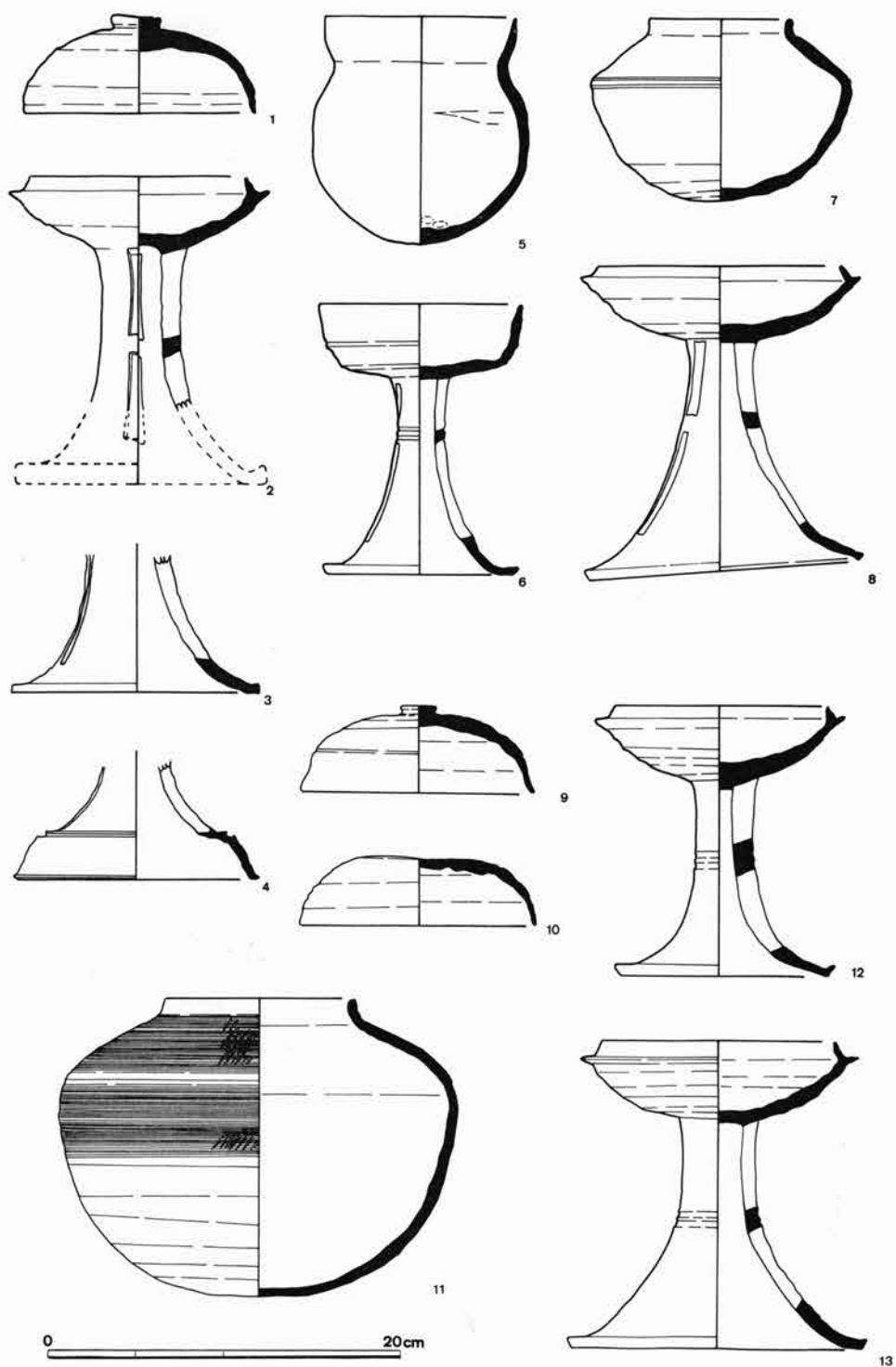
鉄製品は次年度以降に報告する予定であるが、銀環・鉄鏃・鉄刀・鉄鉗などがある。

銀環は長径2.2cm・短径2.1cm・厚さ3mmを測る。銀環の表面は剝離しており、芯部のみが遺存している。鉄鏃は長茎鏃・柳葉鏃など3点以上が出土した。鉄刀は長さ25cm以上を測り、断面は二等辺三角形を呈する。鉄鉗は全長30cm以上を測り、握部はそりをもたず、直線的である。鉗部は鉸合部が平らで、厚さ約1cmを測る。

(2) 畑山2号墳

a. 立地と調査経過

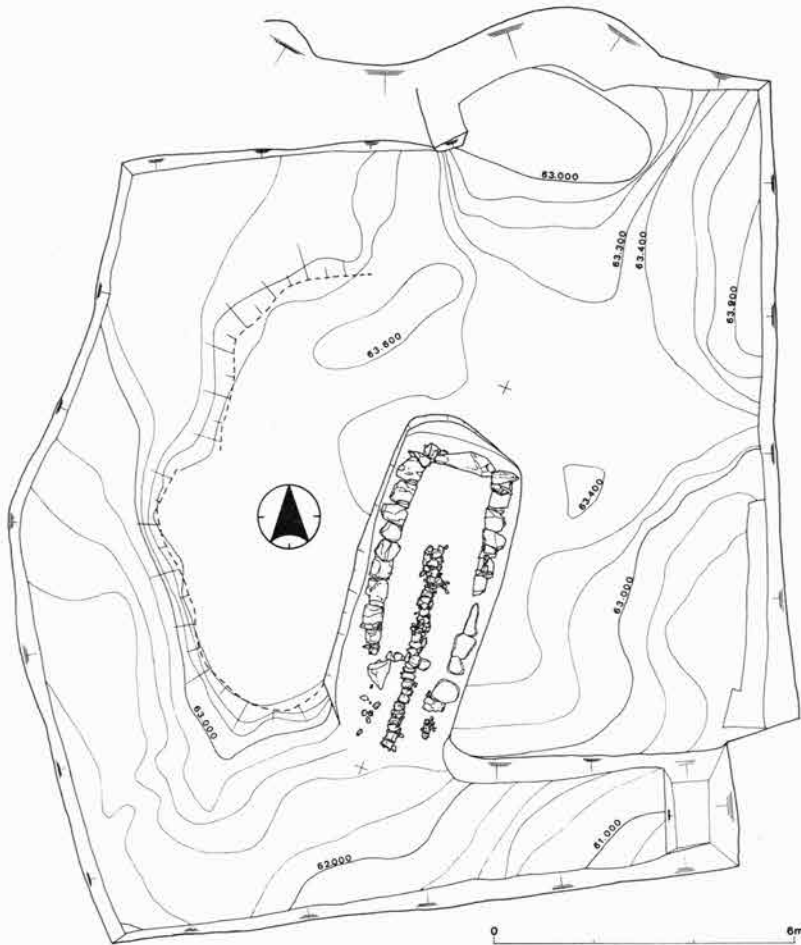
畑山2号墳は、京都府綴喜郡田辺町大字薪小字畑山に所在する。畑山地区内ではこれま



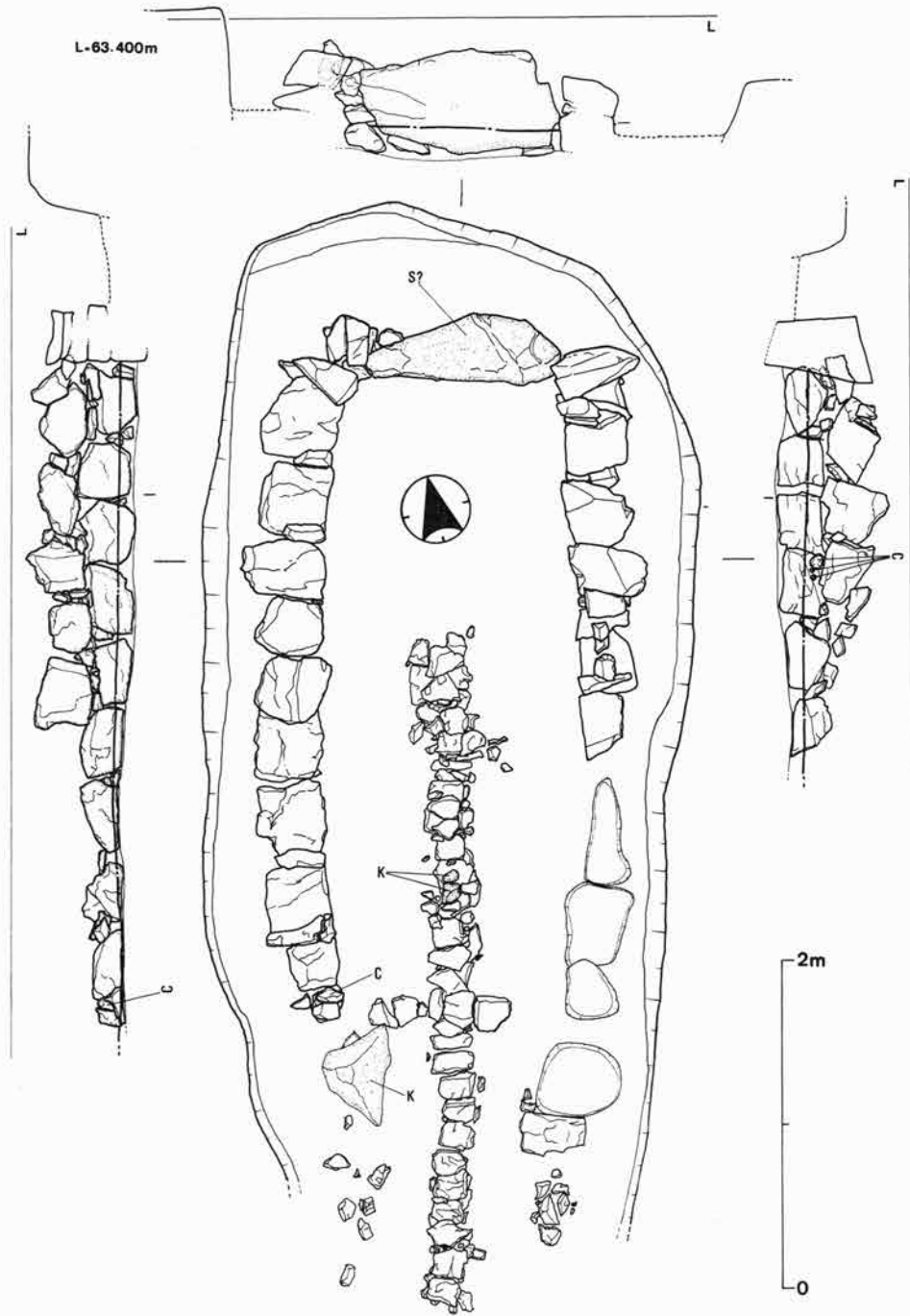
第111図 郷土塚4号墳・畑山3号墳出土遺物
1~8: 郷土塚4号墳, 9~13: 畑山3号墳

でのところ3基の古墳が確認されており、これらは畑山古墳群として知られている。今回の京奈バイパス工事に先立つ発掘調査によって、畑山2号および3号墳の様相について明らかにすることができた。

畑山2号墳は小高い丘陵東側の縁辺部で、標高約60~65mを測るところに立地する。このあたり一帯は広く竹林が覆い、長年にわたる竹林用の土取りなどによって、旧地形の改変には甚だしいものがある。今回の石室主体部を確認した地点も、既にかかなりの土砂が削り取られていた。こうした土取りによる段差(崖)は、調査地の北側と東側でみられ、約1.5mもの高低差を生じていた。人力掘削を始めるについてこのような崖を避け、墳丘の土盛りが残存していると思われる所に幅1.5~2mの細長い試掘坑を4本設定した。丘陵の最頂部から斜面裾部付近までを広く調査することに意を注いだ。当初、須恵器片数点と経筒の蓋(銅製)を斜面地にて検出したが、石室の所在についてはその片鱗すら確認することがで



第112図 畑山2号墳平面図



第113図 畑山2号墳石室実測図(C:チャート, K:花崗岩, S:砂岩)

きなかった。試掘坑を前述の崖下にまで広げたところ、前向きに倒れて石室内にすっぽりとはまり込んだ大きな奥壁石材をはじめ、側石の並びを捉えた。以後、この石室(主体部)を中心に周辺を掘り広げていった。あわせて地山面を丹念に削り出していき、墳丘の規模・形状を追求した。その結果、畑山2号墳は南西方向に開口する横穴式石室をもつことを確認した。しかしながら、墳丘の規模・形状については明確にし得なかった。

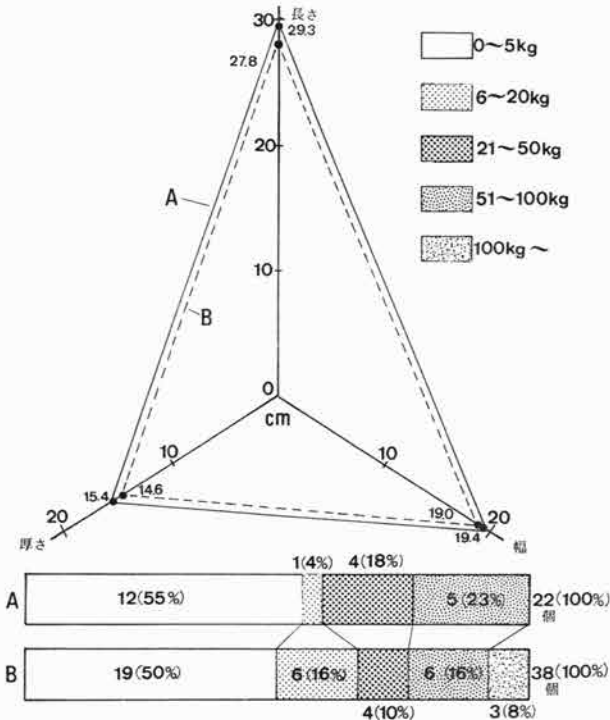
b. 墳丘および内部主体

畑山2号墳の墳丘は竹林を開く際に削平を受け、本来の封土の代わりに竹林の盛土が非常に厚く堆積していた。墳丘はほぼ完全に削り取られていた。墳形については、主体部南西側の地山面が比較的滑らかな曲線を描いてまわることから、おそらく円墳となろう。しかし、旧地形がかなり改変されている現状を考えると、断言にいきさかの躊躇がある。

内部主体である横穴式石室は、やや西寄りの南向きに開口する。その規模は、全長約5.6m以上、幅はやや胴張りになっている中間部で約1.3m、奥壁近くで約1.1mを測る。石室平面の形は、羨道と玄室の境に区別のない、いわゆる無袖式である(第113図)。

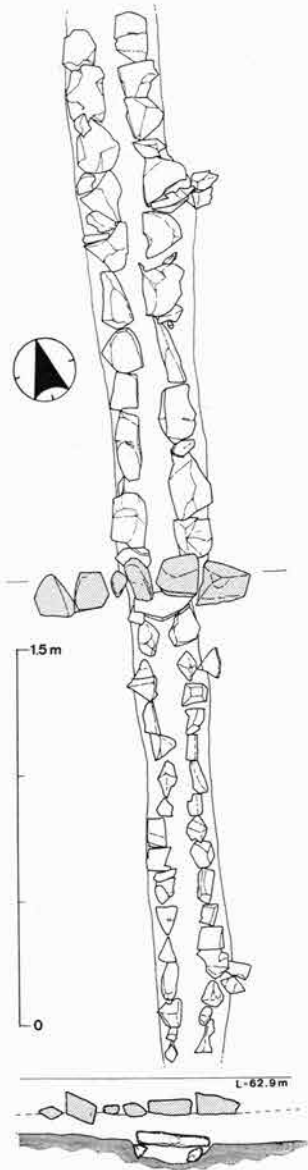
石室はすでに最下段まで側石の抜き取られている部分も多く、残存状況は悪い。奥壁は横長に据えられた大型石材を中央に、小型石材を両側に使って組まれている。石室内にすっぽりとはまり込んでいた花崗岩の石材も、奥壁を構成していたものである。したがって奥壁中央部は二段の巨石が残存していたことになる。両側の側石は石室中間部まではほぼ二段分残り、上段の石材が石室内にいささかせり出しているのが観察された。

なお、当古墳全体は北西から南東に下がる緩斜面地に築かれているため、封土の土圧がより強くかかる西側壁には、東側壁よりも大きな石材を用いているものと考えた。このことを念頭に、両側

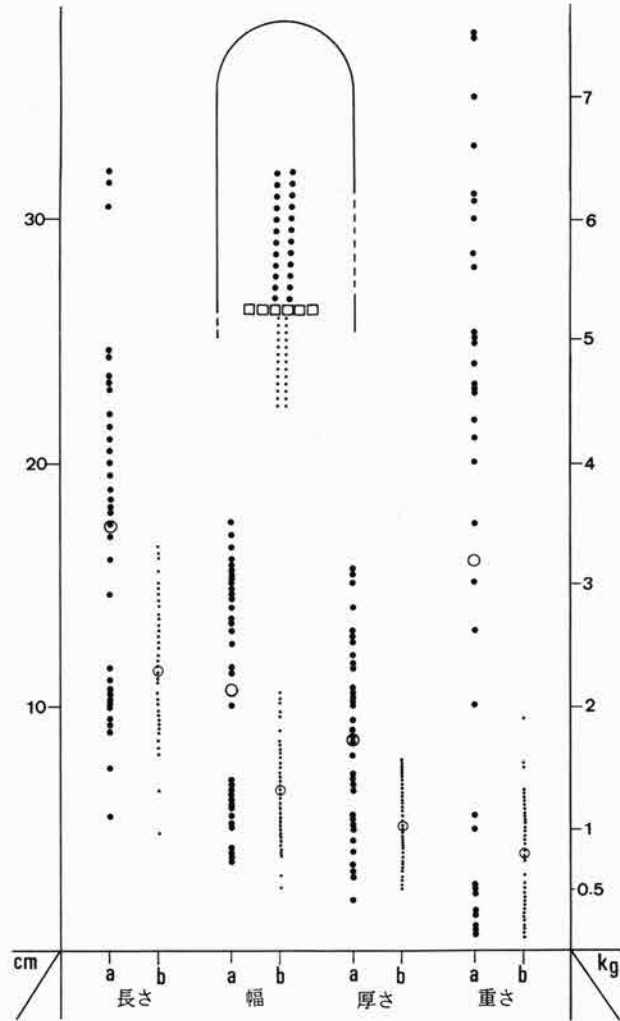


第114図 石室側壁の石材質量比較グラフ (A:東側石, B:西側石)

側壁には、東側壁よりも大きな石材を用いているものと考えた。このことを念頭に、両側



第115図
畑山2号墳排水溝実測図



第116図 排水溝石材法量比較グラフ
a：奥壁側(34個)，b：開口側(36個)，○は平均値

壁のすべての石材の法量(長・幅・厚)および重さを計測し、これをグラフ化した(第114図)。結果的には、東側壁の石材法量がわずかながら西側壁を上回り予想外れとなった。重量別構成比では、大きな石材の間隙を詰める0~5kg大のものが最も多く、両側とも全体のおよそ半分を占める。100kgを超えるものが東側壁には3点(8%)あるが、重量構成比についてもそれほど大きな差はなかった。

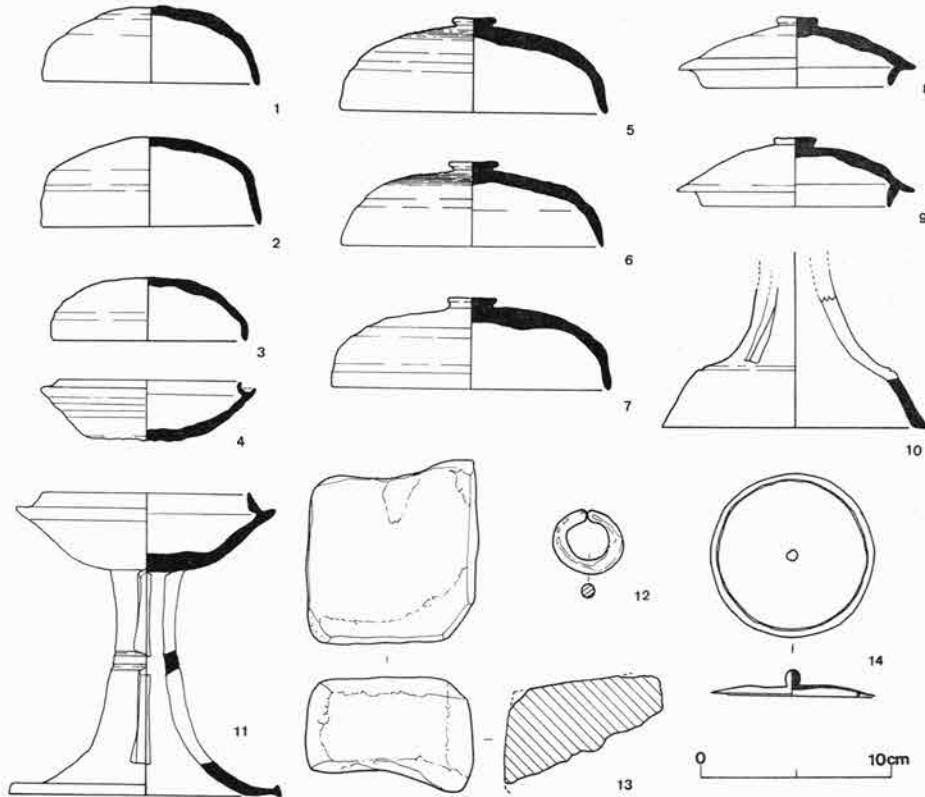
次に、石室中央部には排水溝が設けられていた。全長約4m・幅20~50cm・深さ約15cmを測る。奥壁までは達しておらず中間部で終結している。構造は角礫を両側に組み、この

上に扁平な蓋石が丁寧に被せられているものである。

この排水溝と直交して6個の石が並んでいる(第115図)。排水溝をつくった後、厚さ15～20cmで土盛りして床面とし、ここに配されたものである。この区画石を境にして、奥壁側と開口部側とで使用されている排水溝の石材の大きさが異なる。奥壁側の石が大きいことは一目で諒解される。ここでも石材の長さ・幅・厚さ・重量を区画石の内側と外側とで個別に計測した。第116図に示すように、内側の石材は外側に比べて大きさに幅があり、大小の石材を組み合わせている。一方、外側では内側よりかなり小さな石材をほぼ統一的使用していることがわかった。重さでみると、外側では2kgを超えるものはない。このように石材の大小の違いは、区画石による玄室と羨道の境界を表現しているのかもしれない。

石室・排水溝の石材の種類については、現在のところ不明である。ただ、花崗岩・砂岩?・チャートについては識別できたので、図中に示しておいた(第113図)。その他はすべて同じ石材を使っている。

掘方のラインは比較的明確であった。側壁との間には、赤褐色粘質土の堆積がみられた。



第117図 畑山2号墳出土遺物(12のみ2/3)

そして奥壁から先に構築されていったこともうかがえた。

c. 出土遺物

出土遺物には、須恵器の杯蓋・杯身・蓋・高杯・横瓶・甕、土師器の壺、銀環(耳輪)、凝灰岩片などがある。全体に細片が多く、器種では須恵器蓋類の多さが目立つ。量はコンテナ箱に整理すると3箱を数える。なお、出土状況については石室内がかなり荒されているため、原位置を留めているものは皆無に近かった。第117図によって主なものを紹介する。

須恵器：杯蓋・杯身・蓋(第117図1～9)

1は、口径11.4cm、器高4.1cmを測る杯蓋である。丸みをもった天井部から体部にかけてなだらかに下向する。内・外面ともナデにより仕上げる。2は、口径11.6cm、器高4.7cmの杯蓋である。中間部からやや角度をつけて端部に向う。内・外面ともナデが施される。3も杯蓋である。口径10.4cm、器高3.4cmを測る。1・2と比較してやや器高が低い。丸くなだらかな天井部をもち、端部近くで角度をつけて垂下する。内・外面ともナデ調整。4は、深いかえりをもつ杯身である。口径11.4cm、器高3.2cmを測る。5～7の蓋は、天井部に頂部が平坦になった宝珠つまみをもつ。天井部からなだらかに下向し、端部はやや外反する。5・6の天井部外面には、同心円的につけられた篋おこし痕がみられる。これらは高杯の蓋ともなろう。法量を3つの平均値で示すと、口径14.1cm・器高4.7cmとなる。8・9は、やはり頂部が平坦になったつまみを有する蓋である。全体にやや扁平さみで、口縁端部にはかえりがつく。口径は8が12.4cm、9が12.8cm、器高は8が3.8cm、9が3.6cmである。台付長頸壺の出土はないが、一般的によくセットとなるものである。

須恵器：高杯(同図10・11)

10は、下端部から嵩高にたち上り、段をつけてそのまま滑らかに脚柱部に移る。この段の部分に一条の沈線がはしる。脚柱部には三方向に透しが入る。11は、口縁にかえりのある上杯部を有する有蓋高杯である。脚柱部に二段四方向透しが施され、中間部には2本の沈線がめぐる。10は、口径11.2cm・器高16cmを測る。

銀環(同図12)は、中空ではなく重さ約7gを測る。銀箔が部分的に残存している。

凝灰岩片(同図13)は、石棺材である。表面・側面に明瞭な面取りが観察される。縁辺部も角をおとし、丹念な面取り加工が施されている。石棺のいずれの部分かは、現状では判断しにくい。小さな家形石棺の縄掛け突起の部分になるのであろうか。取り上げられた破片の総重量は5,320gである。量的にはコンテナ1箱弱である。

経筒蓋(同図14)は、古墳主体部内からではなく、丘陵裾部の試掘坑内から出土した。竹林の置土中に包含されていた。径8.6cmを測り、銅製で中央に小さなつまみを有する。厚さはわずか2mmで、内側にはかえりをもつ。残りは非常に良好なもので、腐蝕はほとんど

どすすんでいない。周辺に中世期の遺跡があるものと思われるが、こうした点からも貴重な資料となろう。

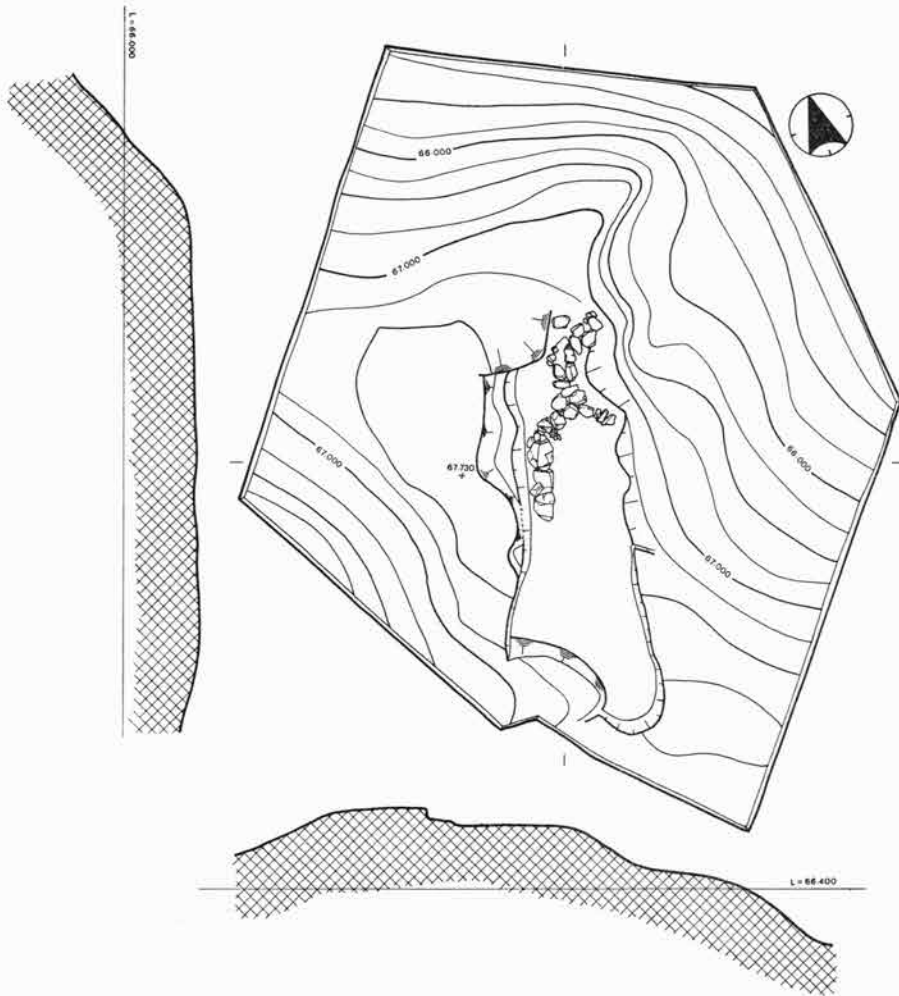
以上の出土遺物、とりわけ須恵器類から当古墳の時期には2時期を考えておきたい。古墳の築造時期は6世紀後半、そして7世紀初頭に再利用されたものと言える。

(3) 畑山3号墳

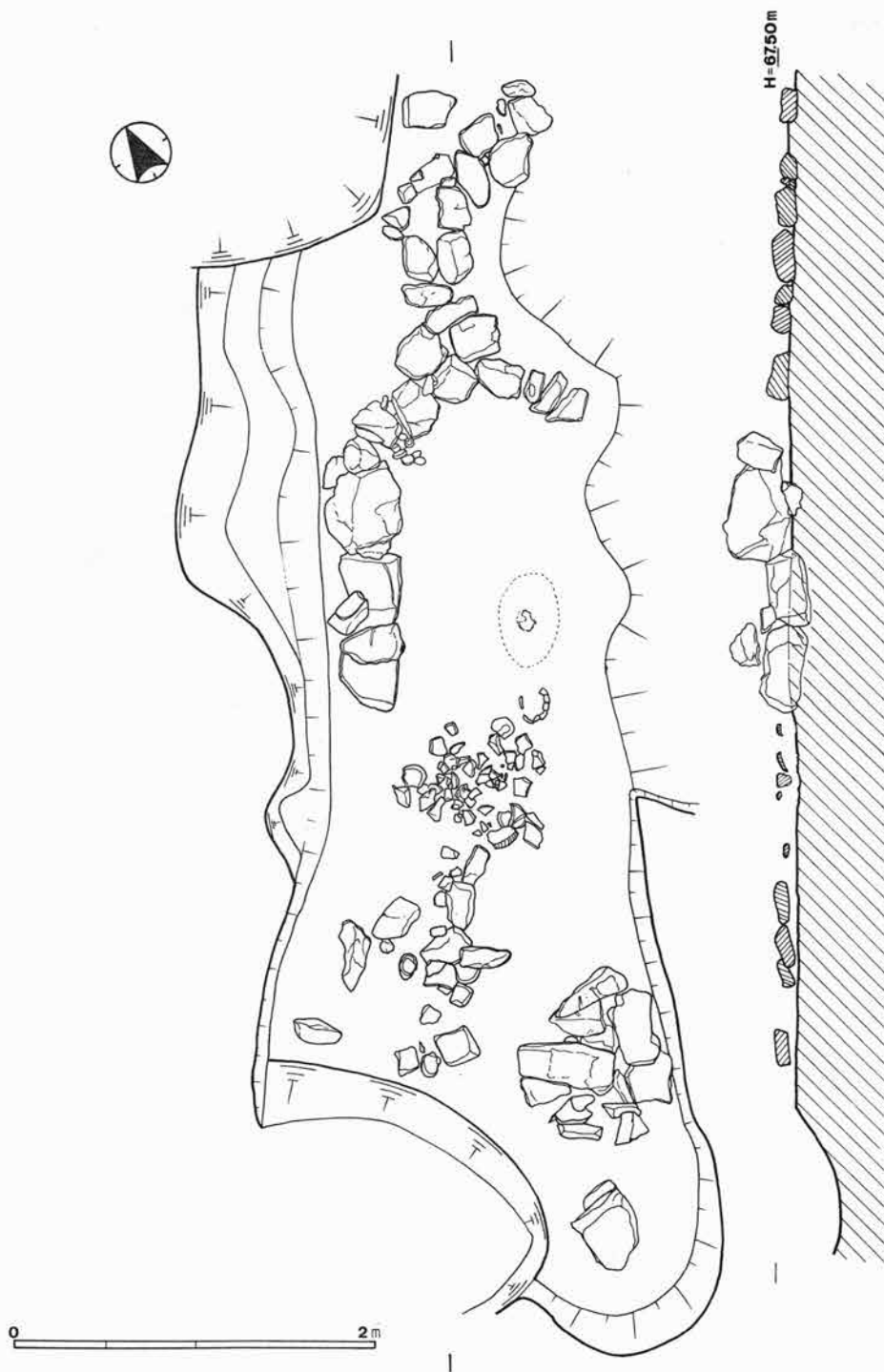
a. 調査の経過

畑山3号墳は、京都府綴喜郡田辺町大字薪小字畑山に所在する。

畑山3号墳は、3基の古墳群からなる畑山古墳群の1基であり、昭和60年度版『京都府遺跡地図』（第5分冊）には記載されていないが、京奈バイパス関係遺跡に伴う分布調査の



第118図 畑山3号墳実測図(S=1/250)



第119図 畑山3号墳石室実測図(S=約1/40)

結果、河原石の露出が認められ、また、隣接して古墳群が点在することより調査を行った。

調査地はまず樹木の伐採を行ったが、古墳状の隆起は認められず、竹林のため旧地形が改変していることが考えられた。調査は、河原石の露出した部分を中心に5m×5mのトレンチを設定し、人力により

順次、掘削を行った。その結果、横穴式石室の一部を確認したが遺存状態は悪く、横穴式石室の石材が散在していた(第118図)。

b. 墳丘および内部主体

畑山3号墳の墳丘は後世の竹林により削平を受け、遺存状態は悪く、墳丘規模・形状については不明である。内部主体は横穴式石室であるが、奥壁および東側壁は遺存せず、西側壁の一部が遺存するのみである。西側壁は中央から奥壁付近にかけて長さ約1.5mの範囲に、基底石と一部2段目までが遺存するのみである(第119図)。石室床面は奥壁付近にのみ長さ約2.0m・幅約1.0mの範囲にわたり、上部を平坦にした人頭大の河原石を敷いたもので、玄室部南半および羨道部には敷石は認められず、破損した石材と遺物が出土するのみであった。石室を構築する以前の掘形は西掘形が明瞭に遺存するが、東掘形は遺存状態が悪く、玄室部南半から羨道部にかけての一部が遺存するのみであり、それより復元すると、掘形幅は1.4~1.9mを測る。

c. 出土遺物

畑山3号墳出土の遺物は、石室内中央の1m四方の範囲に集中して破損した石材とともに出土した。出土遺物は須恵器杯身・杯蓋・短頸壺などコンテナ・バット2箱以上を数える(第111図)。特殊遺物として床面にふせた状態で銅鏡(第120図)1個体が出土した。

d. まとめ

畑山3号墳は墳丘および内部主体の大半が削平を受け、遺存状態はよくなかったが、隣接した畑山2号墳と同様、横穴式石室を内部主体とし、出土遺物より6世紀末葉を前後する時期の古墳であると考えられる。出土遺物の内、銅鏡は古墳の副葬品として出土する例は京都府下では少なく、被葬者を考える上で有効な資料であると考えられる。

ま と め

昭和60年度における京奈バイパス関係遺跡の発掘調査は、試掘調査を含めて古墳および古墳状隆起6基・土器などの散布地3か所を対象として調査を行った。

その結果、郷土塚4号墳・畑山2・3号墳の3基を除く岡村古墳・西山1・2号墳につい



第120図 畑山3号墳出土遺物
—銅鏡— (S=1/2)

ては主体部および墳丘を思わせる盛土などが認められず、古墳とは認めがたい結果を得た。

遺物の散布地として試掘調査を行った野上遺跡・狼谷遺跡・大欠遺跡では、野上遺跡で中世(鎌倉・室町時代)の包含層を、狼谷遺跡で弥生時代後期～古墳時代初頭の包含層の一部を確認したのみで、その他の所では顕著な遺構は検出されなかった。特に、大欠遺跡では遺構・遺物とも認められなかった。

顕著な遺構・遺物が検出されたのは、郷土塚4号墳・畑山2号墳・畑山3号墳の3基の古墳である。

郷土塚4号墳では、墳丘および内部主体については遺存状態は良くなかったが、直径約16mを測る円墳であり、内部主体の横穴式石室の床面には河原石が敷きつめられていた。出土遺物には土師器・須恵器の土器類のほか、鉄器類があり、特に鉄鉗は鉄製品の生産に関連した遺物であり、被葬者を考える上での一資料となる。郷土塚4号墳は出土遺物より6世紀後半と考えられる。

畑山2号墳では、郷土塚4号墳と同様、墳丘の遺存状態が悪く、墳丘規模は不明であるが、内部主体の横穴式石室内には、良好な状態で排水溝が遺存していた。石棺の一部が出土し、小型古墳でありながら石棺を使用していたことは注目される。畑山2号墳は出土遺物より6世紀後半に築造され、7世紀初頭に再利用されたものと思われる。

畑山3号墳では、墳丘および石室の規模については不明であるが、石室内には須恵器とともに銅鏡が出土し注目される。畑山3号墳は出土遺物より6世紀後半～7世紀初頭と考えられる。

以上のように今回調査した各遺跡は、いずれも遺跡の遺存状態は良くなかったが、田辺町域の古代を考える上で良好な資料となる。特に郷土塚古墳群・畑山古墳群については、これまで出土遺物の記録はあったが、墳丘規模・内部主体・被葬者の性格など不明な部分が多かったが、今回の発掘調査により、その一端を窺い知ることができた。

(石井清司・黒坪一樹)

注1 万波俊介「大住車塚古墳」(『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室)1972

注2 田辺町教育委員会、現地説明会資料 1985

注3 林 正「堀切古墳群」(『田辺町遺跡分布調査概報』田辺町教育委員会)1982

注4 田辺郷土史会『田辺町郷土史—古代篇』1959

注5 吉村正親「畑山1号墳出土の遺物」(『京都考古』第36号 京都考古刊行会)1985

調査補助員 石田雅晃、上東克彦、大田 浩、郡角 治、佐藤正之、鈴木良幸、瀬川泰紀、立花正寛、飛田浩一、中井英策、中井英登、中坪央暁、濱口和宏、八田達男、福富 仁、松田嘉之、森本祐一、矢野治巳

整理員 一井富佐代、上田真美、顯娃ちか子、木野村啓子、白川つる子、地上松一、宮本英子、畑 京子、平野仁佳子、柳本喜美恵、山本清美

圖

版

図版第1 京滋バイパス関係遺跡



(1) 調査地北部地区全景（西から）



(2) 調査地全景（北から）



(1) 土壇1遺物出土状況（東から）



(2) 土壇1完掘状況（西から）

図版第3 京滋バイパス関係遺跡



(1) 隼上り1号墳発掘前の全景（南から）



(2) 古墓群検出状況（南西から）



(1) 隼上り1号墳石室検出状況(南西から)



(2) 隼上り1号墳完掘状況(南西から)



(1) 隼上り1号墳石室内遺物出土状況(北西から)



(2) 隼上り2号墳周溝完掘状況(北から)

図版第6 芝山遺跡



(1) A地区調査前全景（東から）



(2) C・D地区調査前全景（西から）



(1) C・D地区試掘調査風景（西から）



(2) 円面碗出土状況



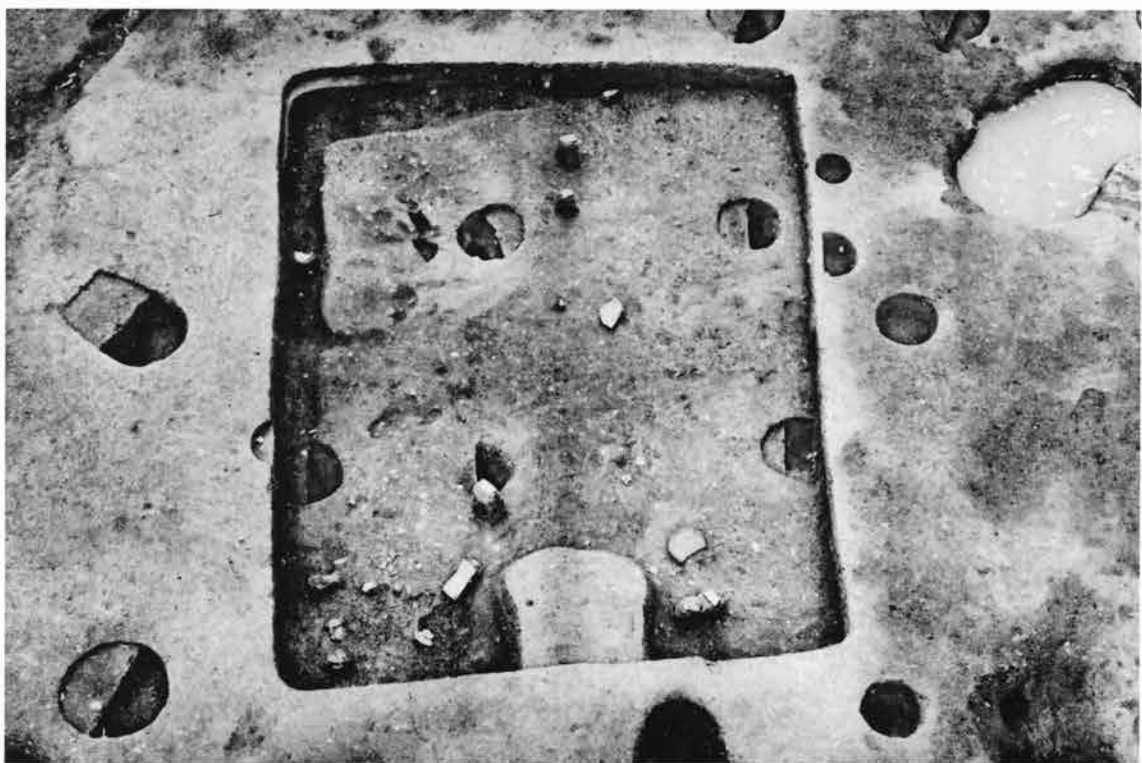
(1) A地区遺構検出状況(南から)



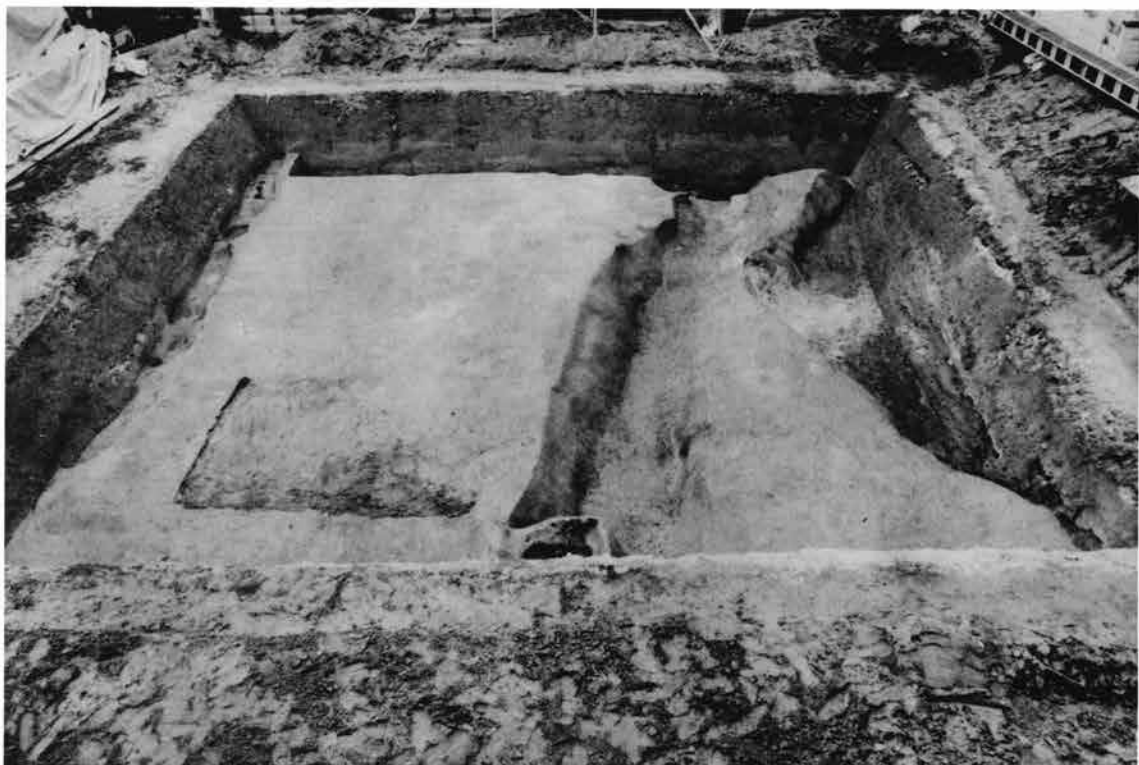
(2) 古墳3主体部遺物検出状況(西から)



(1) 古墳5溝内遺物出土状況(南から)



(2) 住居3検出状況(東から)
(手前・中央はカマド[未完掘])



(1) 西地区全景（東から）



(2) 浄化槽地区全景（西から）



(1) 北地区全景（東から）



(2) 南地区全景（東から）



(1) 北地区SD31 (西から)



(2) 北地区SG01 (東から)



(1) 西地区SX02 (右が北)



(2) 北地区SX05 (上が北)



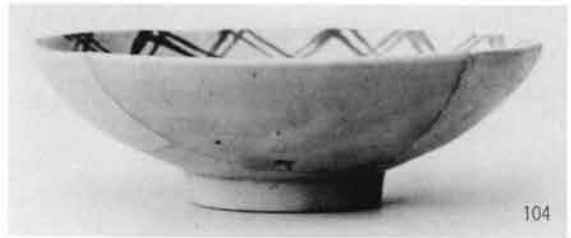
(1) 北地区SK06 (東から)



(2) 北地区SK14 (北から)









(1) 河守条里制跡全景 (北東から)

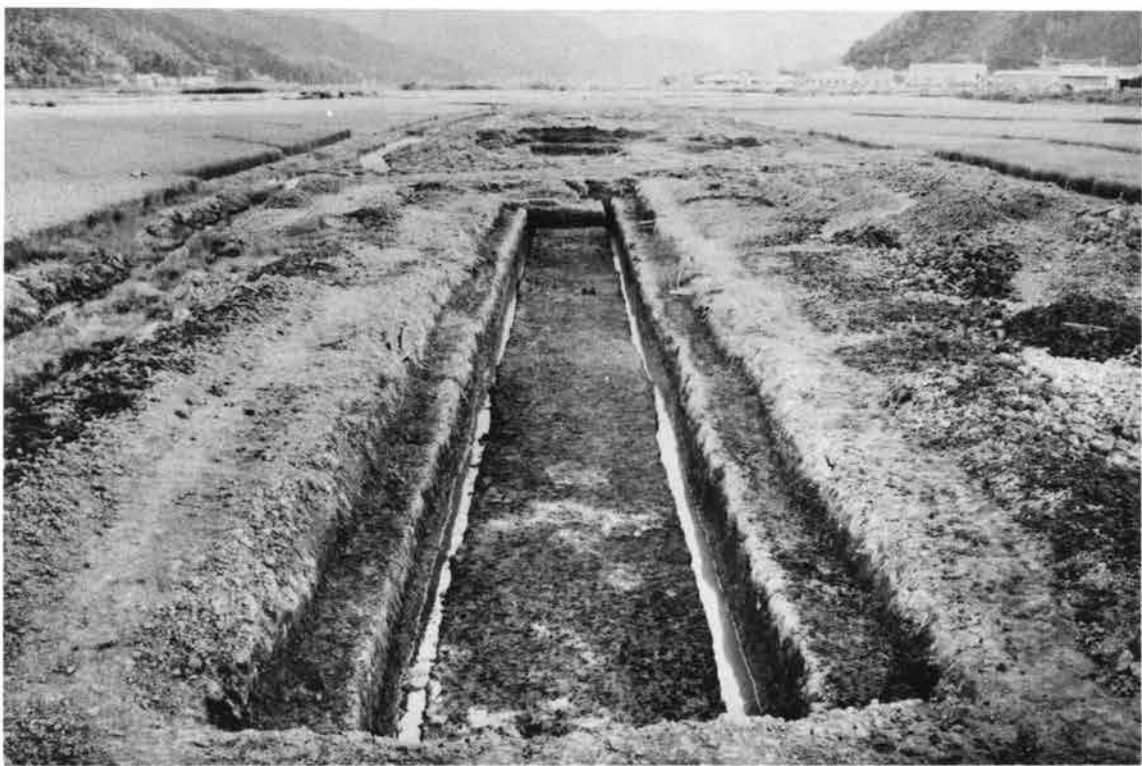


(2) 調査地遠景 (南西から)

図版第19 河守遺跡



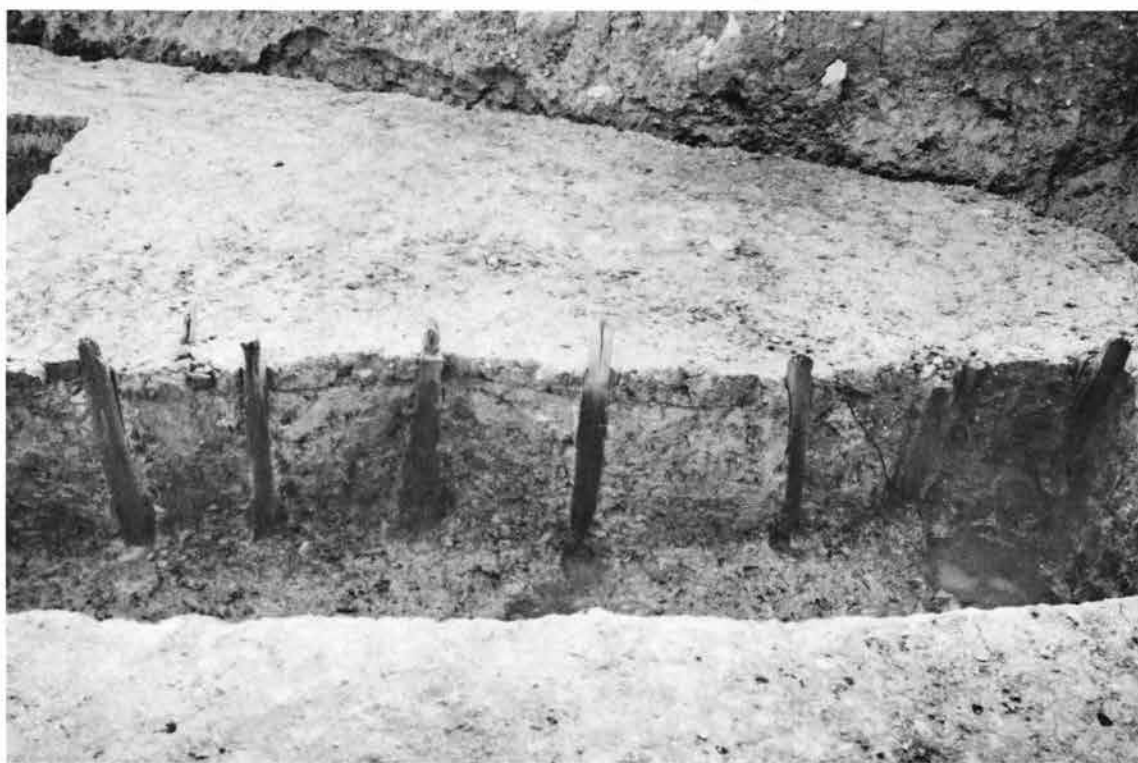
(1) 調査地近景 (南西から)



(2) 3Bトレンチ掘削状況 (北東から)



(1) 杭列 SX02検出状況 (南西から)



(2) 杭列 SX02・溝 SD04断割状況 (東から)



7-1



6-2



6-1



6-8



5-1



5-3



6-6



5-2



5-6



5-7



6-7



7-17

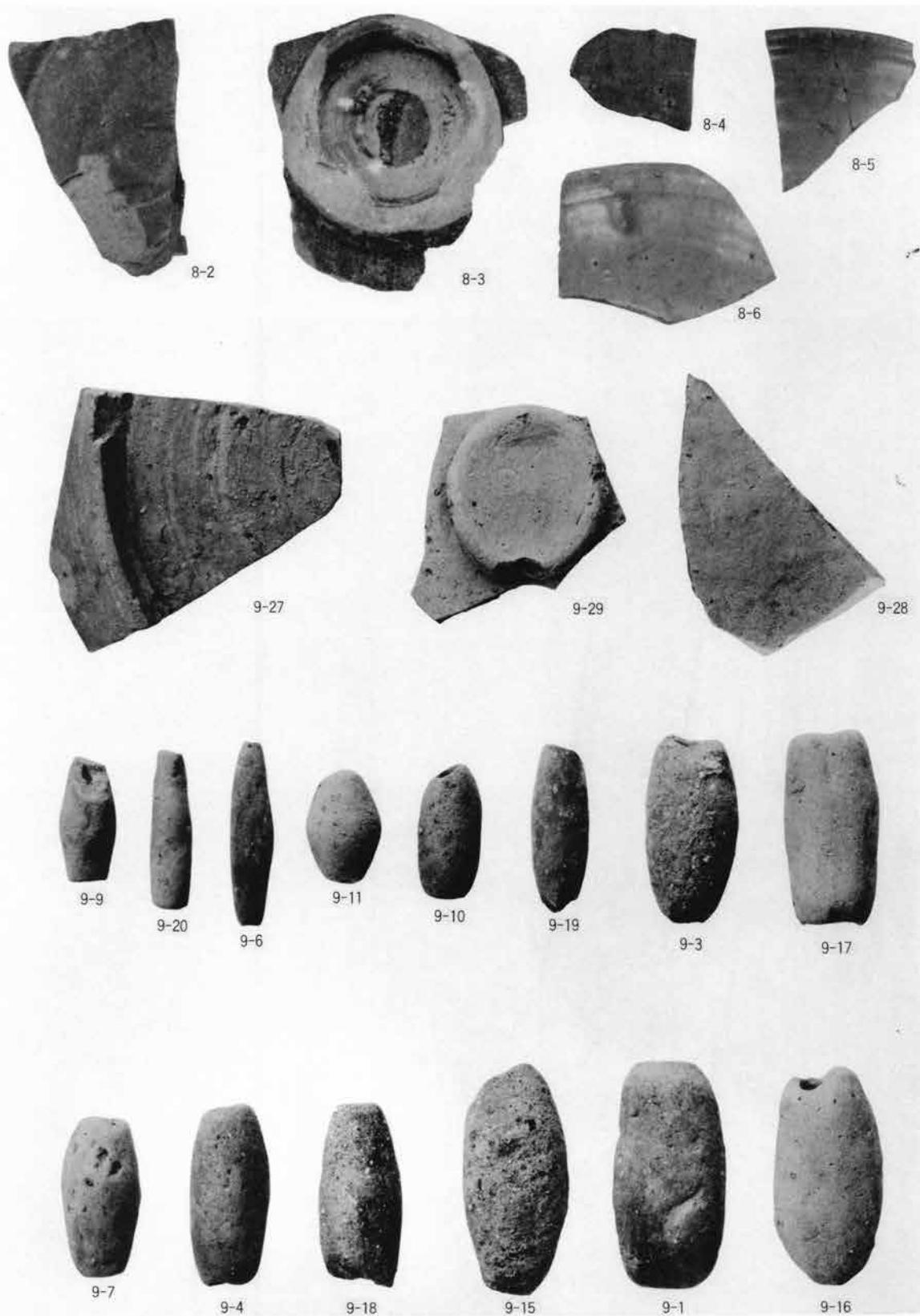


7-14

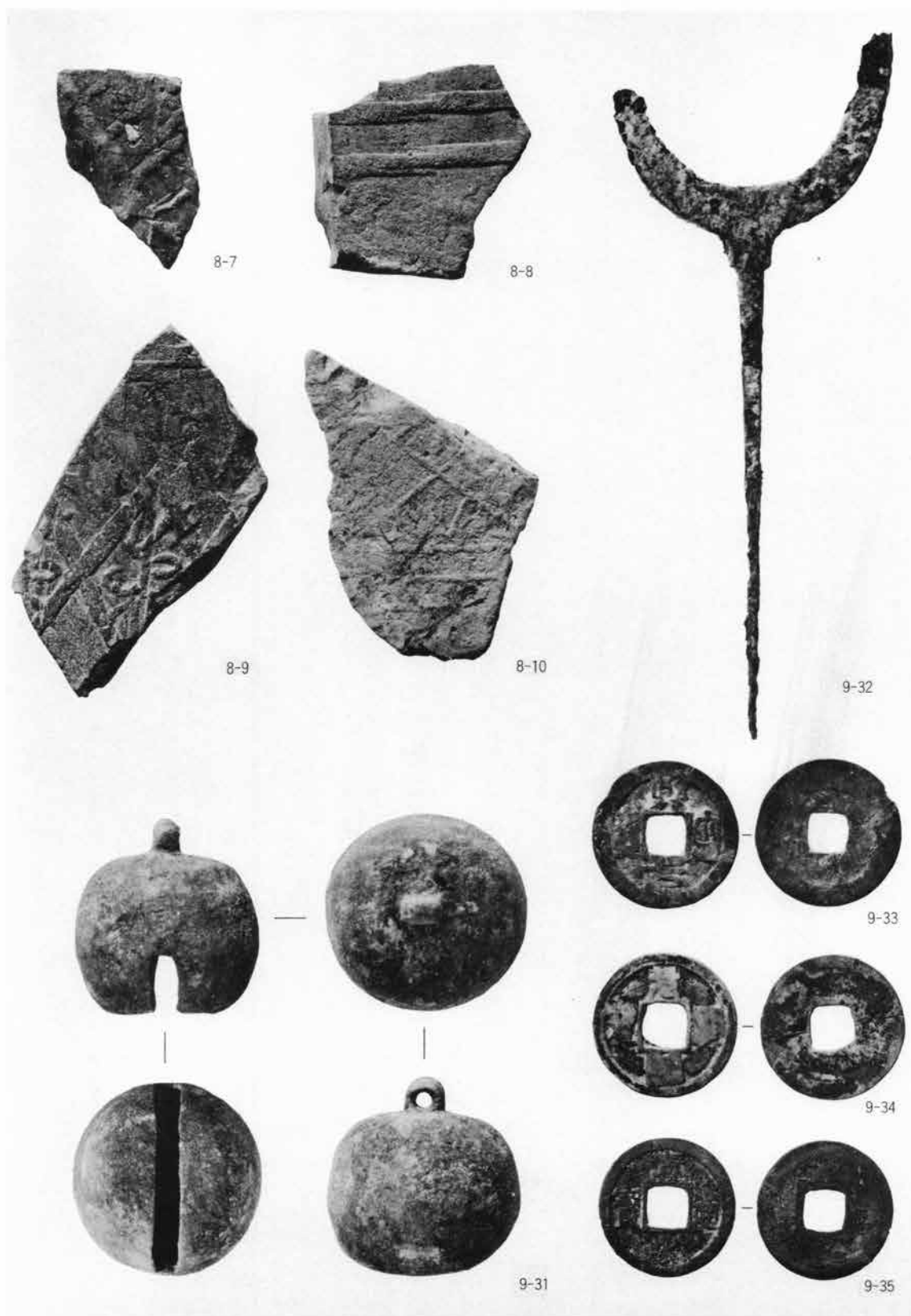


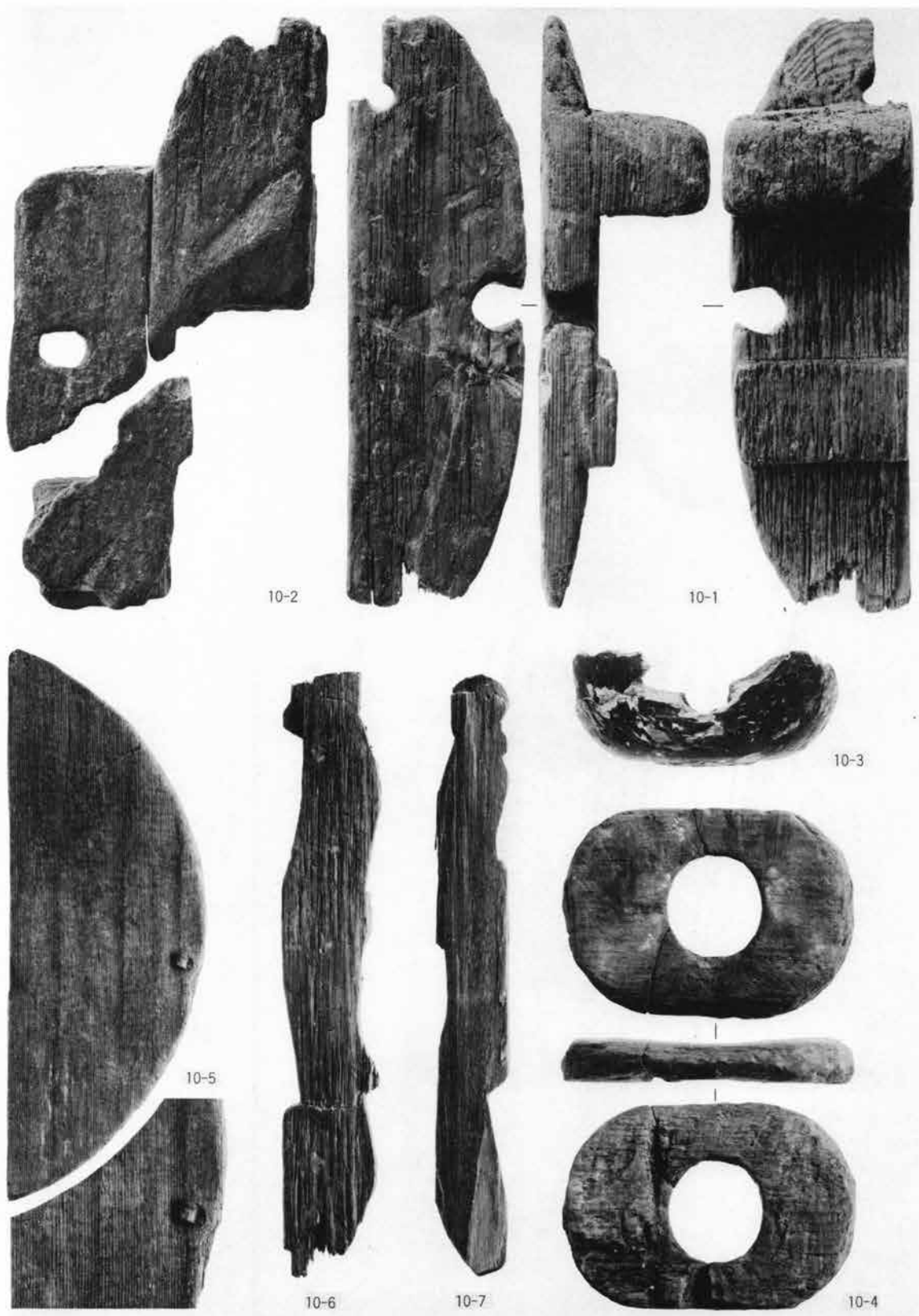
6-9

图版第22 河守遺跡



出土遺物 (2)





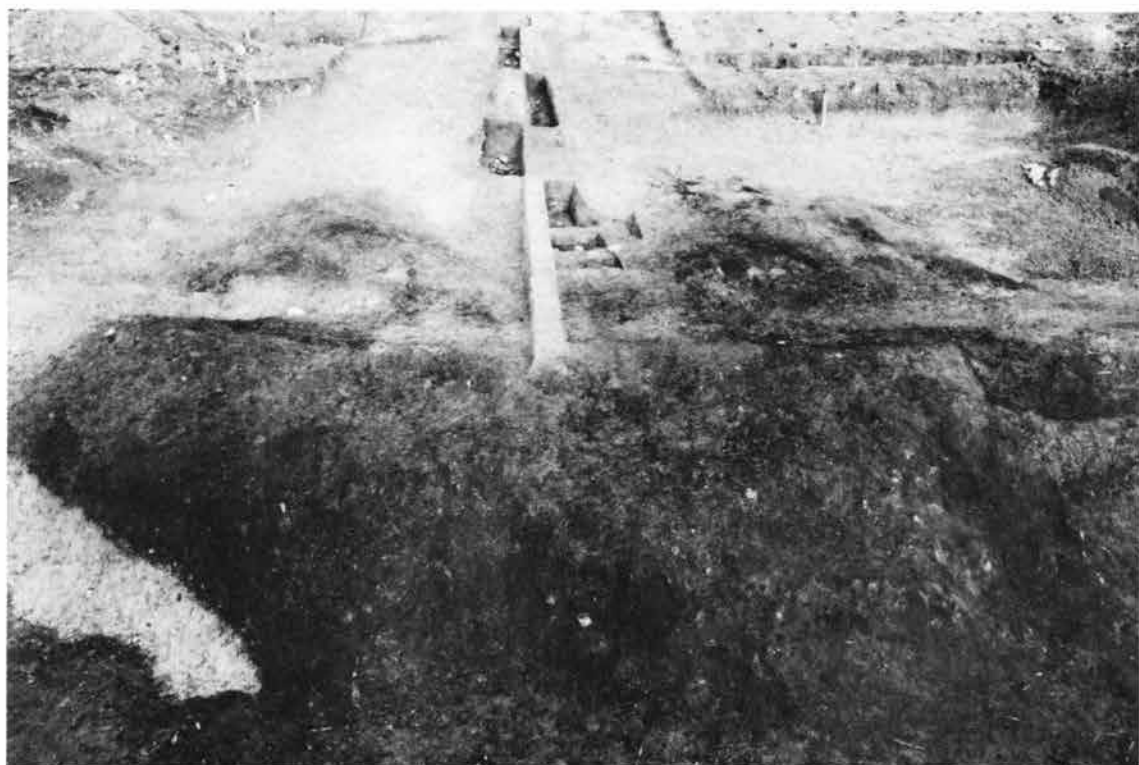
出土遺物 (4)



(1) 調査前遠景（西から）



(2) 調査前灰原露出状況（北西から）



(1) 窯体・灰原検出状況（西から）



(2) 窯体内遺物出土状況（西から）



(1) 窯体全景（西から）



(2) 窯体壁面（北西から）



(1) 完掘後調査地全景（西から）



(2) 前庭部（南東から）



(1) SX03 (南西から)



(2) 灰原内遺物出土状況 (南から)



14



15



17



1



26



27



21



23



32



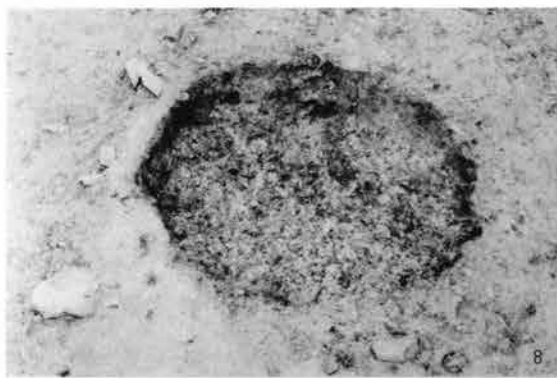
30



(1) A地区全景 (SK01・02) (東から)



(2) B地区全景 (SK03・04) (東から)



土壇群検出状況

1. SK01 (南から) 2. 作業風景 3. SK02 (南から) 4. SK02 (南から)
5. SK03 6. SK03 (南から) 7. SK04 8. SK04 (北から)



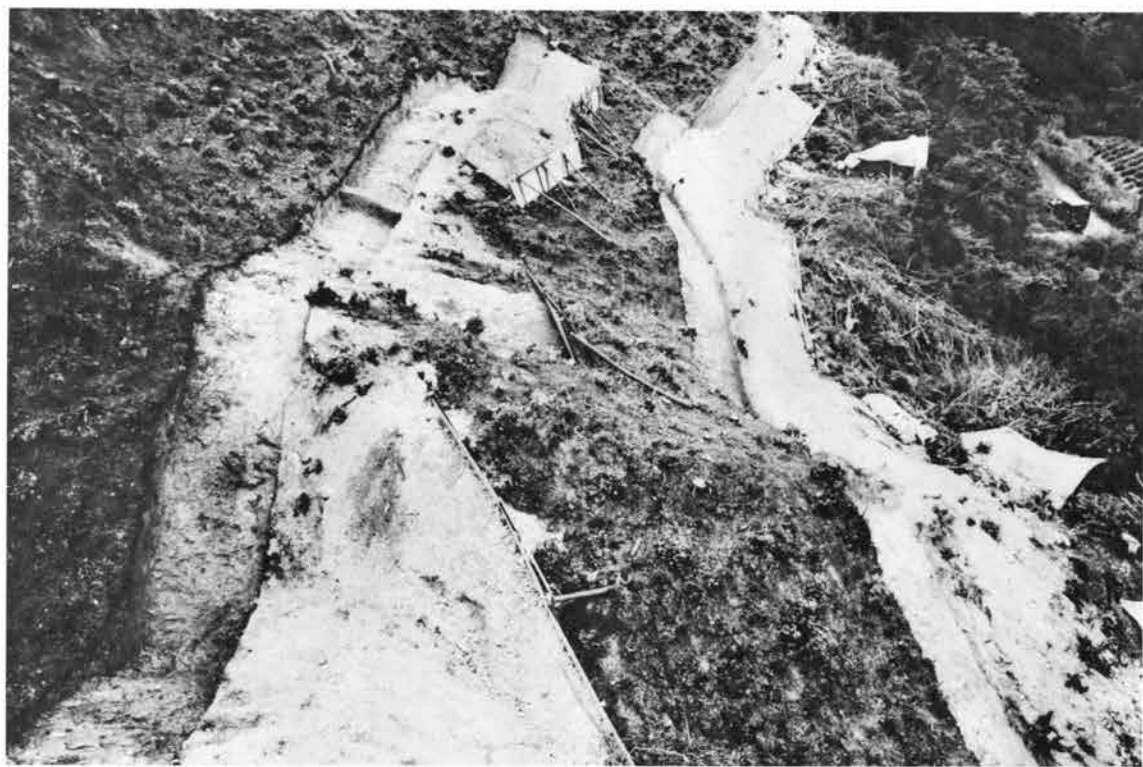
(1) B区調査地遠景(東から)



(2) トレンチ掘削状況(南西から)



(1) C区調査前全景 (西から)



(2) トレンチ全景 (北から)



(1) 調査地全景 (北から)



(2) A区調査地遠景 (北から)



(1) 調査前近景 (南から)



(2) 窯体検出状況 (西から)



(1) 窯体全景（西から）



(2) 焼成部床面修復状況（南から）



出土遺物 (1)





(1) 調査地全景 (東から)



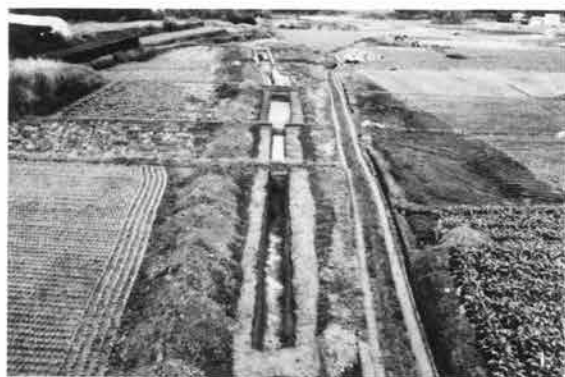
(2) 2トレンチ断面 (北から)



(1) 調査地全景 (北から)



(2) 調査地全景 (南から)



各トレンチの掘削状況

1. C～Gトレンチ（南から）
2. E～Gトレンチ（北から）
3. Cトレンチ（北から）
4. Cトレンチ（西から）
5. Aグリッド（北西から）
6. Dトレンチ石組遺構（北から）
7. 調査前全景（北から）
8. H～Nトレンチ（南から）



(1) 4号墳石棺・目貼り粘土検出状況(南から)



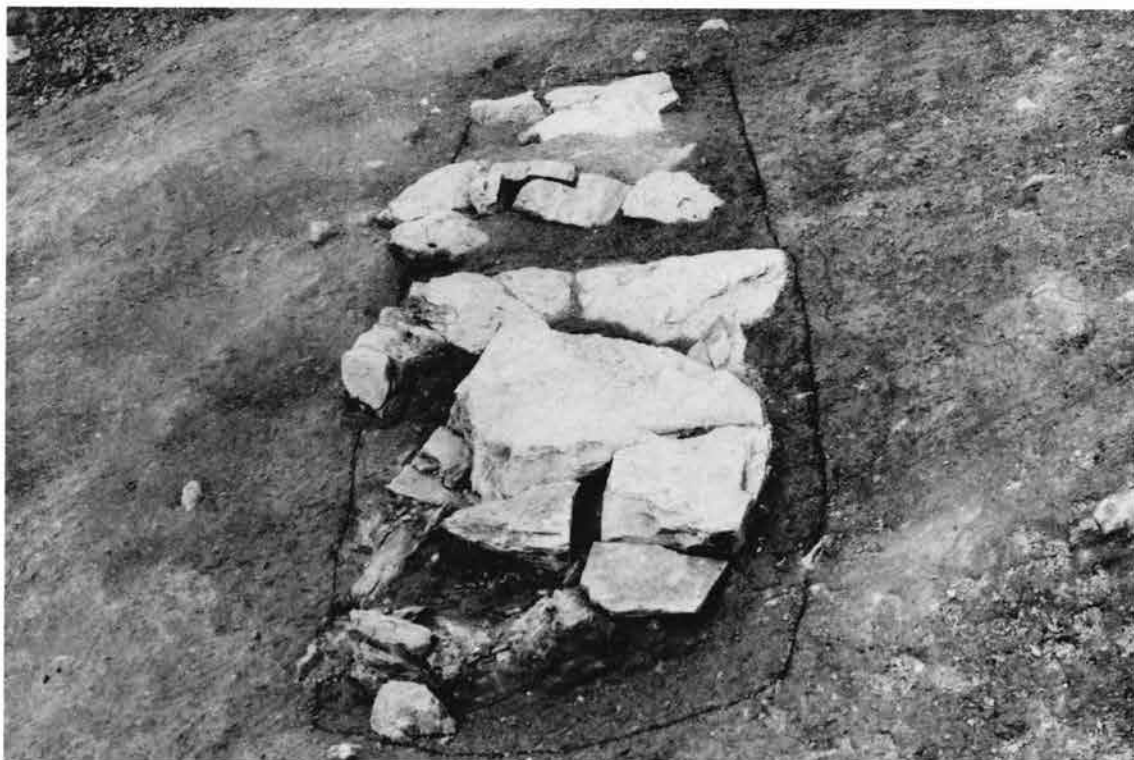
(2) 4号墳石棺検出状況(東から)



(1) 4号墳蓋石除去後の状況（東から）



(2) 4号墳棺内(北木口部)遺物出土状況（南から）



(1) 5号墳蓋石検出状況（北から）



(2) 5号墳蓋石除去後の状況（南から）



(1) 多保市遺跡発掘状況（北から）



(2) 住居1発掘状況（東から）



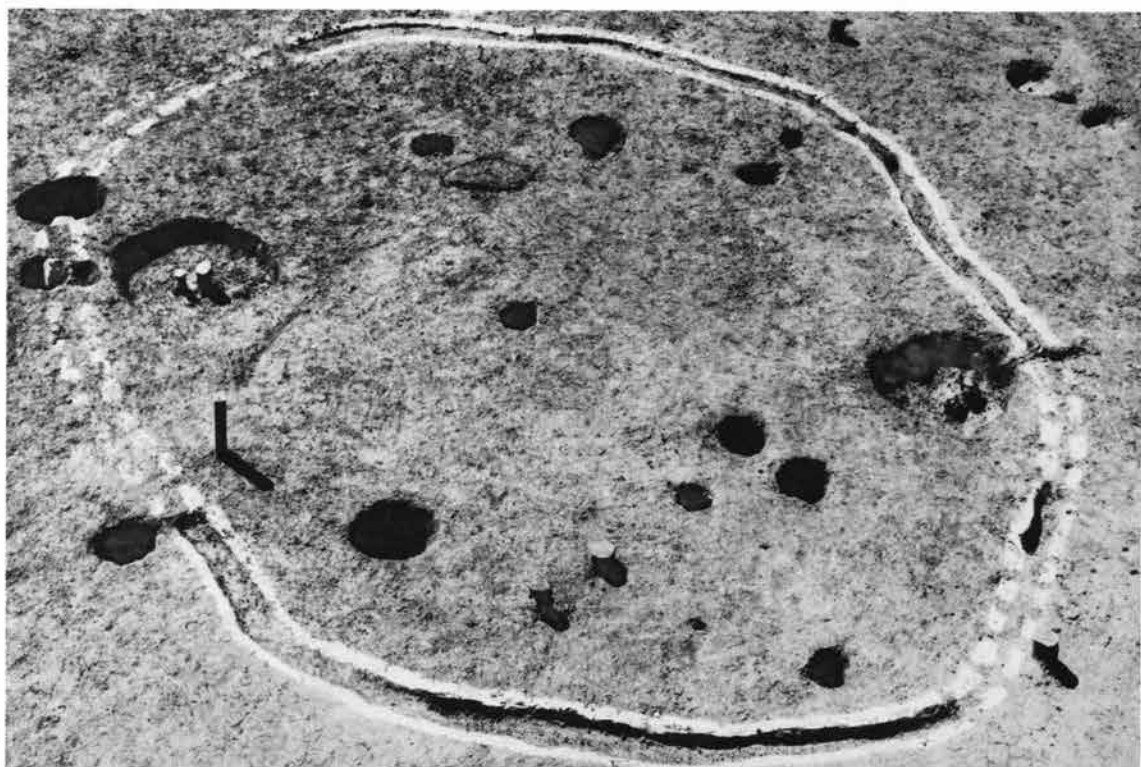
(1) 仁田城跡発掘前風景（北から）



(2) 仁田城跡発掘状況（北から）



(1) 大内城跡下層遺跡遺構検出状況（北から）



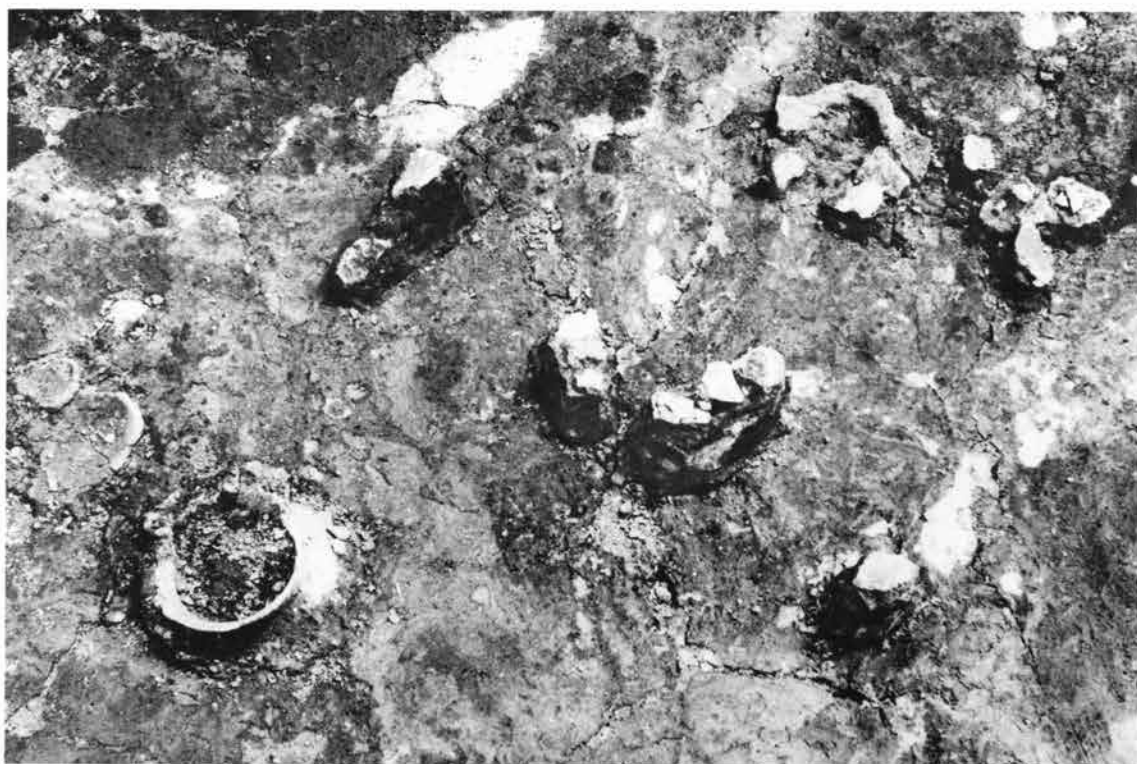
(2) SH01検出状況（北から）



(1) 調査前風景 (南西から)



(2) 遺構検出状況 (北西から)

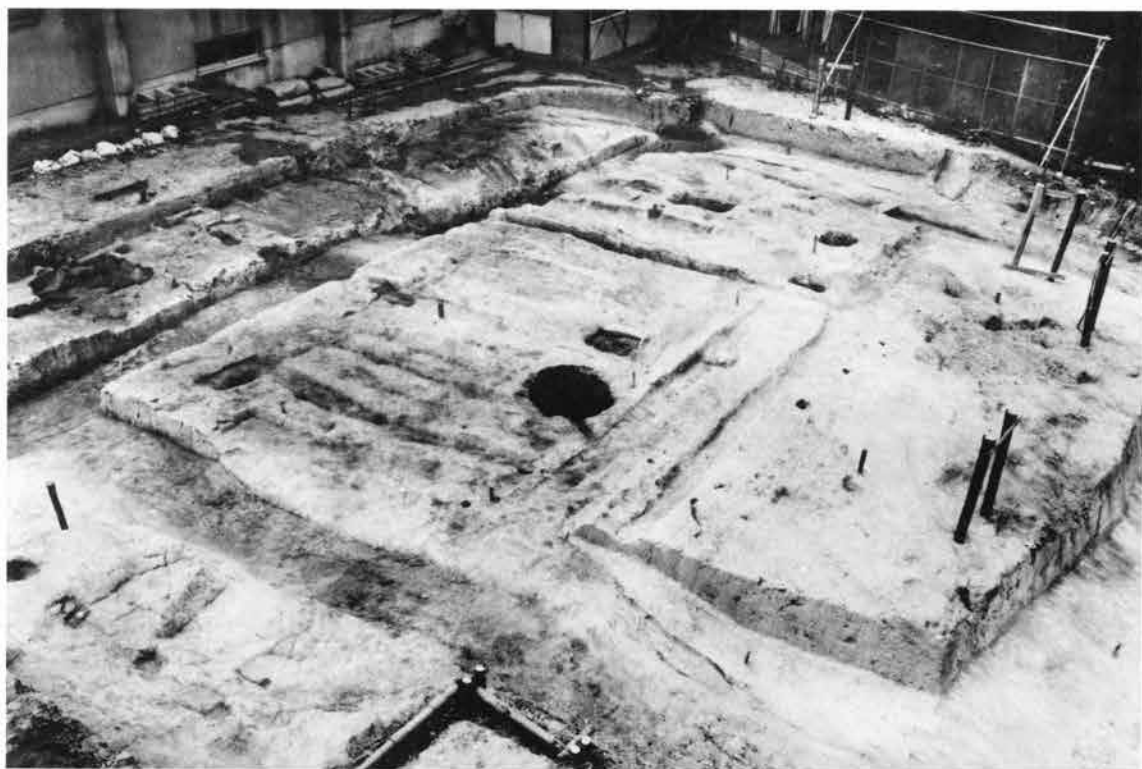


(1) SK19遺物出土状況（北から）



(2) SK18完掘状態（北から）





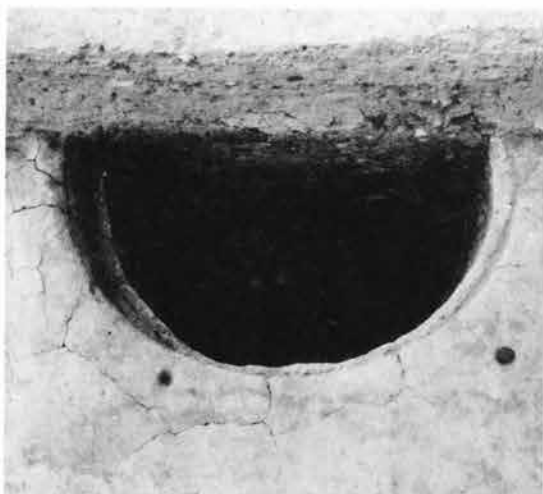
(1) 調査地全景 (南東から)



(2) 調査地全景 (北から)



(1) SX01 (南から)



(4) SE04 (東から)



(2) SX02 (東から)



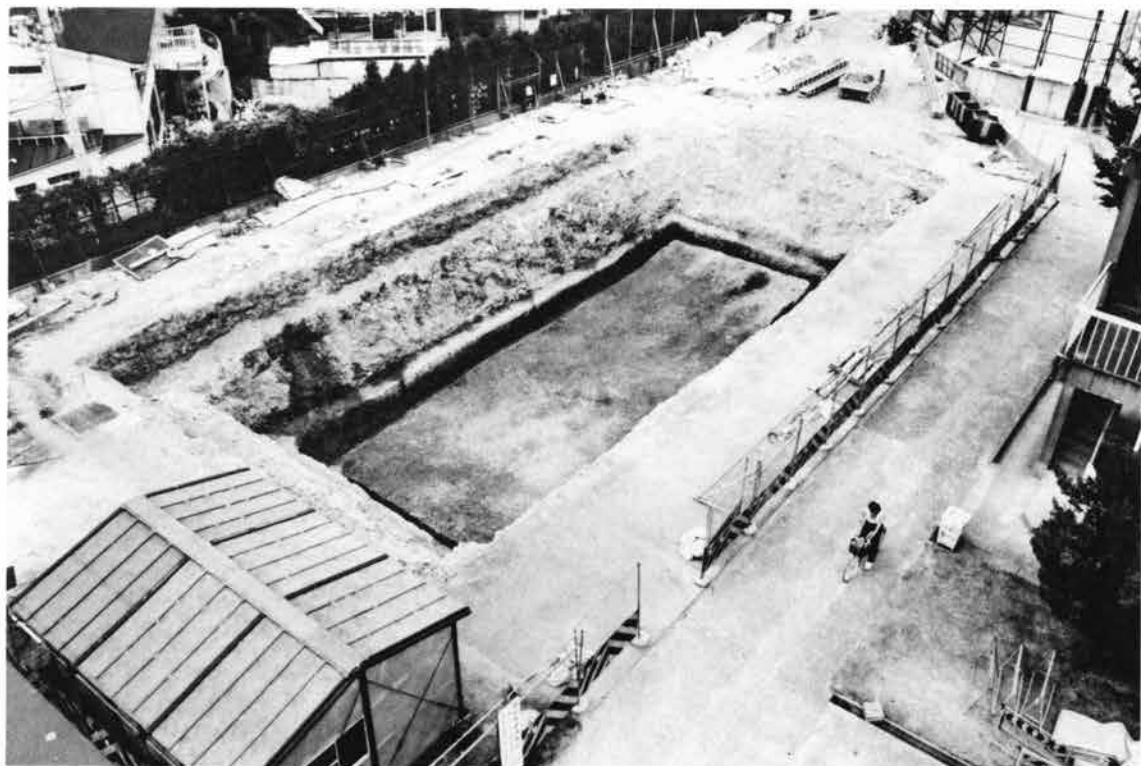
(5) SE05 (南から)



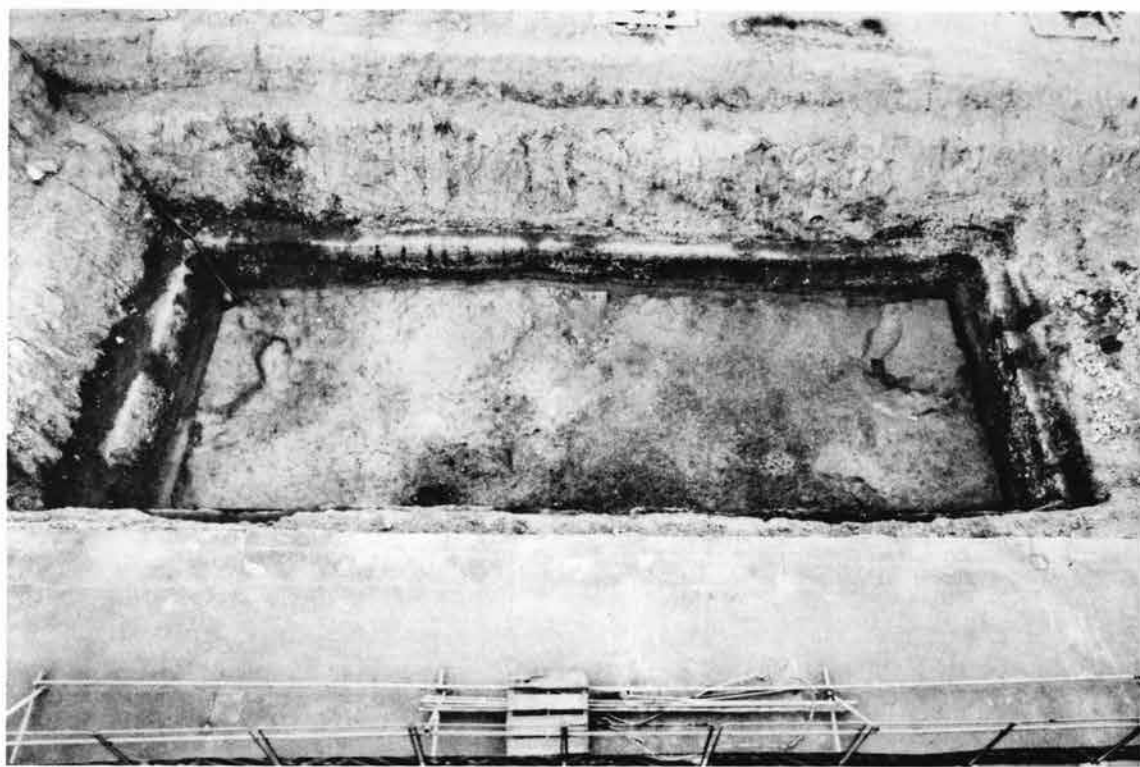
(3) SX03 (南から)



(6) SG06 (南から)



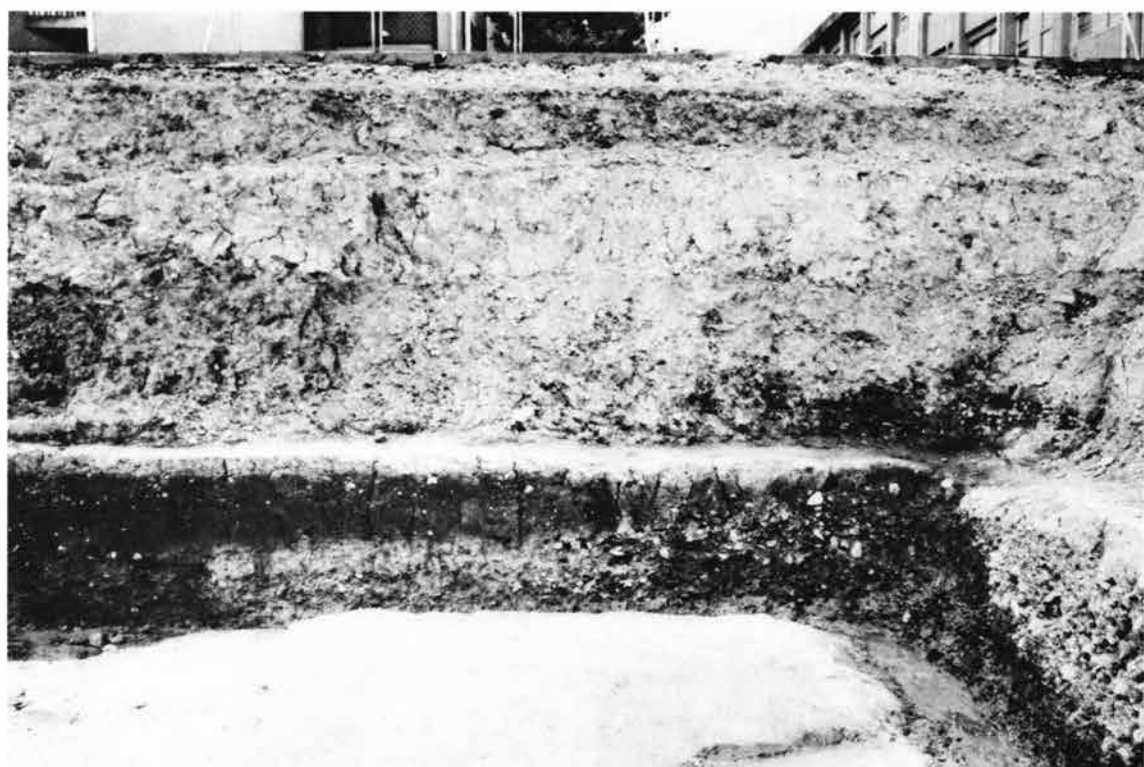
(1) 調査地全景（北西から）



(2) トレンチ全景下層（西から）



(1) 南壁断面



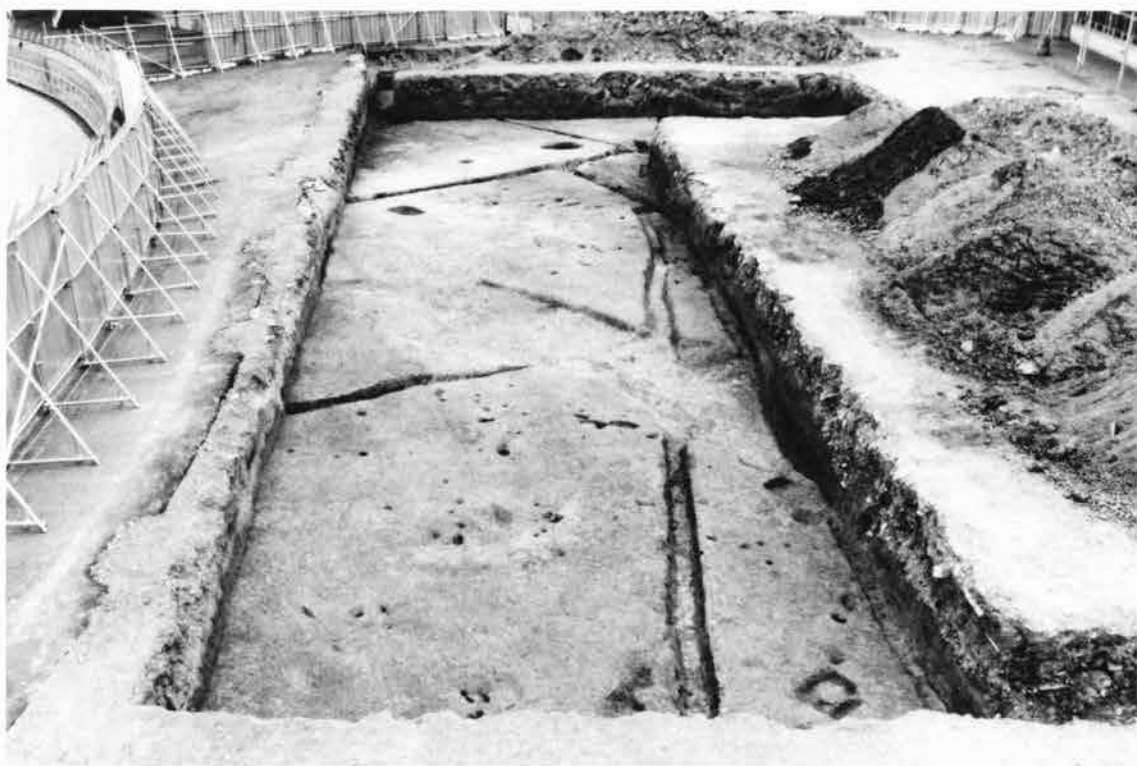
(2) 西壁断面



(1) 調査地全景 (南東から)



(2) Bトレンチ全景 (北西から)



(1) Aトレンチ全景(北西から)



(2) 土壇SK16409遺物出土状況



出土遺物(1)
軒瓦類



出土遺物 (2)
土師器・緑釉陶器



43



40



37



38



15



14



4



41

出土遺物 (3)
須恵器・緑釉陶器



(1) 3号墳全景（北から）



(2) 3号墳第1主体部全景（南東から）



(1) 3号墳第1主体部出土鋤先（東から）



(2) 3号墳SK02出土遺物（南東から）



(1) 5号墳全景(南から)



(2) 5号墳主体部北側遺物出土状態(北から)



(1) 第3トレンチ全景 (南東から)



(2) 第8トレンチ全景 (東から)



1



3



2



4



5



6



7



8



9



10



11

出土遺物 (2)



(1) 郷土塚4号墳完掘状態(西から)



(2) 同上(北から)



(1) 郷土塚4号墳、石室内遺物出土状態（南から）



(2) 郷土塚4号墳、石室完掘状態（南から）



1



7



5



8



6

郷土塚4号墳出土遺物



(1) 畑山2号墳横穴式石室検出状況(北から)



(2) 畑山2号墳主体部内遺物出土状況(南東から)



(1) 畑山2号墳全景(南から)



(2) 畑山2号墳、排水溝検出状況(奥壁側から)



(1) 畑山3号墳，完掘状態（東から）



(2) 畑山3号墳，遺物出土状態（南東から）



畑山2号墳出土遺物



9



15



11



銅鏡



13



12



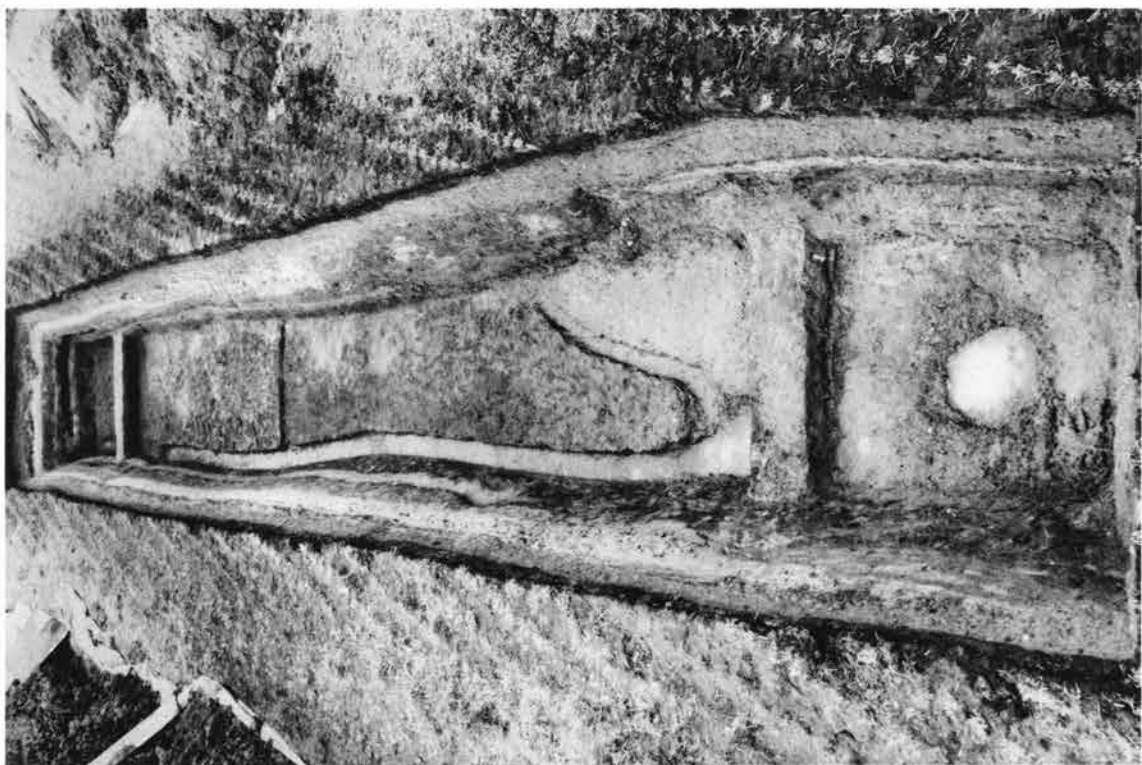
(1) 西山2号墳完掘状態（西から）



(2) 西山1号墳完掘状態（北東から）



(1) 野上遺跡・岡村古墳調査前全景（東から）



(2) 野上遺跡トレンチ完掘状態（南から）

京都府遺跡調査概報 第20冊

昭和61年3月20日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)